

神戸市西区

玉津田中遺跡

—第1分冊—

(徳政・二ノ郷・黒岡地区の調査)



平地住居SB40002



SB40002出土土器



土器棺墓群



方形周溝墓群



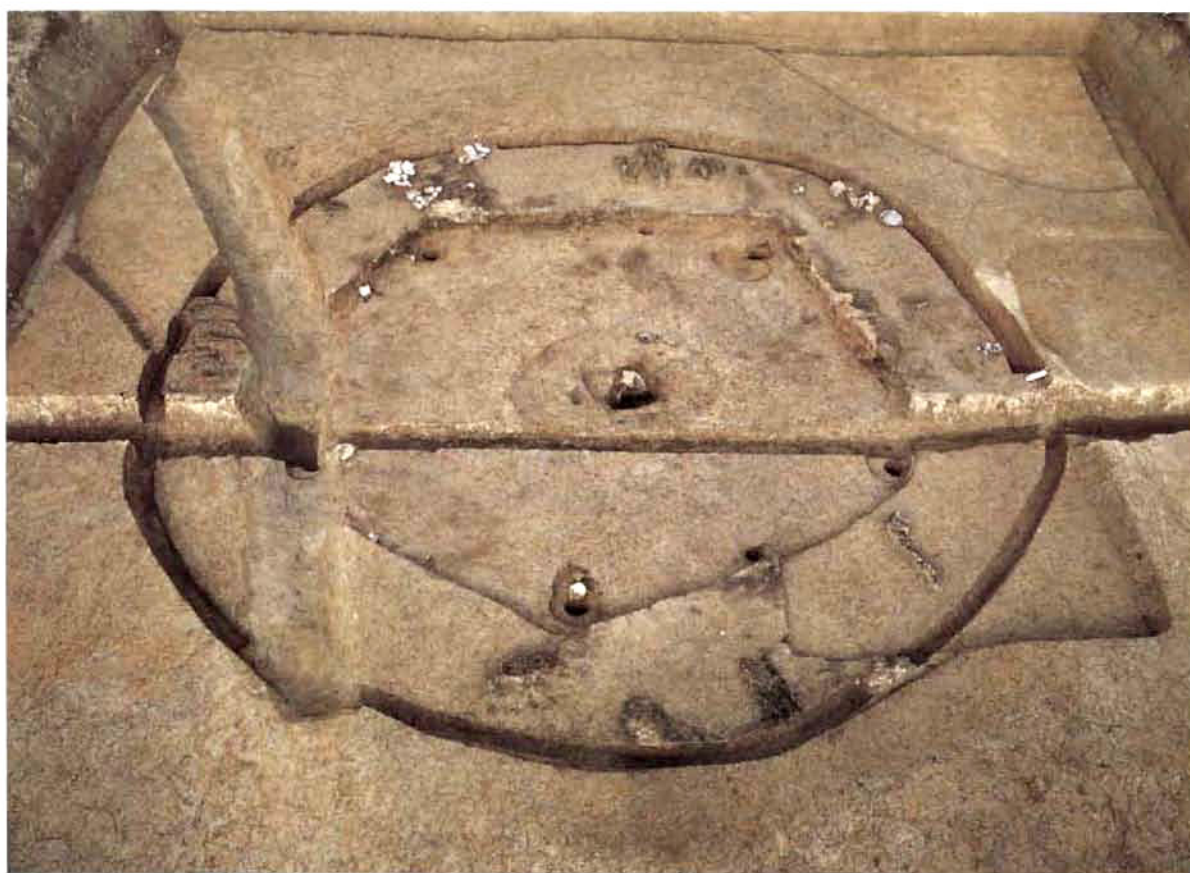
木棺ST40004



ST40004出土青銅武器鋒



水田



竪穴住居SH50001

例 言

1. 本書は、兵庫県神戸市西区玉津町田中（土地区画整理事業後の住居表示は、神戸市西区宮下1～3丁目）に所在する、玉津田中遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、神戸国際港都建設事業田中特定土地区画整理事業に伴うもので、住宅・都市整備公団の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査報告書は、地区別に第1分冊～第5分冊に分け、別途、総括編を刊行する。
4. 第1分冊では、徳政地区・二ノ郷地区と黒岡地区の調査を所収する。
5. 本書に使用した方位は国土座標（第V系）の座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。
6. 本文の執筆は、篠宮正・深井明比古・村上泰樹・中川渉・藤田淳・甲斐昭光・菱田淳子・多賀茂治・鈴木敬二が行い、分担は目次に示した。
7. 地震痕跡については、寒川旭氏（通商産業省工業技術院地質調査所）に現地調査をお願いし、執筆いただいた。青銅器の残存脂肪酸については中野益男氏・福島道広氏・中野寛子氏（帯広畜産大学畜産環境学科）に分析依頼をし、執筆いただいた。木製品の樹種同定については、鳥地謙氏（京都大学名誉教授）に依頼した。人骨の鑑定は池田次郎氏（岡山理科大学教授）に依頼し、所見を元に篠宮が文章化した。
8. 本書の編集は、篠宮が担当した。
9. 発掘調査で出土した遺物、作成した図面・写真などの記録は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管・管理している。
10. 発掘調査および報告書作成にあたり、例言7の方々のほかに以下の方々の助力を得た。記して感謝の意を表します。

（敬称略）岩永省三・工楽善通・肥塚隆保・酒井龍一・沢田正昭・西村康・
深澤芳樹・藤原宏・福永伸哉・光谷拓実・森岡秀人

本文目次

第I部	はじめに	1
第1章	遺跡をとりまく環境 (篠宮)	1
第1節	遺跡の位置と地理的環境	1
第2節	歴史的環境	1
第2章	調査に至る経緯と経過	5
第1節	開発計画 (篠宮)	5
第2節	文化財の対応 (篠宮)	5
第3節	調査の経過 (中川・篠宮)	6
第3章	調査の方法 (篠宮)	8
第1節	発掘調査	8
第2節	出土品整理と報告書作成	8
第II部	第1分冊の概要	10
第1章	第1分冊の概要と経過 (篠宮)	10
第1節	概要	10
第2節	調査経過	10
第3節	調査担当者	12
第2章	調査の成果	14
第1節	徳政地区 (篠宮)	14
第2節	二ノ郷地区 (篠宮)	17
第3節	黒岡地区 (多賀)	21
第III部	遺構	24
第1章	縄文時代から弥生時代前期 (篠宮)	24
第1節	概要	24
第2節	河道	24
第3節	溝	25
第4節	水田	26
第5節	土坑	26
第2章	弥生時代中期下層 (篠宮)	27
第1節	概要	27
第2節	河道	27
第3節	溝	28
第4節	水田	29
第5節	竪穴住居	30
第6節	土坑	30
第3章	弥生時代中期上層	31
第1節	概要 (篠宮)	31
第2節	河道 (篠宮)	31
第3節	溝 (篠宮)	32
第4節	水田 (篠宮)	33
第5節	平地住居 (篠宮)	34
第6節	竪穴住居 (中川・篠宮)	35
第7節	土坑 (中川・篠宮)	37
第8節	土器棺墓 (篠宮)	41
第9節	方形周溝墓 (篠宮)	42
第4章	弥生時代後期から古墳時代前期	56
第1節	概要 (篠宮)	56
第2節	河道 (篠宮)	56
第3節	溝 (篠宮)	56
第4節	水田 (篠宮)	56
第5節	竪穴住居 (多賀)	57
第6節	土坑 (篠宮)	57
第5章	古墳時代後期 (篠宮)	58
第1節	概要	58
第2節	河道	58
第3節	溝	58
第4節	水田	59
第5節	その他	59

第6章	平安時代から鎌倉時代	60
第1節	概要(篠宮)	60
第2節	条里施工以前他(篠宮)	60
第3節	坪境溝(篠宮)	61
第4節	坪A(篠宮)	62
第5節	坪B(篠宮)	63
第6節	坪C(中川・篠宮)	65
第7節	坪D(篠宮)	67
第8節	坪E(篠宮)	69
第9節	坪F(篠宮)	73
第IV部	遺物	74
第1章	土器類	74
第1節	縄文時代(深井)	74
第2節	弥生時代前期(深井)	76
第3節	弥生時代中期下層(篠宮)	78
第4節	弥生時代中期上層(篠宮)	80
第5節	弥生時代後期から古墳時代前期(甲斐・多賀)	98
第6節	古墳時代から奈良時代(菱田)	105
第7節	古代末から中世(鈴木)	106
第8節	中国製磁器(村上)	116
第9節	瓦(多賀)	117
第2章	石器(藤田)	118
第1節	弥生時代中期下層	118
第2節	弥生時代中期上層	120
第3節	弥生時代後期	126
第4節	縄文時代晩期	127
第5節	弥生時代の遊離遺物	127
第6節	中世	127
第3章	玉・金属器・土製品・石製品(篠宮)	132
第1節	玉	132
第2節	金属器・土製品・石製品	134
第4章	木器(篠宮)	135
第1節	縄文時代晩期	135
第2節	弥生時代中期下層	135
第3節	弥生時代中期上層	135
第4節	弥生時代後期	136
第5節	古墳時代後期	136
第6節	中世	136
第V部	自然科学的調査	137
第1章	玉津田中遺跡で検出された地震の痕跡(寒川)	137
第1節	はじめに	137
第2節	地震跡の形態	138
第3節	考察とまとめ	142
第2章	玉津田中遺跡木棺S T40004から出土した青銅器に残存する脂質について (中野・福島・中野)	143
第1節	青銅器および木棺内外の上試料	143
第2節	残存脂質の抽出	144
第3節	残存脂質の脂肪酸組成	145
第4節	残存ステロール組成	145
第5節	脂肪酸組成の数理解析	146
第6節	脂肪酸組成による種特異性相関	147
第7節	酵素抗体法による血液型糖脂質群の認定	148
第8節	まとめ	149
第VI部	まとめ(篠宮)	150

挿図目次

第1図	石鐮の形	121
第2図	石鐮の長さ	121
第3図	石鐮の長さ	121
第4図	管玉の長さ	133
第5図	管玉の長さ	133
第6図	管玉の重量	133
第7図	地震跡(砂脈)の分布	137
第8図	砂脈群Aの平面	138
第9図	砂脈群Aに関する断面	138
第10図	砂脈Bの平面	139
第11図	砂脈Bの断面(その1)	139
第12図	砂脈Bの断面(その2)	139
第13図	砂脈Bの断面(その3)	140
第14図	砂脈Cの平面	140
第15図	砂脈Cの断面	140
第16図	砂脈Cにおける砂礫層の液状化跡	140
第17図	砂脈Fの断面1	141
第18図	木棺S T 40004見取図と試料採取地点	143
第19図	木棺S T 40004出土青銅器	143
第20図	木棺S T 40004から出土した青銅器および土に残存する脂質の脂肪酸組成	144
第21図	木棺S T 40004から出土した青銅器および土に残存する脂質のステロール組成	145
第22図	木棺S T 40004から出土した青銅器および土に残存する脂質の脂肪酸組成樹状構造図	146
第23図	木棺S T 40004から出土した青銅器および土に残存する脂質の脂肪酸組成による種特异性相関	147

表目次

第1表	磨製石庖丁未成品工程別一覧	123
第2表	徳政・二ノ郷・黒岡地区石器一覧1	128
第3表	徳政・二ノ郷・黒岡地区石器一覧2	129
第4表	徳政・二ノ郷・黒岡地区石器一覧3	130
第5表	徳政・二ノ郷・黒岡地区石器一覧4	131
第6表	管玉一覧	133
第7表	木棺S T 40004の試料採取地点と残存脂質抽出量	144
第8表	木棺S T 40004から出土した青銅器および土に残存するステロールとシトステロールの割合	146
第9表	木棺S T 40004から出土した青銅器および土に残存する血液型糖脂質群の認定	148

巻首図版目次

巻首図版1	弥生中期上層 平地住居SB40002/SB40002出土土器
巻首図版2	弥生中期上層 土器棺墓群/方形冨溝墓群
巻首図版3	弥生中期上層 木棺ST40004/ST40004出土青銅武器鋒
巻首図版4	弥生中期上層・弥生後期 水田/竪穴住居SH50001

図版目次

全体図面

図版1	遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/40,000) 陸地測量部「明石」・「林村」・「前開村」・「大久保町」
図版2	調査前の状況と事業範囲 (1/5,000) 神戸市「高津橋」・「福中」
図版3	年度別調査区 (1/5,000)
図版4	第1分冊調査区 (1/2,000)
図版5	徳政地区 土層断面 (1/40・1/1,000)
図版6	二ノ郷地区 土層断面 (1/40・1/1,000)
図版7	黒岡地区 土層断面 (1/40・1/1,000)

遺構図面

図版8	縄文晩期～弥生前期 河道 (SR10001) 断面及び出土土器
図版9	縄文晩期・弥生前期 遺構全体 (1/1,000)
図版11	縄文晩期・弥生前期 土坑 (SK10001～10003・10006)・溝 (SD20001・20003) 断面
図版12	弥生中期下層 溝 (SD30002・30003・30009・30010) 断面
図版13	弥生中期下層 遺構全体 (1/1,000)
図版15	弥生中期下層 竪穴住居 (SH30001)
図版16	弥生中期下層 土坑 (SK30001～30004)
図版17	弥生中期上層 遺構全体1 (徳政・二ノ郷)
図版19	弥生中期上層 遺構全体2 (黒岡)
図版20	弥生中期上層 平地住居1 (SB40002)
図版21	弥生中期上層 平地住居2 (SB40002土器出土状況)
図版22	弥生中期上層 平地住居3 (SB40002床面硬度)
図版23	弥生中期上層 平地住居4 (SB40001)
図版24	弥生中期上層 竪穴住居1 (SH40001～40004)
図版25	弥生中期上層 竪穴住居2 (SH40005～40007)
図版26	弥生中期上層 竪穴住居3 (SH40008・40009)
図版27	弥生中期上層 竪穴住居4 (SH40010～40011)

図版28	弥生中期上層	竪穴住居中央土坑 1 (SH40001・40003・40004)
図版29	弥生中期上層	竪穴住居中央土坑 2 (SH40007~40010)
図版30	弥生中期上層	土坑 1 (SK40001~40005・40007)
図版31	弥生中期上層	土坑 2 (SK40006・40008~40010・40014・40015)
図版32	弥生中期上層	土坑 3 (SK40011~40013・40017)
図版33	弥生中期上層	土坑 4 (SK40018・40020~40023)
図版34	弥生中期上層	土坑 5 (SK40024~40030)
図版35	弥生中期上層	土坑 6 (SK40031~40036)
図版36	弥生中期上層	土坑 7 (SK40037・40038・40040~40044)
図版37	弥生中期上層	土器棺墓 1 (SP40001・40002・40006・40007)
図版38	弥生中期上層	土器棺墓 2 (SP40003~40005)
図版39	弥生中期上層	方形周溝墓群全体 (1/400)
図版40	弥生中期上層	方形周溝墓 1 (SX40001)
図版41	弥生中期上層	方形周溝墓 2 (SX40002)
図版42	弥生中期上層	方形周溝墓 3 (SX40003・40004)
図版43	弥生中期上層	方形周溝墓 4 (SX40005)
図版44	弥生中期上層	方形周溝墓 5 (SX40006・40019)
図版45	弥生中期上層	方形周溝墓 6 (SX40007・40015)
図版46	弥生中期上層	方形周溝墓 7 (SX40009・40020)
図版47	弥生中期上層	方形周溝墓 8 (SX40010)
図版49	弥生中期上層	方形周溝墓 9 (SX40011・40016)
図版50	弥生中期上層	方形周溝墓10 (SX40012)
図版51	弥生中期上層	方形周溝墓11 (SX40013)
図版52	弥生中期上層	方形周溝墓12 (SX40014)
図版53	弥生中期上層	方形周溝墓13 (SX40021・40027)
図版54	弥生中期上層	方形周溝墓14 (SX40022)
図版55	弥生中期上層	方形周溝墓15 (SX40023)
図版56	弥生中期上層	方形周溝墓16 (SX40024)
図版57	弥生中期上層	方形周溝墓17 (SX40025)
図版58	弥生中期上層	方形周溝墓18 (SX40028・40026)
図版59	弥生中期上層	方形周溝墓19 (SX40031)
図版60	弥生中期上層	方形周溝墓20 (SX40032・40030・40035・40033)
図版61	弥生中期上層	方形周溝墓21 (SX40037)
図版62	弥生中期上層	方形周溝墓22 (SX40018・40038・40039・40040平面)
図版63	弥生中期上層	方形周溝墓23 (SX40018・40038・40039・40040断面)
図版64	弥生中期上層	方形周溝墓土器出土状況 1 (SX40002 - 40010)
図版65	弥生中期上層	方形周溝墓土器出土状況 2 (SX40006・40009 - 40010)
図版66	弥生中期上層	方形周溝墓土器出土状況 3 (SX40010 - 40017西)
図版67	弥生中期上層	方形周溝墓土器出土状況 4 (SX40010 - 40012・40020)
図版68	弥生中期上層	方形周溝墓土器出土状況 5 (SX40010 - 40013・40014)
図版69	弥生中期上層	方形周溝墓土器出土状況 6 (SX40014 - 40015・SX40013 - 40014)
図版70	弥生中期上層	方形周溝墓土器出土状況 7 (SX40011 - 40012)
図版71	弥生中期上層	方形周溝墓土器出土状況 8 (SX40022 - 40027・40028)
図版72	弥生中期上層	方形周溝墓土器出土状況 9 (SX40024 - 40027・SX40010 - 40017東)
図版73	弥生中期上層	方形周溝墓土器出土状況10 (SX40023 - 40024)
図版74	弥生中期上層	方形周溝墓土器出土状況11 (SX40024 - 40034・SX40030 - 40033)
図版75	弥生中期上層	方形周溝墓土器出土状況12 (SX40031 - 40032・SX40032 - 40035)
図版76	弥生中期上層	方形周溝墓土器出土状況13 (SX40038 - 40039・SX40036 - 40038)
図版77	弥生中期上層	方形周溝墓土器出土状況13 (SX40004 - 40009・SX40018南・SX40014東・ST40026)
図版78	弥生中期上層	方形周溝墓埋葬施設 1 (ST40001・40002)
図版79	弥生中期上層	方形周溝墓埋葬施設 2 (ST40010・40003・40007)
図版80	弥生中期上層	方形周溝墓埋葬施設 3 (ST40009・40008)
図版81	弥生中期上層	方形周溝墓埋葬施設 4 (ST40011・40006)
図版82	弥生中期上層	方形周溝墓埋葬施設 5 (ST40013・40022・40014)
図版83	弥生中期上層	方形周溝墓埋葬施設 6 (ST40017・40005)
図版84	弥生中期上層	方形周溝墓埋葬施設 7 (ST40018・40015)
図版85	弥生中期上層	方形周溝墓埋葬施設 8 (ST40016・40020)
図版86	弥生中期上層	方形周溝墓埋葬施設 9 (ST40019)
図版87	弥生中期上層	方形周溝墓埋葬施設10 (ST40021・40004)
図版88	弥生中期上層	方形周溝墓埋葬施設11 (ST40023)
図版89	弥生中期上層	方形周溝墓埋葬施設12 (ST40024)
図版90	弥生中期上層	方形周溝墓埋葬施設13 (ST40027・40031)
図版91	弥生中期上層	方形周溝墓埋葬施設14 (ST40028・40029)
図版92	弥生中期上層	方形周溝墓埋葬施設15 (ST40030)
図版93	弥生中期上層	方形周溝墓埋葬施設16 (ST40030)
図版94	弥生中期上層	方形周溝墓埋葬施設17 (ST40032・40025)
図版95	弥生中期上層	方形周溝墓埋葬施設18 (ST40033)
図版96	弥生中期上層	方形周溝墓埋葬施設19 (ST40040・40043)
図版97	弥生中期上層	方形周溝墓埋葬施設20 (ST40044)
図版98	弥生中期上層	方形周溝墓埋葬施設21 (ST40045)

図版99	弥生中期上層 方形周溝墓埋葬施設22 (ST40046・40012)
図版100	弥生後期 遺構全体 (黒岡・一部徳政)
図版101	弥生後期 河道杭列 (SR50002)・溝 (SD50005)
図版102	弥生後期 竪穴住居1 (SH50001・50002)
図版103	弥生後期 竪穴住居2 (SH50001遺物出土状況)
図版104	古墳 遺構全体1 (黒岡)
図版105	古墳 遺構全体2 (徳政・二ノ郷)
図版107	弥生後期 土坑 (SK50001)、古墳 溝 (SD60001~60005)
図版108	中世 掘立柱建物1 (SB80001~80003)
図版109	中世 遺構全体
図版111	中世 掘立柱建物2 (SB80004・80005)
図版112	中世 掘立柱建物3 (SB80006・80007)
図版113	中世 掘立柱建物4 (SB80008)
図版114	中世 掘立柱建物5 (SB80009)
図版115	中世 掘立柱建物6 (SB80010~80012)
図版116	中世 掘立柱建物7 (SB80013~80015・80027・80030・80031)
図版117	中世 掘立柱建物8 (SB80016)
図版118	中世 掘立柱建物9 (SB80017・80018)
図版119	中世 掘立柱建物10 (SB80019・80020)
図版120	中世 掘立柱建物11 (SB80021・80022)
図版121	中世 掘立柱建物12 (SB80023~80026)
図版122	中世 掘立柱建物13 (SB80028・80029)
図版123	中世 掘立柱建物14 (SB80032~80034)
図版124	中世 掘立柱建物15 (SB80035~80038)
図版125	中世 掘立柱建物16 (SB80039・80041・80047)
図版126	中世 掘立柱建物17 (SB80042)
図版127	中世 掘立柱建物18 (SB80040・80043)
図版128	中世 掘立柱建物19 (SB80044)
図版129	中世 掘立柱建物20 (SB80045)
図版130	中世 掘立柱建物21 (SB80046)
図版131	中世 木棺墓 (ST80001)、井戸 (SE80001)
図版132	中世 土坑1 (SK80002~80006)
図版133	中世 土坑2 (SK80007~80009)
図版134	中世 土坑3 (SK80010・80013~80015)
図版135	中世 土坑4 (SK80016~80019・80022・80023)
図版136	中世 土坑5 (SK80011・80012・80020)、溝 (SD80004)

遺物図面

図版137	縄文晩期 土器1 (河道/1~12)
図版138	縄文晩期 土器2 (河道/13~25)
図版139	弥生前期 土器1 (26~50)
図版140	弥生前期 土器2 (51~61)
図版141	弥生中期下層 土器1 (河道・溝/62~76)
図版142	弥生中期下層 土器2 (溝・土坑・竪穴住居/77~89)
図版143	弥生中期下層 土器3 (溝/90~106)
図版144	弥生中期下層 土器4 (土坑・竪穴住居/107~123)
図版145	弥生中期上層 土器1 (河道/124~132)
図版146	弥生中期上層 土器2 (河道/133~143)
図版147	弥生中期上層 土器3 (河道/144~160)
図版148	弥生中期上層 土器4 (河道/161~166)
図版149	弥生中期上層 土器5 (河道/167~176)
図版150	弥生中期上層 土器6 (河道・溝/177~193)
図版151	弥生中期上層 土器7 (溝/194~211)
図版152	弥生中期上層 土器8 (溝/212~226)
図版153	弥生中期上層 土器9 (溝・水田/227~243)
図版154	弥生中期上層 土器10 (方形周溝墓/244~247)
図版155	弥生中期上層 土器11 (方形周溝墓/248~255)
図版156	弥生中期上層 土器12 (方形周溝墓/256~259)
図版157	弥生中期上層 土器13 (方形周溝墓/260~264)
図版158	弥生中期上層 土器14 (方形周溝墓/265~271)
図版159	弥生中期上層 土器15 (方形周溝墓/272~274)
図版160	弥生中期上層 土器16 (方形周溝墓/275~281)
図版161	弥生中期上層 土器17 (方形周溝墓/282~291)
図版162	弥生中期上層 土器18 (方形周溝墓/292~302)
図版163	弥生中期上層 土器19 (方形周溝墓/303~311)
図版164	弥生中期上層 土器20 (方形周溝墓/312~320)
図版165	弥生中期上層 土器21 (方形周溝墓/321~330)
図版166	弥生中期上層 土器22 (方形周溝墓/331~336)
図版167	弥生中期上層 土器23 (方形周溝墓/337~352)
図版168	弥生中期上層 土器24 (方形周溝墓/353~361)

図版169	弥生中期上層	土器25 (方形周溝墓/362~371)
図版170	弥生中期上層	土器26 (方形周溝墓/372~378)
図版171	弥生中期上層	土器27 (方形周溝墓/379~386)
図版172	弥生中期上層	土器28 (方形周溝墓/387~402)
図版173	弥生中期上層	土器29 (方形周溝墓/403~410)
図版174	弥生中期上層	土器30 (平地住居SB40001/411~415)
図版175	弥生中期上層	土器31 (平地住居SB40001/416~423)
図版176	弥生中期上層	土器32 (平地住居SB40001/424~429)
図版177	弥生中期上層	土器33 (平地住居SB40001/430~433)
図版178	弥生中期上層	土器34 (平地住居SB40001/434~439)
図版179	弥生中期上層	土器35 (平地住居SB40001/440~446)
図版180	弥生中期上層	土器36 (竪穴住居/447~463)
図版181	弥生中期上層	土器37 (竪穴住居・土坑/464~475)
図版182	弥生中期上層	土器38 (土坑/476~480)
図版183	弥生中期上層	土器39 (竪穴住居・土坑/481~495)
図版184	弥生中期上層	土器40 (土坑/496~511)
図版185	弥生中期上層	土器41 (土坑/512~522)
図版186	弥生中期上層	土器42 (土器棺/523~529)
図版187	弥生中期上層	土器43 (土器棺/530~535)
図版188	弥生中期上層	土器44 (土器棺・ピット/536~547)
図版189	弥生中期上層	土器45 (包含層/548~564)
図版190	弥生後期~古墳前期	土器1 (河道/565~581)
図版191	弥生後期~古墳前期	土器2 (河道/582~601)
図版192	弥生後期~古墳前期	土器3 (河道/602~616)
図版193	弥生後期~古墳前期	土器4 (河道/617~632)
図版194	弥生後期~古墳前期	土器5 (河道/633~648)
図版195	弥生後期~古墳前期	土器6 (河道/649~668)
図版196	弥生後期~古墳前期	土器7 (河道/669~690)
図版197	弥生後期~古墳前期	土器8 (土坑・溝/691~707)
図版198	弥生後期~古墳前期	土器9 (竪穴住居/708~725)
図版199	弥生後期~古墳前期	土器10 (竪穴住居/726~750)
図版200	古墳後期	土器 (751~791)
図版201	中世	土器1 (溝/792~848)
図版202	中世	土器2 (溝・包含層/849~879)
図版203	中世	土器3 (掘立柱建物・欄/880~928)
図版204	中世	土器4 (掘立柱建物・ピット/929~938)
図版205	中世	土器5 (掘立柱建物・ピット/939~979)
図版206	中世	土器6 (土坑/980~1026)
図版207	中世	土器7 (土坑/1027~1030)
図版208	中世	土器8 (土坑/1031~1033)
図版209	中世	土器9 (土坑/1034・1035)
図版210	中世	土器10 (土坑/1036~1086)
図版211	中世	土器11 (土坑/1087~1097)
図版212	中世	土器12 (井戸/1098~1123)
図版213	中世	土器13 (土器群/1124~1145)
図版214	弥生中期	土製品 (1146~1159)
図版215	中世	輸入磁器 (1160~1188)
図版216	中世	瓦1 (丸瓦・鬼瓦/1189~1203)
図版217	中世	瓦2 (平瓦/1204~1212)
図版218	弥生中期下層	石器1 (1~16)
図版219	弥生中期下層	石器2 (17~24)
図版220	弥生中期下層	石器3 (25~30)
図版221	弥生中期上層	石器4 (31~52)
図版222	弥生中期上層	石器5 (53~75)
図版223	弥生中期上層	石器6 (76~89)
図版224	弥生中期上層	石器7 (90~99)
図版225	弥生中期上層	石器8 (100~111)
図版226	弥生中期上層	石器9 (112~116)
図版227	弥生中期上層	石器10 (117~122)
図版228	弥生中期上層	石器11 (123~129)
図版229	弥生中期上層	石器12 (130~135)
図版230	弥生中期上層	石器13 (136~141)
図版231	弥生中期上層	石器14 (142~160)
図版232	弥生中期上層	石器15 (161~179)
図版233	弥生中期上層	石器16 (180~191)
図版234	弥生中期上層	石器17 (192~194)
図版235	弥生中期上層	石器18 (195~203)
図版236	弥生中期上層	石器19 (主に包含層/204~229)
図版237	弥生中期	石器20 (主に包含層/230~253)
図版238	弥生中期	石器21 (主に包含層/254~263)

図版239	弥生中期	石器22 (主に包含層/264~271)
図版240	弥生中期	石器23 (主に包含層/272~277)
図版241	弥生中期	石器24 (主に包含層/278~281)
図版242	弥生中期	石器25 (主に包含層/282~286)
図版243	弥生中期	石器26 (主に包含層/287~294)
図版244	弥生中期	石器27 (主に包含層/295~309)
図版245	弥生中期	石器28 (主に包含層/310~325)
図版246	弥生中期	石器29 (包含層/326~342)
図版247	弥生中期	石器30 (主に包含層/343~360)
図版248	弥生中期	石器31 (主に包含層/361)
図版249	縄文晩期・弥生後期	石器32 (362~367)
図版250	弥生中期	石器33 (河道/368~372)
図版251	弥生中期	石器34 (河道/373~374)
図版252	弥生	石器35 (375~387)・弥生遊離遺物
図版253	弥生	石器36 (388~392)・弥生遊離遺物
図版254	中世	石器37 (393~397)
図版255	弥生中期	玉類 (1~44)、青銅製品 (1)
図版256	中世	金属器 (2~17)、土製品 (18~21)、石製品 (22~24)
図版257	木製品	木製品 1 (1001~1006)
図版258	木製品	木製品 2 (1007~1009)
図版259	木製品	木製品 3 (1010~1016)
図版260	木製品	木製品 4 (1017~1025)
図版261	木製品	木製品 5 (1026~1032)
図版262	木製品	木棺材 (1033~1035)

遺構写真

図版263	縄文晩期	(徳政15・16・二ノ郷11、河道SR10001/徳政11・13、土坑群SK10001~10007)
図版264	縄文晩期	(二ノ郷12、河道SR10001・溝SD10001/河道SR10001土器出土状況)
図版265	弥生中期下層	(徳政1、水田・河道SR30001/徳政11、水田)
図版266	弥生中期下層	(徳政2~4、水田・水路SD30001~30003・河道SR30001/徳政1、水田・水路SD30002・30004)
図版267	弥生中期下層	(徳政9、水田/徳政10、水田)
図版268	弥生中期下層	(徳政8、竪穴住居SH30001/遺構群)
図版269	弥生中期下層	(徳政8、土坑SK30001上層/下層)
図版270	弥生中期上層	(SY1、河道SR40001遺物出土状況/二ノ郷4、河道SR40002木器出土状況)
図版271	弥生中期上層	(徳政1、水田・河道SR40004/水田・島状高まり)
図版272	弥生中期上層	(徳政2~4、水田/水田・水路SD40003)
図版273	弥生中期上層	(徳政1、水田・水路SD40003/水路SD40003)
図版274	弥生中期上層	(徳政3、水田足跡/SY8、水田足跡)
図版275	弥生中期上層	(竹添4A、水路SD40003/水路SD40003・水口)
図版276	弥生中期上層	(SY、水田畦畔断面)
図版277	弥生中期上層	(黒岡6、水田/黒岡6、水田・河道SR40001/黒岡5、水田・河道SR40001)
図版278	弥生中期上層	(黒岡5、水田/黒岡10、水田/黒岡4、水田・地裏痕跡)
図版279	弥生中期上層	(SY1、平地住居SB40001南から/東から)
図版280	弥生中期上層	(徳政8、平地住居SB40002土器出土状況/完掘状況)
図版281	弥生中期上層	(徳政8、平地住居SB40002土器出土状況細部/土器出土状況細部)
図版282	弥生中期上層	(徳政8、平地住居SB40002主要土器出土状況復原/主要土器復原)
図版283	弥生中期上層	(徳政7、竪穴住居SH40003・40004/徳政8、竪穴住居SH40007)
図版284	弥生中期上層	(竹添4A、竪穴住居SH40001・水路SD40004・水田/竪穴住居SH40001・40002)
図版285	弥生中期上層	(SY1、竪穴住居SH40009/竪穴住居SH40010)
図版286	弥生中期上層	(徳政7、水路SD40003東大畔上層出土状況/土坑SK40004土器出土状況)
図版287	弥生中期上層	(SY1、土器棺墓群SP40001~40003/土器棺墓SP40006)
図版288	弥生中期上層	(SY1、土器棺墓SP40004/徳政8、土器棺墓SP40007)
図版289	弥生中期上層	(二ノ郷1、方形周溝墓群/方形周溝墓群上層)
図版290	弥生中期上層	(二ノ郷1、方形周溝墓SX40002周辺土器出土状況/土壘墓ST40026)
図版291	弥生中期上層	(二ノ郷2、方形周溝墓SX40014~40015土器出土状況/細部)
図版292	弥生中期上層	(二ノ郷1、方形周溝墓群・河道SR40001/二ノ郷1・2・5、方形周溝墓群)
図版293	弥生中期上層	(二ノ郷2、方形周溝墓SX40021~40022土器264出土状況/SX40022~40027・40028土器出土状況)
図版294	弥生中期上層	(KM4、方形周溝墓SX40001/木棺ST40001)
図版295	弥生中期上層	(二ノ郷2・5、方形周溝墓SX40018上層/木棺ST40009・ST40008)
図版296	弥生中期上層	(二ノ郷2・5、方形周溝墓SX40018下層/木棺ST40024・ST40023)
図版297	弥生中期上層	(二ノ郷2・5、木棺ST40023/ST40024)
図版298	弥生中期上層	(二ノ郷2・5、木棺ST40023/ST40024・ST40033/木蓋土壘ST40033/木蓋土壘ST40033人骨細部)
図版299	弥生中期上層	(二ノ郷16、方形周溝墓SX40038・40039/木棺)
図版300	弥生中期上層	(二ノ郷16、木棺ST40044・40046土層/人骨)
図版301	弥生中期上層	(二ノ郷16、木棺ST40045蓋/人骨)
図版302	弥生中期上層	(二ノ郷4、方形周溝墓SX40023/木棺ST40028)
図版303	弥生中期上層	(二ノ郷2、方形周溝墓SX40026墓標/木棺ST40030・墓標坑)
図版304	弥生中期上層	(二ノ郷2、方形周溝墓SX40026断面/木棺ST40030断面)
図版305	弥生中期上層	(二ノ郷2、木棺ST40030組合せ状況/小口内面組合せ状況)
図版306	弥生中期上層	(二ノ郷2、木棺ST40030人骨痕跡/蓋/全体)

図版307	弥生中期上層 (二ノ郷 5、木棺ST40019／管玉出土状況)
図版308	弥生中期上層 (二ノ郷 4、木棺ST40027蓋／底)
図版309	弥生中期上層 (二ノ郷 1、木棺ST40004検出位置／蓋)
図版310	弥生中期上層 (二ノ郷 1、木棺ST40004人骨／東側板)
図版311	弥生中期上層 (二ノ郷 1、木棺ST40004青銅武器鋒出土状況／青銅武器鋒出土状況細部)
図版312	弥生中期上層 (二ノ郷15、木蓋土塚ST40043土層／土器出土状況)
図版313	弥生中期上層 (二ノ郷15、木蓋土塚ST40043根太／人骨)
図版314	弥生中期上層 (二ノ郷 2、木棺ST40005蓋／人骨)
図版315	弥生後期 (二ノ郷 3、河道SR50002／河道SR50002杭列)
図版316	弥生後期 (徳政 3、水田／徳政11、水田)
図版317	弥生後期 (黒岡 3、全景／河道SR50001)
図版318	弥生後期 (黒岡 3、竪穴住居SB50001炭化材検出状況／竪穴住居SB50001土器出土状況)
図版319	弥生後期 (黒岡 3、竪穴住居SB50001土器出土状況細部／竪穴住居SB50002)
図版320	古墳 (二ノ郷 1、溝SD60001～SD60004／二ノ郷 2・4、溝SD60001～SD60004)
図版321	古墳 (黒岡 4・9、溝SD60001～SD60004／黒岡 4、水田)
図版322	中世 (二ノ郷 6、溝SD80004全景／徳政10・二ノ郷10、全景)
図版323	中世 (徳政12、掘立柱建物群SB80001～SB80003／掘立柱建物群SB80004～SB80007)
図版324	中世 (KM 4、掘立柱建物SB80018／掘立柱建物SB80016)
図版325	中世 (KM 4、掘立柱建物群SB80019・木棺ST80001／木棺ST80001)
図版326	中世 (二ノ郷 1、掘立柱建物SB80020・SB80022／二ノ郷 5、掘立柱建物SB80021・SB80023)
図版327	中世 (徳政 1、掘立柱建物群SB80040～SB80042／徳政 4、掘立柱建物SB80029)
図版328	中世 (徳政 7、北部全景／東部全景)
図版329	中世 (二ノ郷 1、掘立柱建物SB80025／徳政 1、掘立柱建物SB80032)
図版330	中世 (徳政 6、掘立柱建物SB80047柱痕P2／柱痕P1)
図版331	中世 (徳政 1、柱穴P800031遺物出土状況／掘立柱建物SB80041柱穴土器出土状況)
図版332	中世 (二ノ郷 5、土坑SK80010／二ノ郷11、土坑SK80008)
図版333	中世 (徳政 4、土坑SK80017／KM 4、土坑SK80013)
図版334	中世 (徳政11、井戸SE80001上層／下層)
図版335	中世 (徳政11、井戸SE80001下層遺物出土状況／断面)

遺物写真

図版336	縄文晩期 土器 1
図版337	縄文晩期 土器 2・弥生前期 土器 1
図版338	弥生前期 土器 2
図版339	弥生中期下層 土器 1
図版340	弥生中期下層 土器 2
図版341	弥生中期下層 土器 3
図版342	弥生中期上層 土器 1
図版343	弥生中期上層 土器 2
図版344	弥生中期上層 土器 3
図版345	弥生中期上層 土器 4
図版346	弥生中期上層 土器 5
図版347	弥生中期上層 土器 6
図版348	弥生中期上層 土器 7
図版349	弥生中期上層 土器 8
図版350	弥生中期上層 土器 9
図版351	弥生中期上層 土器10
図版352	弥生中期上層 土器11
図版353	弥生中期上層 土器12
図版354	弥生中期上層 土器13
図版355	弥生中期上層 土器14
図版356	弥生中期上層 土器15
図版357	弥生中期上層 土器16
図版358	弥生中期上層 土器17
図版359	弥生中期上層 土器18
図版360	弥生中期上層 土器19
図版361	弥生中期上層 土器20
図版362	弥生中期上層 土器21
図版363	弥生中期上層 土器22
図版364	弥生中期上層 土器23
図版365	弥生中期上層 土器24
図版366	弥生中期上層 土器25
図版367	弥生中期上層 土器26
図版368	弥生中期上層 土器27
図版369	弥生中期上層 土器28
図版370	弥生中期上層 土器29
図版371	弥生中期上層 土器30
図版372	弥生中期上層 土器31
図版373	弥生中期上層 土器32
図版374	弥生中期 土製品

- 図版375 弥生後期 土器 1
 図版376 弥生後期 土器 2
 図版377 弥生後期 土器 3
 図版378 弥生後期 土器 4
 図版379 弥生後期 土器 5
 図版380 弥生後期 土器 6
 図版381 弥生後期 土器 7
 図版382 弥生後期 土器 8
 図版383 古墳後期 土器
 図版384 中世 土器 1
 図版385 中世 土器 2
 図版386 中世 土器 3
 図版387 中世 土器 4
 図版388 中世 土器 5
 図版389 中世 土器 6
 図版390 中世 土器 7・石製品、土製品
 図版391 中世 輸入磁器
 図版392 中世 瓦・鉄製品
 図版393 弥生中期 玉類・青銅製品
 図版394 石器 1 (弥生中期下層)
 図版395 石器 2 (弥生中期下層)
 図版396 石器 3 (弥生中期上層)
 図版397 石器 4 (弥生中期上層)
 図版398 石器 5 (弥生中期上層)
 図版399 石器 6 (弥生中期)
 図版400 石器 7 (弥生中期)
 図版401 石器 8 (弥生中期)
 図版402 石器 9 (弥生中期)
 図版403 石器 10 (縄文晩期・弥生中・後期)
 図版404 石器 11 (弥生中期)
 図版405 石器 12 (中世)
 図版406 石器 13 (弥生中期上層)
 図版407 石器 14 (弥生中期上層)
 図版408 石器 15 (弥生中期上層)
 図版409 石器 16 (弥生中期上層)
 図版410 石器 17 (弥生中期)
 図版411 木器 1 (縄文晩期・弥生後期・古墳)
 図版412 木器 2 (弥生後期)
 図版413 木器 3 (弥生中・後期)
 図版414 木器 4 (弥生中・後期)
 図版415 木棺材 (弥生中期上層)

第I部 はじめに

第1章 遺跡をとりまく環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境 (図版1)

玉津田中遺跡は神戸市西区玉津町宮下1～3丁目に所在する。神戸市の西端に位置し、明石の市街地から北へ約5kmに位置する。事業地の南東部方向で、南北に走る一般国道175号（三木街道）と東西に走る第二神明道路とが交差する玉津インターチェンジが存在し、交通の要衝となっている。

播磨灘北東岸の地形は、本来水平に堆積していたものが、六甲山の地殻変動のため隆起し、六甲山から西の加古川方向に向かって傾斜している。この丘陵を伊川、永井谷川、櫛谷川、田中川、明石川などの川が浸食して、段丘を形成している。明石川西岸の播磨灘北東岸は、段丘面の発達が著しく、玉津田中遺跡の西側では、最高位である明美Ⅱ面や明美Ⅰ面が存在する。深い開析谷が発達し、丘陵状の尾根が形成されている。段丘を形成する堆積物は大阪層群の明石層と呼ばれ、砂礫層によって形成されており風化により赤化が進んでいる。

玉津田中遺跡は六甲山系西端に源を発する明石川中流域の左岸に立地する。明石川は中流域では南流し、厚く沖積層を堆積させている。東側の段丘は埋没しており、沖積平野を形成し、完新世段丘と氾濫源で構成されている。

古代に条里地割が施工された後は、明石川は現在とはほぼ同じ位置に付け替えられて流れ、事業地の調査前の現況である水田景観となったのである。

第2節 歴史的環境 (図版1)

明石川流域周辺は恵まれた立地条件のため、旧石器時代から近世にわたって多くの遺跡が分布する。ここでは調査を実施した玉津田中遺跡が位置する明石川中・下流域を中心に旧明石郡など周辺地域を含めて時代ごとに概観する。

1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、雌岡山・雄岡山周辺の拍子池遺跡・青池遺跡・金棒池遺跡や伊川谷の池上南山遺跡などでナイフ形石器などが採集されている。いずれも高位段丘上に立地しているが、調査はされていない。新方遺跡の弥生時代の旧河道から翼状剥片が出土している。また明石人で有名な谷八木遺跡でも調査が行われ、加工木材などが出土している。最近、明石市西脇遺跡では発掘調査が行われ、多数の石器が出土している。

2. 縄文時代

縄文時代の調査例は少なく、採集資料で補っている部分が多い。

縄文時代草創期の有舌尖頭器が神出町金棒池遺跡、青谷遺跡、明石市野々池遺跡で採集されている。前期の遺跡には大蔵山遺跡があり、前期後半の遺物が出土している。中期の遺跡には明石市出ノ上遺跡があり土器が採集されている。

縄文時代後期になると遺跡数は増加し、元住吉山遺跡、大畑遺跡、印路遺跡、片山遺跡、長坂遺跡、

南別府遺跡、明石市出ノ上遺跡などの遺跡が知られている。元住吉山遺跡は縄文時代後期の標式遺跡であり、石囲い炉が見つかった。長坂遺跡では円形の竪穴住居が調査されている。印路遺跡では土坑、溝などが調査されている。

縄文時代晩期の遺跡は玉津田中遺跡の他に西戸田遺跡などがある。

3. 弥生時代

(1) 弥生時代前期

弥生時代にはいと遺跡の数は増加する。前期の明石川流域最古の土器は吉田遺跡で出土しており、中段階以降は玉津田中遺跡でも遺構が見られる。新段階からは新方遺跡、常本遺跡、鍋谷池遺跡、南別府遺跡、二ツ屋東遺跡などが調査されている。常本遺跡では竪穴住居2棟と木棺墓3基が調査されており、西戸田遺跡・二ツ屋東遺跡では土坑が調査されている。

(2) 弥生時代中期前半

弥生時代中期になると前期に比べて遺跡数も増し、遺跡の規模も大きくなる。玉津田中遺跡でも竪穴住居をはじめ土器量も増えている。

弥生時代中期前半から中頃の集落は新方遺跡・今津遺跡・居住小山遺跡などの各遺跡で調査が実施されている。新方遺跡・今津遺跡・居住小山遺跡は中期中頃までの集落であり、いずれも沖積地もしくは台地上に立地している。竪穴住居は円形で、新方遺跡では玉作り関係の遺物が出土している。出合遺跡では水田が調査されている。

中期前半の墓は新方遺跡で貼り石のある円形周溝墓が調査されている他、今津遺跡で木棺墓や土器棺などが調査されている。中頃は新方遺跡と出合遺跡で方形周溝墓群が調査されている。いずれも沖積地で集落に隣接している。

(3) 弥生時代中期後半

中期後半の遺跡は、西神第50号地点・西神第38号地点・養田中の池遺跡・鍋谷池遺跡・西神第65号地点・西神第62号地点・池上ノ池遺跡・頭高山遺跡などが調査されている。いずれも丘陵上に立地しており、尾根上や丘陵斜面に竪穴住居を築いている。青谷遺跡では石戈や磨製石剣などが採集されている。

中期後半の墓はいずれも丘陵上に立地しており、印路台状墓・西神第40号地点で方形台状墓が調査されている。埋葬施設はいずれも複数の木棺を直葬している。西神第47号地点は墓壇群で11基が調査されている。西神第42号地点は木棺墓、土壇墓、土器棺が調査されている。西神第59号地点は木棺墓、土壇墓が調査されている。鍋谷池遺跡と西神第65号地点遺跡・頭高山遺跡では土器棺墓が調査されている。

西神第65号地点では石製の銅鐸の未成品1対が出土しているが、明石川流域からは銅鐸は出土していない。

以上の様に明石川流域では、集落・墓地が弥生時代中期中頃までは低地に形成されていたものが、弥生時代中期後半になると丘陵上に形成されているという特徴がある。

(4) 弥生時代後期

弥生時代後期になると、弥生時代中期後半に丘陵上に上がった集落は再び低地で形成される。前期、中期から続いていた玉津田中遺跡や新方遺跡の他に、吉田南遺跡、高津橋・岡遺跡・大畑遺跡などが調査されている。

白水遺跡では竪穴住居が調査されており、吉田南遺跡では竪穴住居や水田が調査されている。

墓は池上北遺跡で土器棺が調査されている。

玉津田中遺跡や新方遺跡と同様に、吉田南遺跡・池上北遺跡は古墳時代へと続いている。

3. 古墳時代

(1) 集落・生産遺跡

古墳時代の集落は吉田南遺跡・出合遺跡・印路遺跡・常本遺跡・黒田遺跡・居住遺跡・芝崎遺跡・堅田遺跡・養田遺跡・高津橋・岡遺跡・池谷遺跡・新方遺跡・池上ノ池遺跡・長坂遺跡・西神第62号・長坂遺跡の各遺跡で調査が実施されている。玉津田中遺跡と同様に吉田南遺跡・新方遺跡では前期から後期まで継続している。

特に、吉田南遺跡は前期から後期にかけての集落で方形の竪穴住居72棟を検出している。

生産遺跡としては水田、玉作り、須恵器窯があり、水田は吉田南遺跡と新方遺跡で調査されている。新方遺跡において後期の碧玉と滑石の玉作り工房が調査され、多量の未成品が出土している。

古墳時代の須恵器窯は出合、藤原橋、高丘がある。出合窯跡は窯体の一部の調査であるが、遺物として須恵器甕・甌などが出土しており、県下最古の須恵器窯の位置づけがなされている。また窯の周辺から陶製の無文当て具も出土している。藤原橋窯跡は明石川中流域右岸に位置している。調査は行われていないが6世紀後半の須恵器坏・甕などが採集されている。水系は異なるが谷八木川の西、赤根川下流域右岸には金ヶ崎窯跡がある。6世紀前半の須恵器を焼いている。

(2) 古墳

古墳時代前期の古墳は天王山4・5号墳、白水瓢塚古墳、西神第44地点、西神第45地点、堅田神社1号墳、養田中の池、印路C2・3号墳などの古墳が調査されている。いずれも丘陵上に立地しており、白水瓢塚古墳が前方後円墳の他はすべて方墳である。また埋葬施設は天王山5号墳の箱形石棺を除き、すべて割竹形木棺である。

古墳時代中期の古墳は吉田王塚古墳、出合亀塚古墳、西神第9地点、西神第39地点、西神第55-2地点などで調査されている。王塚古墳は周濠をもつ前方後円墳で、亀塚古墳は帆立貝式古墳である。そのほかの中期古墳は墳形が円墳に変化するが、埋葬施設は依然として割竹形木棺が中心をなしている。

古墳時代後期の古墳は鬼神山古墳、天王山3・6号墳、居住小山古墳群、中村古墳群、印路C1号墳、西神第55号地点、西神第41号地点、西神第30号地点、西神第32号地点、西神第33号地点、堅田神社境内3号墳、西神第11号地点、七曲り6号墳、金棒池古墳、カゲユ池古墳、下大谷古墳群などの各古墳で調査が実施されている。

天王山6号墳と居住小山遺跡の5基の古墳の内3基が方墳の他は、いずれも直径10m～17mの円墳で群をなしていることが多い。埋葬施設は一部の割竹形木棺を除いて明石川流域では6世紀中頃まで箱形木棺を直葬する埋葬施設が主体を占めている。明石川流域では横穴式石室を埋葬施設とする古墳は道心山1号墳・拍子ヶ池古墳・神出東町古墳や金棒池古墳など難岡山・雄岡山周辺の明石川上流域を中心に確認されているが前時期の木棺直葬墳や山田川流域と比べると極端に少ない。金棒池古墳は明石川流域の最後の前方後円墳であり、全長31mの規模を測る。

5. 古代

古代において、玉津田中遺跡が所在する地域は播磨国明石郡明石郷の一部であると推定される。明石郡の海岸部には山陽道が通り、明石駅家が配置されている。摂津国と播磨国境の山陽道の経路には諸説があるが、現在の明石市街以西はほぼ意見が一致している。すなわち明石川の平野部は北から西に約69度振った糸里地割方向に東西に走り、和坂で屈折し、西側の丘陵上は北から西に約47度振っている。明

石駅家には諸説あるが、実際は確認されていない。なお、明石駅家と加古駅家の中間の長坂寺遺跡は瓦が出土しており駅家に推定されている。明石郡衙は吉田南遺跡に推定されており、奈良時代から平安時代にかけて企画性をもった掘立柱建物群が建ち並び、陶硯、「葛江里」を記した木簡、墨書土器などが出土している。明石郡における古代寺院は明石市太寺庵寺のみであり、塔心礎が遺存している。

明石川流域の平野部の広い範囲には、山陽道を基準とする北から東に約21度振った条里地割が認められるが、施工された時期は確定できていない。

7世紀初頭に操業が開始される高丘窯跡群は谷八木川上流域に位置している。全部で20基確認されており、その内9基が調査され、四天王寺講堂出土のものと同形同大の鵜尾が出土している。また、押部谷町和田遺跡で生焼けや焼き歪んで亀裂のある須恵器が大量に出土し、スサ入りの粘土塊などが出土していることから須恵器窯の存在が想定されている。

墓は西神第48号地点・西神第89号地点で蔵骨器が調査されている。

6. 中世

中世の集落は条里地割施行地内に存在しており、二ツ屋遺跡・今津遺跡・吉田南遺跡・新方遺跡などで調査されている。特に二ツ屋遺跡は池を伴う礎石建物・掘立柱建物の集落で辻ヶ内地区の集落との関連が注目される。また神戸市教育委員会などが調査を実施している玉津田中遺跡中津地区でも掘立柱建物が見つかっている。

須恵器窯は神出窯跡群・魚住窯跡群・三本松窯跡群などがあり、特に明石川上流などに位置する神出窯跡群は平安時代後半から鎌倉時代にかけて約100基の窯跡が確認されている瓦陶兼業窯である。瓦は鳥羽離宮や平安京六勝寺の内、法勝寺や尊勝寺を中心に運ばれている。窯跡の周辺では粘土採掘坑や掘立柱建物跡など生産にかかわった集落の様相も明らかにされつつある。

墓は居住・小山遺跡で木棺墓が、西神第10地点で群集した集石墓が34基調査されている。

城館は間島氏の福中城、明石氏の枝古城、衣笠氏の端谷城、別所氏の船上城、下津橋城などが知られているが、本格的な調査はされていない。

7. 近世～現代

近世の玉津田中遺跡周辺は播磨国明石郡田中村であり、慶長5年姫路藩領、元和3年に小笠原忠政が船上城に入封し、明石藩領となった。元和4年には赤松山に明石城を築城し城下町を形成した。

明治4年7月明石藩は廃藩置県により明石県田中村となり、同年11月姫路県に統合された後、飾磨県と改称され、明治9年府県制の改変で兵庫県明石郡田中村になった。明治22年、市制町村制の施行により14か村が合併して明石郡玉津村田中となった。

昭和22年には神戸市との合併に伴って、垂水区田中となり、昭和23年からは垂水区玉津町田中となった。昭和45年の第二神明道路の開通に伴う玉津インターチェンジの開設は、その利便性から開発の波を誘うこととなった。昭和57年には垂水区からの分区により、神戸市西区玉津町田中となり、すぐ南側に神戸市西区役所が設置された。

なお、平成4年5月にはウィンズタウンとして街開きが行われ、現在は住宅が建ちつつある。

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 開発計画

昭和48年3月、神戸市垂水区（昭和57年9月から西区）玉津町田中において、地元住民主体の組合方式の開発計画が立てられ、玉津地区土地区画整理事業の事前調査と設計事務が始まった。

その後、地元の準備会と神戸市は、5年間にわたる協議の末、諸般の事情により組合主体の施行が色々の難点を伴っていると判断をし、昭和53年3月になると、区画整理事業が日本住宅公団（現住宅・都市整備公団）に移管した。昭和56年8月に神戸市環境影響評価要綱により「神戸国際港都建設事業田中特定土地区画整理事業」の環境影響評価書案が作成された。これによると、著しい影響が考えられるものではなく、影響がないかまたは軽微なものに、工事に伴う濁水流出・建設作業騒音、工事による植物・動物への影響、施設による景観への影響が指摘された。文化財への影響は、多少の影響が指摘された。これらには適切な措置を講じ、事業を進めていくとした。これにより、昭和56年10月に都市計画法に基づく市街地開発事業並びに促進区域の決定を受け、事業が進められることとなった。

開発する意義は、区画整理の計画地域が、神戸市西神地域の中でも最も市街化の波を受けている地域であり、昭和51年10月に策定された「新神戸市総合基本計画」の中では、計画的土地利用と人口配置、施設水準の確保等を行い、良好な市街地の形成を図る地域として位置づけられた。このため計画地域は、この地域整備計画の理念を受けて、宅地造成と公共施設の整備改善を図り、当該地域における宅地不足の緩和と健全かつ良好な環境を有する市街地の形成を図ることを目的とした。

開発事業の概要は、計画面積約31ha、計画人口約3,300人とし、児童公園3園、小学校1校などを計画し、地元権利者の意向等により、適宜、集合農地区が計画され、開発計画の土地利用構成が示された。なお、当初の開発スケジュールは、昭和56年度より事業着手し、昭和60年度に事業の完了を予定した。

しかし、最終的には、小学校の計画はなくなり、計画戸数850戸で神戸ワインスタウンとして平成4年3月から募集を開始し、平成4年5月に街開きを行った。

第2節 文化財の対応

一方、事業区域内の埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、日本住宅公団が主体になった時点で、日本住宅公団から神戸市教育委員会へ分布調査の実施依頼が提出された。この依頼を受けた神戸市教育委員会は、昭和54年度に当該地の分布調査を実施した。その結果、周知の埋蔵文化財包蔵地である居住遺跡に隣接しているとともに、開発区域周辺には多くの埋蔵文化財が確認されており、事業地内では土師器・須恵器片・サヌカイト片などの遺物の散布がほぼ全域に認められた。これにより埋蔵文化財の取り扱いの協議を実施し、事業計画地全域にわたり事前の確認調査の必要性があるという結論に至った。

確認調査体制については、兵庫県教育委員会・神戸市教育委員会・住宅・都市整備公団の三者で検討し、最終的に兵庫県教育委員会が事業主体となり、調査を対応するという結論に達した。

確認調査は昭和57年3月に住宅・都市整備公団から調査依頼が出され、昭和57年4月から開始した。なお、確認調査の結果、全面調査の必要が生じた場合等の取り扱いについては、改めて協議して決めることとした。

昭和57年度から58年度前半までの確認調査は、坪掘りで行ったが、昭和58年度後半と59年度はトレン

チ調査で行った。昭和59年度までの確認調査によって、一部未買収地の確認調査はできなかったが、およその全面調査が必要な範囲はおさえられた。その結果、未確認地を除いて全体の事業計画地の約8割にあたる約25haの全面調査が必要であると判断した。

ただし、これだけの面積の全面調査となると事業自体の計画も見直す必要も迫られたため、兵庫県教育委員会と住宅・都市整備公団が建設省と文化庁を交え協議した。その結果、全体に盛土を行い保存をすること、建物は低層住宅とし地下に影響を与えないこととし、地下に影響を与え、保存不可能な部分について調査を行うこととした。調査を行う部分は全面調査が必要であると判断した部分の内、共同溝を敷設する道路部分と調整池を設置する部分や水路・擁壁の部分とした。

昭和59年度当初の公団の希望は、昭和58年度までの確認調査の成果に基づき、4地区の工区に分け、昭和59年度に第2次確認調査および都市計画道路の全面調査の一部を実施することとし、昭和61年度前半までに全面調査を終了する計画を提示してきた。また調査の進展に合わせ、昭和59年度後半から進入路築造をはじめとする整地や排水などの工事が予定され、昭和63年度の完成を目指していた。

昭和59年度までの確認調査の結果、ほとんどの地区に遺跡の存在が認められた。そればかりではなく、沖積地であるために、複数面の遺構面が存在すること、遺構・遺物の残りが非常に良いことなどが判明した。このような中で進められた昭和59年度の全面調査では、確認調査で想定していた以上の遺構や遺物の残存状況の良さで、改めて今後の調査方針を検討しなければならなくなった。

昭和60年度からは調査体制を整え、本格的に全面調査を開始した。それとともに、調査の不要箇所は盛土工事などが開始された。また調査終了箇所は随時工事が進められていった。

全面調査は住宅・都市整備公団の開発工程により兵庫県教育委員会と協議し調査地が決定され、年度単位で行われた。したがって同一地区で調査地が隣でありながら、年度を異にしていることが多い。

平成2年度には事業地北東部の未買収地を中心に確認調査を実施し、全面調査の範囲を確定し、平成2・3年度に全面調査を実施した。新たに防火水槽の設置が計画されたため、設置場所の調査を行い、現場での調査を終了した。

道路および水路部分を除いた宅地部分は、盛土し現状保存を図ることにしていた。このため、平成4年11月に、住宅の建設に先立って、公団に遺跡の範囲および調査位置を記載した図面と各地点での遺構面までの深度の一覧を付し、現状変更にあたっては教育委員会と協議するように通知し、あわせて、神戸市教育委員会にも写しを送付した。

第3節 調査の経過 (図版3)

ここでは、各調査年度における調査地点の概要を示す。詳細は、各分冊に記述している。

昭和57年度 (第1・2次調査)

昭和57年度は、調査対象地のほぼ南半分(7ラインより南側)の確認調査を実施した。手掘りにより、坪掘り202箇所、拡張13箇所、トレンチ3箇所の調査を実施した。面積は1,016㎡である。

昭和58年度 (第3・4次調査)

昭和58年度は、第3次調査で調査対象地の北半分(7ラインより北側)の確認調査を実施した。第4次調査ではFラインより西で、9ラインと10ラインの間に設定したトレンチ調査(SY1～8トレンチ)で詳細な確認調査を実施した。面積は4,567㎡である。

昭和59年度 (第5次調査)

昭和59年度は確認調査6,414㎡、および都市計画道路部分の全面調査3,400㎡の合計9,814㎡の調査を実施した。確認調査はKM4～17トレンチの14箇所で行った。面調査は辻ヶ内1区と竹添1区の2箇所で行った。

昭和60年度（第6次調査）

昭和60年度は、都市計画道路部分の確認調査249㎡、都市計画道路、街路部分および調整池部分の全面調査7,410㎡の合計約7,659㎡の調査を実施した。全面調査は、竹添2・3・4区、徳政1・2・3・4区の7箇所で行った。確認調査は居住地区で行い、全面調査が必要と判断した。

昭和61年度（第7・8次調査）

昭和61年度は、事業地の南半分を中心に都市計画道路部分および街路部分と一部拡張した部分を含めて約14,206㎡を実施した。調査を実施した区は徳政5・6・7・8区、二ノ郷1・2・3・4・5・6・7区、下町1区、竹添5・6・7・8・10・11・12・13・14・15・16・19区、池ノ内1・6・7区、居住1区の28箇所である。

昭和62年度（第9次調査）

昭和62年度は、都市計画道路部分および街路部分4,934㎡、詳細確認調査部分400㎡の合計5,334㎡について行った。都市計画道路部分および街路部分は、下町2区、亀ノ郷1・7区、池ノ内8・9・10区、辻ヶ内2区の7箇所で行った。詳細確認調査部分は弥生時代中期の方形周溝墓の広がりを確認するために、二ノ郷8・9区の2箇所で行った。

昭和63年度（第10次調査）

昭和63年度は、都市計画道路および街路部分7,877㎡、水路部分にあたる864㎡、擁壁部分にあたる593㎡の合計9,134㎡について全面発掘調査を行った。調査地点は、辻ヶ内3・4区、徳政9・10・12区、二ノ郷10区、下町8・9区、亀ノ郷3・5・6・8区、西ヶ市1・2・3・4・6・7区の合計18箇所である。

平成元年度（第11次調査）

平成元年度は、都市計画道路および街路部分にあたる10,343㎡の全面発掘調査を実施した。発掘調査地点は、亀ノ郷2・4区、下町3・4・5・6・7・10区、二ノ郷11・12・14・15・16区、徳政15・16区の16箇所である。

平成2年度（第12・13次調査）

平成2年度は、昭和59年度時点で未買収地であった地点の確認調査と都市計画道路および街路部分全面調査を実施した。全面調査は辻ヶ内5・6・7・8・9区、竹添9区、黒岡1・2・3・4・5・6・7・8・9・10区、亀ノ郷9・10・11区、池ノ内17区、狭間1・2区、唐土1・2区の24箇所の調査を実施した。調査面積は確認調査165㎡、全面調査12,026㎡の合計12,191㎡である。

平成3年度（第14次調査）

現地における発掘調査の最終年度で、発掘調査は街路部分の唐土3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16区、狭間3・4・5・6・7・8・9・10区、西ヶ市8区、防火水槽部分の徳政17区、池ノ内18区の合計25箇所の調査を実施した。調査面積は、6,217㎡である。

調査終了後は現地事務所の荷物・遺物等の撤収作業を行い、10月18日にすべての作業を完了した。

以上10年間にわたり、一部重複部分もあるが、確認調査12,411㎡、全面調査68,070㎡、合計80,481㎡の調査を行い終了した。これは事業用地のおよそ1/4、遺跡推定範囲の1/3におよぶ。

第3章 調査の方法

第1節 発掘調査

1. 調査の方針

埋蔵文化財の調査は住宅・都市整備公団から調査依頼に基づき、兵庫県教育委員会が実施した。

調査は、神戸市教育委員会の分布調査によって、遺物散布地として周知されていたため、確認調査を実施した。確認調査は遺跡の有無および性格、さらに正確な範囲と年代、遺構面までの深度などを目的に行った。確認調査は、人力による坪掘りで行っていたが、面積も高台であり、堆積状況や広がりを詳細に知る必要が合ったため、途中から、機械と人力を併用した調査に切り替えた。確認調査の結果、全面調査の必要が生じた場合等の取り扱いについては、改めて協議して決めることとした。

全面調査は確認調査の成果をふまえ、機械と人力を併用していった。現代の耕作土や遺物の含まれない洪水砂などは機械で行い、遺構検出や遺構掘削は人力で行った。また、方形周溝墓や木棺・竪穴住居跡住居など調査区外に延びている場合、その重要性に応じて、協議を行い、調査を実施した。また、最終遺構面の下層も、必要に応じて、堆積状況を確認した。

2. 調査区の呼称

調査区の名称は調査対象地が広いこともあって小字名を冠して地区名とした。また小字名は大文字アルファベットの2文字をあて、徳政 (TM)、二ノ郷 (NG)、黒岡 (KO)、竹添 (TZ)、亀ノ郷 (KG)、下町 (SM)、池ノ内 (IU)、西ヶ市 (NI)、唐土 (MK)、狭間 (HM)、辻ヶ内 (TU)、居住 (IS) と略号を使用した。それぞれの調査区は小字明に、算用数字を付加して呼称した。

3. 地区割

調査時の地区割は、事業用地の形態と明石郡条里の方向を考慮し、国土座標V系の座標北から東へ21°43'37" 東へ傾いたラインを基準に任意の玉津座標の基準として設定した。玉津座標は北から21°43'37" 東へ傾いているが、明石川上流方向を北として記述することにする。

玉津座標は全体を50m四方の大地区に分け、この中を10m四方の小地区を単位とし、北西の交点を呼称した。大地区は東西方向を大文字のアルファベットで用い、西からA～Pとした。南北方向はアラビア数字を用い、北から1～14とした。10m四方の区画は、東西方向を小文字のアルファベットを用い、a～eとした。南北方向をアラビア数字を用い1～Vとした。ただし現地調査、報告書においては、この呼称が用いられることは少なく、実測用の基準として利用している。これは調査区が、道路の形態に応じて設けられたためで、それぞれの調査区において新たな呼称を設けた。

第2節 出土品整理と報告書作成

1. 現場での出土品整理

発掘調査現場では、発掘調査と並行して出土遺物の水洗いや土壌サンプルの水洗選別を中心に作業を行った。水洗いは、土器・石器・木器などの出土遺物が中心である。土壌サンプル水洗は土坑・住居跡の床面・木棺の中などの微細な遺物を採集することを目的として行い、土器・石器・玉・植物種子など、通常の発掘方法では取り上げられないものまで採集した。また完形に近い土器などは接合・復原して現地説明会などに役立てた。また、木器は、管理が難しいため写真を撮り木器カードを作成した。遺構図

は各年度ごとに各時代の平面図（1/100）を作成し、遺構番号を明記して遺物整理に備えた。

なお、昭和58年度までの確認調査の成果は「玉津田中遺跡調査概報Ⅰ」として公表した。

2. 遺物整理年度

上記の基本方針に基づき、出土品整理と報告書作成について、平成3年4月1日付けで住宅・都市整備公団関西支社と兵庫県教育委員会との間で「発掘調査出土品整理に関する協定書」を締結し、玉津田中遺跡の発掘調査出土品整理事業を進めていくことになった。協定締結時点では発掘調査自体が完全に終了していなかったにもかかわらず、区画整理事業の工期や出土遺物の量が多かったことから、早めに出土品整理事業を進めていくこととなった。「協定書」では事業期間や事業予算などを締結した。事業期間は平成3年度から平成7年度までの5年間とした。

3. 報告書作成

報告書の作成は出土品整理開始時も発掘調査が継続中であること、また遺構面や遺物量も多量であること、1冊では到底まとめられる量ではないこと、などを考慮して、分冊にすることにした。

報告書の分冊は、遺構のつながりが判りやすく、遺物を区ごと収納しているため、遺物整理はやりやすいため地区ごとに分冊することにした。ただし、全体のまとまりがなくなることが考えられたため、別途全体をまとめた総括編でまとめることとした。報告書は、①徳政・二ノ郷・黒岡地区、②池ノ内・下町・西ケ市・亀ノ郷地区、③狭間・唐土地区、④辻ケ内地区、⑤竹添地区の5分冊を予定し、最後に⑥総括編を予定した。各①から⑤までの分冊は、各編集担当を置き、事実報告を中心にを行い、⑥総括編で全体のまとめ、自然科学分野の報告、考察を掲載する予定をした。

4. 遺物整理計画

報告書の作成計画に基づき、遺物の整理計画を策定した。①徳政・二ノ郷・黒岡地区は平成3・4年度に遺物整理を行い、平成5年度に刊行を計画した。②池ノ内・下町・西ケ市・亀ノ郷地区は平成4・5年度に遺物整理を行い、平成5年度に刊行を計画した。③狭間・唐土地区は平成4・5年度に遺物整理を行い、平成6年度に刊行を計画した。④辻ケ内地区は平成5・6年度に遺物整理を行い、平成6年度に刊行を計画した。⑤竹添地区は平成3年度から7年度まで遺物整理を行い、平成7年度に刊行を計画した。⑥総括編は平成7年度に刊行を計画した。

5. 出土品整理

埋蔵文化財調査事務所では遺物の接合・復原・実測・拓本・写真撮影と遺構図補正とトレース・レイアウト、原稿執筆を主な仕事とした。

遺物は出土量が多量のため、選別にあたっては遺構出土遺物を中心に行い、旧河道や包含層出土遺物については、時期が特定できるものや遺跡の特質が判る遺物を選択した。また写真撮影するものを中心に復原を行った。

金属器・木器については実測・復原・写真撮影の後、保存処理を行った。木器については魚住分館にPEGタンクを入れて、大型品や技術的に処理が難しいものを除いて、処理することとした。

また、玉津田中遺跡の環境復原や生活復原をするため、炭化米や炭化種子・獣骨など部分的に同定などの分析を行い、サヌカイト剥片や玉類は選択的に産地同定し、木製品の樹種の同定も主要なものについて行った。

第II部 第1分冊の概要

第1章 第1分冊の概要と経過

第1節 概要

第1分冊で報告する調査地域は、玉津田中遺跡全体の西部の徳政・二ノ郷・黒岡地区に位置する。約8,800㎡の面積がある。東側は第5分冊の竹添地区、第2分冊の下町・亀ノ号地区に隣接している。北側・西側は遺跡は続くが事業地外であり、調査していない。南側は事業地外であるが、明石川の氾濫原のため遺跡は広がっていない。西側の約10m～100m西側に現在の明石川が流れている。

第2節 調査経過

第1分冊に報告する徳政・二ノ郷・黒岡地区の調査は、確認調査を第1次・第2次・第3次で行い、全面調査を第5次・第6次・第7次・第8次・第9次・第10次・第11次・第13次・第14次に行った。

第1次調査（遺跡調査番号 820041）

第1分冊の調査地区は徳政東地区（D・E-10～13）の坪掘りを15箇所と下河原地区Fラインより西で12箇所の坪掘りを行った。

調査の結果、E10-1・3で弥生時代中期の溝を検出した。D11-2、E10-3、E11-1で中世のピットや溝を検出した。全体に中世と弥生時代の遺跡の広がりが見られた。下河原地区は明石川の氾濫原で遺構は検出できなかった。

第2次調査（遺跡調査番号 820064）

第1分冊部分の第2次調査は徳政西地区（B・C-10～13）で22箇所と二ノ郷地区（B～E-7～9）で30箇所の坪掘りを58箇所行った。

調査の結果、C9-4、C10-1・4に弥生時代中期の水田の小畦畔が見つかり、周囲にも水田土壌が広がっていることから周辺の広い範囲に水田が広がっていることが想定された。E9から南は微高地が広がっていることも判明した。また古墳時代前期の溝をD7-1で、古墳時代後期の溝をE9-1で検出した。中世はB12-1で土坑が、C9-2で柱穴群を検出した他、徳政地区に中世遺物の散布が認められた。これにより徳政・二ノ郷地区全域に遺跡が広がっていることが判明した。

第3次調査（遺跡調査番号 830042）

第1分冊部分の第3次調査は黒岡地区（B・C-3～7）の坪掘りとKM1トレンチとKM3トレンチのB-C-Dの確認調査を実施した。C6-1では弥生時代後期の河道を検出したため拡張した。その結果、弥生時代後期の土器や木器が多量に出土した。KMトレンチでは広い範囲の状況を確認し、溝などととも旧河道や微高地といった地形的な変遷も確認でき、黒岡地区の様相が明らかになった。

第4次調査（遺跡調査番号 830057）

第1分冊部分の第4次調査はSY1～8区の全面調査を実施した。全体に中世の遺構が広がり、その下層からはSY1区からは旧河道と微高地上の平地住居や土坑・土器棺墓群を確認した。SY2～8区では良好な弥生時代中期上層水田を検出した。なおその下層は調査していない。

第5次調査（遺跡調査番号 840016）

昭和59年度の第1分冊部分の調査はKM4・7・8トレンチのA-F間・KM9で確認調査を実施した。KMトレンチでは広い範囲の状況を確認し、溝・旧河道や微高地といった地形的な変遷も確認できた。特にKM4トレンチのC-D間では中世の掘立柱建物跡や方形周溝墓を確認したため拡張した。

第1～3次調査の坪掘りによる確認調査に加え第3～5次調査のトレンチによる確認調査により遺跡の状況が点的なものから面的なものへと明らかになった。

第6次調査（遺跡調査番号 850011）

昭和60年度の第1分冊部分の調査は徳政1～4区、竹添4A区で全面調査を実施した。徳政3・4区は弥生時代中期の水田の広がり状況と状況を把握するために設けた区である。

竹添4A区では、中世の溝・掘立柱建物跡、古墳時代後期の溝、弥生時代中期の竪穴住居跡・溝・水田を検出した。徳政1～4区では中世の溝・掘立柱建物跡、弥生時代中期の2面の水田域が広がっており、水路や大畦畔、鳥状高まりなども検出した。

第7・8次調査（遺跡調査番号 860011）

昭和61年度の第1分冊部分の調査は徳政5～8区、二ノ郷1～7区で全面調査を実施した。二ノ郷5区は方形周溝墓群の様相を確認するために設けた調査区である。

徳政5～8区は、中世の掘立柱建物跡や溝や土坑を調査した。また7・8区では南北に走る古墳時代の溝を調査した。古墳時代以前は、西側に位置する5・6区と7・8区の西側では水田地帯であり、7・8区の東側では微高地となり竪穴住居跡や土坑などを調査した。また8区の水田水路と微高地西側の河道に挟まれた微高地からは洪水の砂で埋もれた平地住居を検出し、床面に多数の完形土器が出土した。弥生時代中期下層の検出面は南北に走る溝を調査した。

二ノ郷1～6区は中世の面、古墳時代の面、弥生時代中期上層の面、弥生時代中期下層の面を調査した。中世の検出面では溝、掘立柱建物跡、土坑などを調査した。古墳時代の検出面では南北に走る溝を調査した。弥生時代中期上層の面では方形周溝墓群を検出し、残りのよい埋葬施設を調査した。

なお、昭和61年8月と11月に現地説明会を実施し、一般に公開した。

第9次調査（遺跡調査番号 870011）

昭和62年度の第1分冊部分の調査は二ノ郷8・9区の全面調査を実施した。

二ノ郷8・9区は弥生時代中期の方形周溝墓群と住居跡群との関係明らかにするため、調査を実施した。その結果、方形周溝墓が南側に伸びており南端を確認した。また断面の観察の結果、調査区の南部においては、竪穴住居跡を方形周溝墓群が切る様相が判明し、墓域の拡大に伴って、方形周溝墓が居住区域まで広がってきたことが判った。この区は下層の調査は行っていない。なお、発掘調査に先立ち、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの協力を得て、この周辺区域の電気探査を行った。

第10次調査（遺跡調査番号 880011）

昭和63年度の第1分冊部分の調査は徳政9～12区、二ノ郷10区で全面調査を実施した。

徳政9・10区、二ノ郷10区は区の西端に位置する南北に長い調査区で、中世の条里の坪境溝を調査した。弥生時代中期は水田、水路、河道を調査した。弥生時代前期は徳政9区で水田、水路を調査した。縄文時代晩期は二ノ郷10区、徳政10区で河道を調査した。

徳政11・12区では中世の掘立柱建物跡、土坑、溝と弥生時代中期上層の水田、水路、弥生時代中期下層の水田、水路、弥生時代前期から縄文時代晩期の自然河道を検出した。

第11次調査（遺跡調査番号 890011）

平成元年度の第1分冊部分の調査は徳政13～16区、二ノ郷11～16区、下町3・10区で全面調査を実施した。なお二ノ郷16区では木棺が区外に延びていたため、一部拡張した。

徳政15・16区は検出した遺構面は弥生時代上層の水田と、弥生時代前期の溝と弥生時代前期から縄文時代晩期の河道を調査した。

二ノ郷11～13区は、検出した遺構面は中世の溝と掘立柱建物跡と土坑、弥生時代中期上層の河道、水路、水田、弥生時代中期下層の溝、弥生時代前期の旧河道と溝、縄文時代晩期の河道を調査した。二ノ郷14～16区は、調査を実施した遺構は中世の溝、古墳時代後期の溝、古墳時代前期の溝、弥生時代後期の土坑、弥生時代中期の河道と方形周溝墓群、弥生時代中期前半の溝である。下町3・10区は後期の水田、水路、溝、弥生時代後期の河道、溝、柱穴列、弥生時代中期の河道を調査した。

第13次調査（遺跡調査番号 900009）

平成2年度の第1分冊部分の調査は黒岡1～10区で全面調査を実施した。

黒岡1・3・8区では古墳時代後期の水田、弥生時代後期の火災にあった竪穴住居跡・河道、弥生時代中期の河道・水田土壌を調査した。黒岡4・5・9区では古墳時代後期の水田・水路、弥生時代後期の溝・河道、弥生時代中期の水田・河道を調査した。4区では地震の痕跡を確認した。

黒岡6・7・10区では古墳時代後期の水田、弥生時代中期の水田・河道を調査した。

第14次調査（遺跡調査番号 910029）

平成3年度の第1分冊部分の調査は防火水槽設置のため、徳政17区で全面調査を実施した。鎌倉時代の溝と弥生時代中期上層水田を調査をした。

第3節 調査担当者

1. 発掘調査

第1次調査（遺跡調査番号 820041） 期 間 昭和57年4月12日～6月30日

担当者 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課
大平 茂・山下史朗

第2次調査（遺跡調査番号 820064） 期 間 昭和57年11月19日～12月28日

担当者 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課
井守徳男・大平 茂・山下史朗

第3次調査（遺跡調査番号 830042） 期 間 昭和58年4月16日～8月10日

担当者 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課
山本三郎・山下史朗

第4次調査（遺跡調査番号 830057） 期 間 昭和58年8月1日～昭和59年3月31日

担当者 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課
山本三郎・山下史朗

第5次調査（遺跡調査番号 840016） 期 間 昭和59年4月12日～昭和60年3月31日

担当者 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課
山本三郎・加古千恵子・中川 渉

第6次調査（遺跡調査番号 850011） 期 間 昭和60年4月30日～昭和61年3月31日

担当者 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

山本三郎・深井明比古・村上泰樹・別府洋二・藤田 淳・甲斐昭光・篠宮 正

第7次調査（遺跡調査番号 860011） 期 間 第7次 昭和61年5月26日～昭和62年3月31日

担当者 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

深井明比古・村上賢治・菱田淳子・篠宮 正

第8次調査（遺跡調査番号 860011） 期 間 第8次 昭和61年10月1日～昭和62年3月25日

担当者 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

大平 茂・深井明比古・村上賢治・久保弘幸・中川 渉・菱田淳子・篠宮 正

第9次調査（遺跡調査番号 870011） 期 間 昭和62年7月11日～10月31日

担当者 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

深井明比古・岸本一宏・中川 渉・菱田淳子・篠宮 正

第11次調査（遺跡調査番号 890011） 期 間 平成元年8月7日～平成2年3月23日

担当者 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

大平 茂・中川 渉・甲斐昭光・菱田淳子・篠宮 正

第13次調査（遺跡調査番号 900009） 期 間 平成2年6月4日～平成3年3月25日

担当者 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

山下史朗・廣野 誠・中川 渉・多賀茂治・鈴木敬二

第14次調査（遺跡調査番号 910029） 期 間 平成3年5月13日～10月18日

担当者 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

中川 渉・廣野 誠・多賀茂治・鈴木敬二・深江英憲

2. 出土品整理

平成3年度

整理普及班 篠宮 正

別府洋二（木製品保存処理）

嘱 託 員 社領育代・山口卓也・古谷章子・酒井喜美子・前山三枝子・石野照代・茨木恵美子・香川フジ子・杉本淳子・中田明美・二階堂康・西野淳子・早川亜紀子・前田千栄子・水戸美美子・本窪田英子・和田寿佐子・水谷幸子・西原美千代・光澤鈴子・伊藤ミネ子・川上啓子・衣笠雅美・長谷川洋子・飯田章子・吉田優子・家光和子

平成4年度

整理普及班 菱田淳子・篠宮 正

村上賢治（木製品保存処理）

嘱 託 員 社領育代・山口卓也・古谷章子・小川美奈・岡崎輝子・酒井喜美子・前山三枝子・今村直子・石野照代・茨木恵美子・香川フジ子・杉本淳子・中田明美・二階堂康・西野淳子・早川亜紀子・前田千栄子・水戸美美子・本窪田英子・和田寿佐子・水谷幸子・西原美千代・光澤鈴子・伊藤ミネ子・川上啓子・衣笠雅美・長谷川洋子・飯田章子・吉田優子・家光和子

平成5年度

整理普及班 菱田淳子

調査第3班 篠宮 正

嘱 託 員 社領育代・酒井喜美子・前山三枝子

第2章 調査の成果

第1節 徳政地区

1. 概要

徳政地区は事業地の西南隅に位置し、面積約23,000㎡の地区である。北に二ノ郷地区、東に竹添地区が接している。徳政地区の調査区は徳政1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16区とSY1区と竹添4A区である。

徳政地区は全体が沖積地であり、現在は段丘化し、明石川が西側を流れている。

縄文時代晩期は西端を河道が蛇行して南流しており、微高地には土坑が存在している。弥生時代前期には縄文晩期の埋没した河道に溝を掘削している。弥生時代中期下層には河道を挟んで、西側に水田、東側の微高地の高い部分に溝が掘られ竪穴住居跡住居が作られている。水田には水路が伴っており、高い部分は耕作されていない。

弥生時代中期上層には河道を挟んで、西側全面に水田、東側の微高地に居住域が形成されている。水田には水路が伴っている。この弥生時代の水田・河道は中期後半におこった大洪水によって埋没する。弥生時代後期になると河道は細くなる。低い場所は水田が作られている。

古墳時代になると、微高地の高い部分に水路が掘削され、西端の低い部分に水田が作られていた。削平されているが、ほぼ全域が水田化されていた可能性が高い。古代には条里区画が施行され整然とした水田が整えられた。中世には条里区画内に整然とした屋敷地が成立した。

2. 調査区毎の概要

(1) 徳政1区

竹添4A区と徳政2区に挟まれた弯曲した調査区である。確認した遺構面は中世、弥生時代中期上層、弥生時代中期下層の3面である。

弥生時代中期下層 水田と水路を調査した。水路より標高が高い部分では水田は作られていない。

弥生時代中期上層 水田と水路を調査した。

中世 掘立柱建物と土坑、溝を調査した。

(2) 徳政2区

徳政1区と二ノ郷1区に挟まれた南北調査区である。確認した遺構面は中世、弥生時代中期上層、弥生時代中期下層の3面である。

弥生時代中期下層 水田と水路を調査した。水路より標高が高い部分では水田は作られていない。

弥生時代中期上層 水田と水路を調査した。

中世 溝を調査した。

(3) 徳政3区

徳政2区の西側に位置する東西調査区で、水田の広がりを確認するため設けた区である。確認した遺構面は中世、弥生時代後期、弥生時代中期上層、弥生時代前期の4面である。

弥生時代前期 東端で縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての河道を調査した。

弥生時代中期上層 水田を調査した。

弥生時代後期 水田を調査した。

中世 小規模な掘立柱建物と溝を調査した。

(4) 徳政4区

徳政2区の東側に位置する東西調査区で、水田の広がりを確認するため設けた区である。確認した遺構面は中世、弥生時代中期上層、弥生時代中期下層の3面である。

弥生時代中期下層 水田と水路を調査した。

弥生時代中期上層 水田と水路を調査した。

中世 掘立柱建物と土坑、溝を調査した。

(5) 徳政5区

徳政2区の西側、徳政3区の北側に位置する南北調査区で、水田の広がりを確認するため設けた区である。調査した遺構面は中世、弥生時代中期上層、弥生時代中期下層の3面である。

弥生時代中期下層 水田と水路を調査した。

弥生時代中期上層 水田と水路を調査した。

中世 溝を調査した。

(6) 徳政6区

竹添4A区と徳政11区との間に位置する南北調査区である。調査した遺構面は中世、弥生時代中期上層、弥生時代中期下層の3面である。

弥生時代中期下層 水田・水路を検出した。

弥生時代中期上層 水田を検出した。

中世 掘立柱建物と溝を調査した。柱根が残っていた。

(7) 徳政7区

徳政1区の東側に位置する弯曲した調査区である。調査した遺構面は中世、古墳時代後期、弥生時代中期上層、弥生時代中期下層の4面である。

弥生時代中期下層 流路と水田・水路、東端の微高地で竪穴住居、土坑などを検出した。

弥生時代中期上層 水路と水田・水路、東端の微高地で竪穴住居、土坑などを検出した。

古墳時代後期 南流する溝を検出した。

中世 掘立柱建物と溝を調査した。

(8) 徳政8区

徳政7区の東側に位置する東西調査区である。調査した遺構面は中世、古墳時代後期、弥生時代中期上層、弥生時代中期下層の4面である。

弥生時代中期下層 東端は微高地で竪穴住居、土坑などを検出し、河道を挟んで微高地上に竪穴住居、土坑、水路を挟んで水田を検出した。

弥生時代中期上層 東端は微高地で竪穴住居、土器棺、土坑を検出し、河道を挟んで微高地上に平地住居、水路を挟んで水田を検出した。

古墳時代後期 南流する溝を検出した。

中世 溝、土坑、掘立柱建物を検出した。

(9) 徳政9区・徳政10区

徳政9区は西端の境界線沿いに位置し、徳政10区の南にあたる。水路と道路部分の調査である。確認した遺構面は中世、弥生時代中期上層、弥生時代中期下層、弥生時代前期の4面である。

弥生時代前期 南流する溝2条と水田面を検出した。水田は溝より西側にのみ存在する。

弥生時代中期下層 全面に水田面を検出した。

弥生時代中期上層 溝と水田面を検出した。溝は大きく蛇行しながら北から南へ向かって流れている。溝の両側には大畦畔が取りついている。

中世 溝を検出したのみである。溝は現代まで使われてきた水路の前身の溝と条里の坪界溝がある。

(10) 徳政10区

徳政10区は西端の境界線沿いに位置する。徳政9区と二ノ郷10区間の南北調査区である。水路と道路部分の調査である。確認した遺構面は中世、弥生時代上層の2面である。

弥生時代中期上層 流路1条と水田面を確認した。流路は礫により埋没していた。

中世 溝とピットを検出した。溝は現代まで使われていた水路の前身の条里の坪界溝とそれに直行する溝とがある。ピットは3個検出し一列に並んでいるが、建物跡とすれば区外に延びているため不明である。

(11) 徳政11区

徳政11区は徳政1区の西側に平行する調査区である。確認した遺構面は中世、弥生時代後期、弥生時代中期上層、弥生時代前期～縄文時代晩期の4面である。

弥生時代前期～縄文時代晩期 河道と土坑を検出した。

弥生時代中期上層 全面に厚い洪水砂に覆われた水田面を検出した。

弥生時代後期 北半部で水田を検出した。

中世 掘立柱建物、土坑、井戸、溝を検出した。

(12) 徳政12区

徳政9区と徳政11区間に位置する東西調査区である。確認した遺構面は中世、弥生時代中期上層、弥生時代中期下層、弥生時代前期から縄文時代晩期の4面である。

弥生時代前期 西半部で河道・溝・水田面等を検出した。

弥生時代中期下層 西端で水田面を検出し、東端で溝を確認した。

弥生時代中期上層 全面で厚い洪水砂に覆われた水田面と、中央部で北から南に流れる水路を検出した。

中世 中央部、東端で掘立柱建物・土坑・溝などを検出した。西端は東部より地形的に低く、シルト質の包含層があり、馬の足跡を多数検出した。中央部、東半部で掘立柱建物と条里の坪界溝、建物に伴う溝などを検出した。

(13) 徳政13区

徳政9区と徳政11区に挟まれた東西調査区である。確認した遺構面は中世、弥生時代後期、弥生時代中期上層、弥生時代中期下層、弥生時代前期の5面である。

弥生時代前期 東半部で河道を検出した。

弥生時代中期下層 西端で水田を8区画検出した。

弥生時代中期上層 流路と水田を検出した。

弥生時代後期 中央部で水田17区画を検出した。

中世 東半部で掘立柱建物、溝、土坑を検出した。

(14) 徳政14区

徳政11区と徳政10区に挟まれた東西調査区である。確認した遺構面は中世、弥生時代中期上層、弥生

時代中期下層、弥生時代前期の4面である。

弥生時代前期 東端で河道を検出した。

弥生時代中期下層 溝を1条検出した。

弥生時代中期上層 水田を検出した。

中世 東端で掘立柱建物を西端で溝を検出した。

(15) 徳政15区

徳政10区と二ノ郷11区に挟まれた東西調査区である。昭和58年度に調査を実施したS Y区と同一である。検出した遺構面は弥生時代中期上層、弥生時代前期の2面である。

弥生時代前期 縄文時代晩期から弥生時代前期前半にかけては河道を検出したのみである。

弥生時代中期上層 厚い洪水砂に覆われていた水田面を検出した。

(16) 徳政16区

徳政5区と二ノ郷11区に挟まれた東西調査区である。昭和58年度に調査を実施したS Y区と同一である。検出した遺構面は弥生時代上層の面と、弥生時代前期の面の2面である。

弥生時代前期 微高地上に溝を1条検出した。東西方向の溝である。

弥生時代中期上層 厚い洪水砂に覆われていた水田面を検出した。

(17) 徳政17区

徳政11区と徳政12区の交点の南側に位置する。防火水槽を新たに設けることになったため調査を実施した。検出した遺構面は中世、弥生時代中期上層の2面である。

弥生時代中期上層 厚い洪水砂に覆われていた水田面を検出した。

中世 南北方向の溝を検出した。

(18) 竹添4 A区

第5分冊の竹添地区と徳政1区の間に位置する東西調査区である。検出した遺構面は中世、古墳時代後期、弥生時代中期上層、弥生時代中期下層の4面である。

弥生時代中期下層 水田と水路を検出した。

弥生時代中期上層 東端で竪穴住居、水路を挟んで西側に水田が広がっている。

古墳時代後期 溝を3条検出した。

中世 掘立柱建物、溝を検出した。

(19) S Y 1区

第5分冊の竹添地区と徳政10区の間に位置する東西調査区である。

第2節 二ノ郷地区

1. 概要

二ノ郷地区は事業地の西端に位置し、面積約35,000㎡の地区である。南に徳政地区、東に竹添地区、北に黒岡地区が広がっている。調査区は二ノ郷1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16、下町3・10区である。

二ノ郷地区は全体が沖積地であり、現在は段丘化し、明石川が西側を流れている。

縄文時代晩期は西端で河道が南流し、徳政地区に流れている。弥生時代前期には縄文晩期の埋没した河道に溝を掘削している。弥生時代中期下層には河道を挟んで、西側に水田、東側の微高地の高い部分

に溝が掘られている。水田には水路が伴っており、高い部分は耕作されていない。

弥生時代中期上層には河道を挟んで、西側全面に水田、東側の微高地に方形周溝墓が形成されている。水田には水路が伴っている。この弥生時代の水田・河道は中期後半におこった大洪水によって埋没する。弥生時代後期になると河道は細くなり、洪水砂礫が堆積して微高地だった場所に土坑が作られている。低い場所は水田が作られていた可能性が高い。

古墳時代になると、微高地の高い部分に水路が掘削され、東端の低い部分に水田が作られていた。削平されているが、ほぼ全域が水田化されていた可能性が高い。古代には条里区画が施行され整然とした水田が整えられた。中世には条里区画内に整然とした屋敷地が成立した。

2. 調査区毎の概要

(1) 二ノ郷1区

二ノ郷1区は徳政2区と二ノ郷15区の間に位置する南北調査区である。検出した遺構面は中世、古墳時代後期、弥生時代後期、弥生時代中期上層、弥生時代中期下層の5面である。

弥生時代中期下層 東西方向の溝を調査した。

弥生時代中期上層 方形周溝墓群と南端で河道を調査した。

弥生時代後期 土坑を調査した。

古墳時代後期 溝を調査した。

中世 掘立柱建物、溝を調査した。

(2) 二ノ郷2区

二ノ郷2区は徳政7区と二ノ郷16区の間に位置する南北調査区である。検出した遺構面は中世、古墳時代後期、弥生時代中期上層、弥生時代中期下層の4面である。

弥生時代中期下層 溝を調査した。

弥生時代中期上層 方形周溝墓群と河道を調査した。

古墳時代後期 溝を調査した。

中世 溝を調査した。

(3) 二ノ郷3区

二ノ郷2区・1区東側に位置する東西調査区である。検出した遺構面は古墳時代、弥生時代中期上層の2面である。

弥生時代中期上層 東端で方形周溝墓を調査し、東側は河道である。

弥生時代後期 河道を調査した。

(4) 二ノ郷4区

二ノ郷2区2区東側に位置する東西調査区である。検出した遺構面は古墳時代後期、弥生時代中期上層、弥生時代中期下層の3面である。

弥生時代中期下層 溝を調査した。

弥生時代中期上層 東端で方形周溝墓を調査し、東側は河道である。

古墳時代後期 溝を調査した。

(5) 二ノ郷5区

二ノ郷5区は二ノ郷1区と徳政2区との間に位置し、方形周溝墓群の様相を確認するため設けた調査区である。検出した遺構面は中世、古墳時代後期、弥生時代中期上層、弥生時代中期下層の4面である。

弥生時代中期下層 南北方向の溝を調査した。

弥生時代中期上層 方形周溝墓群を調査した。

古墳時代後期 南北方向の溝を調査した。

中世 掘立柱建物、溝、土坑を調査した。

(6) 二ノ郷6区

二ノ郷1区西側に位置する南北調査区で、方形周溝墓群の様相を確認するため設けた区である。検出した遺構面は中世、古墳時代後期、弥生時代中期上層、弥生時代中期下層の4面である。

弥生時代中期下層 溝を調査した。

弥生時代中期上層 方形周溝墓群を調査した。

古墳時代後期 南北方向の溝を調査した。

中世 南北方向の条里の坪境溝を調査した。

(7) 二ノ郷7区

S Y 1区の下層の調査区である。

(8) 二ノ郷8区

二ノ郷4区と7区の間位置する。方形周溝墓群と住居跡群の関係を探るために設定した。二ノ郷4区S X 40024の中央部に直行する南北方向の調査区である。検出した遺構面は中世、弥生時代中期の2面である。また下層で方形周溝墓以前の溝を確認したが調査を行わなかった。

弥生時代中期上層 4基の方形周溝墓と埋葬施設S T 40041号を検出した。南端の溝は堆積状況が一般の周溝と異なるが居住域に近いためであると考えられる。S X 40033の下層には方形周溝墓に切られる堅穴住居の存在を確認した。このことから住居地域への新しい段階の墓域が拡大が確認できた。

中世 溝を調査した。

(9) 二ノ郷9区

二ノ郷8区の東側に平行する調査区である。検出した遺構面は古墳時代、弥生時代中期の2面である。

弥生時代中期上層 4基の方形周溝墓を確認し、すぐ西側は河道に面していることが判明した。S X 40031のマウンド内には側溝掘削時に木棺の存在を確認した。方形周溝墓の下層からは堅穴住居を確認した。このことから、S X 40035・40033を通る東西ラインが墓域の南限とみられ、特別な施設は存在しなかったと考えられる。方形周溝墓が造られる以前はS X 40034・40035近くまで居住域が広がっていたことが判明した。

古墳時代後期 南北に走る溝3条を確認した。

(10) 二ノ郷10区

二ノ郷12・13・14、徳政10と接する南北調査区である。検出した遺構面は中世、弥生時代中期上層、弥生時代前期から縄文時代晩期の3面である。

弥生時代前期～縄文時代晩期 河道を調査した。

弥生時代中期上層 水田を調査した。

中世 南北方向の坪境溝と南端で東西方向の坪境溝を調査した。

(11) 二ノ郷11区

二ノ郷12・13・14、徳政15・16と接する南北調査区である。検出した遺構面は中世、弥生時代中期上層、弥生時代中期下層、弥生時代前期の4面である。

弥生時代前期 縄文時代晩期から弥生時代前期前半にかけては河道、溝を検出した。河道は南端を北から南へ向かって流れ、大きな木の株が存在した。

弥生時代中期下層 中央部分で溝2条を検出したのみである。北から南に斜行して流れる溝である。

弥生時代中期上層 河道、水路、水田を検出した。河道は北端に北から南に向かって流れている。水路は河道と水田の間に河道と並行して流れている。水田は水路の西側に続いている。中央部分で大畦畔を伴う水路と落ち込みが存在した。二ノ郷12区との交点付近では大きな段が存在している。

中世 溝と掘立柱建物と土坑を検出した。溝は直交もしくは並行するものと、斜交するものとの2時期存在する。斜交する溝は切り合関係から直行するものより古い。掘立柱建物は3棟存在している。土坑から多量に遺物が出た。

(12) 二ノ郷12区

徳政15区の北側に位置する東西調査区である。確認できた遺構面は中世、弥生時代上層、弥生時代前期の3面である。

弥生時代前期 西端で河道と土坑1基を検出した。

弥生時代中期上層 厚い洪水砂に覆われた水田を、全域で確認した。東端には水田面の高低差が大きい部分があり、その境には幅広い畦畔が設置されている。西半部は、水田面の高低差が少なく一区画の面積も広い。

中世 東半部で、二ノ郷11区で検出した遺構面およびその面から切り込む溝1条を断面で観察した。

(13) 二ノ郷13区

二ノ郷10区と二ノ郷11区との間、二ノ郷12区の北側に位置する東西調査区である。調査した遺構面は中世、弥生時代中期上層、弥生時代中期下層、弥生時代前期～縄文時代晩期の4面である。

弥生時代前期 土坑1基、溝4条と河道を検出した。

弥生時代中期下層 西端で溝2条を検出した。

弥生時代中期上層 厚い洪水砂に覆われた水田を11区画検出した。東端では、河道の一部が大畦畔を伴う形で検出した。水路の両肩には、盛土によって形成された土手を取りついている。

中世 掘立柱建物と溝を検出した。溝は斜交する溝3条と、それを切る条里方向の溝1条を調査した。

(14) 二ノ郷14区

二ノ郷14区は、二ノ郷11区と二ノ郷6区との間の東西調査区である。検出した遺構面は中世と弥生時代中期上層の2面である。

弥生時代中期上層 埋積した河道と方形周溝墓を検出した。方形周溝墓は微高地の縁辺部にあたる。

中世 調査をしたが遺構は検出できなかった。

(15) 二ノ郷15区

二ノ郷1区と第2分冊の下町1区との間に位置する南北調査区である。検出した遺構面は中世、古墳時代、古墳時代前期、弥生時代中期上層、弥生時代中期下層の5面である。

弥生時代中期下層 方形周溝墓の下層に北から南に流れる溝を1条確認した。溝の下層から木製の鎌の未成品が出土した。

弥生時代中期上層 方形周溝墓3基を検出した。いずれも微高地の高所に立地しているため、後世にかなり削平されている。

古墳時代前期 溝を4条検出した。

古墳時代後期 溝と落ち込みと土坑を検出した。溝は4条有り、南に向かって流れている。落ち込みは西壁に続いており、不定形である。

中世 条里方向の南北溝2条と真北方向の溝1条を検出した。

(16) 二ノ郷16区

二ノ郷2区と下町4区(第2分冊)との間に位置する南北調査区である。調査過程で方形周溝墓内の木棺が区外に伸びていたため、西側に一部を拡張した。検出した遺構面は中世、弥生時代後期、弥生時代中期上層の3面である。

弥生時代中期上層 中期後半に発生した大洪水の砂によって覆われた方形周溝墓4基を検出した。

弥生時代後期 弥生時代中期の洪水砂の上面に形成されている。土坑・溝・ピットを検出した。

中世 平安～中世にかけての遺構は溝3条を検出した。

(17) 下町3区

二ノ郷15区と二ノ郷16区の間に位置する東西調査区である。検出した遺構面は、中世、古墳時代後期、弥生時代後期、弥生時代中期上層の4面である。

弥生時代中期以前 断割りの結果、礫層が厚く堆積し、川が流れていたことが判明した。

弥生時代中期上層 厚い洪水砂で覆われていた。下町10区の西端を流れる川と二ノ郷15・16区の方形周溝墓との間に位置し、湿地状を呈していた。

弥生時代後期 弥生時代中期の洪水砂の上面に遺構面を形成していた。北から南に流れる溝1条を確認した。

古墳時代後期 水田跡を3区画確認した。水田面は東に向かって下がっており、洪水砂で覆われていた。西側半分は後世に削平されている。

中世 東西溝と条里方向の南北溝を検出した。

(18) 下町10区

下町3区の東側に位置する東西調査区である。下町3区の調査で、遺構が広がることが判明したため、新たに設けた。検出した遺構面は古墳時代後期、弥生時代後期、弥生時代中期上層の3面である。

弥生時代中期上層 西端で河道を検出したのみで、東側は湿地が広がっていた様子である。中期後半の大洪水によって埋没した様子が窺える。

弥生時代後期 弥生時代中期の洪水砂を基盤に形成している。ほぼ中央部に北から南に向かって流れる河道が走り、両側に微高地を形成している。

古墳時代後期 下町3・4区から続く水田、下町4区から続く流路と水田面を切る溝を検出した。水田は8区画検出した。水田面は流路に向かって傾斜しており、流路は従来、水路であった可能性が高い。溝は直行して2条検出した。

第3節 黒岡地区

1. 概要

黒岡地区は事業地の北東隅の約23,000㎡の地区である。区画整理施工以前は条里に基づいた区画をもつ水田地帯であった。地区は全体が沖積地であり、現在は段丘化し、明石川が西側を流れている。

この地区の基層となるのは、他の地区同様の縄文時代後期頃に堆積した黒色のシルトである。これを切り込んで地区のほぼ中央を河道が南流し、黒岡地区の南端で東南方向に流れを変える。この河道は上

流から大量の砂礫を押し流し、洪水の度に溢れて河道の両側に堆積し、自然堤防を形成する。自然堤防は河道東側（流れの内側）で発達が著しく、その背後は後背湿地になる。

弥生時代前期になると、河道の東側の自然堤防上に集落ができる。そして、河道の西側の後背湿地は水田として利用される。この時期以降も、河道による沖積作用は続き、砂礫の堆積が行われる。河道は堆積物によって西側から次第に幅を狭め、これに伴う反作用として、東側の自然堤防を浸食してゆく。

弥生時代中期には河道を挟んで、東西両側ともに水田として利用されている。水田面は河道に近いレベルの低い所では、洪水砂を挟んで2面確認できる。上層の水田は新たに埋積された河道の上にも広がっている。また水田に引水するために人工の水路が掘削されている。この弥生時代の水田は中期後半におこった大洪水によって埋没してしまう。また河道も大量の砂礫によって埋没し、弥生時代後期になるとほとんど流れがなくなり、湿地状のものになる。黒岡地区の南側では洪水砂の上および前期の集落の上に弥生時代後期の集落が営まれる。洪水砂によって埋まった水田はこの時期にはまだ使用されていなかったようである。

古墳時代になると、洪水砂の堆積で段丘化した部分に水路が掘削され、黒岡地区全体が再び水田化する。そして、中世までには確実に条里制が施行され、整然と区画された水田が作られ、現在に至る。

2. 区毎の概要

(1) 黒岡1区

黒岡地区の南東端の、南北方向の調査区である。今回報告するのはそのうち南側の70mの部分である。基本的な層序は、上から耕作土・近世水田土壌・中世水田土壌・古墳時代水田土壌・弥生時代後期土壌・弥生時代中期後半の洪水砂・弥生時代中期の土壌層である。調査した面は弥生時代中期上層面・弥生時代後期面・古墳時代後期水田面の3面である。

弥生時代中期上層 中期後半の洪水による厚い洪水砂を取り去ったところで検出した面である。面としては二ノ郷地区の周溝墓が作られる面に対応する。湿地状の堆積があり、少量の遺物が出土しているが、河道以外には遺構は検出できなかった。河道は北端と南端で2条検出した。いずれも洪水による砂礫層によって埋没している。

弥生時代後期 中期後半の洪水砂の上で検出した面である。南端で東西方向に走る溝を検出し、北端では中期の河道が埋没して湿地化したものを検出した。

古墳時代後期 洪水砂が薄いために畦畔は検出できなかったが、東西方向に走る水路を検出した。

(2) 黒岡3区

黒岡地区の南端に位置する東西方向の調査区である。基本的な層序はほぼ1区と同じである。ただし、立ち割りによって断面を観察した結果、中期の河道の下層にさらに幅の広い前期の河道を確認した。調査した面は、弥生時代中期上層面・弥生時代後期面・古墳時代後期水田面の3面である。

弥生時代中期上層 東端で河道を検出した。河道の西側は水田面になっていたようであるが、古墳時代以降の水流による攪乱が大きく平面的には調査できなかった。

弥生時代後期 中期の河道は洪水によって埋没しており、湿地化している。その両側の洪水砂の上では住居・土坑・溝を検出した。

古墳時代後期水田 面としては全体に続くが、畦畔が検出できたのは、レベルが低く、洪水砂がかぶっていた東側半分だけである。水田は8区画検出し、南北方向には人工の水路が多数走っている。

(3) 黒岡4区

3区の北側の東西方向の調査区である。基本的な層序は1区と同じである。調査した面は弥生時代中期上層面・弥生時代後期面・古墳時代後期水田面の3面である。

弥生時代中期上層 東端を河道が南流し、河道の東側は自然堤防を浸食して急な崖になり、西側は水田になっている。水田は河道に向かって段々にレベルを下げゆく。河道に近いところは中期後半の洪水による厚い砂で覆われている。

弥生時代後期 東端で中期の河道が埋没して湿地化したものと、西側では南北に走る水路を検出した。

古墳時代後期水田 はほぼ全域が洪水砂に覆われていたために、畦畔・水路が検出できた。水田は7区画検出している。水路はすべて南北方向に走るが、複雑に切り合っている。

(4) 黒岡5区

4区の北側にある東西方向の調査区である。基本的な層序は1区と同じであるが、弥生時代中期水田面が洪水砂を挟んで2面確認できた。弥生時代中期上層と古墳時代後期水田面の2面を調査した。

弥生時代中期上層水田 中期後半の洪水砂を除去して検出した。B+30より西側は水田面のレベルが高く、後世の耕作によって削られており、畦畔は検出できなかった。東端に河道があり、水田はこの河道に向かって段々にレベルを下げゆく。最も河道に近い所に大畦畔がある。

古墳時代後期水田 面としては全体に広がるが、畦畔が検出できたのは東端だけである。洪水によって削られた部分があるが、5区画の水田を検出した。

(5) 黒岡6区

5区の北側にある南北方向の調査区である。基本的な層序は5区と同じである。調査した面は弥生時代中期上層水田面と古墳時代後期水田面の2面である。

弥生時代中期上層水田 東側を河道が南流する。中期下層水田面の段階では河道であった部分が砂礫の堆積によって埋まり、その上に上層水田が広がっている。

水田は河道を挟んで東西に広がり、水田面は河道にむかって段々に下がっていく。河道の西側には大畦畔があり、その東側が水路になる。

古墳時代後期水田 平面的に調査できたのは東端のみである。洪水の際、水流によって浸食されているが、3区画の水田を検出した。

(6) 黒岡7区

最も北に位置し、基本的な層序は5区と同じである。調査した面は弥生時代中期上層水田のみである。

弥生時代中期上層水田 はほぼ中央に河道がある。水田は河道の西側で検出できた。水田面はゆるやかに河道に向かって傾斜している。15区画の水田面を検出している。

(7) 黒岡8区

黒岡3区の西端から南側へ延びる区である。弥生時代後期の溝と古墳時代の流路を検出した。

(8) 黒岡9区

黒岡4区と5区の西端に接する南北方向の調査区である。基本的な層序は4区と同じである。古墳時代の水路が多数切り合った状態で検出できた。

(9) 黒岡10区

黒岡6区と7区の西端に接する南北方向の調査区である。基本的な層序は6区と同じである。調査した面は弥生時代中期上層水田である。

弥生時代中期上層水田 面としては検出できたが、畦畔は検出できなかった。

第III部 遺構

第1章 縄文時代から弥生時代前期

第1節 概要 (図版9)

第1分冊地域の縄文時代から弥生時代前期にかけての概要は自然河道と微高地、水田などを確認し調査を実施している。調査を実施した区は徳政3・11・12・13区、二ノ郷9・10・13・15区である。徳政1区については弥生時代中期下層水田調査後の断割りによって遺構を確認し、遺構部分のみ調査を行っており、全面調査を実施したわけではない。また弥生時代中期以降の自然河道と重複している部分は面的に調査を実施していない部分もある。

北から南に傾斜する地形の中で、河道・水路とも地形に沿って北から南に流れている。しかし縄文時代晩期の自然流路は大きく蛇行しながら流れている。居住域・墓域は第1分冊地域では確認していない。

第2節 河道

S R 10001 (図版8)

S R 10001は、調査区の西端を蛇行しながら北から南へ流れている。幅の狭い調査のため断片的であるが、二ノ郷10区、二ノ郷13区を北から南へ向けて流れ、二ノ郷12・9区を東から西へ流れ、徳政9区では弥生時代の流路により削られているものの、徳政15区の西角をかすめて北から南へ流れ、徳政15区の東端で大きく蛇行し、南へ流れ、徳政3区から徳政11区で屈曲し、西へ流れ、徳政13・12区へと続いている。蛇行しているため川幅は一定ではないが、15m前後である。検出面からの深さは1m～2mを測る。幅と水量の関係で、幅の狭い部分は深く、広い部分は浅くなっている。堆積土は、下層に黒色の黒色シルト層があり、その上に砂礫が堆積している。それ以上は黒色シルト層と砂層の互層であり、比較的水平に堆積している。下層の基盤層は古い時期の河川堆積物である。徳政12区の縁には直径0.7mのヤナギの原木が生えており、川に倒れ込んでいた。

遺物は、二ノ郷12区、徳政3・11・12区の最下層からは突帯文土器のみが出土しており、二ノ郷12・11区は多くの土器が流路の左岸から出土しており、いずれも東から流れ込んだ状況といえる。土器以外にサヌカイト、チャートの剥片が少量出土している。また、二ノ郷13区では加工した板材が、徳政11区では木製の掘り棒が出土している。礫層以上は弥生前期前半の土器も出土しており、弥生前期前半まで流れていたものと考えられる。なお、この最上層には溝が開削されている。上層との遺構の関係から、弥生時代前期の間に開削され、前期の間に埋没していると考えられる。

二ノ郷11区出土の深鉢が出土した時、周囲の土の水洗いを実施した。この結果、炭化米が107粒程度検出できた。また他の植物種子も検出できた。ただし、この深鉢周辺以外の土、あるいは二ノ郷12区の土も水洗いしたが、他の植物種子は検出できるが炭化米は検出されなかった。この突帯文土器の深鉢と米については大きな意義がある。この河道は突帯文期の炭化米が出土していたり、上層においては水平堆積しているため、プラントオパールの分析を行っている。

S R 20001

S R 20001は縄文時代晩期のS R 10001が埋没したのち、基本的には弥生時代中期の自然流路S R 30001とは

は同じ位置を流れている。

S R 20002

S R 20002はS R 20001と同様に弥生時代前期後半以降、弥生時代中期のS R 30002の下層を流れている。

第3節 溝

溝は縄文時代と考えられるものと、弥生時代前期のものが存在する。縄文時代晩期の溝は、二ノ郷12区、徳政16区、徳政1区といずれも自然流路左岸で検出している。弥生時代の溝は、縄文時代晩期から弥生時代前期へと続く流路S R 10001の最上層の中央部を開削したものと、区の西端で検出した水田に伴う水路2条とがある。

S D 10001

徳政12区の西端、自然流路S R 10001の左岸の微高地上に位置する。幅2.0m、深さ0.3mで、北から南へわずかに傾斜している。溝内には黒色シルトが堆積していた。遺物は出土していないが、層位的にみて縄文時代晩期と考えられる。

S D 10002

徳政16区に位置する。幅1.5m、深さ0.2mで、東から西へ向かって傾斜しており、自然流路S R 10001へ続く。溝内には黒色シルトが堆積していた。遺物は出土していないが、層位的にみて縄文時代晩期と考えられる。

S D 10003

徳政1区の北寄りに位置する。北から南へ向かって大きく蛇行しながら南へわずかに傾斜している。溝内には黒色シルトが堆積していた。北方にまだ続いていると考えられるが、断割り時に確認したため、調査できなかった。遺物は出土していないが、層位からみて縄文時代晩期と考えられる。

S D 20001 (図版11)

S D 20001は、徳政9区の水田内を北から南へ流れる水路である。断面形はU字形で、幅1.73m、深さ0.7mを測る。西側に大畦畔がとりつく。下層はシルト層が堆積していたが、上層は砂層が堆積していた。遺物は弥生前期の壺の破片が出土している。

S D 20002

徳政9区と徳政12区の西端に位置し、水路S D 20001の東側に平行して流れる水路である。この水路より西側に広がる水田の用水路と考えられ、この水路S D 20002より東側では水田は存在していない。上面が削平されているため正確な規模は不明であるが、検出面で幅0.7m前後、深さ0.3m前後を測る。埋土は砂が堆積していた。遺物は出土していない。

S D 20003 (図版11)

S D 20003は縄文時代晩期の自然流路S R 10001が埋没した後、新たに開削した水路である。自然流路S R 10001の痕跡のほぼ中央部分を幅1.8m、深さ0.7mで開削し、蛇行している。断面形はU字形である。埋土は砂がラミナ状に堆積している。遺物は弥生時代前期の弥生土器壺・甕が少量出土している。

S D 20004

S D 20004は徳政14・13・12区を北から南に向かって流れる水路で、おそらく水路S D 20003から分流していると考えられる。徳政13・12区では分流したり、開削し直している。断面形はU字形で、幅1.8

m、深さ0.4mを測る。遺物は弥生時代前期の弥生土器甕が出土している。

第4節 水田 (図版9)

弥生前期の水田域は区の西端の徳政9・12区に位置しており、さらに西方の区外へ延びている。東端は水路S D 10002を流れ、これより低い西方へ水田域は広がっている。水田域のほぼ中央部には水路S D 10001が平行して走っている。この水田面の直上には洪水による細砂から極細砂が堆積している。水田は畦畔によって区画されている。畦畔は大小の2種類があり、大畦畔は水路の脇に付帯する。小畦畔は大畦畔で囲まれた水田域を小区画に区画するものである。水田は水路S D 20001より西で18区画、水路S D 20001とS D 20002との間で19区画の合計37区画を確認した。いずれも区の幅が狭いため、水田域は水路と同様に地面から南東へ地形に沿って傾斜している。区画は不定形なものも存在するが、多くは地形に沿って長方形である。1区画の面積は明確にできないが、15～50m²前後の小区画の水田である。

第5節 土坑 (図版11)

S K 10001

徳政13区の東端、徳政11区との交点付近に位置し、S R 10001の左岸に立地する。長径1.5m、短径0.87mの楕円形で深さ0.19mを測る。埋土は黒色のシルトが堆積していた。

遺物は縄文晩期土器片が出土した。

S K 10002

S K 10001の南東に位置している。長径1.5m、短径1.06mの楕円形で、深さ0.18mを測る。埋土は黒色のシルトが堆積していた。遺物は縄文晩期土器片が出土した。

S K 10003

S K 10002の北7mにあり、S R 10001の肩から4mのところに位置する。西側は調査外に続くため、明確な形は不明であるが、長径1.34m以上、短径1.34mの楕円形で、深さ0.3mを測る。埋土は黒色のシルトが堆積していた。遺物は出土していない。

S K 10004

S K 10002の東側6mに位置する。長径1.6m、短径1.0mの楕円形で、深さ0.2mを測る。埋土は黒色のシルトが堆積していた。遺物は出土していない。

S K 10005

S K 10004の南側に位置する。直径1.2mの円形で、深さ0.2mを測る。埋土は黒色のシルトが堆積していた。遺物は出土していない。

S K 10006

S K 10003の南側に位置する。直径1.4mの円形で、深さ0.2mを測る。埋土は黒色のシルトが堆積していた。遺物は出土していない。

S K 10007

S K 10006の南側に位置する。直径1.7mの円形で、深さ0.08mを測る。埋土は黒色のシルトが堆積していた。遺物は出土していない。

第2章 弥生時代中期下層

第1節 概要 (図版13)

第1分冊部分の弥生時代中期下層の概要は、弥生時代中期上層ほど洪水砂に覆われていないため、水田部分は上層の影響を受けたり、河道・水路・居住域など弥生時代中期上層と重なる部分が多く、そのため削平されており、あまり状況は良くない。そのような状況の中で概要をのべると、北から南に傾斜する地形の中で、河道・水路とも地形に沿って北から南に流れている。居住域は自然流路S R 30001と自然流路S R 30002に挟まれた微高地上と自然流路S R 30001とその西側を流れる水路S D 30005との間の小微高地に限られる。自然流路S R 30001と自然流路S R 30002に挟まれた微高地はさらに第5分冊の竹添地区に広がっている。

水田域は徳政地区と黒岡地区に存在し、徳政地区は水路S D 30006の西側に広がり、徳政西地区と徳政東地区の大きく2地区に分けられる。徳政西地区は水路S D 30001より西側に位置し、徳政東地区は水路S D 30001と水路S D 30006に挟まれた範囲である。水路S D 30001と水路S D 30009の間は上層の影響もあり水田は検出していない。水路の状況から考えて、本来水田は造られていなかったことが考えられる。黒岡地区では北端で検出している。なおこの面の水田区画は小区画で方形であることが特徴である。墓域は確認していない。

第2節 河道

S R 30001

自然流路S R 30001は、二ノ郷11・14・1・7区、徳政4・7・1区、竹添4 A区、徳政6区を北から南に流れている。徳政4区で水路S D 30003と合流、二ノ郷1区の南端付近でS D 30006が分流している。この水路の多くの部分は、弥生時代中期上層水田のS D 40003と重なっているため、影響を受け削平されている部分が多い。また、排水を主とした目的と考えられるため、自然の流路であると考えたが、直線的であるため、人工的な溝であることも考えられる。規模がはっきりわかる部分で、幅4.0m、深さ1.0mを測る。遺物は弥生中期前半の壺、甕が少量出土している。

S R 30002

S R 30002は黒岡7・6・5・4・3区、二ノ郷11・14・1・2・7区、徳政8・7区と流れ、竹添4 A区へ続く区の北端から南端まで微高地の西辺を北から南へ流れている。黒岡4区付近では微高地の東側を流れるS R 30002と分流している。蛇行しているため、川幅は一定ではないが、7m前後である。川幅との関係で川幅の狭い部分は深く、広い部分は浅くなっている。堆積は、弥生時代中期上層(S R 40001)まで、同じ場所を流れているため、弥生時代中期下層の単純層が残されている場所は少ない。

遺物は黒岡地区では同時期の微高地が存在していないため少ない。徳政地区の居住域西側部分では弥生時代中期前半の弥生土器壺・甕が少量出土している。

S R 30003

S R 30003は黒岡4区付近から分流して、黒岡1区、下町2・10区、二ノ郷3・4区から竹添地区の微高地の東側を北から南へ流れている。

遺物は弥生時代中期前半の弥生土器壺・甕が少量出土している。

第3節 溝

S D 30001

S D 30001は、徳政12区を北から南に流れている。本来はこれより西側に存在する水田のための水路と考えられるが、ここ以外の区では弥生時代中期上層水田の耕作による影響のため確認できなかった。遺物は弥生時代前期の甕の小片が出土している。

S D 30002 (図版12)

S D 30002は二ノ郷13・11区、徳政5・2・1・11・12区を北から南へ地形に沿って流れている。この水路の流れている場所は、地形的に高い部分であり、東側に広がる水田の用水路として設定されたと考える。この水路の両側には本来、大畦畔が取りつく所であるが、弥生時代中期上層水田の耕作により影響を受け、確認できなかった。場所によって違いがあるが、断面形はU字形で、幅は1.8～3.0m、深さ最大0.5mを測る。水田と同様に洪水砂がラミナ状に堆積している。

徳政2区からは東へ向かうS D 30003が直角に分流している。この交点部分は他の場所より深くなっており、杭の痕跡が残っている。また、この分流地点の下流1.5mでは水田に配水するS D 30004が分流している。S D 30003と分流する手前では東側に細いバイパスが設けられている。

遺物は徳政2区の分流地点周辺で弥生時代中期前半の土器や磨製石剣、石鏃が出土している。

S D 30003 (図版12)

S D 30003は、S D 30002から徳政2区で東方に直角に分流し、排水路と考えられるS R 30001に合流している。延長約10mを測る。場所によって違いがあるが、幅は0.8～1.2m、深さ0.3mを測る。水田と同様に洪水砂がラミナ状に堆積している。遺物は出土していない。

S D 30004

S D 30004は、S D 30002から徳政2区で東方に直角に分流し、約1～2m離れて並行に流れる小水路である。幅は約1～1.5m、深さ0.2mの小規模なものである。東側に広がる水田のための用水路の機能が考えられる。水田と同様に洪水砂がラミナ状に堆積している。遺物は出土していない。

S D 30006

S D 30006は、二ノ郷1区の南端付近でS R 30001から分流したと考えられ、二ノ郷2・7区、徳政8・7区、竹添4A区を北から南に流れている。徳政7区でS D 30007が徳政7区と竹添4A区との間でS D 30008が分流している。この水路の多くの部分は、弥生時代中期上層水田のS D 40004と重複しているため、影響を受け削平されている部分が多い。規模は徳政8区で、幅3.0m、深さ0.7mを測る。遺物は弥生時代中期前半の弥生土器壺・甕が出土している。

S D 30007

水路S D 30007は、徳政7区で水路S D 30006から西方に分流し竹添4A区を流れ、水路S D 30006と並行している。徳政7区では溝の中央部に稜があり2条の溝である。規模がはっきりわかる部分で、幅1.5m、深さ0.3mを測る。遺物は出土していない。

S D 30008

S D 30008は徳政7区と竹添4A区との間でS D 30006から分流している水路である。幅0.7m、深さ0.5mを測り、断面形が箱形を呈する。S D 30006との間には水量調節用と考えられる溝が2箇所設けられている。

S D30009 (図版12)

S D30009は、おそらくS R30002から分流したものと考えられ、二ノ郷6・1・5・2・4区を北から南に流れ、S D30010に合流している。断面形はU字形で、規模は幅3.85m、深さ1.67mを測る。遺物は弥生時代中期前半の弥生土器壺・甕が少量出土している。

S D30010 (図版12)

S D30010は、おそらくS R30002から分流したものと考えられ、二ノ郷15・5・2・4区を北から南に向かって流れ、S D30009と合流し、さらにS Y1、徳政8区を流れ、竹添地区まで達している。このS D30010はS R30002とS R30003との間の微高地の最高部を流れる水路である。断面形はU字形で、規模がはっきりわかる部分で、幅5.7m、深さ2.0mを測る。二ノ郷5区では埋まりかけた水路の一部が、弥生時代中期上層の面で、方形周溝墓の溝として利用されている。

遺物は二ノ郷地区では弥生時代前期末から弥生時代中期前半にかけての弥生土器壺・甕と二ノ郷15区では平鉄身の未成品が出土している。徳政地区は居住域に近いため多量の弥生時代中期前半の弥生土器壺・甕・蓋が出土している。

S D30011

S D30011は、二ノ郷2区を南北に屈曲しながら走っており、S D30009に切られている。幅0.4m、深さ0.5mを測り、断面形が箱形を呈する。遺物は出土していない。弥生時代前期に遡る可能性もある。

第4節 水田 (図版13)

水田域は徳政地区と黒岡地区に存在しており、120区画の調査を行った。

徳政地区の水田域は水路S D30006の西側に広がり、徳政西地区と徳政東地区の大きく2地区に分けられる。徳政西地区は区の西端徳政9・10・12・13区部分であり、水路S D30001より西側に位置する。徳政東地区は徳政4・6・7・11区、竹添4A区に広がり、水路S D30002と水路S D30006に挟まれた範囲である。

徳政西地区の水田域は、さらに東方へ続くと思われるが、上部の洪水砂の堆積が少ないことや、弥生時代上層水田の土壌層の影響が及んでいると考えられる地形的に高い所からは検出できない。この地域の水田に伴う水路はかろうじて徳政12区でS D30001を検出したが、地形の上部では検出できなかった。このS D30001を東限とする水田域が推定できる。この水田面の直上には洪水による細砂～極細砂が堆積していた。水田は畦畔によって区画されており、水路に伴う大畦畔が発見できなかったため小畦畔のみである。ただし、徳政9区の水田には畦畔が拡張した部分があり、大畦畔の一種か「高状高まり」と同様のものと考えられる。水田はこの地域で52区画確認した。上層の影響で畦畔が確認できずに広い区画になっている部分もあり、さらに数は増えるものと考えられる。水田域は地面から南東へ地形に沿って傾斜している。区画は地形に沿って長方形である。1区画の面積は明確にできないが、6～10m²前後の小区画である。

徳政東地区の水田域は水路S D30002を西限として、河道S R30001を挟み、S D30006・S D30007を東限としている。S R30001は低い所を流れ、排水路として使われている。水田面の直上には流れによる中砂から極細砂が堆積していた。水田は畦畔によって区画されている。畦畔は大小の2種類があり、大畦畔は水路の脇に付帯する。小畦畔は水路で囲まれた水田域を小区画に区画している。水田域は水路と同様に北西から南東へ地形に沿って傾斜している。区画は地形に沿って長方形をなす。S D30002と

S D30003との交点の南側は2×4 m程度の小区画の水田が段をなしているが、それ以外は水路と平行に長い水田が確認された。これは横方向の畦畔が流れたため、この様な形状をしているのであって、本来は8 m前後に区画されていたものと考えられる。S R30001とS D30006との間は水田を作らない高まりの間に水路と平行に水田面が続いている。洪水の時に強く水が流れており、本来存在した畦畔も流されている可能性がある。S D30002とS R30001の間に43区画、S R30001とS D30006との間に10区画を確認し、西端の地区とも合わせて105区画確認した。さらに畦畔が流失した可能性も考えられるためそれ以上存在したと考えられる。

黒岡地区は北端の黒岡7区の水田は河道S R30001の西側で検出した。15区画の水田面を検出し、水田面はゆるやかに河道に向かって傾斜している。

第5節 竪穴住居 (図版15)

S H30001

S H30001は徳政8区を流れるS D30006の東に位置している。ほぼ同じ場所で3基存在し、周壁溝の切り合いや中央土坑の切り合い、周壁溝と柱穴の切り合いから新旧を決めた。古いものから順番にa・b・cと呼称した。いずれも平面形態は周壁溝を有する円形で、主柱は4本で、脇柱をもつ中央土坑が中心に存在する。中心を北に移動させながら、規模をわずかに大きくしている。規模はaが直径3.6m、bが直径3.6m、cが直径4.2mである。周壁溝は幅20cm、深さ10cm前後である。中央土坑はいずれも直径0.5m、深さ0.2m前後で、下層に炭が堆積し、cの中央土坑からは生駒西麓産の弥生土器が出土した。

第6節 土坑 (図版16)

S K30001

S K30001は徳政8区のS R30002の東に位置する直径0.55m、検出面からの深さ0.28mの円形土坑である。下層は鋤の先端が刺さった状態で出土し、上層は弥生土器が潰れた状態で出土した。

S K30002

S K30002は徳政7区のS D30006の西に位置する直径0.4m、検出面からの深さ0.15mの円形土坑である。弥生土器が出土した。

S K30003

S K30003は徳政8区のS D30006の西に位置している。南北1.7m、東西0.6mの楕円形で、検出面からの深さは0.35mある。

S K30004

S K30004はS Y1区のS D30010の東に位置している。直径1.7mで、検出面からの深さ0.5mの円形土坑である。埋土には多量の炭が含まれていた。遺物は弥生土器ともに石鏃・石鏃未成品・石錐・磨製石庖丁未成品が出土した。

第3章 弥生時代中期上層

第1節 概要 (図版17・19)

弥生時代中期上層の面は広範囲に洪水砂で覆われているため、比較的良好に全体像が判明した。地形は北から南に傾斜し、河道・水路とも地形に沿って北から南に流れている。遺構は大きく二つの地域に分けられる。一つは河道S R 40001と水路S D 40004の西側に広がる水田域であり、一つは水路S D 40004の東側に広がる微高地部分である。

水路S D 40004の西側に広がる水田域は、さらに西側や南側の調査区外に広がっている。水田は水路や水路に伴う大畦畔から四つの水田域に分かれる。水田区画は基本的に地形に即して作られているため、不定形で大小の規模がある。これらの水田は一時の洪水により砂礫で埋没して良好な状態で残っていた。

水路S D 40004の東側に広がる微高地部分は自然河道S R 40001と自然河道S R 40002に挟まれた微高地部分と自然河道S R 40001と水路S D 40004に挟まれた2地区に分けられる。ただし、用途別に分けると二ノ郷7区とS Y 1区を境に北側には方形周溝墓群が形成され、南側には竪穴住居、平地住居、土坑などの居住域が広がっている。方形周溝墓群と居住域の間には調査した範囲では特別な施設は設けられていなかった。

自然河道S R 40001と水路S D 40004に挟まれた徳政8区部分では洪水で一時に埋まった平地住居跡S B 40001が存在し、床面からは完形の土器群が出土し、水田畦畔に置かれた土器と共に洪水時の時期が決定できる資料である。

なお、基本的に弥生時代中期上層の面は弥生時代中期下層が埋没してから弥生時代中期後半に弥生時代中期上層水田が洪水で埋没するまでとしたが、僅かではあるが、洪水後に埋没した砂礫面に新たに構築された弥生時代中期後半の遺構（S K 40001やS K 40004など）も便宜的に弥生時代中期上層の面に含めた。

第2節 河道

S R 40001

黒岡7・6・5・4・3・1区、二ノ郷11・14・1・2・7区、徳政8・7区と流れ、竹添4区へ続く区の北端から南端まで微高地の西辺を北から南へ流れている。黒岡4区付近では微高地の東側を流れるS R 40002と分流している。蛇行しているため、川幅は一定ではないが、徳政地区で7m前後である。検出面からの深さは徳政8区で2.5mを測る。川幅と水量の関係で川幅の狭い部分は深く、広い部分は浅くなっている。川内の堆積土は、下層にシルト層が堆積している場所もあるが、多くは最終洪水時に運ばれてきた礫や砂が川底に堆積している。この河道や水路S D 40002からあふれた砂礫は西へ広がる水田や、住居や方形周溝墓が群をなす微高地の一部まで覆っている。

遺物は黒岡地区は同時期の微高地が広がっているため少ない。また、二ノ郷地区の方形周溝墓群の西側では、洪水礫に混じって弥生中期の壺・甕が出土している。徳政地区の居住域西側の洪水の影響を受けなかった微高地からの落ち際には、弥生土器がまとまって出土している。特に、S Y 1区のS B 40002の西側では、板を伴って特異な壺がまとまって出土している。木器の出土は少ない。

S R 40002

黒岡4区付近から分流して、黒岡1区、下町2・10区、二ノ郷3・4区を流れ竹添地区へ続いている。つまり、微高地の東側を北から南へ流れている。川幅は地区によりまちまちであるが、8～24mを測る。下町10区では中洲が残っており、木が生えていた。

遺物は周囲が墓域であるため少なく、下町10区からは完形の弥生中期の壺が、二ノ郷4区からは3連結のクワの未成品が出土している。

S R 40003

調査区の西端、徳政10区に位置する。S R 40001やS R 40002と異なった堆積状況がみられ、また水田の畦畔が切られた状況になっているため流路と呼び方を変えた。北から蛇行しながら西へ流れている。流路幅は4～6m、最深1.2mを測る。堆積物は砂礫が充満しており、一部水田面へあふれている。遺物は少なく、弥生中期の甕が出土している。以上のことから、本来は水路（S D 40001）であったものが洪水により流路になったものと考えられる。

S R 40004

徳政1・11・13・12区を東から西へ向かい、大きく蛇行して南へ流れている。本来は水田面であった堤防に水路S D 40002の水流が堰き止められて、シュートして新たに流路となったものである。徳政11区の流れはじめは大きく抉れており、ローリングの痕跡もみられる。幅は4m前後、水田面からの深さは1m前後を測る。

遺物は弥生時代中期の弥生土器壺・甕が少量出土しているが、礫層中からの出土で磨耗している。

第3節 溝

S D 40001

徳政9・12区を北から南へ蛇行しながら流れている。この水路の両側には大畦畔がとりつき、周囲には水田が広がっている。幅は約1.8m、深さ約0.5mを測る。水田と同様に洪水砂がラミナ状に堆積している。遺物は出土していない。

S D 40002

二ノ郷13・11区、徳政5・2区を北から南に向かってほぼ一直線に流れている。水路の続きは水路S D 40003に合流すると思われる。この水路の両側には大畦畔がとりつき、周囲には水田が広がっている。幅は約1.0m、深さ約0.4mを測る。水田と同様に洪水砂がラミナ状に堆積している。

遺物は僅かながら出土している。弥生時代中期の弥生土器壺・高坏がある。

S D 40003

二ノ郷7区、徳政4・7・1・6区を北から南に向かってほぼ一直線に流れている。途中でS D 40002とS D 40004との分流がある。洪水による流失部分を除けば両側に大畦畔を伴う大規模な水路である。大畦畔は水路を掘削した土で造られているため古い時期の土器が混じっている。水路幅は約5～7m、深さ約1.5mを測り、大畦畔は幅1.0m前後、高さ0.3m前後を測る。埋土は洪水時の流路となっているため、多くは礫が堆積している。周囲には水田が広がっている。徳政7区と1区の間からは西方向に流路があふれS R 40004となって流れ出ている。

遺物は徳政1・6区付近で多く出土し、弥生時代中期の弥生土器壺・甕がある。また特筆するものとして徳政1区から銅鐸形土製品が出土している。

S D 40004

二ノ郷11・1・2・7区、徳政8・7区、竹添4A区を北から南に向かってほぼ真っ直ぐ流れている。S R 40001から分流したと考えられ、二ノ郷11・1区周辺ではS R 40001と並行して流れている。この水路の西側には水田が広がり、大畦畔が伴っている。大畦畔は水路を掘削した土で造られているため古い時期の土器が混じっている。なおこの水路より東側は微高地が発達し、水田は存在していない。水路幅は3～4m、深さ1m程度を測り、大畦畔は幅1.0m前後を測る。水田と同様に洪水砂がラミナ状に堆積している。

遺物は水路の東側にS B 40001が存在する徳政8区で多量に出土し、他の区でも僅かながら出土している。出土遺物には弥生時代中期の弥生土器壺・甕・鉢・器台・土製紡錘車がある。

S D 40005

徳政1区の南端のS D 40003の西側に伴う大畦畔の一部を加工して水路としている。同じS D 40003の上流部分では同様の水路は見受けられないため徳政1区より下流部分にのみ設けられているものと考えられる。これは洪水時にS D 40003からS R 40004が派生している部分に分水施設があったものと考えられる。断面形は箱形で、幅は0.5m、深さ0.1mを測る。水田と同様に洪水砂がラミナ状に堆積している。遺物は出土していない。

第4節 水田 (図版17・19)

中期上層水田域は、徳政・二ノ郷地区と黒岡地区の2地区で合計251区画調査した。

徳政・二ノ郷地区は南北に走るS R 40001あるいはS R 40001の西側に平行して走る水路S D 40004の西側に広がる。西端および北端は調査対象外に延び、南端は新しい明石川の氾濫原による削平部分まで確認できる。この水田面の直上には、後世の削平を考えると洪水砂礫が厚さ0.4m以上にわたって堆積していたものと考えられる。この洪水は砂礫の堆積状況の観察により、自然流路S R 40001や水路S D 40003の流れから派生したものであると考えられる。特に流路S R 40004は中心的な流路である。

水田は、畦畔によって区画しており、合計209区画確認した。なお調査が多年度にわたって行われていたり、区に一部しかかかっていないものや、洪水の影響で畦畔流失も部分的に存在するため、若干の増減があることも考えられる。水田を区画する畦畔は、大小の2種が存在する。大畦畔は基本的に水路の両側に付帯する。小畦畔は大畦畔で囲まれた水田域を小区画に区画するものである。水田域は地形に添って北から南へ傾斜している。水田面の標高は、調査区内での最高地点は二ノ郷10区の17.31mで、最低地点は徳政6・11区の16.05mである。したがって、平面での距離220mに対して比高差1.26mを測る。

水田は大きく、水路などで4地区に分けられる。一つはS D 40001の西側に広がる水田域、二つめはS D 40001とS D 40002・S D 40003に挟まれた水田域、三つめはS D 40002とS D 40004に挟まれた水田域、四つめはS D 40003とS D 40004に挟まれた水田域とがある。S D 40001の西側に広がる水田域は洪水の時に小畦畔が流されている部分が多く、また区外に広がるため6区画しか確認していない。

S D 40001とS D 40002・S D 40003に挟まれた水田域は北側と南側の広がり不明であるが、全体の様子が把握できる水田域である。この水田域で163区画を確認した。水田区画は地形に即して作られており、傾斜の比較的ゆるやかな場所は大きな区画の水田(徳政3・11区付近)を作っている。またこれとは反対に傾斜のきつい場所は小さな区画の水田(徳政1区南端付近)を作っている。この水田域の地形的な高所はS D 40002の西側約8mに平行する部分で、二ノ郷13・12・11区、徳間3・11・12区の水

田区画を結んだラインであり、このラインの水田区画は水路方向に長い区画の水田である。つまりこの細長い水田を水路として低い水田に水を掛け流した可能性が高い。またこのラインの徳政1区部分には鳥状高まりが2箇所存在している。徳政2・5区の北端に位置する大畦畔と水路S D40002の大畦畔に囲まれた池状の遺構の西端では弥生土器の破片がかたまっている。また、カヤの木樋が出土した。

S D40002とS D40004に挟まれた水田域は、傾斜がきついため小さな区画の水田が大勢をしめており、28区画確認した。二ノ郷11区の水田畦畔上には弥生時代中期の高坏が倒れた状態で出土した。

S D40003とS D40004に挟まれた水田域は傾斜がきついかかわらず、比較的大区画の水田が作られており、19区画確認した。徳政8区のS D40003東側の畦畔からは鋸歯文を施した脚付鉢が出土した。

各水田の区画の形態は、調査区の形態が細長いため、全体の枠組みがわかるものがほとんどない。このような状況の中で、形態の判明しているものをみていくと、中期下層以前と様相が異なり不定形のものばかりである。また区外へ延びているもので推定できるものも含めても、やや長方形のものも存在するが、不定形のものが多い。ほとんどが区外に延びており、区画が明確にできたもののうち最大のもは徳政3区の148.5m²、最小のもは徳政2区の20.0m²である。

黒岡地区は河道S R40001周辺の低い部分で検出した。徳政・二ノ郷地区とのつながりは不明である。黒岡3・4・5・6・7区で41区画確認した。西側は削平のため、確認できなかった。区画は不定形であり、面積がわかるものはない。

第5節 平地住居

S B40001 (図版23)

S Y1区のS R40001の東側に位置する。弥生時代中期後半の洪水砂に覆われていた。東西4間(7.6m)、南北1間(3.0m)の南北棟の建物である。南北方向の方位はN-17°-Wである。柱掘形は直径30cm～40cm前後の円形で、深さは検出面から30cm～40cmである。東側と北側に浅いL字状の溝がとりつく。溝の幅は0.6m～0.8m、深さ最大0.3mである。床面中央部からやや東よりに直径0.3m～0.5mの被熱赤変部が重複しながら複数箇所存在する。

S B40002 (図版20～22)

徳政8区のS D40004とS R40001の間に位置する平地住居である。弥生時代中期後半の洪水砂に覆われていた。東西5間(7.8m)、南北2間(3.7m)の東西棟の側柱建物である。南北方向の方位はN-5°-Eである。柱掘形は直径20cm～30cm前後の円形で、深さは検出面から20cm～48cmである。いずれも直径14cm前後の柱痕跡をとどめる。南側と北側に浅い溝がとりつく。南溝の幅は1.5m、深さ0.3mである。床面中央部に直径1.2mの被熱赤変部が存在する。また、西側にも直径0.5mの被熱赤変部が存在する。南東角には浅い円形土坑がある。床面には西側半分を中心に、完形および完形に近い弥生土器が約30個体出土した。土器の中の土は水洗選別したが遺物は出土しなかった。東南部の床面には長さ3.2m、幅0.3mのモミの板材があり、板の上から石鎌が出土した。南溝からは炭化物が多量に出土し、炭化米や植物種子、ハモ歯骨、サヌカイト剥片、碧玉製管玉が出土した。

床面の硬さを周辺も含め山中式硬度計を用い測定したところ、建物内部はおおむね29以上の極密の値を示している。特に中央部およびやや西よりの部分が硬い値を示している。

第6節 竪穴住居

S H40001 (図版24・28)

竹添4A区に位置し、S R40002の右岸、S D40004との間に立地する。東側の一部はS R40002により削られており、北側の一部は確認トレンチで削られている。また東側の一部はS H40002を切って重複している。平面形態は円形で、直径5.0mを測る。支柱穴は4本である。壁の高さは、検出面から約0.1mを測る。壁際には幅約0.2m、深さ0.1mの溝が巡る。床面の標高は16.0mで、ほぼ中央部に土坑がある。土坑は東西に長い楕円形で、0.57m×0.38m、深さ0.17mの規模をもつ。この土坑の長軸側のすぐ脇にはピットが存在する。直径約0.26m、深さ約0.24mを測る。

S H40002 (図版24)

竹添4A区に位置し、S R40002の右岸、S D40004との間に立地する。東側の大部分はS R40002により削られており、西側の一部はS H40001を切られて重複している。平面形態は円形で、規模は直径5.6mを測る。支柱穴および中央土坑は不明である。壁の高さは、検出面から約0.1mを測る。壁際には幅約0.2m、深さ0.1mの溝が巡る。遺物は弥生土器壺が出土している。

S H40003 (図版24・28)

徳政7区の東端に位置する。弥生時代中期の集落が立地する微高地の西端部に位置し、西半部をS R400002に削られている。北半部は区外のため、全体の約1/4を調査したことになる。弥生時代中期の土壌層ではプランを捉えることができず、土壌層を取り払った面で検出したため、壁面の立ち上がりは0.2mほどしか残っていない。

周壁溝の検出状況から4時期の建て替え・拡張が認められ、それに伴って移動した中央土坑を3箇所検出した。いずれの住居跡も平面形態は円形で、円形の中央土坑を伴っている。

最初の住居aは周壁溝1・中央土坑1・P1～3で、本来は4本柱であったと考えられる。復原できる直径約4.0m、面積約11.3㎡である。中央土坑1は直径0.9m、深さ0.35mで、炭層を含む。

2回目の住居bは周壁溝2・中央土坑1・P4～7で、本来は5本柱であったと考えられる。復原できる直径約5.9m、面積約27.3㎡である。中央土坑は最初の住居跡と共有している。

3回目の住居cは周壁溝3・中央土坑2・P8～10で、本来は4本柱であったと考えられる。復原できる直径約5.6m、面積約24.6㎡である。中央土坑2は直径0.8m、深さ0.3mで、炭層を含む。

最後の住居dは周壁溝4・中央土坑3・P11～14で、本来は10本柱であったと考えられる。復原できる直径約7.2m、面積約40.7㎡である。中央土坑3は直径0.9m、深さ0.4mで、炭層を含む。P11～14は直径0.5m、深さ0.2～0.3mである。周壁溝4からは石垣丁が1点出土した。

遺物は弥生土器壺・甕が出土し、水洗選別でサヌカイトの剥片、炭化米、植物種子が出土した。

S H40004 (図版24・28)

S H40003と同様、自然河川S R40002の左岸に位置し、土壌層を取り去った面で検出した。西半部はS R40002に削られ、北半部はS H40003に削られているため、全体の約1/4しか残存していない。

平面形態は円形で、復原できる直径約4.3m、検出面からの深さ0.12mである。床面で検出した遺構には周壁溝・中央土坑・柱穴P15・16があり、4本柱であったと考えられる。中央土坑は直径0.55m、深さ0.15mの浅いもので、僅かに炭層を含む。遺物は弥生土器壺・甕が出土し、水洗選別でサヌカイトの剥片、炭化米、植物種子が出土した。

S H40005 (図版25)

徳政8区のS R40002の左岸に位置している。南半部は区外であり、S H40006と重複し切っている。平面形態は円形で、直径約6.4m、検出面からの深さ0.24mである。主柱穴は4本と考えられ、2本存在する。壁溝は存在しない。床面の標高は16.2mで、中央土坑は存在せず、2箇所に被熱赤変部が認められる。遺物は弥生土器壺・甕が出土した。

S H40006 (図版25)

徳政8区のS H40005と重複し切られており、南半部は区外である。平面形態は円形で、直径約7.4m、検出面からの深さ0.24mである。主柱穴は4本と考えられ、2本存在する。壁溝は存在しない。床面の標高は16.2mである。

S H40007 (図版25・29)

徳政8区東端のS H40006の東側に位置しており、南北の一部が区外となっている。ほぼ同心円状に4基重複しており、中央土坑、周壁溝、柱穴の切り合いから新古を確認し、古い方からa・b・c・dと呼称した。

aは平面形が円形で、直径5.0mを測り、主柱穴は6本である。周壁溝は幅約0.2m、中央土坑は直径0.3m以上である。bはやや南に移動し平面形が円形で、直径5.0mを測り、主柱穴は6本である。周壁溝は幅約0.2m、中央土坑は直径0.3m以上である。cはやや北に移動しひとまわり大きくなった。平面形が円形で、直径6.2mを測り、主柱穴は6本である。周壁溝は幅約0.3m、中央土坑は直径0.4m以上である。dは中心はそのままひとまわり大きくなった。平面形が円形で、直径7.3mを測り、主柱穴は6本である。周壁溝は幅約0.3m、中央土坑は直径0.7mである。床面の標高は16.5mである。

遺物は弥生土器壺・甕・高坏が出土した。

S H40008 (図版26・29)

徳政8区東端のS H40007の東側に位置し、重複し切られている。平面形は円形で、直径3.4mを測る。壁の高さは、検出面から約0.1mを測り、床面の標高は16.1mである。主柱穴は不明で、周壁溝は存在しない。中央土坑は直径0.23m、深さ0.12mである。

S H40009 (図版26・29)

S Y1区のS R40002の東側に位置しており、S B40001の下層である。平面形は円形で、直径4.6mを測る。主柱穴は4本である。壁の高さは、検出面から0.2mを測る。壁際には幅約0.2m、深さ0.1mの溝が巡る。床面の標高は16.4mで、ほぼ中央部に土坑がある。土坑は円形で直径0.38m、深さ0.2mである。遺物は中央土坑から弥生土器壺が出土した。

S H40010 (図版27・29)

S Y1区のS H40009の東側に位置している。S D30010の埋没後に作られている。平面形は円形で、直径5.0mを測る。主柱穴は4本である。壁際には幅約0.2m、深さ0.1mの溝が巡る。床面の標高は16.5mで、ほぼ中央部に土坑がある。土坑は東西に長い楕円形で0.50m×0.38m、深さ0.22mである。

S H40011 (図版27)

S Y1・竹添14区に位置している。北側の半分以上は区外であり、主柱穴および中央土坑は不明である。平面形態は円形で、規模は直径8.4mを測り、床面の標高は16.4mである。壁の高さは、検出面から約0.2mを測る。壁際には幅約0.2m、深さ0.1mの溝が巡る。遺物は弥生土器壺が出土し、水洗選別でサヌカイトの剥片、炭化米、植物種子が出土した。

第7節 土坑

S K 40001

徳政1区の北部に位置する。弥生時代中期上層が埋没した洪水砂を基盤として掘削されている。平面形態は円形で、規模は直径1.4m、深さは検出面から0.95mを測る。埋土は9層でレンズ状堆積をしている。遺物は、弥生時代中期後半の小型の把手付鉢が出土しているのみである。

S K 40002 (図版30)

徳政8区のS R 40001の西側、S B 40002の下層に位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径0.75m、短径0.5m、深さは検出面から0.95mを測る。水洗選別で炭化米が出土した。

S K 40003 (図版30)

徳政8区のS K 40002の北側に位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径0.68m、短径0.55m、深さは検出面から0.08mを測る。水洗選別で炭化米が出土した。

S K 40004 (図版30)

徳政7区東端の弥生時代の土壌層第1面で検出した。埋土の上層に土器が一括に廃棄されていたため、土壌層の上面で検出することができた。平面形態は不整形で、東端部は側溝に切られている。径は約0.9mで、検出面からの深さは0.45mである。

S K 40005 (図版30)

徳政7区東端の弥生時代の土壌層を取り払った第3面で検出した。西端部は側溝によって削られている。平面形態は隅丸方形で、残存長0.55m、幅0.45m、検出面からの深さ0.06mである。底面は平坦で、底に幅0.18mほどの板が敷かれていた。29号方形周溝墓の38号木棺に隣接しているところから、これも木棺ではないかと考えられたが、詳細は不明である。

S K 40006 (図版31)

徳政8区に位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径0.88m、短径0.62m、深さは検出面から0.12mを測る。炭化物層とシルト層が互層をなしている。水洗選別でサヌカイトの剥片・炭化米・種子が出土した。

S K 40007 (図版30)

徳政8区のS K 40006の東側に位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径0.8m、短径0.6m、深さは検出面から0.1mを測る。弥生土器壺が出土した。

S K 40008 (図版31)

徳政8区のS K 40006の南側に位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径1.6m、短径1.12m、深さは検出面から0.12mを測る。埋土は砂質シルトである。弥生土器壺が出土した。

S K 40009 (図版31)

徳政8区に位置する。平面形態は円形で、規模は直径0.7m、深さは検出面から0.36mを測る。弥生土器壺が出土した。

S K 40010 (図版31)

徳政8区に位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径1.4m以上、短径0.67m、深さは検出面から0.17mを測る。断面形は浅い皿状である。水洗選別で炭化米・植物種子が出土した。

S K 40011 (図版32)

平面形態は楕円形で、規模は長径0.7m以上、短径0.55m以上、深さは検出面から0.34mを測る。埋土はシルト質極細砂で、水洗選別でサヌカイトの剥片・炭化米・植物種子が出土した。

S K 40012 (図版32)

平面形態は楕円形で、規模は長径0.86m、短径0.80m、深さは検出面から0.50mを測る。埋土はシルト質極細砂で炭を含み、ラミナ状になっている。弥生土器壺が出土し、水洗選別でサヌカイトの剥片・炭化米・植物種子が出土した。

S K 40013 (図版32)

平面形態は楕円形で、北側は土坑に切られている。規模は長径1.55m以上、短径0.43m、深さは検出面から0.24mを測る。埋土はシルト質極細砂である。弥生土器無頸壺が出土した。

S K 40014 (図版31)

平面形態は楕円形で、規模は長径1.52m、短径0.95m、深さは検出面から0.45mを測る。埋土はシルト質極細砂である。弥生土器壺が出土した。

S K 40015 (図版31)

S Y 1 区の S K 40016 の北西に位置している。平面形は東西方向の楕円形で、規模は長径1.62m、短径1.20m、深さは検出面から0.55mを測る。炭化物層とシルト層が互層をなしている。弥生土器壺・蓋が出土し、水洗選別でサヌカイトの剥片、炭化米、植物種子が出土した。

S K 40016 (図版32)

S Y 1 区の東端、S H 40011 の上層にあたり、S K 40016 に切られている。平面形は東西方向の楕円形で、長径2.1m以上、短径1.28m、深さは検出面から0.70mを測る。炭化物層とシルト層が互層をなしている。弥生土器壺・鉢が出土し、水洗選別でサヌカイトの剥片、炭化米、植物種子が出土した。

S K 40017 (図版32)

S Y 1 区の東端に位置しており、S H 40011 の上層にあたり、S K 40016 を切っている。平面形は東西方向の楕円形で、長径1.7m以上、短径1.50m、深さは検出面から0.30mを測る。弥生土器壺が出土し、水洗選別で炭化米、植物種子が出土した。

S K 40018 (図版33)

S Y 1 区の S K 40015 の南に位置している。平面形は南北方向の楕円形で、規模は長径2.18m、短径0.72m、深さは検出面から0.70mを測る。弥生土器壺が出土し、水洗選別でサヌカイトの剥片、炭化米、植物種子が出土した。

S K 40019 (図版33)

S Y 1 区の S K 40015 の南の下層に位置し、S K 40020 に切られている。平面形は円形で、直径0.7m、深さは検出面から0.08mを測る。水洗選別でサヌカイトの剥片、炭化米、植物種子が出土した。

S K 40020 (図版33)

S Y 1 区の S K 40015 の南の下層に位置し、S K 40019 を切っている。平面形は東西方向の楕円形で、規模は長径0.81m、短径0.58m、深さは検出面から0.26mを測る。水洗選別でサヌカイトの剥片、炭化米、植物種子が出土した。

S K 40021 (図版33)

S Y 1 区の S K 40018 の西に位置し、S K 40023 に切られている。平面形は東西方向の楕円形で、規模は長径1.75m、短径0.84m、深さは検出面から0.39mを測る。弥生土器壺が出土し、水洗選別でサヌカ

イトの剥片、炭化米、植物種子が出土した。

S K 40022 (図版33)

S Y 1 区の S K 40015 の西に位置し、S K 40024 に切られており、S K 40033～40035 の上層にあたる。平面形は東西に長い不整形で、規模は長径3.18m、短径0.90m以上、深さは検出面から0.21mを測る。弥生土器甕・脚が出土し、水洗選別でサヌカイトの剥片、炭化米、植物種子が出土した。

S K 40023 (図版33)

S Y 1 区の S K 40022 の南に位置し S K 40021 を切り、S K 40024 に切られている。平面形は不整形で、規模は長径1.08m以上、短径1.54m、深さは検出面から0.55mを測る。弥生土器壺・高坏が出土し、水洗選別でサヌカイトの剥片、炭化米、植物種子が出土した。

S K 40024 (図版34)

S Y 1 区の S K 40022 の南、S K 40023 の東に位置し両土坑を切っている。平面形は不整形で、規模は長径1.24m、短径0.73m、深さは検出面から0.30mを測る。炭化物層とシルト層が互層をなしている。水洗選別で炭化米、植物種子が出土した。

S K 40025 (図版34)

S Y 1 区の S K 40023 の南に位置している。平面形は円形で、規模は長径0.65m、短径0.60m、深さは検出面から0.18mを測る。水洗選別で炭化米、植物種子が出土した。

S K 40026 (図版34)

S Y 1 区の S K 40022 の北に位置し、S K 40032 を切っている。平面形は東西方向の楕円形で、規模は長径0.87m、短径0.50m、深さは検出面から0.50mを測る。水洗選別でサヌカイトの剥片、炭化米、植物種子が出土した。

S K 40027 (図版34)

S Y 1 区の S K 40018 の西に位置している。平面形は南北方向の楕円形で、規模は長径0.95m以上、短径0.70m、深さは検出面から0.17 m を測る。炭化物層とシルト層が互層をなしている。水洗選別でサヌカイトの剥片、炭化米、植物種子が出土した。

S K 40028 (図版34)

S Y 1 区の S K 40027 の西に位置し、S K 40030 を切っている。平面形は南北方向の楕円形で、規模は長径1.38m、短径1.02m、深さは検出面から0.39mを測る。水洗選別でサヌカイトの剥片、炭化米、植物種子が出土した。

S K 40029 (図版34)

S Y 1 区の S K 40021・23 の下層に位置している。平面形は円形で、規模は長径0.76m、短径0.60m、深さは検出面から0.12mを測る。水洗選別で炭化米、植物種子が出土した。

S K 40030 (図版34)

S Y 1 区の S K 40028 の西に位置し、S K 40028 に切られている。平面形は東西方向の楕円形で、規模は長径2.38m、短径0.92m、深さは検出面から0.30mを測る。炭化物層とシルト層が互層をなしている。水洗選別でサヌカイトの剥片、炭化米多量、植物種子が出土した。

S K 40031 (図版35)

S Y 1 区の S K 40030 の北に位置している。平面形は南北方向の楕円形で、規模は長径3.14m、短径1.29m、深さは検出面から0.57mを測る。炭化物層とシルト層が互層をなしている。弥生土器壺・甕が

出土し、水洗選別でサヌカイトの剥片、植物種子が出土した。

S K 40032 (図版35)

S Y 1 区の S K 40022 の北に位置し区外に延び、S K 40026 に切られている。平面形は方形で、規模は長径2.3m、短径1.95m、深さは検出面から0.29mを測る。水洗選別でサヌカイトの剥片、炭化米、植物種子が出土した。

S K 40033 (図版35)

S Y 1 区の S K 40024 の北に位置し、S K 40034 に切られている。平面形は東西方向の楕円形で、規模は長径1.06m、短径0.69m、深さは検出面から0.42mを測る。炭化物層とシルト層が互層をなしている。水洗選別でサヌカイトの剥片、炭化米、植物種子が出土した。

S K 40034 (図版35)

S Y 1 区の S K 40033 の西に位置し、S K 40033 と S K 40035 を切っている。平面形は東西方向の楕円形で、規模は長径1.00m、短径0.64m、深さは検出面から0.36mを測る。炭化物層とシルト層が互層をなしている。水洗選別でサヌカイトの剥片、炭化米、植物種子が出土した。

S K 40035 (図版35)

S Y 1 区の S K 40034 の西に位置し、S K 40034 に切られている。平面形は東西方向の楕円形で、規模は長径0.78m、短径0.64m、深さは検出面から0.25mを測る。炭化物層とシルト層が互層をなしている。水洗選別でサヌカイトの剥片、炭化米、植物種子が出土した。

S K 40036 (図版35)

S Y 1 区の S H 40011 と重複し、東壁を切っている。平面形は円形で、規模は長径0.70m、深さは検出面から0.30mを測る。

S K 40037 (図版36)

S Y 1 区の S H 40011 と重複し、南壁を切っている。平面形は方形で、規模は長辺2.24m、短辺1.92m以上、深さは検出面から0.19mを測る。

S K 40038 (図版36)

S Y 1 区の S H 40011 に重複し切っている。平面形は円形で、規模は直径1.25m、深さは検出面から0.48mを測る。埋土は炭化物が多量に含まれており、第1・2層から土器が出土し、水洗選別でサヌカイトの剥片、炭化米、植物種子が出土した。

S K 40039 (図版36)

S Y 1 区の S K 40037 と重複している。平面形は東西方向の楕円形で、規模は直径0.71m、短径0.55m、深さは検出面から0.08mを測る。水洗選別で炭化米が出土した。

S K 40040 (図版36)

S Y 1 区の S H 40010 と S H 40011 の間に位置し、S D 30010 の上層にある。平面形は円形で、規模は直径0.72m、深さは検出面から0.52mを測る。炭化物層とシルト層が互層をなしている。水洗選別でサヌカイトの剥片、炭化米、植物種子が出土した。

S K 40041 (図版36)

S Y 1 区の S H 40010 の西壁を切っている。平面形は南北方向の楕円形で、規模は長径1.15m、短径0.83m、深さは検出面から0.26mを測る。弥生土器イイダコ壺が出土し、水洗選別で炭化米、植物種子が出土した。

S K 40042 (図版36)

S Y 1 区の S H 40011 の北に位置している。平面形は東西方向の長円形で、長径1.36m以上、短径0.52m、深さは検出面から0.18mを測る。炭化物層とシルト層が互層をなしている。水洗選別でサスカイトの剥片、炭化米、植物種子が出土した。

S K 40043 (図版36)

S Y 1 区の S K 40042 の南に位置している。平面形は東西方向の楕円形で、規模は長径0.60m、短径0.46m、深さは検出面から0.12mを測る。弥生土器壺・甕が出土した。

S K 40044 (図版36)

S Y 1 区の S H 40011 の南壁に接している。平面形は東西方向の長方形で、長辺1.62m、短辺0.52m、深さは検出面から0.30mを測る。弥生土器壺が出土した。

第8節 土器棺墓 (図版37・38)

土器棺は S Y 1 区で S P 40001～40006 の 6 基と徳政 8 区で 1 基の合計 7 基を調査した。

S P 40001

S Y 1 区の S H 40010 の上層に位置している。掘形の平面形は楕円形で、規模は長径0.54m、短径0.36m、深さは検出面から0.26mを測る。棺の長軸は N-79° -E で東西方向である。広口太頸壺を身とし、横位で東に開口している。蓋は脚部を打ち欠いた高坏と細頸壺、甕の口縁部の破片を組合わせている。

S P 40002

S Y 1 区の S H 40010 の上層、S P 40001 の東側に位置している。掘形の平面形は楕円形で、規模は長径0.46m、短径0.32m、深さは検出面から0.15mを測る。棺の長軸は N-88° -E で東西方向である。直口壺を身とし、横位で東に開口している。蓋は小形の甕を小割にし、大きな破片で開口部を、小さな破片で底部を押さえている。

S P 40003

S Y 1 区の S H 40010 の上層、S P 40001 の北側に位置している。掘形の平面形は鶏卵形で、規模は長径0.55m、短径0.40m、深さは検出面から0.27mを測る。棺の長軸は N-71° -E で東西方向である。小形の甕を身とし、横位で東に開口している。高坏の脚を欠いた坏部を蓋としている。

S P 40004

S Y 1 区の S B 40001 の東側に位置している。掘形の平面形は円形で、規模は長径0.41m、短径0.38m、深さは検出面から0.30mを測る。無頸壺を身とし、やや傾斜させている。高坏の坏部の一部で蓋をしていたが、完全には蓋ができていない。

S P 40005

S Y 1 区の S K 40031 の北側に位置している。掘形の平面形は不整形円で、規模は長径0.73m、短径0.65m、深さは検出面から0.35mを測る。西側に小段を設けている。体部上半を打ち欠いた壺を身とし、直立している。甕と身の打ち欠いた壺上半部の破片を蓋としている。

S P 40006

S Y 1 区の S B 40001 の下層、S H 40009 の上層に位置している。掘形の平面形は円形で、規模は長径0.34m、短径0.30m、深さは検出面から0.36mを測る。小形の甕を身とし、直立している。高坏の脚を打ち欠いた坏部で蓋をしている。

S P 40007

徳政8区のS H 40006とS H 40007の間に位置している。掘形の平面形は円形で、規模は長径0.69m、短径0.66m、深さは検出面から0.23mを測る。棺の長軸はN-69°-Wで東西方向である。無頸壺を身とし、やや傾斜した横位で東に開口している。体部上半を打ち欠いた壺を蓋としており、上圧でつぶれている。一部S H 40007の土器と接合した。

第9節 方形周溝墓 (図版39)

弥生時代中期上層面に伴う方形周溝墓は群を形成し、総数40基確認した。墓域は、二ノ郷1・2・3・4・7・8・14・15・16区に位置し、自然流路S R 40001とS R 40002との間に形成された微高地の上流側に立地している。下流側には居住域が形成されている。なお、1基(S X 40026)は自然流路S R 40001と西側を流れる水路S D 40004との間に離れて存在している。

当初は、道路部分だけの調査予定であったが、周溝内の木棺S T 40004から青銅武器の鋒が出土したため、木棺の東側に位置する方形周溝墓の全容を解明するため、二ノ郷1区と二ノ郷2区の間を拡張して調査を実施した(二ノ郷5区)。また、二ノ郷16区では調査区外にまたがって残りの良い木棺が出土したため、木棺の全容を調査できる部分を西側に拡張し、調査を行った。また、方形周溝墓群の西端、北端については地形から群集範囲が想定でき、実際の調査でも確認できた。しかし、方形周溝墓群の南端については、微高地がさらに南側に続き、居住域が広がっているため、地形からは判断できなかった。このため、方形周溝墓群の南端あるいは居住域との関係を明らかにする目的で、新たに二ノ郷8・9区この二つの調査区を墓域と居住域との間に地形に応じて設定し、調査を実施した。したがって、この二つの調査区は、方形周溝墓の確認のみで、下層の調査を実施していない。

埋葬施設は、方形周溝墓の墳丘内にあるものと周溝内にあるものがあり、総数39基確認した。墳丘内は木棺のみで、周溝内は木棺と木蓋土壌が存在する。小児用の棺も木棺を用い、土器棺は使用していない。

1. 方形周溝墓**S X 40001 (図版40)**

最大規模のS X 40010の南西に位置している。上部は古墳時代の溝や、平安から鎌倉時代の整地で削平を受けている。南北12.0m、東西10.5mの長方形を呈する。西周溝底からの高さは1.1mを測る。周囲はすべて周溝を共有し、北側はS X 40002と、東側はS X 40017と、西側はS X 40005・S X 40007と接している。南側は区外に延びている。埋葬施設はS T 40001とS T 40002の2基を確認した。

S T 40001 (図版78)

墳丘のほぼ中央部に位置し、南北に主軸をもつ埋葬施設S T 40002を一部切る組合せ式木棺である。掘形は長軸1.83m以上、短軸1.12m、深さは0.42mを測る。内法は1.5m×0.55mを測る。長軸はN-16°-Wを指し、棺底の標高は16.62mを測る。棺材は腐蝕が著しく、南側の小口板(コウヤマキ)が僅かに残る程度であった。棺の構造の詳細は明らかではないが、小口板は底板より深く埋め込まれていた。底板の有無は確認できなかった。人骨の痕跡も確認できなかった。

S T 40002 (図版78)

S T 40001に北西側を切られて存在し、南北に主軸をもつ組合せ式の木棺である。掘形は長軸2.24m、

短軸0.84m、深さ0.45mを測る。内法は1.40m×0.50mを測る。長軸はN-30°-Wを指し、棺底の標高は16.46mを測る。棺材はほとんど腐蝕し、棺の構造は明らかでないが、小口穴は存在しない。人骨の痕跡も確認できなかった。

S X 40002 (図版41・64)

S X 40001の北に位置している。南北8.0m、東西方向は北側で3.8m、南側で5.0mのやや変形の長方形を呈している。南周溝底からの高さは1.0mを測る。周囲はすべて周溝を共有し、北側はS X 40009、東側はS X 40010、西側はS X 40003、南側はS X 40001と接している。盛土から石鏃1点が出土した。埋葬施設はS T 40003の1基を確認した。

S T 40003 (図版79)

S X 40002の南よりに位置する。墳丘の長軸とは直角し、東西に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形は長軸1.65m、短軸0.67m、深さ0.25mを測る。内法は1.42m×0.56mを測る。長軸はN-83°-Wを指し、棺底の標高は16.75mを測る。棺材はほとんど腐蝕して棺の構造は明らかではないが、小口穴は存在しない。人骨の痕跡は確認できなかったが、棺内から石鏃が2点出土した。

S X 40003 (図版42)

S X 40002の西側に位置している。南北7.5m、東西7.5mのやや菱形をした方形を呈する。東周溝底からの高さは0.8mを測る。西側は自然流路S R 40001が流れている。北・東・南は周溝を共有し、北側はS X 40004・S X 40009と、東側はS X 40002と、南側はS X 40005と接している。

埋葬施設はS T 40010の1基を確認した。

S T 40010 (図版79)

墳丘の南東部に位置する。南北に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形は長軸0.74m、短軸0.47m、深さ0.16mを測る。内法は長さ0.40m、幅0.27m、深さ0.16mを測る。長軸はN-20.5°-Wを指し、棺底の標高は16.81mを測る。棺材は腐蝕して残っていないため、棺の構造は詳細は明らかではないが、小口穴は存在しない。人骨の痕跡も確認できなかった。

S X 40004 (図版42・77)

S X 40003の北側に位置している。南北3.9m以上、東西4.0m程度の方角を呈する。東周溝底からの高さは0.9mを測る。西側は区外へ延びているが、自然流路S R 40001が流れ、北側はS X 40006と自然流路S R 40001との余剰帯が存在している。東・南側は溝を共有し、S X 40009・S X 40003と接しており、S X 40009との間の溝からは完形の土器が出土している。埋葬施設は検出できなかった。

S X 40005 (図版43)

S X 40003の南側に位置している。南北7.3m、東西6.0mのはほぼ正方形を呈する。南周溝底からの高さは1.1mを測る。西側は自然流路S R 40001が流れ、北東南は周溝を共有し、北側はS X 40003、東側はS X 40001、南側はS X 40007と接している。埋葬施設は確認できなかった。

S X 40006 (図版44・65)

S X 40002の北方に位置している。南北4.5m、東西4.9mのはほぼ正方形を呈している。南周溝底からの高さは0.9mを測る。西側は溝を挟み、自然流路S R 40001との間の余剰帯に接し、北東南は周溝を共有し、北側はS X 40019、東側はS X 40010、南側はS X 40009と接している。

埋葬施設はS T 40006の1基を確認した。

S T 40006 (図版81)

S X 40006の中央部に位置している。墳丘の主軸とはやや軸を振り、東西に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形は長軸1.53m、短軸0.62m、深さ0.32mを測る。木棺の内法は長さ1.43m、幅0.54m、深さ0.32mを測る。長軸はN-79° -Wを指し、棺底の標高は16.82mを測る。棺材のうち蓋板は1枚板を使用し、北側板の一部がかろうじて残った程度である。残りの南側板、小口板は腐蝕が著しく、シルト化した痕跡が残る程度である。底板の有無は不明である。底部には小口穴の痕跡はない。棺内にはシルトが堆積しており、人骨の痕跡は確認できなかった。棺内からサヌカイトの剥片が32点出土した。

S X 40007 (図版45)

S X 40005の南側に位置している。南東側の一部は区外に延びている。南北7.0m以上、東西6.0mの長方形を呈している。北周溝底からの高さは1.2mを測る。西側は自然流路S R 40001が流れている。北東は溝を共有し、北側はS X 40005と東側はS X 40001と接している。

埋葬施設はS T 40007の1基を確認した。

S T 40007 (図版79)

墳丘のほぼ中央部に位置している。墳丘の長軸と同様に、南北に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形は長軸2.26m、短軸0.93m、深さ0.34mを測る。内法は長さ1.7m、幅0.60m、深さ0.34mを測る。長軸はN-25° -Wを指し、棺底の標高は16.58 mを測る。棺材は腐蝕が著しく、蓋板、側板、小口板はシルト化していた。底板の有無は不明である。底部には小口穴の痕跡はない。棺内にはシルトが堆積しており、人骨の痕跡は確認できなかった。

S X 40009 (図版46・65・77)

S X 40002北側に位置している。南北6.0m、東西7.3mの不定な方形を呈している。北周溝底からの高さは1.1mを測る。周囲はすべて周溝を共有し、北側はS X 40006、東側はS X 40010、南側はS X 40002・S X 40003、西側はS X 40004と接しており、S X 40004との間の溝からは完形の土器が出土している。埋葬施設は確認できなかった。

S X 40010 (図版47・64・65・66・67・68・72)

微高地のほぼ中央部に位置し、方形周溝墓群中最大である。上部は古墳時代の溝や、平安から鎌倉時代の建物で削平を受けている。南北23.0m、東西14.0mの長方形を呈する。東周溝底からの高さは1.8mを測る。周囲はすべて周溝を共有し、北側はS X 40012・S X 40020、東側はS X 40013・S X 40014、南側はS X 40017、西側はS X 40006・S X 40002・S X 40009と接している。

埋葬施設は2基確認し、ほぼ中央に1基、南側の陸橋付近に1基を確認している。

S T 40021 (図版87)

墳丘のほぼ中央部に位置している。墳丘の主軸と同様に南北に主軸をもつ組合せ式木棺である。木棺の内寸は長さ1.3m以上、幅0.6m、深さ0.07m以上を測る。長軸はN-25° -Wを指し、棺底の標高は17.00mを測る。棺材は腐蝕し、数mmにやせていた。底板の周囲に側板、小口板の痕跡がある。人骨の痕跡は確認できなかった。

S T 40019 (図版86)

S X 40017との間に位置する陸橋部分に位置する。墳丘の主軸とは直交し、東西に主軸をもつ組合せ式木棺である。古墳時代の溝のため、上部が削平されており、かろうじて棺底のみ残存している。木棺の内法は長さ0.7m以上、幅0.46m、深さ0.6mを測る。長軸はN-66° -Eを指し、棺底の標高は16.99mを測る。棺材は腐蝕のためシルト化している。底板の周囲に側板、小口板の痕跡がある。

人骨の痕跡は確認できなかったが、棺底からは碧玉製の管玉が34点出土した。

S X 40011 (図版49・70)

S X 40010号墓の北東方向に位置している。上部は平安から鎌倉時代の整地で削平を受けている。北東部分の一部は区外のため調査できていない。南北8.8m、東西6.1mの長方形を呈する。西周溝底からの高さは1.1mを測る。周囲はすべて周溝を共有し、北はS X 40037、東はS X 40016、南側はS X 40013、西はS X 40012と接しており、S X 40012との間の溝からは土器が出土している。

埋葬施設は西南部の陸橋部分で1基確認した。

S T 40020 (図版85)

S X 40011の南西部の陸橋上に位置する墳丘の主軸と直交し、東西に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形は長軸1.54m、短軸0.87m、深さ0.30mを測る。木棺の内法は長さ1.05m、幅0.50m、深さ0.30mを測る。長軸はN-53°-Eを指し、棺底の標高は16.9mを測る。棺材は腐蝕が著しいが、蓋板と両側板の一部が残存しており、両小口板と底板はシルト化していた。棺の構造は小口板を底に埋め込むタイプである。人骨頭部の痕跡が北小口に接して丸く残っていた。

S X 40012 (図版50・67・70)

S X 40011の西側に位置している。上部は古墳時代の溝や、平安から鎌倉時代の整地で削平を受けている。南北7.5m、東西10.5mの長方形を呈し、南周溝底からの高さは1.2mを測る。周囲はすべて周溝を共有し、北側はS X 40011、南側はS X 40010、西側はS X 40020と接している。S X 40011との間の溝からは土器が出土している。埋葬施設は西よりに1基確認している。

S T 40012 (図版99)

墳丘のはほぼ中央部に位置する。南北に主軸をもつ組合せ式木棺である。上層の古墳時代の溝に削平され、かろうじて棺底が残った程度である。掘形は長軸1.91m、短軸0.80m、深さ0.16m以上を測る。内法は長さ1.70m、幅0.63m、深さ0.16m以上を測る。長軸はN-27.5°-Wを指し、棺底の標高は16.86mを測る。棺材は腐蝕が著しく、西側の側板が一部残る程度であった。棺の構造は、小口板、側板ともに底板にのるタイプである。骨の痕跡は確認できなかった。

S X 40013 (図版51・68・69)

S X 40011の南側に位置している。上部は平安から鎌倉時代の整地で削平を受けている。南北11.5m、東西10.5mのはほぼ正方形を呈する。西周溝底からの高さは1.70mを測る。周囲は東側を除いて周溝を共有し、北側はS X 40011、南側はS X 40014、西側はS X 40010と接している。S X 40014との間の溝からは土器が出土している。東側は溝の東側に余剰帯が残り、この東側にS X 40018がある。

埋葬施設はS T 40013の1基を確認した。

S T 40013 (図版82)

S X 40013の東端に位置する。南北に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形は長さ1.46m、幅0.55m、深さ0.33mを測る。長軸はN-3°-Wを指し、棺底の標高は16.89mを測る。棺材は腐蝕が著しく、底板の一部が残っているのみである。棺の底に小口穴はない。人骨の痕跡は確認できなかった。

S X 40014 (図版52・68・69・77)

S X 40013の南側に位置している。上部は平安から鎌倉時代の整地で削平を受けている。南北12.8m、東西10.5mの長方形を呈している。西周溝底からの高さは1.70mを測る。周囲は東側を除いて周溝を共有しており、北側はS X 40013、南側はS X 40015、西側はS X 40010と接している。東側は自然流路S

R40002との間に余剰帯が残る。S X40013との間の溝とS X40015との間の溝、S X40014東溝からは土器が出土している。盛土からは打製尖頭器未成品が出土した。

埋葬施設は2基確認し、中央部やや北よりに1基、南端に1基確認した。

S T 40014 (図版82)

S X40014の墳丘中央部よりやや北側に位置する。東西に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形は長さ1.90m、幅0.90m、深さ0.17mを測る。内法は長さ1.69m、幅0.62m、深さ0.17mを測る。長軸はN-85°-Eを指し、棺底の標高は16.94 mを測る。棺材は腐蝕のためシルト化していた。棺の構造は両小口板が「T」形を呈し、底板より0.2m深く掘り込むタイプである。人骨は確認できなかった。棺内から石鏃が1点出土した。

S T 40022 (図版82)

S X40014の南端に位置している。東西に主軸をもつ組合せ式木棺である。内寸は長さ0.51m、幅0.22m、深さ0.02mを測る。長軸はN-63°-Eを指し、棺底の標高は17.37mを測る。棺材は底板の一部のみ残存し、他は腐蝕のためシルト化している。棺の底に小口穴はない。人骨の痕跡は確認できなかった。

S X 40015 (図版45・69)

S X40014の南側に位置している。上部は平安から鎌倉時代の整地で削平を受けている。南東部の半分以上は区外のため調査していない。したがって南北6.2m以上、東西10.5m以上の方形を呈するものと思われる。北周溝底からの高さは1.0mを測る。周囲は東側を除いて周溝を共有し、北側はS X40014、南側はS X40021、西側はS X40017と接している。東側は自然流路S R40002との余剰帯が残ると思われる。S X40014との間の溝からは土器が出土している。埋葬施設はほぼ中央部に2基確認した。

S T 40015 (図版84)

墳丘のはば中央部に位置する。南北に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形は長さ1.08m、幅0.50m、深さ0.28mを測る。内法は長さ0.93m、幅0.45m、深さ0.28mを測る。長軸はN-19°-Wを指し、棺底は標高16.82mを測る。棺材は腐蝕が著しく、西側の側板の一部と、小口が内側に倒れ込んで残っている程度で他はシルト化している。棺の構造は底板に横板の小口をのせるタイプである。人骨の痕跡は確認できなかった。棺内には左右の胸の位置から、石鏃が2点出土している。

S T 40018 (図版84)

S T40015の北側に位置する。S T40015とは直交し、東西に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形は長さ1.52m、幅0.72m、深さ0.28mを測る。内法は長さ1.16m、幅0.47m、深さ0.28mを測る。長軸はN-80°-Eを指し、棺底の標高は16.74mを測る。棺材は腐蝕のためシルト化している。棺の底に小口穴はない。人骨は痕跡も確認できなかった。

S X 40016 (図版49)

S X40011の東側に位置している。北東部は区外に伸びている。南北3.3m以上、東西5.0mの方形を呈すると思われる。西周溝底からの高さは0.9mを測る。西側と南西側は溝を共有し、S X40011、S X40013と接している。埋葬施設はほぼ中央部から1基確認している。

S T 40016 (図版85)

墳丘のはば中央部に位置する。南北に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形は長さ1.6m以上、幅0.70m、深さ0.22mを測る。長軸はN-16.5°-Wを指し、棺底の標高は16.81mを測る。棺材は腐蝕が著しく、シルト化していた。棺の底に小口穴はない。人骨の痕跡は確認できなかった。

S X 40017 (図版66・72)

S X 40010の東側に位置している。北部分の一部を調査したのみで、多くは区外へと延びている。上部は古墳時代の溝や、平安から鎌倉時代の整地で削平を受けている。南北11.5m、東西9.0m程度の長方形を呈する。北周溝底からの高さは1.0mを測る。北側は周溝を共有し、S X 40010と接しており、東側は周溝を共有し、S X 40015と接している。なおS X 40010との間には、東側に幅約3mの陸橋部が存在する。埋葬施設は確認していない。

S X 40018 (図版62・63・77)

S X 40013の東側に3mの余剰帯を挟んで位置している。自然流路S R 40002に近いので、全体が洪水砂に覆われていた。南北8.4m、東西4.1mの長方形を呈する。南周溝底からの高さは0.6mを測る。北東側はS X 40039が間に溝を作らずに接している。南側と西側は余剰帯となっている。

埋葬施設は上層で2基、下層で2基の合計4基を確認した。なお西側の溝内にも埋葬施設を確認した。

S T 40008 (図版80)

S X 40018の墳丘上層のはほぼ中央部に位置する。墳丘の長軸とは直交し、東西に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形は長さ1.16m、幅0.58m、深さ0.20mを測る。内寸は長さ0.97m、幅0.40m、深さ0.20mを測る。長軸はN-88°-Eを指し、棺底の標高は16.61mを測る。棺材は腐蝕が著しいが、蓋棺側板、小口板、底板すべてがかろうじて残っていた。棺の構造は底板の上に縦板の小口板をのせるタイプである。人骨の痕跡は確認できなかったが、規模から考えて、小児棺であろう。

S T 40009 (図版80)

S T 40008と平行して南側に位置する。墳丘の主軸とは直交し、東面に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形は長さ0.60m、幅0.48m、深さ0.24mを測る。内寸は長さ0.45m、幅0.26m、深さ0.24mを測る。長軸はN-81°-Eを指し、棺底の標高は16.6mを測る。棺材は腐蝕が著しく、蓋板側板の一部、小口板の一部が残っていたにすぎない。棺の構造の詳細は明らかではない。人骨様の痕跡は認められたが、詳細は不明である。規模から考えて、小児棺であろう。

S T 40023 (図版88)

S X 40018の下層に位置し、上層の埋葬施設S T 40008の直下にある。墳丘の主軸とは直交し、東西に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形は長さ1.93m、幅0.87m、深さ0.32mを測る。棺の内法は長さ1.67m、幅0.52m、深さ0.25mを測る。土圧により押しつぶされているため復原すると深さ0.38mになる。主軸はN-56.5°-Eを指し、棺底は標高16.08mを測る。棺材は蓋板、側板、小口板、底板ともに1枚板を使用していた。材の残りは良好で、厚さ3～8cm残っている。棺内は蓋を開けた時、一部空洞が認められ、水が溜まっていた。それ以下はシルトが溜まっていた。

棺の構造は、底板に小口板を嵌め込む抉りを設け、嵌め込んでいる。側板は底板の上ののっており、小口板を嵌め込む溝を掘っている。小口板は横板を使っているため、土圧により折れている。なお、東側板の裏側の掘形内には棺材の木端を埋めている。

人骨は底板の上にはほぼ全身が残っている。頭部は東に位置し、頭蓋骨・下顎骨の全体が残っている。ただし後頭部は空洞のため、調査時に破損した。後頭部は上向き、下顎骨は歯槽が下を向いている。上顎右P3は咬頭なく、腔露出している。P4は磨耗やや弱い。体幹は椎骨と肋骨が残る。上肢は北側に左半部、南側に右半部が位置している。鎖骨・上腕骨・尺骨・橈骨が残る。左手は肘を完全に折り曲げ左肩近くに、右手は肘を約78°折り曲げ腹の下に位置している。下肢は北側に臼上を欠く左寛骨・左大腿

骨・左脛骨が残っており、南側に右寛骨・右大腿骨・右脛骨が残っていた。膝は左約 8° 、右約 15° に折り曲げられている。以上の骨の配置から、東枕で俯臥屈肢の姿勢で埋葬されていた。

身長は大腿骨の最大長が400mm未満であることから、150cm未満である。性別は眉間と眉上弓が弱く、乳様突起が小さく、下顎骨がきゃしゃであることから女性と考えられる。年齢は上右第1・第2小白歯の磨耗状況から壮年後半から熟年前半(35~45歳)である。

S T 40024 (図版89)

S X 40018の下層にあり、S T 40023の北側に併列して位置している。東西に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形は長さ1.80m、幅0.75m、深さ0.32mを測る。木棺の内寸は長さ1.72m、幅0.57m、深さ0.32mを測る。棺材は蓋板、側板、小口板がともに1枚板を使用していた。いずれも材の残りは良好であるにもかかわらず、底板が残存していないのは、当初から存在していなかったものと考えられる。北側からの土圧により、北側板が棺内に倒れ込み、蓋板も落ち込んでいた。また南側板、両小口ともにやや南側に傾いていた。棺底は逆に傾いており、人骨が北側板に付着していた。主軸は-N 58° -Eを指し、棺底は標高16.1mを測る。棺内はシルトが溜まっていた。棺の構造は底板がなく、両小口を棺底より深く埋め込むタイプである。北小口板は高さ0.68m、南小口板は高さ0.53mを測る。南小口は孔の加工がみられる。

人骨の遺存状況は良好とは言えないが、頭部は東に位置し、頭蓋骨・下顎骨の一部が残っている。上顎MIの磨耗は強い。顔面を上に向けており、顔面の一部を欠いている。体幹は椎骨と右肋骨の一部が残る。左肋骨は痕跡のみである。上肢は北側に右半部が位置しており、左半部は残っていない。鎖骨・肩甲骨・上腕骨・前腕骨の一部が残っている。右手は肘を約 90° 折り曲げている。下肢は残りが悪く、北側に右脛骨・右腓骨の一部が残っており、南側に左大腿骨・左脛骨・左腓骨の一部が残っていた。膝は折り曲げられている。以上、東枕の仰臥屈肢の姿勢で埋葬されていたものと考えられる。性別、年齢は、身長は不明である。遺物は、石鏃が1点出土し、腹部から植物種子が1点見つかった。

S X 40019 (図版44)

S X 40006の北側に位置している。北西側は区外へ延びている。上部は古墳時代の溝や、平安から鎌倉時代の整地で削平を受けている。南北4.4m以上、東西4.3m以上の方形を呈すると思われる。東周溝底からの高さは0.8mを測る。東側はS X 40020と、南側はS X 40006と周溝を共有し接している。埋葬施設は確認していない。

S X 40020 (図版46・67)

S X 40019の東側に位置している。古墳時代の溝や平安から鎌倉時代の整地で削平を受けている。南北5.4m、東西4.8mの方形を呈し、南周溝底からの高さは0.8mを測る。周囲はすべて周溝を共有し、東側はS X 40012と、南側はS X 40010と、西側はS X 40019と接している。埋葬施設は確認していない。

S X 40021 (図版53)

S X 40015の南側に位置している。南北6.8m、東西5.9m以上の方形を呈する。周囲はすべて周溝を共有していると考えられ、北側はS X 40015と、西側はS X 40015と接している。南東側は区外に延びている。S X 40022との間からは土器が出土し、そのうち264は体部下半に中礫が入れられた状態で直立していた。埋葬施設はほぼ中央部で、1基確認している。

S T 40025 (図版94)

墳丘のほぼ中央部に位置し、南北に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形の平面形は隅丸長方形で、

長軸1.72m、短軸0.93m、深さは0.36mを測る。内法は1.11m×0.42mを測る。長軸はN-24°-Wを指し、棺底の標高は16.67mを測る。棺材は腐蝕が著しく、両側の側板の中心部分が僅かに残り、両小口はシルト化した痕跡として残っており、棺底より深く掘り込まれていた。底板の有無は確認できなかった。人骨は遺存していなかったが、頭部の痕跡と思われる土の変色が棺底の北端に残っていた。また棺底の中央部やや北からも人骨痕跡と思われる土の変色を認めた。

遺物は棺底の頭部の痕跡と考えられるやや南側から碧玉の管玉7点が出土した。3点は調査時に位置を確認したが、残り4点は水洗選別により確認した。

S X 40022 (図版54・71)

S X 40021の西側に位置している。南北12.3m、東西9.5mの南北に長い長方形を呈する。周囲はすべて周溝を共有していると考えられ、北側はS X 40017と、東側はS X 40021と、南側はS X 40027・S X 40028と接している。南東側と北西側の一部は区外に延びている。

埋葬施設はほぼ中央部から1基確認している。

S T 40032 (図版94)

墳丘のほぼ中央部に位置し、南北に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形の平面形は長方形で、長軸1.60m、短軸0.75m、深さは0.26mを測る。内法は1.42m×0.56mを測る。長軸はN-19.5°-Eを指し、棺底の標高は16.75mを測る。棺材は腐蝕が著しく、かろうじて東側板の一部が残っていた。棺底には小口穴は存在しなかったことから、底板に小口板がのるタイプであると考えられる。人骨は遺存していなかった。

S X 40023 (図版55・73)

S X 40024の東側に位置している。南北10.4m以上、東西6.5mの南北に長い長方形を呈する。東側は自然流路S R 40002が流れており、一部浸食を受けている。西側は溝を共有してS X 40024と接している。南側と北側の一部は区外に延びている。埋葬施設はほぼ中央部から1基確認している。

S T 40028 (図版91)

墳丘のほぼ中央部に位置し、南北に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形の平面形は長方形で、長軸1.62m、短軸0.95m、深さは0.27mを測る。内法は1.17m×0.58mを測る。長軸はN-10°-Wを指し、棺底の標高は16.54mを測る。棺材は腐蝕が著しく、全く残存していなかった。棺底には小口穴の痕跡は確認できなかった。人骨は遺存していなかった。

S X 40024 (図版56・72・73・74)

S X 40023の西側に位置している。南北7.2m、東西11.0mの南北に長い長方形を呈する。南側半分は一部しか調査していないが、周囲はすべて周溝を共有していると考えられる。北側はS X 40027、東側はS X 40023、南側はS X 40030、西側はS X 40025と接している。

S T 40029 (図版91)

S墳丘のやや北よりに位置し、東西に主軸をもつ組合せ式木棺である。南側は区外のため、全体を調査していない。掘形の平面形は隅丸長方形で、長軸2.07m、短軸0.85m以上、深さは0.37mを測る。内法は1.49m×0.62m以上を測る。長軸はN-82°-Wを指し、棺底の標高は16.62mを測る。棺材は腐蝕が著しく、全く遺存していなかった。棺底には小口穴の痕跡は確認できなかった。人骨は遺存していなかった。棺内から炭化米95粒と植物種子が出土した。

S X 40025 (図版57)

自然流路 S R 40001 の東側、S X 40024 の西側に位置している。南北 6.7m、東西 7.5m の不整形な方形を呈する。南周溝底からの高さは 0.9m を測る。周囲はすべて周溝を共有していると考えられ、北側は S X 40028、東側は S X 40024、南側は S X 40031 と接し、西側は S R 40001 の余剰帯である。埋葬施設は確認していない。

S X 40026 (図版 58・77)

自然流路 S R 40001 の西側、水路 S D 40004 の東側の低い微高地上に位置しており、全体が洪水砂で覆われていた。洪水砂を除けていくと直立した板材を検出した。この板材は墳丘内に埋もれていた部分に比べ、地上に表れていた部分の劣化は上部にいくほど著しいため、埋葬時に建てられた墓標であると考えられる。墓標は高さ 0.6m、幅 0.5m、厚さ 0.06m のコウヤマキの板材で、地表に 3.8m 出ていた。盛土を掘削すると北側から埋葬施設が直行して検出できた。

南北 6.7m、東西 4.8m の南北に長い方形を呈する。南周溝底からの高さは 0.5m を測る。周溝の幅は北側で 1.7m、南側で 2.0m、西側で 0.8m を測る。南北に周溝墓が存在しているかは不明である。埋葬施設は中央部に 1 基確認している。

S T 40030 (図版 92・93)

墳丘のはほぼ中央部に位置し、東西に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形の平面形は隅丸長方形で、長軸 2.08m、短軸 0.98m、深さは 0.69m を測る。棺の内法は 1.02m × 0.26m × 0.35m を測る。長軸は N-72°-E を指し、棺底の標高は 16.03m を測る。棺材は蓋板、側板、小口板、底板ともに 1 枚板を使用していた。材の残りは非常に良好で、厚さ 4~10cm 残っている。棺内は蓋を開けた時、一部空洞が認められ水が溜まっていた。それ以下はシルトが溜まっていた。棺の構造は、底板に小口板を嵌め込む抉りを設け、嵌め込んでいる。側板は底板の上ののってあり、小口板を嵌め込む溝を掘っている。小口板は横板を使っている。人骨は底板の上に頭、腕、脊椎などと考えられる痕跡が付着していた。このことから東頭位であることがわかる。頭部には赤色顔料が明瞭に存在している。頭部の位置を考えると埋葬後、水などの自然現象で僅かにずれている可能性が考えられる。性別、年齢、身長などは不明である。

S X 40027 (図版 53・71・72)

S X 40022 の南側に位置している。東側は区外へ延びている。南北 4.4m、東西 4.6m 以上の東西に長い長方形を呈する。南周溝底からの高さは 0.9m を測る。周囲は周溝を共有していると考えられ、北側は S X 40022、南側は S X 40024、西側は S X 40028 と接している。

埋葬施設はやや西よりに 1 基確認している。

S T 40027 (図版 90)

墳丘のやや西よりに位置し、南北に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形の平面形は長方形で、長軸 1.7m、短軸 0.84m、深さは 0.34m を測る。内法は 1.34m × 0.61m を測る。長軸は N-3°-W を指し、棺底の標高は 16.42m を測る。棺材は部分的に腐蝕が著しく、蓋板と底板が残存していた。蓋板は土圧により南側が下がっていた。底板の端部は腐食しているものの、小口穴が開けられており、また、掘形底にも小口穴の痕跡があることから T 形の小口板を底板に嵌め込むタイプが想定できる。人骨は痕跡も含めて遺存していなかった。

S X 40028 (図版 58・71)

S X 40027 の西側に位置している。南北 4.2m、東西 6.2m の東西に長い長方形を呈する。南周溝底からの高さは 1.1m を測る。周囲は周溝を共有していると考えられ、北側は S X 40022、南側は S X 40025、

東側はS X 40027と接し、西側はS R 40001の余剰帯である。古墳時代の溝による影響で削平が著しいため埋葬施設は確認していない。

S X 40030 (図版60・74)

S X 40024の南側に位置している。東側の大部分は区外である。南北8.1m、東西2.1m以上の方形を呈し、西周溝底からの高さは1.0mを測る。確認し得た北・南・西側は周溝を共有し、S X 40024・S X 40033・S X 40034と接している。墳丘部分だけの調査のため、埋葬施設は確認していない。

S X 40031 (図版59・75)

S X 40025の南側に位置している。東側の大部分は区外へ延びている。南北14.1m、東西3.4m以上の長方形を呈するものと思われる。南周溝底からの高さは1.1mを測る。西側は自然流路S R 40001が流れている。北側は周溝を共有しS X 40025が、南側は周溝を共有しS X 40032が接している。

埋葬施設は南よりの側溝部分で、木棺S T 40042の所在を確認しただけである。

S X 40032 (図版60・75)

S X 40031の南側に位置している。東側は区外へ延びている。南北5.8m、東西3.4m以上の方形を呈し、北周溝底からの高さは1.1mを測る。西側は自然流路S R 40001が流れている。北側は周溝を共有しS X 40031が、南側は周溝を共有しS X 40035が接している。埋葬施設は確認していない。

S X 40033 (図版60・74)

S X 40030の南側に位置している。東側の大部分は区外へ延びている。南北49.5m、東西2.2m以上の方形を呈するものと思われる。北周溝底からの高さは1.2mを測る。北側は周溝を共有し、S X 40030と接する。埋葬施設は確認していない。下層には弥生時代中期の竪穴住居が存在している。

S X 40034 (図版34)

S X 40034はS X 40030の西側に位置している。西側の大部分は区外へ延びている。南北4.0m以上、東西1.5m以上を測る。東側はS X 40030と溝を共有し、接している。埋葬施設は確認していない。

S X 40035 (図版60・75)

S X 40032の南側に位置している。東・南側は区外へ延びている。南北10m以上、東西6.8m以上の方形を呈する。西側は自然流路S R 40001が流れている。北側はS X 40032と溝を共有し接している。埋葬施設は確認していない。

S X 40036 (図版76)

S X 40044の北側に位置しており、北側は区外へ延びている。南北1.0m、東西3.0m以上の方形を呈する。南周溝底からの高さは0.3mを測る。南側はS X 40011と溝を共有し接している。埋葬施設は確認していない。

S X 40037 (図版61)

S X 40011の北側に位置している。一部古墳時代の溝により影響を受けている。南北10.5m、東西10.1m以上の方形を呈する。東周溝底からの高さは1.1mを測る。東側はS X 40041と溝を共有し、南側はS X 40011と溝を共有し接している。北側は幅3.3mの溝により区画されているが、周溝墓は続かない。埋葬施設は確認していない。

S X 40038 (図版62・63・76)

S X 40018の北東に位置し、洪水砂に覆われていた。南北4.9m、東西4.1mの方形を呈する。西周溝底からの高さは0.6mを測る。東側は余剰帯が残り、自然流路S R 40002へ続く。北側はS X 40036、南側

はS X40039、西側はS X40040が位置し、溝を共有している。埋葬施設は2基確認し、中央部に1基、北よりに1基確認している。

S T40044 (図版97)

S X40038のほぼ中央に位置する。東西に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形は長さ1.82m、幅0.72m、深さ0.41mを測る。内法は1.29m×0.42m×0.32mを測る。主軸はN-87°-Eを指し、棺底は標高16.08mを測る。棺材は蓋板、北側板、両小口板、底板は1枚板を使用しているが、南側板はやや短めの板を2枚横に重ねるように設置している。棺内はシルトが溜まっていた。棺の構造は、底板に両側板がのるが、両小口は深く埋め込むタイプである。なお、両小口はやや東側に傾いている。小口板の高さは東側で0.8m、西側で0.55mを測る。

人骨はほぼ全身が底板の上に残っていた。頭部は東に位置し、頭蓋骨・下顎骨が残っているが、前頭部は欠けている。体幹は椎骨と肋骨が残る。上肢は南側に左半部、北側に右半部が位置している。左右の上腕骨・尺骨・橈骨が残っている。肘は右が完全に折り曲げられており、右手は右肩に置かれている。下肢は左右の寛骨・大腿骨・脛骨・腓骨・左足骨が残っている。膝は左が約84°に、右が約106°に折り曲げられており、膝を立てて埋葬している。つまり東枕の仰臥屈肢の姿勢で埋葬されていた。年齢は成人。性別、身長は不明である。

S T40046 (図版99)

S T40044の北側に位置している。S T40044と同様に東西方向に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形は長さ0.79m、幅0.42m、深さ0.1mを測る。内法は長さ0.64m、幅0.28m、深さ0.15mを測る。主軸はN-82.5°-Wを指し、棺底は標高16.3mを測る。棺材は蓋板、側板、小口板、底板ともに1枚板を使用していた。棺の残りは良好である。棺内はシルトが溜まっていた。棺の構造は底板に小口板を置く溝を設け、その中央部に孔をあけている。側板には小口板を嵌め込む溝を設け、底板の上ののっている。小口板は「T」状を呈し、底板の孔に嵌め込んでいる。人骨は遺存していなかったが、底板に痕跡が残っている。東側の痕跡は頭部、西側の痕跡は寛骨周辺かと思われる。木棺の大きさから、幼児棺であると考えられる。

S X40039 (図版62・63・76)

S X40018の南側に位置し、洪水砂に覆われていた。南北4.3m、東西3.8mのほぼ正方形を呈している。東側・南側は余剰帯が残り、北側はS X40038と溝を一部共有して接し、西側は溝で区画せずに接する様に存在する。南溝の西端の底からはクスノキの板材(50×65cm)が直径20cm大の礫をのせて置かれていた。この板材はS T40045の小口に使用した残りの材であると考えられる。

埋葬施設はやや北西よりに1基確認している。

S T40045 (図版98)

S X40039のやや西よりに位置している。南北に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形は長さ2.0m、幅0.96m、深さ0.51mを測る。内寸は長さ1.32m、幅0.45m、深さ0.51mを測る。主軸はN-7.5°-Wを指し、棺底は標高15.83mを測る。棺材は蓋板、側板、小口板、底板ともに1枚板を使用していた。しかし、東側板はカヤの材であり、扉等の転用材を使用したとみえて脆く、腐蝕し、全体に東側に傾いている。棺内にはシルトが溜まっていた。棺の構造は底板に小口板を嵌め込む抉りを設け、側板にも小口を嵌め込むための溝を設けている。側板の溝は真っ直ぐではなく、上部へいくほど内湾している。また、これに合うように小口板もクスノキの材を使い、内湾させている。両側板も底板の上ののっている。

人骨は底板の上にはほぼ全身が残っていた。頭部は北に位置し、頭蓋骨・下顎骨が良く残っている。体幹は椎骨・仙骨・肋骨が残る。上肢は西側に左半部、東側に右半部が位置している。鎖骨・肩甲骨・上腕骨・尺骨・橈骨が残っている。肘は左が折り曲げた状態、右が伸ばした状態で、左手は左胸に、右手は右腰に置かれている。下肢は西側に左寛骨・左大腿骨・左腓骨・左脛骨が残っており、東側に右寛骨・右大腿骨・右腓骨・右脛骨が残っていた。膝は左が約 16° に、右が約 13° に折り曲げられている。つまり北枕で俯臥屈肢の姿勢で埋葬されていた。

年齢は成人。性別は男性。身長は大腿骨最大長が420mmあることから約160cmである。

S X 40040 (図版62・63)

S X 40038の西側に位置している。墳丘の大部分は区外にあるため、埋葬施設は確認していない。

S X 40041 (図版61)

S X 40037の東側に位置している。墳丘の大部分は区外にある。南北3m以上、東西0.8m以上の方形を呈する。埋葬施設は確認していない。

2. 溝内の埋葬施設

方形周溝墓の墳丘内に位置しない溝内の埋葬施設をここで扱うことにする。溝内の埋葬施設は溝の方向に埋葬施設が平行するものと、直交するもの、また周溝墓の溝の交点付近にあるもの等に大別される。

(1) 溝に平行するもの

S T 40004 (図版87)

S X 40002とS X 40010の間に位置する。周溝が約0.4mのシルトが堆積した後、木棺が築かれている。木棺の上には約0.5mの盛土の存在が確認できた。溝の方向と同様に南北に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形は長さ1.52m、幅0.60m、深さ0.52mを測る。棺の内法は長さ1.15m、幅0.40m、深さ0.52mを測る。主軸はN- 10° -Wを指し、棺底は標高16.35mを測る。棺材は腐蝕が著しいため、蓋板、両側板しか残っていなかった。底板は存在していなかった可能性が高い。他はシルト化していた。蓋板はかろうじて板とわかる程度の残り、棺内の空洞と土圧のため、棺内に捻んでいた。東側板は2枚の材を、上下に組合わせている。棺内から炭化米が1粒出土した。

頭部は北に位置し、頭蓋骨・下顎骨が残っているが、体幹は残っていない。上肢は西側に左半部、東側に右半部が位置している。上腕骨・尺骨・橈骨が残っている。肘は左が折り曲げた状態、右が約 100° に折り曲げられており、左手は左肩に、右手は右腰に置かれている。下肢は寛骨の痕跡が僅かに残り、左右の大腿骨・左脛骨が残っていた。膝は左が約 38° に折り曲げられている。つまり北枕で俯臥屈肢の姿勢で埋葬されていた。

遺体の腹部から長さ4.8cm、幅2.1cm、厚さ0.6cmの青銅武器の鋒が出土した。青銅器に付着した脂肪酸分析の結果、腹部に刺さったものの内蔵には達せず折れて、体内に残っていたことが確認された。また血液型はB型であることが判明した。年齢は30歳代で、性別、身長は不明である。

S T 40005 (図版83)

S X 40014とS X 40015との間の周溝内の東よりに位置する。掘形は長さ1.70m、幅0.60m、深さ0.35mを測る。内法は長さ1.34m、幅0.36m、深さ0.23mを測る。長軸はN- 85° -Eを指し、棺底の標高は16.3mを測る。棺内から炭化米が1粒出土した。

人骨はほぼ全体が復原できる程度状況である。頭部は東に位置し、頭蓋骨・下顎骨がかろうじて残っている。下顎は歯が良く残っており、右第3大臼歯があり、左は第2小臼歯が歯槽開放である。体幹

は椎骨と右肋骨の一部が残る。上肢は南側に左半部が位置している。鎖骨・上腕骨・尺骨・橈骨が残っている。肘関節は折り曲げられており、左手は左肩に置かれていると考えられる。下肢は左右の大腿骨と脛骨の片方が残っており、膝関節は折り曲げられており立て膝である。埋葬姿勢は東枕の仰臥屈葬である。

年齢は右下大臼歯の磨耗が強く40歳前後の成人である。性別は女性である。身長は不明である。

S T 40033 (図版95)

S X 40018の西側の周溝内に位置する木蓋土壌である。当初、埋葬施設として調査を進めなかったため、墓の埋め方などの上層観察ができなかった。埋葬施設は墓壙を掘り、蓋をしたいわゆる木蓋土壌墓である。掘形は1.84×1.13mの南北に長い楕円形で、その中を1.00m×0.54m程度掘り下げている。深さは0.3mある。長軸はN-5°-Eを指し、棺底の標高は16.02mを測る。掘形内の北端に頭部小口板を埋め込んでいた。蓋板は他の板の残存状況と比較すると良くないため、厚く、大きな板は使用しなかったと思われる。蓋板の状況は上からの土圧により、小口板や人骨などで折れていた。人骨周囲の底面を精査中に植物の腐み物を確認した。したがって、遺骸は腐み物にくるまれたか、腐み物を敷いた状態で蓋を架けられて埋葬されたと考えられる。

人骨はほぼ全身が残っていた。頭部は北に位置し、頭蓋骨・下顎骨が残っている。体幹は中位胸椎を欠くが腰椎・仙骨と肋骨が残る。上肢は東側に左半部、西側に右半部が位置している。左右の上腕骨・尺骨・橈骨が残っている。肘は左が約21°に、右が約54°に折り曲げられており、左手は左肩に、右手は右腹部に置かれている。下肢は左右の寛骨・大腿骨・脛骨・腓骨・左足骨が残っている。膝蓋骨が右大腿骨と足骨の間にある。膝は左が約28°に、右が約15°に折り曲げられており、膝を立てて埋葬している。性別、年齢は不明である。身長は大腿骨最大長460mm、上腕骨最大長300mmであることから男性であれば約168cm、女性であれば約164cmである。北枕で仰臥屈肢の姿勢で埋葬されていた。

S T 40047

S X 40040とS X 40018北側の余刺帯との間の周溝内に位置する組合せ式木棺である。木棺の大部分は区外にあるため、詳細な規模や構造などは不明である。僅かに南側側板と蓋板を確認したが、土圧による傾斜や弯曲が見られる。

(2) 溝に直行するもの

S T 40040 (図版96)

S X 40032とS X 40034の間の周溝内に位置する木蓋土壌である。掘形は1.20m×0.45mの東西に長い楕円形である。深さは0.16mある。長軸はN-72°-Eを指し、棺底の標高は16.13mを測る。掘形内の東端に頭部小口板を埋め込んでいた。蓋板は検出できなかった。

人骨はかろうじて痕跡をとどめていた。頭部は東に位置し、頭蓋骨・下顎骨がかろうじて残っている。体幹は椎骨は残存せず、肋骨が僅かに残る。上肢は南側に左半部、北側に右半部が位置している。鎖骨・上腕骨・尺骨・橈骨が残っている。肘は左が約54°に、右が約23°に折り曲げられており、左手は胸に、右手は右肩に置かれている。下肢は南側に寛骨・左大腿骨・左腓骨・左脛骨が残っており、北側に右寛骨・右大腿骨・右腓骨・右脛骨が残っていた。膝は左が完全に、右が約16°に折り曲げられている。埋葬姿勢は東枕の仰臥屈葬である。年齢は成人。性別・身長は不明である。

S T 40043 (図版96)

S X 40037とS X 40041の間の周溝内に位置する木蓋土壌である。S T 40043は周溝が約0.4mのシルト

が堆積した後、築かれている。蓋板の上には約0.5mの盛土の存在が確認できた。盛土の上には直立した状態で穿孔された脚付細頸壺が出土した。掘形は1.06m×0.56mの東西に長い楕円形である。深さは0.13mある。長軸はN-73°-Eを指し、棺底の標高は16.31mを測る。掘形内の東端に枕様の有機質の物質が存在した。墓壇の両脇には根太を置き、蓋板をのせている。根太は北側が長さ1.54m、南側が1.50mの断面一辺5cm程度の角材である。人骨周囲の底面を精査中に植物の編み物を確認した。したがって、遺骸は編み物にくるまれたか、編み物を敷いた状態で蓋を架けられて埋葬されたと考えられる。

人骨の遺存状況は良好とは言えない。掘形東端の枕様の物質の上に頭蓋後頭部を上に向け、体幹は墓壇ほぼ中央部に後面を上にした脊椎骨が残る他は残存していない。上肢は北側に左上腕骨、左橈骨・尺骨が残り、腕は約29°に折り曲げ、手は胸の下に位置する。下肢は西端に位置し、南側に右大腿骨、北側に左大腿骨があり、両足骨体が西端にある。埋葬姿勢は頭部を東に置く俯臥屈葬である。

年齢は10歳前後の小児の可能性がある。性別は不明である。身長は大腿骨最大長380mm以下であることから、男性であれば148cm以下、女性であれば146cm以下である。

(3) 溝の交点

S T 40011 (図版81)

S X 40003・S X 40004・S X 40009の交点の周溝内に位置し、南北に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形の平面形は長方形で、長軸1.53m、短軸0.61m以上、深さは0.30mを測る。棺の内法は長さ1.43m、幅0.53m、深さ0.50mを測る。長軸はN-32°-Eを指し、棺底の標高は16.52mを測る。棺材は腐蝕が著しく、僅かに蓋板の一部板材が残っていた。蓋板は弯曲して木棺内に落ち込んでいた。北小口板もシルト化して痕跡をとどめていた。棺底には小口穴は確認できなかった。人骨は遺存していなかった。

S T 40031 (図版90)

S X 40022・S X 40028とS R 40001の西側の余刺帯の中間に位置し、南北に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形の平面形は長方形で、長軸1.30m、短軸0.40m以上、深さは0.08mを測る。長軸はN-21°-Eを指し、棺底の標高は16.57mを測る。棺材は腐蝕が著しく、僅かに底板の一部と北小口板の一部と考えられる板材が残っていた。底板の北側部分に小口板を嵌め込む袂りと考えられる段が存在している。棺の構造は、底板に横板の小口板を嵌め込むタイプと考えられる。人骨は遺存していなかった。

S T 40026 (図版77)

S X 40002・S X 40003・S X 40009の間に位置し、南北に主軸をもつ土壙墓である。壙墓の平面形は楕円形で、北西側が幅が広い。長軸2.50m、短軸1.10m、深さは最大0.50mを測る。長軸はN-35°-Wを指し、棺底の標高は16.5mを測る。人骨は遺存していなかった。

遺物は完形の壺、口縁部を欠いた壺、縦半分程度の壺が墓壇内に落ち込んだ状態で出土している。

S T 40017 (図版83)

S X 40012・S X 40020間の周溝内の北端に位置し、南北に主軸をもつ組合せ式木棺である。掘形の平面形は長方形で、長軸1.5m、短軸0.9m、深さは0.30mを測る。棺の内法は長さ1.3m、幅0.6m、深さ0.28mを測る。長軸はN-20°-Eを指し、棺底の標高は16.72mを測る。棺材は腐蝕が著しく、底板の一部板材が残っていたのみである。底には小口穴は確認できなかった。人骨は遺存していなかった。棺内から石鏃1点が出土した。

第4章 弥生時代後期から古墳時代前期

第1節 概要 (図版100)

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての概要はS R 50001とS R 50002の2条の自然河道と竪穴住居、土坑、水田などの遺構が判明している。弥生時代後期の竪穴住居は、弥生時代中期後半に起こった大洪水でもたらされた砂礫層の堆積により微高地化した黒岡地区の微高地上に形成されている。

水田は弥生時代中期の洪水砂礫の堆積が少なかったS R 40003とS R 40004とS D 40003とのほぼ中間の徳政3・11・14区を中心に広がっている。ただし、これ以外のS R 50001以西は古墳時代以降の開田などによる削平により高い部分は遺構が確認できなかったが、二ノ郷・徳政地区は水田地域だったと考えられる。

第2節 河道

S R 50001

黒岡5区の東部から黒岡4区、C 6区、黒岡3区、二ノ郷11・14・1区、徳政2・4・7・1・6区を北から南へ流れている。黒岡地区では竪穴住居などの遺構が近接していたため遺物が多く出土した。二ノ郷、徳政地区の流れは下層である弥生時代中期上層面のS D 40004とS D 40003が洪水により土砂の堆積が進み、流路となったものである。場所によって幅、深さは異なるが、黒岡4区では幅11m前後、深さ1.3mを測る。遺物はC 6区～黒岡3区にかけて集中的に出土しており、弥生時代後期の壺・甕・鉢・高坏・器台・ミニチュア土器などが出土している。

S R 50002

黒岡5区と黒岡4区の間で、S R 50001から東側に分流して、黒岡1区の北端、下町2・4区、下町10区、二ノ郷3区を通り、竹添地区に流れている。二ノ郷・徳政・竹添地区の流れは下層である弥生時代中期上層面のS R 40002が洪水により土砂の堆積が進み、流路となったものである。場所によって幅や深さは異なるが、下町10区では幅8m、深さ1.7mを測る。遺物は弥生時代後期の壺・甕・鉢・高坏・器台・ミニチュア土器などが出土している。

第3節 溝

S D 50001～S D 50003

黒岡1区南端から二ノ郷15区にかけて、並行あるいは一部交差して流れている。二ノ郷5区より南は削平されており、検出できなかった。幅0.8～1.4m前後、深さ0.3m前後である。

S D 50004

二ノ郷16区の北端に位置し、S R 50002の西側を並行して流れている。幅0.5m、深さ0.2mである。

S D 50005 (図版101)

下町10区から二ノ郷3区にかけて、S R 50002の東側に位置し、並行して流れている。幅1.0m、深さ0.2mである。二ノ郷3区ではS R 50002の東端に打ち込まれた2列の杭列がS D 50005とS R 50002の間を強固にする役割を果たすものと考えられる。

第4節 水田 (図版100)

水田は徳政3・11・12区で検出した。水田域範囲は明瞭に区別されるものではなく、上層の影響により

水田面が失われている状態である。したがって洪水砂に覆われた低い部分しか調査し得なかった。水田は小畦畔によって区画されており、不定形である。小畦畔は幅0.3m前後、高さ最大0.2m前後の蒲葺状を呈している。一区画の面積が判明するものはないが、同一場所の弥生時代中期のとはほぼ同じ面積である。水田は16区画確認できたが、徳政3区の東端は一部、畦畔を造り替えた痕跡がある。

第5節 竪穴住居

S H50001 (図版102・103)

黒岡3区のSR50001の西側の微高地上に位置する弥生時代後期中葉の竪穴住居である。平面形はやや角をもった円形であり、内側には五角形のベッド状遺構（以下ベッドと略）がある。中央には上手で囲まれた中央土坑があり、また住居の周囲には周壁溝が巡る。柱は五角形の各頂点に位置し、掘形はベッドまで及ぶ長楕円形のものである。底には自然木を敷きつめ、礎板としている。

各部分の寸法は、直径が7.6m、ベッドの内側の直径が5.2m、中央土坑の土手の直径が最大2.0m、幅0.3m、高さ0.1m、中央土坑の直径が0.6m、深さ0.3m、周壁溝の幅0.3m、深さ0.2m、柱穴の直径が長軸0.6m、短軸0.3m、深さ0.5mである。全体の面積は45.3㎡、ベッドの内側の面積は18.3㎡ある。

この住居は火災によって焼失した焼失住居であり、炭化した建築材が良好な状態で出土している。ベッドの上には屋根の部材と思われる太さ10cmほどの炭化材が放射状に検出された。また、周壁溝の中には藁が束ねて立てられていた状態が検出された。ベッドの内側は床面直上に建築材などの炭化した炭が10cmほど積もり、その中には屋根を葺いていた繊維の束も認められた。この炭層の上に焼土がさらに10cmほどの厚さで堆積している。この土は屋根あるいは壁に用いられていた土であると推測できる。

さらに、焼失しているため、使用当時のままに近い状態で遺物が出土しており、内部の空間の利用状況も知ることができた。まず中央土坑であるが、土手の内側に1～2cmほどの細かい炭が堆積しており、中央土坑からかき出されたものと推測できる。また土坑の中には粗製の大型鉢が落ち込んでおり、この土器が煮沸に用いられていたことが伺える。遺物は土器の他に、土玉・砥石・投石が出土した。

土器は41個体以上出土しているが、出土位置からA～Eの5群にグループ分けできる。それぞれの特徴を簡単にまとめると、A群は高杯の占める割合が高く、B群は器台が多く、C群は鉢・甕が多く、D群は壺が多く、E群は鉢が多い。また、小型の鉢は各群に含まれている。これは住居の中が、供膳、貯蔵、祭祀などの用途にしたがって使い分けられていたことの反映である可能性が高いといえる。

S H50002 (図版103)

SR50001東側の微高地上の弥生時代後期の住居である。中期の洪水砂の上に作られており、約1/3が区内にかかる。円形の竪穴式住居であるが、残りは悪く立ちあがりほとんどない。直径は推定8mであり、一部周壁溝が二重になっており、一度、建て替えがおこなわれたものと推定できる。この住居も火災で焼失しており、炭化材が床面上で検出された。出土土器は壺底部が1点のみである。

第6節 土坑

S K50001 (図版107)

二ノ郷1区古墳時代後期の水路SD60002とSD60003の間に位置している。平面形は東西1.2m、南北0.6mの不正円形である。深さは最大0.12mで比較的浅い。土坑全体に割れた土器が広がっていた。

出土した土器は弥生時代後期の壺・甕である。

第5章 古墳時代後期

第1節 概要 (図版104・105)

古墳時代後期の概要は、鎌倉時代の整地層あるいは古代における条里型地割りの施工時に削平されているため余り良好とはいえない。そのため遺構を検出し、調査した部分は一部である。そのような状況の中で概要を述べると、北から南に傾斜する地形の中で、用水路S D60001～60004は北から南にはほぼ一直線に比較的地形の高い部分を流れている。また用水路、排水路を兼ねた水路S D60005は地形の低い部分を北から屈曲しながら南へ流れている。そして、この水路の周辺からは水田が検出された。これらの水田は洪水砂に覆われている。この洪水砂は水路S D60005の上流から溢れた流路S R60001によってもたらされている。この流路S R60001は水路S D60005の周辺をほぼ直線的に流れており、礫を含む堆積物で埋まっている。

地形的に高い部分は先に述べたとおり、削平により用水路S D60001～60004の底などしか検出できなかったが、地形的に高い部分に位置する水路や水田土壌の存在、マンガンの蓄積を考慮に入れ、水田が営まれていたのではないかと考えられる。

したがって、第1分冊部分の古墳時代後期の景観は地形的に高い部分に築かれた用水路と、低い部分に築かれた排水路を設置した水田地帯であることが想定できる。なお、居住域は検出していない。

第2節 河道

S R 60001

古墳時代後期の水田が埋没した時の洪水による自然流路であると考えられる。第1分冊部分では確認しえなかったが、おそらく水路S D60005から派生したものと考えられる。規模は調査地点によって異なるが、下町10区では幅3.5m、深さ0.7mを測る。埋上は小礫を中心に堆積している。

第3節 溝 (図版107)

S D 60001～60004

水路S D60001～60004は群をなし、黒岡9・4・3区、二ノ郷6・1・5・2・4・9区、徳政8・7区、竹添4区を北から南に向かって、ほぼ一直線に走っている。地形的に高所に築かれているため、おそらく後世の削平により、溝の底部分しか残っていないのではないかと考えられる。また、何回かの掘り返しを行っているため重複部分も見受けられる。また区間が離れているため、確実な溝の繋がりが捉えられない部分もある。したがって、ここではまとめて報告することにする。

幅は2m前後、深さは0.5m前後を測る。溝内の最下層は鉄分が沈着し小礫が堆積しており水が流れたことを示している。

遺物は古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の土師器・須恵器が出土している。

S D 60005

黒岡・下町地区の低い部分を流れる水路である。黒岡5・4・1区、下町10区、二ノ郷3区を北から南に流れている。洪水によるS R60001の影響をうけて流失している部分(下町10区など)もあるが、2分冊の下町2・4区部分では両側に大畦畔を伴っている。二ノ郷3区では、幅2.0m、深さ1.0mを測

る。また木材で護岸工事をしており、直径6cmの杭が約0.3~0.8m間隔で打ち込まれている。

遺物は黒岡1区で馬鞆の台が出土している。

第4節 水田 (図版104・105)

古墳時代後期の水田は徳政地区と黒岡地区の大きく分けて2つの地区で調査した。小畦畔で区画された水田は2地区合わせて59区画確認した。

徳政地区

徳政13・14区の中央部分で、洪水砂に覆われていた水田を検出した。水田はさらに周囲に延びているものと考えられるが、周囲は上層の影響や削平で畦畔が検出できなくなっており調査できなかった。水田面は小畦畔によって区画されており、不定形なものが多い。小畦畔は幅0.3mを測る。水田は27区画確認している。

黒岡・下町地区

黒岡6・5・4・3・1区、下町3・10区のS D60005の周辺の低い部分で検出した。水田はS R60001の洪水砂に覆われていた。水田はさらに周囲に延びているものと考えられる。周囲は上層の影響や削平で畦畔が検出できなくなっており調査できなかった。またS R60001の洪水の影響をうけて流失している部分もある。小畦畔で区画された水田は32区画検出しており、いずれも不定形である。一部水口が存在した。小畦畔は幅0.3m前後を測る。

第5節 その他

SW60001

徳政12区の西端に位置する溜まり状の落ち込みである。

遺物は古墳時代の上器の他に、頭部を作り出した棒状の木製品が出土している。

第6章 平安時代から鎌倉時代

第1節 概要 (図版109)

平安時代から鎌倉時代にかけての遺構は徳政・二ノ郷地区の全域に濃密に広がり、黒岡地区では溝や土坑がわずかにみられる程度である。明石川は、ほぼ現在と同じ場所を流れていたと考えられる。

徳政・二ノ郷地区で検出した遺構は、条里の坪境溝と坪内を分割する溝で整然と宅地が区画されている。このため、便宜的に条里の各坪をA～Fのアルファベットで呼称し、説明する。宅地内には掘立柱建物や井戸や土坑が存在している。

条里施工以前の遺構として、条里方向に斜行し、ほぼ正南北方向をとる溝や掘立柱建物が存在する。重複関係は、いずれも条里方向の遺構に切られている。

第2節 条里施工以前他

条里施工以前の遺構として、条里方向に斜行し、ほぼ正南北方向をとる溝（S D80039～S D80044）や掘立柱建物（S B80025・S B80032）が考えられる。重複関係は、いずれも条里方向の遺構に切られている。

S D80038

S Y 3・徳政3・11・12区に位置し、北から南西方向に弧を描く溝である。幅は検出面で0.7m、深さ0.2mを測る。遺物は須恵器小皿が出土している。

S D80039

二ノ郷13・KM4・二ノ郷11・徳政5・2区に位置し、ほぼ一直線に走る正南北溝である。南北溝S D80017やS B80015～17に切られている。方向はN-3°-Wにとる。幅は検出面で0.4m、深さ0.2mを測る。遺物は須恵器杯が出土している。

S D80040

二ノ郷13・KM4・二ノ郷11・徳政5・2区に位置し、ほぼ一直線に走る正南北溝でS D80039の東側に平行している。S D80028やS B80016・80017に切られている。幅は検出面で1.2m、深さ0.1mを測る。

S D80041

二ノ郷13・KM4・二ノ郷11・徳政5区に位置し、ほぼ一直線に走る正南北溝でS D80040の東側に平行している。S D80028やS B80016・80017に切られている。幅は検出面で0.5m、深さ0.1mを測る。

S D80042

二ノ郷11区に位置し、ほぼ一直線に走る正南北溝でS D80041の東側に平行している。幅は検出面で1.4m、深さ0.5mを測る。遺物は須恵器小皿が出土している。

S D80043

二ノ郷11・6・1に位置し、やや蛇行している正南北溝である。S D80004・80011やS B80024に切られている。幅は検出面で0.7m、深さ0.3mを測る。遺物は土師器小皿が出土している。

S D80044

下町3・二ノ郷16区に位置する南北方向の溝である。幅は検出面で1.5m、深さ0.3mを測る。

遺物は須恵器坏が出土している。

S B 80025 (図版121)

二ノ郷1区の南寄りに位置している。東西1間(1.65m)、南北1間(2.3m)の掘立柱建物である。南北方向の方位はN-11°-Wである。柱掘形は直径20cm～30cm前後の円形で、深さは検出面から28cm～47cmである。いずれも直径16cm前後の柱痕跡をとどめる。遺物は柱穴から須恵器碗・甕が出土している。

S B 80032 (図版123)

徳政1区のはは中央部に位置している。東西1間(2.65m)、南北2間(4.2m)の掘立柱建物である。南北方向の方位はN-0°-Eである。柱掘形は直径22cm前後の円形で、深さは検出面から14cm～40cmである。いずれも直径12cm前後の柱痕跡をとどめる。遺物は柱穴から土師器小片が出土している。

S K 80024

黒岡地区にある唯一の土坑である。黒岡7区に位置し、遺物は土師器碗・坏、須恵器坏が出土している。

第3節 坪境溝

S D 80001

調査区の西端、徳政9区に位置する南北溝である。S D 80002から続く溝である。通常の明石郡条里の方向と異なり、N-27°-Wに方向をとる。現代まで使われていた水路に切られている。幅1.0m以上、深さは検出面から0.4mある。条里方向とは異なるが、明石川に近く条里が明確でないことや、現代水路と同一であることから同様の溝と考えた。遺物は須恵器壺が出土している。

S D 80002

調査区の西端、徳政10・9区に位置する坪Bの西辺の南北溝である。はは中央部でわずかに屈曲し、南半はN-32°-Eに向く。幅は検出面で1.0m前後、深さ0.4mを測る。

遺物は土師器鍋、須恵器小皿・鉢、瓦器碗が出土している。

S D 80003

調査区西端の二ノ郷10区に位置する坪Cの西辺の南北溝である。西側は現代水路に切られている。幅は検出面で1.5m以上、深さは検出面から0.4mを測る。

S D 80004

二ノ郷6・1区に位置する坪Cと坪Dの間の南北溝である。下層の溝S D 80043を切っている。幅は検出面で0.8m程度であり、深さは検出面から0.2mを測る。何度か掘り返しているため、切り合いが著しい。

遺物は土師器坏の完形品が2点出土している。他に土師器小皿・坏、須恵器坏、馬の歯が出土している。

S D 80005

徳政2・1・11区に位置する坪Bと坪Eの間の南北溝で、S D 80006へ続く。幅は検出面で1.4m、深さ0.4mを測る。遺物は須恵器鉢が出土している。

S D 80006

徳政12区の東端に位置する坪Aと坪Fの間の南北溝である。S D 80005から続いている。幅は検出面で1.0m、深さ0.4mを測る。遺物は土師器坏、須恵器坏が出土している。

S D 80007

二ノ郷10・11区に位置する坪Bと坪Cの間の東西溝である。現代の溝に切られている。幅は検出面で0.5m、深さ0.3mを測る。

S D 80008

S Y 1区、徳政7区に位置する坪Dと坪Eの間の東西溝である。S D 80007の東に続いている。幅は検出面で0.5m、深さ0.8mを測る。遺物は土師器小皿、須恵器小皿・皿・坏が出土している。

S D 80009

徳政6、竹添4 A区に位置する坪Eと坪Fの間の東西溝である。幅は検出面で0.5m、深さは0.2mを測る。

S D 80014

徳政1・2・11区に位置し、S D 80005の東側4.5mに平行している。坪Bと坪Eの間の南北溝であり、S D 80015に続いている。幅は検出面で0.8m、深さ0.3mを測る。遺物は須恵器坏が出土している。

S D 80015

徳政12区に位置し、S D 80006の東側4.5mに平行している。坪Bと坪Fの間の南北溝であり、S D 80014から続いている。幅は検出面で0.9m、深さ0.4mを測る。遺物は須恵器小皿・坏が出土している。

第4節 坪A

坪Aは坪境溝S D 80001・80006に囲まれた範囲である。坪Bとは明瞭な境は存在しない。南側は完新世の段丘崖である。掘立柱建物S B 80001～80007、土坑S K 80001・80002が存在している。

S D 80026

徳政12区に位置し、S B 80004の東側に平行する南北溝である。幅は検出面で0.5m、深さ0.2mを測る。遺物は土師器小皿、須恵器小皿・坏が出土している。

S D 80027

徳政12区に位置し、S B 80006の西側に平行する南北溝である。幅は検出面で0.3m、深さ0.2mを測る。

S B 80001 (図版108)

徳政12区のほぼ中央に位置し、北側は区外に続いている。東西2間(6.4m)、南北1間(2.3m)以上の総柱建物である。南北方向の方位はN-11°-Eである。柱掘形は直径25cm前後の円形で、深さは検出面から22cm～28cmである。いずれも直径16cm前後の柱痕跡をとどめる。

S B 80002 (図版108)

徳政12区のほぼ中央部、S B 80001の南に位置し、南側は区外に続いている。東西2間(6.6m)、南北1間(2.3m)以上の総柱建物である。南北方向の方位はN-15°-Eである。柱掘形は直径24cm前後の円形で、深さは検出面から20cm～56cmである。いずれも直径16cm前後の柱痕跡をとどめる。S B 80003と重複関係にある。

S B 80003 (図版108)

徳政12区のほぼ中央部、S B 80003と重複関係にある東西2間(4.48m)、南北2間(4.56m)の掘立柱建物である。南北方向の方位はN-17°-Eである。柱掘形は直径28cm前後の円形で、深さは検出面から16cm～24cmである。いずれも直径16cm前後の柱痕跡をとどめる。

S B 80004 (図版111)

徳政12区の東寄りに位置する東西4間(8.95m)、南北3間(6.3m)の総柱建物である。南北方向の方位はN-21°-Eである。東側に雨落ち状の溝がとりつく。柱掘形は直径30cm前後の円形で、深さは検出面から25cm～30cmである。いずれも直径16cm前後の柱痕跡をとどめる。S B 80005と重複関係にある。

遺物は柱穴(P 3)から土師器小皿の完形品と土師器小皿が別々の柱穴(P 11・12)から出土している。他に土師器碗・鍋、須恵器碗・鉢・甕が出土している。

S B 80005 (図版111)

徳政12区の東寄り、S B 80004と重複関係にある東西3間(6.8m)、南北3間(6.8m)の総柱建物である。南北方向の方位はN-25°-Eである。柱掘形は直径34cm前後の円形で、深さは検出面から20cm～56cmである。いずれも直径16cm前後の柱痕跡をとどめる。

遺物は柱穴から土師器碗・鍋、須恵器小皿が出土した。

S B 80006 (図版112)

徳政12区の東寄り、S B 80004の東に位置する東西2間(3.95m)、南北2間(4.8m)の総柱建物である。南北方向の方位はN-21°-Eである。西側に雨落ち状の溝がとりつく。柱掘形は直径25cm前後の円形で、深さは検出面から28cm～34cmである。いずれも直径16cm前後の柱痕跡をとどめる。S B 80007と重複関係にある。遺物は柱穴から土師器小皿・碗・鍋、須恵器杯、焼土塊が出土した。

S B 80007 (図版112)

徳政12区の東寄り、S B 80006と一部重なりながら東側に位置する東西2間(5.2m)以上、南北1間(3m)以上の総柱建物である。南北方向の方位はN-21°-Eである。柱掘形は直径24cm前後の円形で、深さは検出面から20cm～36cmである。いずれも直径12cm前後の柱痕跡をとどめる。

遺物は柱穴から土師器小皿・杯、須恵器杯・鉢が出土した。

S K 80001

徳政12区の南側に位置する確認調査の坪掘りで確認した土坑である。

遺物は土師器小皿、須恵器杯が出土している。

S K 80002 (図版132)

徳政12区の掘立柱建物S B 80006の西側に位置する土坑である。平面形は東西に長い楕円形で、東西1.55m、南北1.2mを測る。深さは検出面から0.1mを測る。

第5節 坪B

坪Bは坪境溝S D 80002・80007・80005に囲まれた範囲である。坪Aとは明瞭な境は存在しない。掘立柱建物S B 80008～80014、土坑S K 80003～80006、井戸S E 80001・土器群、土器溜りが存在している。

S D 80010

徳政10・14区に位置し、坪Bを南北に2等分する東西溝である。幅は検出面で0.5m、深さ0.2mを測り、小規模である。

S D 80020

徳政11区に位置する東西溝である。S K 80005の南側に位置している。幅は検出面で1.0m、深さ0.2mを測る。遺物は土師器小皿・杯、須恵器杯、瓦器碗・羽釜が出土している。

S D 80021

徳政11区に位置する東西溝である。S K 80005の北側に位置している。幅は検出面で0.9m、深さ0.2mを測る。遺物は須恵器小皿が出土している。

S B 80008 (図版113)

徳政13区の東寄りに位置する東西7間(16.72m)、南北2間(4.8m)以上の総柱建物である。南北方向の方位はN-18°-Eであるが、東西方向とは直交していない。柱掘形は直径39cm~28cm前後の円形で、深さは検出面から20cm~56cmである。いずれも直径20cm前後の柱痕跡をとどめる。

遺物は柱穴から土師器小皿・坏・鍋と須恵器坏、焼土塊が出土している。

S B 80009 (図版114)

徳政13区の東寄り、S B 80008と一部重なり、北側に位置する。東西5間(14.0m)、南北7間(4.6m)以上の総柱建物である。南北方向の方位はN-22°-Eであるが、東西方向とは直交していない。柱掘形は直径28cm前後の円形で、深さは検出面から20cm~40cmである。いずれも直径16cm前後の柱痕跡をとどめる。遺物は柱穴から2つの柱穴(P 5・9)に分割して根石として使われた須恵器甕が出土している。この他に土師器坏・鍋、須恵器坏・壺、焼土塊が出土している。

S B 80010 (図版115)

徳政13区のはは中央部に位置する。東西2間(2.5m)、南北1間(2.1m)の掘立柱建物である。南北方向の方位はN-12°-Eである。柱掘形は直径28cm前後の円形で、深さは検出面から12cmである。いずれも直径10cm前後の柱痕跡をとどめる。

S B 80011 (図版115)

徳政11区に位置する。南北4間(7.5m)、東西2間(2.5m)以上の掘立柱建物である。南北方向の方位はN-22°-Eである。柱掘形は直径32cm前後の円形で、深さは検出面から16cm~36cmである。いずれも直径12cm前後の柱痕跡をとどめる。S K 80005に切られている。

遺物は柱穴から土師器小皿・椀・鍋、須恵器坏が出土している。

S B 80012 (図版115)

徳政13区の東寄りに位置する。東西2間(4.7m)、南北1間(1.9m)以上の掘立柱建物である。南北方向の方位はN-17°-Eである。柱掘形は直径26cm前後の円形で、深さは検出面から16cm~28cmである。いずれも直径12cm前後の柱痕跡をとどめる。

S B 80013 (図版116)

徳政3区の西寄りに位置し、南側は区外へ続く。東西2間(3.9m)、南北2間(4.1m)以上の掘立柱建物である。南北方向の方位はN-21°-Eである。柱掘形は直径15cm前後の円形で、深さは検出面から36cm~40cmである。いずれも直径8cm前後の柱痕跡をとどめ、P 1には河原石が根石として据えられていた。

S B 80014 (図版116)

徳政3区の東寄りに位置する。東西1間(2.2m)、南北1間(2.2m)の掘立柱建物である。南北方向の方位はN-23°-Eである。柱掘形は直径20cm前後の円形で、深さは検出面から16cmである。いずれも直径16cm前後の柱痕跡をとどめる。

S A 80002

徳政11区のS D 80021の北側に位置する東西方向の柵である。遺物は柱穴から鬼瓦の破片が出土している。

S K 80003 (図版132)

徳政13区のS B 80008に重複して存在する土坑である。平面形は南北に長い不整形で、東西1.1m、南北1.8m以上を測る。深さは検出面から0.08mを測る。遺物は須恵器甕が出土している。

S K 80004 (図版132)

K M 9区のS E 80001の西側に位置する土坑である。平面形は東西に長い長方形で、東西1.1m、南北0.85mを測る。深さは検出面から0.1mを測る。遺物は土師器小皿、須恵器小皿が出土している。

S K 80005 (図版132)

K M 9・徳政11・13区の交点に位置する大形の土坑である。平面形は南北に長い楕円形で、南北8.5m、東西7.1mを測る。深さは検出面から0.8mを測る。埋土は最下層にシルトが堆積し、その上層に遺物を大量に含んだ拳大の礫層が堆積し、上層は淡褐色の砂質土が堆積していた。

遺物は土師器鍋・羽釜・マダコ壺、須恵器小皿・坏・鉢・壺・甕、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などが多量に出土している。マダコ壺の中には骨が充満していた。

S K 80006 (図版132)

K M 9区のS K 80005の南側に位置する土坑である。平面形は円形で、直径0.7mを測る。深さは検出面から0.2mを測る。遺物は須恵器坏が出土している。

S E 80001 (図版131)

徳政11区の北寄りて検出した、内法一辺0.53mの、縦板組み隅柱横棧どめの方形井戸である。各辺とも4～5枚の縦板を立て少しずつ重ねて立て、四隅の隅柱と横棧で支えている。隅柱のうち東・西・南は3方は一辺5cm前後の角材を用い、残りの北隅は直径7cmの丸太を用いている。横棧は底から15cm、23cmの2箇所にある。隅柱には1.2cm×0.9cmの孔をあけて横棧を組み合わせている。遺構検出面から井戸底までの深さは1.38mあるが、井戸枠は底から66cmまでが残り、以上の部分は腐食して失われている。井戸枠の方位は北から東に22度偏っている。掘形は東西1.2m、南北1.15mの円形で、底に向かって少し狭くなるように掘られている。井戸の底は縄文時代晩期以前の河道の堆積層である細砂層まで掘られており、湧水の条件は備わっている。

遺物は上層と下層の2層から、須恵器坏・小皿・鉢・甕、土師器碗・小皿・鍋・釜・甕、砥石が出土した。

第6節 坪C

坪Cは坪境溝S D 80003・80007・80004に囲まれた範囲である。北側にも条里の坪境溝が存在する。掘立柱建物S B 80015～80019、土坑S K 80007・80008、墓S T 80001が存在している。

S D 80016

二ノ郷11区に位置する坪Cの南1/4を区画する東西溝である。掘立柱建物群S B 80015～19の南辺を区画する溝であると考えられる。幅は検出面で0.9m、深さ0.2mを測る。

S D 80017

二ノ郷13区に位置する坪C内を1/3に区画する東側の南北溝である。掘立柱建物群S B 80015～19の西辺を区画する溝であると考えられる。幅は検出面で0.4m、深さ0.1mを測る。

S D 80028

二ノ郷11区、K M 4区に位置し、S B 80015の北側、S B 80019の東側、S B 80018の南側に存在する

コの字形の溝である。幅は検出面で0.4m、深さ0.1mを測る。

S B 80015 (図版116)

二ノ郷11区の南寄りに位置する。東側は区外へ続く。東西1間(2.1m)以上、南北2間(3.7m)の総柱建物である。南北方向の方位はN-14°-Eである。柱掘形は直径30cm前後の円形で、深さは検出面から34cm~47cmである。いずれも直径16cm前後の柱痕跡をとどめ、P1・3・6からは根石が出土した。

遺物は柱穴から土師器小皿・坏・鍋が出土した。

S B 80016 (図版117)

KM4区に位置する。東西7間×南北5間の総柱建物で、西南隅の東西2間×南北1間の部分は欠けて鍵の手になっている。また北辺の一区画で柱が1本抜けていて、2間×2間の土間状となっている。柱間は東西方向がやや広く1.8~2.3m、南北方向が1.8~2.0mで、東西方向に棟をとり、方位はおおよそN-23°-Eである。建物の規模は東西15.4m、南北9.6m、床面積約139㎡である。遺物は須恵器坏が出土している。

S B 80017 (図版118)

S B 80016と重複しており、切り合い関係は不明だが、他の建物との関連からS B 80016より先行するものと考えられる。東西2間×南北3間だが、西南隅の柱は確認トレンチの掘削によって失われていて確認できていない。東西方向の柱間は不均等で、西側が4.8m、東側が2.8mである。南北方向は中央が3.6m、両端が1.8mで、東西2間×南北1間の建物の両側に1間ずつの張り出しが付いたものとみることが出来る。南北方向の方位はおおよそN-21°-E、建物の規模は東西7.6m、南北7.2m、床面積約55㎡である。遺物は須恵器小皿が出土している。

S B 80018 (図版118)

S B 80017の東側に位置し、S B 80016を切っている。東西2間×南北3間の総柱建物である。柱間は東西方向が1.7~1.8m、南北方向が2.0~2.1mで、南北方向に棟をとり、方位はおおよそN-23°-Eである。建物の規模は東西3.5m、南北6.0m、床面積約21㎡である。遺物は土師器坏が出土している。

S B 80019 (図版119)

S B 80016・S B 80017の南側に位置する。現状では東西3間×南北3間の総柱建物だが、北側は確認トレンチの掘削によって失われており、さらに1間分の余地がある。東西方向の柱間は2.0m、南北方向は北側2間が2.6~2.8m、南側の1間が1.9~2.1mで、南北方向に棟をとり、方位はおおよそN-20°-Eである。建物の規模は東西6.0m、南北7.4m、床面積約44㎡である。

なお建物中央やや南寄りの床下には木棺墓S T 80001がある。建物と直接関係があるかどうかは不明だが、長軸を梁方向に一致させており、何らかの関連はあるものとみられる。

S A 80001

KM4区のS B 80019と重複関係にある東西方向の柵である。遺物は柱穴から須恵器小皿が出土している。

S K 80007 (図版133)

S B 80018の東側に位置する。南半部は確認トレンチの掘削によって失われている。平面は楕円形で、幅2.35m、深さ0.05mである。遺物は土師器坏が出土している。

S K 80008 (図版133)

二ノ郷11区に位置し、二ノ郷11・13区の掘立柱建物群S B 80016~80019の東側に位置する土坑である。

西側半分は区外のため発掘していない。平面形は南北に長い楕円形で、南北4.5m程度、東西2.0m以上を測る。深さは検出面から0.6mを測る。

遺物は土師器小皿・坏・甕、須恵器小皿・坏・鉢・甕、白磁碗・水注など多量に出土した。土師器・須恵器の小型品の多くは完形で出土したが、大形の甕は細片で出土した。

S T 80001 (図版131)

S B 80019の床下にあたる部分で見つかった。長軸方向の方位はN-70°-Wで、建物の梁方向に一致している。掘形は長方形で、長軸の東西方向が1.6m、短軸が東端で0.95m、中央で1.0m、西端で0.85m、深さが最大0.18mである。棺は底板が比較的良好に遺存していた他、蓋板・側板の痕跡もわずかに認められた。木棺の形状は短軸側が二段掘りを呈し、その下に底板を敷き、側板を立てていた。小口板は底板の上に立てていたと考えられる。規模は長軸が1.46m、短軸が二段掘りの上段で0.44m、下段で0.34mである。底面のレベルは東端の方が西端より4cm高く、頭位は東であった可能性が高い。

副葬品として、木棺の東小口辺に沿って刀子が1点出土した。刃先を南に向け、棺底から6cm浮いた状態で水平に置かれており、小口板の裏込めに埋納されたとみられる。

第7節 坪D

坪Dは坪境溝S D 80004・80008に囲まれた範囲である。東側は未調査であり、北側にも条里の坪境溝が存在する。掘立柱建物S B 80020～80024、土坑S K 80009～80014が存在している。

S D 80011

二ノ郷1・4区に位置し、坪Dを北2/3と南1/3に区画する東西溝である。場所によって2～3条平行して走っている。幅は検出面で0.9m、深さ0.3mを測る。

S D 80029

二ノ郷1・5区に位置し、S B 80021の西辺と南辺に存在するL字形の溝である。西辺では約3.0m離れており、南辺では約3.3m離れている。幅は検出面で0.3m前後、深さ0.2mを測る。

S D 80030

二ノ郷1区に位置し、S B 80022の西側に存在する南北溝である。S B 80022の西辺柱穴とは約0.9m離れている。幅は検出面で0.6m、深さ0.2mを測る。

S B 80020 (図版119)

二ノ郷1・5区のはほぼ中央部に位置している。東西3間(7.8m)、南北3間(5.8m)の総柱建物である。南北方向の方位はN-16°-Eである。西側には雨落ち状の溝がとりつく。S B 80021、S B 80022と重複関係にある。柱掘形は直径20cm前後の円形で、深さは検出面から27cm～58cmである。いずれも直径16cm前後の柱痕跡をとどめる。柱穴の中は石や須恵器碗、平瓦を根石としている。

遺物は柱穴から土師器小皿・坏、須恵器坏・甕、平瓦、焼土塊が出土している。

S B 80021 (図版120)

二ノ郷1・5区のはほぼ中央部に位置している。東西5間(8.8m)、南北3間(6.2m)の総柱建物である。南北方向の方位はN-20°-Eである。西側と南側にL字状に浅い溝が走る。南側1間分は東側にはみだしている。また、浅い長方形土坑S K 80000がとりつく。S B 80020、S B 80022と重複関係にある。柱掘形は直径25cm前後の円形で、深さは検出面から24cm～44cmである。いずれも直径12cm前後の柱痕跡をとどめる。柱穴の中には石や須恵器甕、瓦を根石としているものがある。

遺物は柱穴から土師器小皿・坏・鍋・釜、須恵器小皿・坏・鉢・甕、平瓦と焼土塊が出土している。

S B 80022 (図版120)

二ノ郷1・5区のはほぼ中央部に位置している。東西3間(8.8~8.65m)、南北3間(8.45m)の総柱建物である。南北方向の方位はN-19°-Eである。但し西端部分は1間(2.15m)延びる。S B 80020、S B 80021、S B 80023と重複関係にある。柱掘形は直径25cm前後の円形で、深さは検出面から34cm~62cmである。いずれも直径16cm前後の柱痕跡をとどめる。

遺物は柱穴から土師器小皿・坏・鍋、須恵器坏が出土している。

S B 80023 (図版121)

二ノ郷1・5区のはほぼ中央部に位置している。東西2間(3.8~3.85m)、南北2間(4.0m)の総柱建物である。南北方向の方位はN-18°-Eである。S B 80022と重複関係にあり、北辺はS B 80021に接する。柱掘形は直径30cm前後の円形で、深さは検出面から14cm~48cmである。いずれも直径16cm前後の柱痕跡をとどめる。柱の中には石や須恵器甕、瓦を根石としているものがある。

遺物は柱穴から土師器坏・鍋、須恵器碗・甕、軒丸瓦、焼土塊が出土している。

S B 80024 (図版121)

K M 4区のS B 80020~S B 80023の南側に位置している。東西3間(7.7m)、南北1間(2.4m)の建物である。南北方向の方位はN-22°-Eである。柱掘形は直径30cm前後の円形で、深さは検出面から14cm~48cmである。いずれも直径16cm前後の柱痕跡をとどめる。

S K 80009 (図版133)

二ノ郷1・5区のS B 80020~S B 80023の北東方向に位置する土坑である。平面形は南北に長い楕円形で、南北1.55m、東西1.1mを測る。深さは検出面から0.2mを測る。

遺物は土師器小皿、須恵器小皿が出土している。

S K 80010 (図版134)

二ノ郷1・5区のS B 80020~S B 80023の北東方向に位置する土坑である。平面形は南北に長い楕円形で、南北1.25m、東西1.0mを測る。深さは検出面から0.85mを測る。

遺物は土師器小皿・羽釜、須恵器坏・甕・鉢が出土している。

S K 80011 (図版136)

二ノ郷1・5区のS B 80021の東側に位置する土坑である。平面形は南北に長い長方形で、南北3.5m、東西2.0mを測る。深さは検出面から0.05mを測り、浅い。

遺物は土師器碗、鍋、須恵器坏・甕、白磁碗が出土している。

S K 80012 (図版136)

二ノ郷1・5区のS B 80020~S B 80023の南側に位置する土坑である。平面形は円形で、直径1.0mを測る。深さは検出面から0.2mを測る。

遺物は土師器小皿、須恵器坏・鉢・甕、丸瓦、焼土塊が出土している。

S K 80013 (図版134)

S B 80024の東脇に位置する。規模は0.9m×0.55mの不整形で、深さ14cmである。埋土からは10個体前後の須恵器小皿・坏が出土した。

S K 80014 (図版134)

S B 80024の南東側に位置する。規模は0.95×0.6mの不整形円形で、深さ30cmである。

遺物は土師器小皿、須恵器坏が出土した。

第8節 坪E

坪Eは坪境溝S D80014・80008・80009に囲まれた範囲である。東側は未調査である。掘立柱建物S B80026～80045、土坑S K80015～80022が存在している。

S D80012

徳政7・8区に位置し、坪Eを1/3に区画する溝のうち北側の1条の東西溝である。幅は検出面で1.0m前後、深さ0.2mを測る。遺物は土師器小皿・坏、須恵器小皿・坏が出土している。

S D80013

徳政7区に位置し、坪Eを1/3に区画する溝のうち南側の1条の東西溝である。幅は検出面で0.7m、深さ0.2mを測る。

S D80018

徳政8・7区に位置する坪Eを東西に2等分する南北溝である。幅は検出面で0.7m、深さ0.3mを測り、小規模である。

S D80019

竹添4A区に位置する坪Eを西2/3と東1/3に区画する南北溝である。場所によって2～3条平行して走っている。幅は検出面で0.4m、深さ0.1mを測る。

S D80024

徳政7区に位置する坪Eを東西に3等分する東側の2条の南北溝である。S D80023の南側に位置している。幅は検出面で0.3～0.5m、深さ0.2mを測る。

S D80022

徳政7区に位置する東西溝である。S B80034の南側に位置している。幅は検出面で0.9m、深さ0.2mを測る。

S D80023

徳政7区に位置する東西溝である。S B80038・39の北側に位置している。幅は検出面で0.8m、深さ0.2mを測る。遺物は土師器羽釜・鍋、須恵器坏が出土している。

S D80025

徳政1区に位置する東西溝である。S B80041の北側に位置している。幅は検出面で0.7m、深さ0.2mを測る。

S D80031

徳政4区に位置し、S B80030の北側に存在する東西溝である。S B80022の北辺柱穴とは約0.5m離れている。幅は検出面で0.5m、深さ0.2mを測る。

S D80032

徳政7区に位置し、S B80035の西辺と南辺に存在するL字形の溝である。柱穴とは約0.2m離れている。幅は検出面で0.5～0.8m、深さ0.1mを測る。

S D80033

徳政7区に位置し、S B80036とS B80037の間に所在する南北溝である。幅は検出面で0.4m、深さ0.1mを測る。

S D 80034

徳政7区に位置し、S B 80039の東側に所在する南北溝である。幅は検出面で0.3m、深さ0.1mを測る。

S D 80035

徳政1区に位置し、S B 80041の西側に所在する南北溝である。S B 80035の西辺柱穴とは約1.5m離れている。幅は検出面で0.3m、深さ0.1mを測る。

S D 80036

徳政1区に位置し、掘立柱建物S B 80041の東側に所在する南北溝である。S B 80035の東辺柱穴とは約2.0m離れている。幅は検出面で0.3m、深さ0.1mを測る。

S D 80037

徳政7区の東端に位置し、溝S D 80023から南に伸びさらに東へ屈曲する溝である。幅は検出面で0.3m、深さ0.1mを測る。遺物は土師器の小皿が出土している。

S B 80026 (図版121)

徳政7区の北端に位置している。東西2間(4.05m)、南北2間(3.85m)の総柱建物である。南北方向の方位はN-19°-Eである。東側は区外に延びている。柱掘形は直径30cm前後の円形で、深さは検出面から36cm~46cmである。いずれも直径16cm前後の柱痕跡をとどめる。

遺物は柱穴から土師器杯、須恵器杯、白磁碗が出土している。

S B 80027 (図版116)

徳政4・7区にまたがっている。東西2間(4.5m)以上、南北推定1間(3.3m)以上の掘立柱建物である。南北方向の方位はN-21°-Eである。柱掘形は直径32cm~28cm前後の円形で、深さは検出面から20cm~33cmである。いずれも直径12cm前後の柱痕跡をとどめる。

遺物は柱穴から土師器壺、須恵器杯が出土している。

S B 80028 (図版122)

徳政4区の東側区外に延びている。東西2間(4.85m)、南北2間(4.1m)の総柱建物である。南北方向の方位はN-23°-Eである。柱掘形は直径25cm前後の円形で、深さは検出面から49cm~20cmである。いずれも直径12cm前後の柱痕跡をとどめる。遺物は柱穴から土師器杯、須恵器杯が出土している。

S B 80029 (図版122)

徳政4区の東端に位置している。東西2間(5.45m)以上、南北4間(9.1m)以上の総柱建物である。南北方向の方位はN-22°-Eである。柱掘形は直径25cm前後の円形で、深さは検出面から28cm~38cmである。いずれも直径16cm前後の柱痕跡をとどめる。

遺物は柱穴から土師器小皿・杯、須恵器杯が出土している。

S B 80030 (図版116)

徳政4区のS B 80028の南側に位置する。東西1間(1.9m)、南北1間(1.75m)の掘立柱建物である。南北方向の方位はN-21°-Eである。柱掘形は直径25cm前後の円形で、深さは検出面から40cm~44cmである。いずれも直径12cm前後の柱痕跡をとどめる。遺物は柱穴から土師器小皿が出土している。

S B 80031 (図版116)

徳政4区のS B 80029に重複して北東に位置する。東西1間(2.3m)以上、南北1間(1.9m)以上の掘立柱建物である。南北方向の方位はN-22°-Eである。北側は区外に延びている。柱掘形は直径20cm

前後の円形で、深さは検出面から38cm～40cmである。いずれも直径16cm前後の柱痕跡をとどめる。

遺物は柱穴から土師器小皿が出土している。

S B 80033 (図版123)

徳政8区のはほぼ中央部に位置している。東西2間(3.1m)、南北1間(1.9m)以上の総柱建物である。南北方向の方位はN-23°-Eである。北側は区外に延びている。柱掘形は直径25cm前後の円形で、深さは検出面から38cm～62cmである。いずれも直径20cm前後の柱痕跡をとどめる。

遺物は柱穴から須恵器坏が出土している。

S B 80034 (図版123)

徳政7区の西寄りに位置している。東西2間(5.2m)以上、南北4間(9.2m)の総柱建物である。南北方向の方位はN-20°-Eである。西側は区外に延びている。柱掘形は直径30cm前後の円形で、深さは検出面から28cm～58cmである。いずれも直径20cm前後の柱痕跡をとどめる。

遺物は柱穴から須恵器坏が出土している。

S B 80035 (図版124)

徳政7区の中央部に位置している。東西1間(2.5m)以上、南北1間(2.45m)以上の掘立柱建物である。南北方向の方位はN-17°-Eである。北東側は区外に延びている。西南側はL字形に雨落ち状の溝が巡っている。柱掘形は直径25cm前後の円形で、深さは検出面から34cm～36cmである。いずれも直径20cm前後の柱痕跡をとどめる。遺物は柱穴から土師器坏、須恵器坏が出土している。

S B 80036 (図版124)

徳政7区の南寄りに位置している。東西1間(2.4m)、南北1間(1.9m)以上の掘立柱建物である。南北方向の方位はN-15°-Eである。南側は区外に延びている。東側は雨落ち状の溝がとりつく。柱掘形は直径17cm前後の円形で、深さは検出面から46cm～66cmである。いずれも直径16cm前後の柱痕跡をとどめる。遺物は柱穴から土師器小皿・坏、須恵器坏、白磁碗が出土している。

S B 80037 (図版124)

徳政7区のS B 80036の東側に位置している。東西4間(8.25m)、南北1間(1.9m)以上の総柱建物である。南北方向の方位はN-17°-Eである。南側は区外に延びている。柱掘形は直径25cm前後の円形で、深さは検出面から22cm～52cmである。いずれも直径16cm前後の柱痕跡をとどめる。

遺物は柱穴から土師器小皿が出土している。

S B 80038 (図版124)

徳政7区のS B 80037の東側に位置している。東西2間(3.1m)、南北2間(4.6m)の総柱建物である。南北方向の方位はN-27°-Eである。柱掘形は直径30cm前後の円形で、深さは検出面から14cm～52cmである。いずれも直径20cm前後の柱痕跡をとどめる。

遺物は柱穴から土師器小皿、須恵器坏、白磁碗、平瓦が出土している。

S B 80039 (図版125)

徳政7区のS B 80038の東側に位置している。東西1間(1.9m)、南北2間(4.6m)の掘立柱建物である。南北方向の方位はN-26°-Eである。東側に雨落ち状の溝がとりつく。柱掘形は直径20cm前後の円形で、深さは検出面から22cm～34cmである。いずれも直径16cm前後の柱痕跡をとどめる。柱穴には河

原石を根石にしているものがある。遺物は柱穴から土師器小片、平瓦が出土している。

S B 80040 (図版127)

徳政1区に位置している。東西1間(2.3m)以上、南北1間(2.2m)以上の掘立柱建物である。南北方向の方位はN-16°-Eである。柱掘形は直径40cm前後の円形で、深さは検出面から20cmである。いずれも直径12cm前後の柱痕跡をとどめる。遺物は柱穴から土師器小皿・坏、須恵器小皿・坏が出土した。

S B 80041 (図版125)

徳政1区の南寄りに位置している。東西3間(7m)、南北1間(4.1m)の掘立柱建物である。南北方向の方位はN-18°-Eである。S B 80042と重複している。柱掘形は直径32~28cm前後の円形で、深さは検出面から36cm~52cmである。いずれも直径20cm前後の柱痕跡をとどめる。

遺物は柱穴から土師器小皿・坏・鉢、須恵器小皿・坏が出土している。

S B 80042 (図版126)

徳政1区の南寄りに位置している。東西6間(14.7m)、南北4間(9m)の掘立柱建物である。南北方向の方位はN-18°-Eである。S B 80041と重複している。柱掘形は直径30cm前後の円形で、深さは検出面から24cmである。いずれも直径15cm前後の柱痕跡をとどめる。東側及び東南隅には、方形の土坑S K 80022が伴う。また西辺には溝S D 80035、東辺には溝S D 80036が伴う。

S B 80043 (図版127)

K M 8・竹添4 A区の西寄りに位置している。東西2間(3.7m)、南北1間(1.9m)以上の掘立柱建物である。南北方向の方位はN-36°-Eである。S B 80044と重複している。柱掘形は直径20cm前後の円形で、深さは検出面から16cmである。いずれも直径12cm前後の柱痕跡をとどめる。

S B 80044 (図版128)

K M 8・竹添4 A区の西寄りに位置している。東西6間(14.5m)、南北3間(7m)以上の掘立柱建物である。南北方向の方位はN-19°-Eである。S B 80043と重複している。柱掘形は直径24~36cm前後の円形で、深さは検出面から16cm~36cmである。いずれも直径16cm前後の柱痕跡をとどめる。

遺物は柱穴から土師器小皿、須恵器小皿が出土している。

S B 80045 (図版129)

K M 8・竹添4 A区のS B 80044の東側に位置している。東西2間(4.4m)、南北5間(11.7m)以上の掘立柱建物である。南北方向の方位はN-21°-Eである。柱掘形は直径24cm~48cm前後の円形、深さは検出面から16cm~48cmである。いずれも直径16cm前後の柱痕跡をとどめる。

遺物は柱穴から須恵器坏が出土している。

S K 80015 (図版134)

徳政7区の北端に位置する土坑で、S D 80008を切っている。平面形は東西に長い楕円形で、南北0.7m、東西1.1mを測る。深さは検出面から0.22mを測る。遺物は須恵器坏が出土している。

S K 80016 (図版135)

徳政4区のS B 80030の東側に位置する土坑である。平面形は東西に長い長方形で、東西1.4m、南北1.0mを測る。深さは検出面から0.25mを測る。遺物は土師器碗・鍋、須恵器坏と鉄器が出土している。

S K 80017 (図版135)

徳政4区の土坑S K 80016の南側に位置する土坑である。南側は側溝掘削で調査されなかった。平面形は円形で、直径0.52mを測る。深さは検出面から0.28mを測る。遺物は土師器椀が出土している。

S K 80018 (図版135)

徳政7区に位置する土坑である。平面形は隅丸方形で、一辺3.0mを測る。深さは検出面から0.12mを測る。遺物は須恵器鉢が出土している。

S K 80019 (図版135)

徳政8区のS B 80032の南側に位置する土坑である。平面形は東西に長い楕円形で、東西1.7m、南北1.4mを測る。深さは検出面から0.1mを測る。遺物は土師器小皿・椀、須恵器杯・甕が出土している。

S K 80020 (図版136)

徳政1区に位置する土坑である。平面形は南北に長い楕円形で、南北3.1m、東西1.6mを測る。深さは検出面から0.3mを測る。遺物は土師器椀、須恵器杯・鉢・甕、白磁碗が出土している。

S K 80021

徳政1区の南端に位置する土坑でS K 80022に切られている。平面形は南北に長い不整形で、南北6.0m以上、東西3.5m程度を測る。深さは検出面から0.1mを測る。

遺物は青磁碗の破片が出土している。

S K 80022 (図版135)

徳政1区南端のS B 80036の南東に位置する土坑で、S B 80036に伴う。平面形は東西に長い隅丸長方形で、東西5.6m、南北2.4mを測る。深さは検出面から0.16mを測る。

遺物は土師器椀・鍋、須恵器杯・鉢・甕が出土している。

第9節 坪F

坪Fは坪境溝S D 80015・80009に囲まれた範囲である。南側は完新世の段丘崖であり、東側は未調査である。掘立柱建物S B 80046・80047、土坑S K 80023が存在している。

S B 80046 (図版130)

徳政11区の南寄りに位置している。東西7間(18.4m)、南北6間(14m)の掘立柱建物である。南北方向の方位はN-17°-Eである。北東側と南西側は区外に続いている。柱掘形は直径44cm前後の円形で、深さは検出面から16cm～50cmである。いずれも直径16cm前後の柱痕跡をとどめる。

遺物は柱穴から土師器小皿・杯・鍋、須恵器杯・鉢が出土している。

S B 80047 (図版125)

徳政6区の中央部に位置している。東西1間(1.3m)以上、南北2間(4.3m)の掘立柱建物である。南北方向の方位はN-16°-Wである。西側は区外に続いている。柱掘形は直径32cm前後の円形で、深さは検出面から44cmである。いずれも直径16cm前後の柱痕跡をとどめ、P 1・2・3には柱根が遺存していた。遺物は柱穴から土師器小片、須恵器鉢が出土している。

S K 80023 (図版125)

徳政12区の東端に位置する土坑である。S D 80006に切られている。平面形は円形で、直径0.94mを測る。深さは検出面から0.18mを測る。遺物は須恵器杯が出土している。

第IV部 遺物

第1章 土器類

第1節 縄文時代 (図版137・138)

1. 概要

玉津田中遺跡の縄文時代の土器はすべての地区を合わせても約50点あまりしか出土していない。池ノ内・西ヶ市地区では後期の遺物も出土しているが、今回掲載対象地区の土器はいずれも晩期後半の突帯文土器で、その数は24点ある。他に晩期突帯文をもつ深鉢数点がみられたが正確な実測ができず、図化は控えた。縄文晩期突帯文土器は、徳政地区から二ノ郷地区の南北に蛇行する河道S R 10001の最下層を中心に出土している。その他、土器は遺構から遊離した状態で弥生時代などの土層から出土したものも含んでいる。

突帯文土器の器種には壺、深鉢があり、口縁部あるいは胴部に突帯がみられる。器種や突帯等の形態分類については家根1982、南1988を参考にした。

- 器種形態** 壺 a は口縁部付近に突帯を有するもの
壺 B は胴部上半に突帯を有するもの
深鉢 a 1 は口縁から頸部間が外反し、1 条突帯を有するもの
深鉢 a 2 は口縁から頸部間が外反し、2 条突帯を有するもの
深鉢 B 1 は口縁から頸部間が直立あるいは内傾し、1 条突帯を有するもの
深鉢 B 2 は口縁から頸部間が直立あるいは内傾し、2 条突帯を有するもの

突帯断面形態 D形、D形、△形がある

突帯刻み形態 D形、小D形、O形、小O形、V形（ヘラで切るもの）があり、単位刻み（一定間隔をおき大きくO形を刻むもの）も存在する

次に対象地区の遺構ごとに遺物を説明する。

2. 河道

S R 10001 (2~13・15~25)

この河道は遺構の項目で説明されているように二ノ郷地区から徳政地区に向かって蛇行しながら北から南に流れるもので、延長350mにおよび、その堆積層は上・中・下・最下層に分かれている。各区にかかるこの河道の土層は同じ様相を呈する所もあるが、わずかに変化しているため同一層で記述が困難であることから、調査区ごとの一括性を重視し記述する。

二ノ郷12区では3・8・12・13・21~24の12点が河道S R 10001から出土したものである。突帯文土器はいずれも最下層から出土しており、S R 10001からの少ない土器の点数の中でも最も集中している部分である。4~6は最大径を口縁部付近にもつ深鉢B1で、いずれも角閃石を多量に含む生駒西麓の胎土である。突帯は口縁部に接して1条のみで、器壁外面の調整にハケを使用している。型式としては長原式と考えられるが、外面調整にハケを使用するのは那珂遺跡37次調査の環濠出土にあり、特異な資料である。8・22は深鉢B2の胴部破片で断面D形突帯に小D刻みを施し、横長O形の2単位刻みを有

する。7・8・22は同系統の生駒西麓の胎土をもち、整形等に共通する点があるが、積極的に同一個体とは断定できない。12は胴部に横方向から縦方向に丁寧なヘラミガキが施された1条突帯をもつ深鉢a1類の土器で灰白色の色調を呈する。23・24は深鉢a1類の胴部突帯の破片でいずれも外面にススが付着する。21は径が小さく壺か小型深鉢の胴部突帯と考えられ、▽突帯上にV形刻みを施す。3は胴部上半に2条の突帯が接し、壺Bタイプで断面△突帯上に小O形の刻みをもつ。

徳政11区では、2・9・15・17・19・20・25の8点が出土した。2は口縁部下位に突帯をもつ壺a類の土器で、断面▽形の突帯に小D形の刻みをもつ。16は壺B類で胴部上半に断面▽形の突帯をもち、小O形の刻みをもつ土器である。9は深鉢a2類で、上部突帯は断面▽形、下部は断面▽形で刻みはV形で、摂津から西播磨にかけてよくみられる土器である。15は深鉢a類で口縁端部と突帯上に横長O形の単位刻みをもつ。17は深鉢a類で突帯断面は▽形、刻みは小Dである。19は断面D形の突帯に小D形刻みにO形の単位刻みをもつ深鉢a類の土器である。20は断面▽形の突帯をもち、刻みはD形で深鉢a類の土器である。25は深鉢の底部で底面は欠損しているが、わずかに平らな面をもつものであろう。

徳政3区では10・11が出土した。これら縄文土器のほか弥生前期土器27・28が伴出した。10は口縁部に断面▽形、胴部に▽形の突帯をもち、いずれも突帯刻みはV字の深鉢a2類である。11は10と同系統の胎土をもち同一個体の可能性もあるが、断定はできなかった。11は胴部下半の破片で、底部を欠くもののおおむね平底であらう。徳政13区では18が出土した。18は断面▽形の突帯上にV字の刻みを施した深鉢a類の土器で、口縁端部は丸く仕上げられている。

3. その他(1・14)

S R10001以外の突帯文土器の出土は徳政11区の微高地上から1が出土した。この土器は口縁部下位に突帯をもつ壺a類の土器で突帯上に連続する刻みはないが、断面▽形の突帯にO形の単位刻みをもつものである。徳政12区では弥生時代中期下層のS D30001から14が出土した。これは断面▽形の突帯に小Oの刻みをもつ深鉢a類であり、口縁端部は平坦に仕上げられている土器である。

4. まとめ

今回の報告対象地区から縄文土器が出土した所は前述どおりS R10001からである。その多くは二ノ郷12区、徳政11区からのもので、しかも最下層から出土している。それゆえ土器については一括性が強く、播磨地方の縄文時代終末の土器様相が示されたものといえる。まず、縄文時代晩期の突帯文土器の中で、どのような編年位置にあるのかについては、生駒西麓産の長原式土器が出土していることから晩期後半の遺物があることは明らかである。しかし、長原式と並行する時期の在地の土器がどのような様相を呈するのか、また長原式以降の土器型式がどのような形で存在し弥生土器との関係はどうなっているのか、明確な判断材料がなく、いましばらく資料検討を行い報告したい。

註

(1) 単位刻みとは突帯文土器の突帯上あるいは口縁端部に大型のO字の刻みを一定間隔をおいて押圧するものである。

参考文献

- 家根祥多 1982年 「縄文土器」『長原遺跡発掘調査報告書II』大阪市文化財協会
 南 博史 1988年 「縄文文化の遺構と遺物」『口酒井遺跡第11次発掘調査報告書』伊丹市教育委員会・財団法人古代学協会
 丹治康明 1991年 「雲井遺跡第1次発掘調査報告書」神戸市教育委員会

第2節 弥生時代前期 (図版139・140)

1. 概要

玉津田中遺跡の弥生前期遺物出土地区は徳政地区、二ノ郷地区、黒岡地区のほか、第2分冊掲載予定の亀ノ郷・D3 拡張・下町・KM7の各地区である。今回掲載地区から出土し、図化できたものは弥生前期土器35点のみで、今回掲載の土器には前期前半及び後半の土器がある。出土場所は縄文時代晩期の凸帯文土器が出土した河道SR10001の中層や上層からの出土が多い。

弥生前期土器は、徳政地区から二ノ郷地区の南北に蛇行する河道SR10001の中層や上層および一部最下層から出土している。その他の土器は小さな遺構や包含層から出土したものも含んでいる。またこれら前期土器には生駒西麓産と考えられるような胎土をもつものはなく、在地で製作されたものと思われる。器種には壺蓋・壺・甕・甕蓋・鉢がある。壺については短く外反するものや広口壺があり、文様には段、削出凸帯、貼付凸帯文、ヘラ描直線文があり、ヘラ描きによる重弧文や貼付凸帯による弧文がある。甕については口縁部はいずれも如意形口縁で文様は段、削出凸帯、ヘラ描直線文、ヘラ描き重弧文がある。なお詳細な時期については播磨弥生前期編年¹⁾にしたがった。

次に遺構ごとに遺物を説明する。

2. 河道

SR10001 (27・28・30・31・35・37・38・42・43・45・48・50・53・55～59)

SR10001から出土した土器は二ノ郷12、徳政3・12・13区からのものである。二ノ郷12区からは縄文晩期凸帯文土器が出土した最下層から51が出土している。51は壺胴部上半にヘラ描直線文2条がみられるが、1条の直線文を描いた際に継ぎ目がうまく合わなかったもので、本来は1条の直線文と考えられる。下層からは口縁端部が刻まれた甕48が出土した。中層である第2層からは3点出土し、壺胴部にヘラによる縦線や重弧文があるもの53や、同一個体と考えられる甕の体部で、3本のヘラ描きによる山形文が描かれているもの56・57がある。上層からは4点出土し、頸胴部間が段によって画される壺30や、壺の底部35がある。そのほか口縁端部および段上に刻みがある甕37がある。50は体部に横方向のヘラによる沈線とその下に重弧文などが描かれている鉢である。これら資料は段などから全体に古相を示すものでa・b段階のものであろう。

徳政3区のSR10001からは黒色シルト下層出土のものがある。壺頸部にヘラ描直線文2条を施し、口縁部が小さく開くもの27がある。また壺底部片で、27と同一個体の可能性のあるもので、2点共横方向に丁寧なヘラミガキが施されるもの28も出土した。これらもa・b段階のものであろう。

徳政12区のSR10001では2層から3点出土した。胴部に7条のヘラ描直線文をもつ壺52や、3条のヘラ描直線文をもつ甕45、3条のヘラ描直線文をもつ甕59がある。壺52は多条化していることからc段階以降の新しい様相を示すものだろう。

徳政13区のSR10001では3層から文様部は不明の広口壺口縁部31が出土した。2層からは壺胴部上半に2条の貼付凸帯を弧状に配置した55が出土した。甕としては体部にヘラ描直線文3条を施したものの42や、体部が内傾し、ヘラ描直線文3条+aをもつ43がある。また体部に2条+aをもつもの58も出土した。

SR20001 (33・44)

二ノ郷3区では砂礫層から2点出土した。頸部にヘラ描直線文4条+aをもつ広口壺33で、沈線3条

をもつ甕44も出土した。徳政9区では胴部上半に縦方向にヘラ描文を施した壺29がある。

黒岡5区からは体部に段が施された甕39がある。これはa段階のものである。

S R 40004 (34・47)

徳政1区では洪水礫から頸部にヘラ描直線文11条を施した広口壺34が出土した。徳政12区では無文で小型の甕47が出土した。

S D 30010 (32・40・46)

二ノ郷2区では溝下層から頸部に削出凸帯上にヘラ描直線文3条を施した広口壺32が出土した。c段階のものであろう。二ノ郷4区では砂層から甕の頸部に削出凸帯b種+ヘラ描直線文1条の文様が施されたもの40がある。また頸部にヘラ描直線文4条を巡らした完形品の甕46も出土した。

3. その他の遺構 (26・36・41・49・54・60・61)

黒岡3区のS R 50001(弥生後期の河道)では相対する箇所穿孔されている壺の蓋49が出土した。

KM 8区の下層水田畦畔上面から2条のヘラ描直線文を施された完形品の甕41がある。

二ノ郷5区S X 40015の盛土から頸部に幅の狭い削出凸帯文a種をもち、蓋とを結ぶ孔をもつ壺口縁部26が出土した。

徳政8区の包含層から胴部に5条の貼付凸帯文b種をもつ壺36が出土した。36については文様が多条化することからd段階に属するものであろう。

徳政11区から体部にヘラ描直線文2条+aの甕61が出土した。

徳政12区S D 30001からは体部にヘラ描直線文3条+aを施し、表面胎土中にモミ痕が残る甕の破片60が出土した。

徳政13区S D 30002からは刻み目貼付凸帯文4条+aをもつ壺胴部54が出土した。

註

- (1) 弥生前期土器編年については「丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書」内の「播磨における前期弥生土器の様相」(深井・釜江1982)にあるa～e段階に準じた。

第3節 弥生時代中期下層 (図版141~144)

1. 河道

S R 30001 (70)

壺70が出土している。広口壺の口縁部の破片で口縁端部の上、下端にヘラによる刻みを付けている。

S R 30002 (62~65)

壺・甕・鉢が出土している。壺62は無文の広口壺で縦長球形の体部に短く開く口縁部を持つ。甕63・64は逆L口縁の63と外反する口縁と体部上半に装飾を持つ64とがある。63は逆L口縁に体部上半は櫛描直線文で飾る。64は体部上半を櫛描直線文を6帯施紋し、下3帯間には2列の三角列点文を施している。鉢65は口縁部が若干外反している。口縁端面はヘラによる斜格子が刻まれている。口縁下には櫛描直線文を加飾している。

2. 溝

S D 30002 (66・67・123)

壺・甕・鉢が出土している。壺66は底部の破片で厚く張り出した底部にハケ調整を施した体部が付く。壺67は口縁部が外反し体部上半に櫛描直線文を5帯加飾する大形品である。鉢123は厚く作られた底部の破片である。

S D 30006 (68・69)

壺・甕が出土している。壺68は短い頸部に外反する口縁部が付く広口壺である。体部上半は櫛描直線文により加飾されている。甕69は口縁部が外反し体部上半に櫛描直線文を加飾する。

S D 30010 (71~76・78~84・86~97・99~106)

壺・甕・鉢・甕蓋が出土している。壺は無装飾の広口壺71・72・82・83と櫛描文で飾る広口壺73・74・78~80・84・88と直口壺75と口縁部直下に突帯が巡る広口壺76と短頸壺81と小形の壺86と壺底部89とがある。無装飾の広口壺は小形のもの(71・72)と中形のもの(82・83)とがある。72は体部下半を横位と縦位のヘラミガキで仕上げている。加飾の広口壺は頸部から体部上半を櫛描直線文のみを施すもの73・34、櫛描直線文主体で櫛描波状文を施すもの79・80・84と櫛描直線文と櫛描波状文を交互に施すもの88とがある。口縁部の加飾は73が端面を櫛描波状文で飾り、端部に刻みを加えている。74は端部に刻みを施している。直口壺75は短く立ち上がる頸部から体部にかけて櫛描の直線文と波状文を交互に施文している。口縁部直下に突帯が巡る広口壺76は突帯および口縁端部に刻みを施している。短頸壺81は球形の体部に短く立ち上がる口頸部を持つ。体部上半は3条1単位の櫛描直線文と1条の櫛描波状文を交互に施文している。小形の壺86は口縁直下に櫛描波状文を施している。

甕は無文のハケ調整のもの91・92・96・97、無文でケズリ調整するもの93~95、口縁部が外反して体部上半を加飾するもの99~101、逆L口縁のもの102・103、口縁直下に突帯を付けるもの104、底部105・106とがある。無文のハケ調整の甕91・92・96・97は緩やかに外反する口縁部を持っている。97は口縁端部に刻みを付けている。無文でケズリ調整する甕93~95は体部を横位と縦位のヘラ削りを行い口縁部との間に稜を付けている。胎土は結晶片岩を含んでおり、紀伊からの搬入品である。なお底部105も同様に結晶片岩を含んでおり、紀伊からの搬入品である。口縁部が外反して体部上半を加飾する甕99~101は櫛描直線文と波状文を加飾しているもの99と櫛描直線文のみの加飾のもの100・101とがある。99は口縁部内面に櫛描波状文を加飾している。101は口縁端部に刻みを付けている。逆L口縁の甕102・

103は小形のもの102と大形のもの103とがあり、いずれも櫛描の直線文と波状文で飾っている。口縁直下に突帯を付ける甕104は突帯下を櫛描の直線文と波状文で飾っている。突帯には部分的に刻みが付けられている。鉢87は直線的に開いており、無文である。甕蓋90は深い笠形を呈している。

S D30011 (77・85・98)

壺・甕が出土している。広口壺77は頸部の破片で頸部下端に15条の貼付突帯を付け、さらに棒状浮文を加えている。口縁内面には貼付突帯による加飾がみられる。無頸壺85は短く立ち上がる口頸部を持つ。体部はハケによる調整のみで無文である。甕98は口縁部が外反する無文の甕である。口縁端部は刻みが付けられている。

3. 竪穴住居

S H30001 (108・109)

中央土坑から壺108・109が出土している。球形の体部の広口壺で頸部に櫛描直線文間隔をあけて複数巡らす。胎土は角閃石を含み黒褐色を呈する。生駒山西麓からの搬入品である。

S H30002 (110)

甕110が出土している。「く」字状に外反する口縁に加飾された体部上半を持つ。体部上半は多条の櫛描直線文に最下端のみ櫛描波状文を加飾する。体部下半は縦位のヘラミガキで調整している。

S H30003 (111～115・118～120)

壺・甕・鉢が出土している。壺111・113はいずれも口縁部の破片である。111は広口壺で拡張した口縁端面に細い竹管を刺突している。113は無文の広口壺である。甕115・118～120は加飾のあるもの115と無文のもの118～120とがある。前者は外反する口縁部に2帯以上の櫛描波状文で加飾された体部上半を持つ。後者は緩やかに外反する口縁部を持つ無文の甕である。鉢(112・114)は口縁部破片112と底部破片114とがある。112は拡張した口縁部に波状の突起を巡らす。拡張した部分には櫛描直線文を加飾している。114は張り出した底部に直線的に開く体部を持つ。体部は櫛描直線文で加飾している。

4. 土坑

S K30002 (107)

壺107が出土している。直立した口縁部の破片でやや拡張した口縁端面には櫛描直線文を施し、口縁直下には多条の櫛描直線文で加飾している。

5. 包含層 (116・117)

包含層から出土した主な土器を取り上げる。116・117は甕で、外反する口縁に加飾された体部上半を持つ。体部上半は多条の櫛描直線文に最下端のみ櫛描波状文を加飾する。いずれもS H30003の西方から出土しており、溝S D30010との関連で捉えたい。

第4節 弥生時代中期上層

1. 河道 (図版145~150)

S R 40001 (124~176)

壺・無頸壺・甕・鉢・高坏・蓋・イイダコ壺・マダコ壺が出土している。

壺には広口壺・有段口縁広口壺・直口壺・短頸壺などがある。広口壺は頸部に突帯を付けないもの(125・126・138)と頸部に断面三角形突帯を付けるもの(130・139・246)、頸部に指頭圧痕突帯を付けるもの(131)、「く」字状口縁のもの(166・170)とがある。125・126は体部を櫛描の直線文と波状文で飾り、125は口縁内面に櫛描列点文を加えている。126は口縁端面、内面とも櫛描波状文で飾っている。138は細頸の広口壺で口縁端部は垂下し、凹線文を巡らし、4個1単位の円形浮文を貼付けている。130は頸部下端に2本以上の貼付突帯を付け口縁端部は拡張し、凹線文を巡らし、部分的に棒状浮文を貼付けている。139は頸部下端に2本の貼付突帯を付け口縁端部は垂下し、凹線文を巡らし、棒状浮文と円形浮文を貼付けている。口縁部内面は直立した筒状の口縁を付けている。体部は櫛描の直線文と波状文で飾っている。246は頸部下端に2本の貼付突帯を付けている。口縁内面には2本の刻み目突帯が巡り、注ぎ口部は突帯を押しつぶして付けている。体部上半は櫛描の直線文と波状文で構成され、最下端は列点文が巡っている。131は頸部に退化した指頭圧痕突帯を付け、口縁端部は拡張し、凹線文を巡らし、部分的に棒状浮文を貼付けている。体部上半は櫛描直線文、最大径部分には櫛による列点文を加えている。166・170は口縁部が「く」字状に外反する広口壺である。166は口縁端部は凹線文を巡らしている。体部はハケ調整の後、下半は横位、縦位のヘラミガキを施している。170は体部上半を櫛描の直線文と波状文で飾っている。有段口縁広口壺140は外反した頸部に直立した口縁部が付く。口縁端部と有段部には刻みが付けられている。広口壺の底部(171・172)は大形のもの破片で、体部中位は横位のヘラミガキ、底部付近は縦位のヘラミガキを施している。

直口壺は口縁部に凹線文が巡るもの(133・134)と頸部最下端に突帯文が巡るもの(135)とがある。短頸壺は直立する口頸部に指頭圧痕突帯をもつもの(136)ともたないもの(137)とがある。137は口縁部に凹線が巡り、挟りがある。長頸壺141・142は卵形の体部にくびれずに長い頸が付く。口縁部は挟りをもち刻み目突帯と櫛描波状文で飾る。体部上半から頸部にかけては櫛描の直線文と波状文で飾る。

広口壺口縁124は口縁端部を垂下させ円形浮文を3列巡らし、内面は櫛描波状文で飾っている。広口壺口縁129は口縁内面に刻み目突帯を2条巡らしている。壺底部127は体部状半を櫛描直線文で飾っている。壺底部128は算盤形の体部上半を櫛描直線文と波状文で飾っている。壺底部132は頸部に突帯を巡らす壺と思われ、櫛描の櫛描直線文と波状文、斜格子文で飾っており、円形浮文を貼付けている。壺底部143は算盤形の体部に列点を施している。無頸壺155は球形の体部に内湾した口縁部が付く。口縁部には4条の凹線文を巡らしている。2個1対の紐穴があく。底部には凹線文を巡らした脚台が付く。

甕は小形のもの(161・167・168)と中形のもの(162・163・164・169)と大形のもの(165・173・174)とがある。いずれも口縁部は「く」字状に外反している。161~163は口縁端部に凹線文を巡らしている。鉢は内傾した口縁部をもつもの(144・145)と屈曲して立ち上がる口縁部のもの(150・154)とがある。前者は口縁部に凹線文を巡らし、145は円形浮文を貼付けている。また注口も付けられている。後者は大形で口縁部に凹線文を巡らすもの(150)と小形のもの(154)とがある。

高坏は水平口縁のもの(146)と屈曲して立ち上がる口縁部のもの(147~150)とがある。147は口縁

外面に3条の凹線文を巡らしている。149は口縁端部を拡張させ、外面に刻みを付けている。

脚台は背が高く、高坏のものと考えられるもの(156・157)と背の低いもの(158～160)とがある。159は脚端部を拡張させ、凹形浮文を貼付けている。蓋175・176は笠形でつまみは突出している。小形の壺の蓋である。イダコ壺151・152は丸底で口縁部に孔を穿っている。マダコ壺153は口径10.9cm、高さ22.3cmの碗弾形を呈し、平底である。口縁部と底部に外から孔を穿っている。

S R 40002 (177～187)

壺、水差、高坏などが出土している。

壺は広口壺、直口壺、短頸壺がある。広口壺には頸部の短いもの(177)と頸部の長いもの(178)とがある。177は口頸部の破片で、頸部最下端に1条の突帯が巡り、口頸部が大きく開く。口縁部は上下に拡張し、凹線文が巡り、棒状浮文を貼付ける。178は口径部の破片で大きく外方へ開き、口縁部を下方に拡張させている。口縁端部は凹線文を巡らし、凹形浮文を貼付けている。内外とも縦位のヘラ調整を行っている。直口壺179はやや外方に開く直立した口頸部をもち、口縁部はヨコナデを行っている。頸部下端には指頭圧痕突帯を巡らしている。体部上半はハケ調整の後、整っていない櫛状工具による直線文と、波状文を交互に施している。短頸壺(180・182・183)は外反した口縁部をもつもの(180)と直立する口縁部をもつもの(182・183)とがある。180は算盤玉形の胴部に短い口縁部が付く完形品である。頸部には2孔1対の紐穴がある。胴部上半は縦位のヘラミガキ、それ以外の内外は横位のヘラミガキを施している。182・183は直立する口縁部に凹線文が巡る。水差(181)は算盤玉形の胴部に断面扁平の環状の把手が付く。胴部は全体にハケ調整を施し、内面下半はヘラ削りを行っている。

高坏は坏部に水平の口縁部が付く単純なもの(184)と、水平口縁の端部が垂下し、坏部内面に突帯が付くもの(185)と、屈曲して立ち上がる口縁をもち、外面に凹線文を巡らす大形のもの(186)がある。高坏脚部(187)は脚端部が拡張する。脚部外面には螺旋状のヘラ描沈線文を施す。内面は横位のヘラ削りを施す。

2. 溝 (図版1150～153)

S D 40002 (212・213・235)

壺・鉢が出土している。

壺は212がほぼ全体の様相が判り、213は体部上半以上を欠くが両者とも同類である。頸部に2条の凹線を巡らす広口壺で口縁端部は上下に拡張し、内面に段を作り、凹線文を4条巡らす。体部上半はハケ調整の後、櫛状工具による列点文を2列施す。体部下半は、下方を縦位のヘラミガキ、最大径部を横位のヘラミガキ調整を行っている。体部下半の内面はヘラ削りを行っている。鉢235は内傾する口縁をもつ。体部は櫛描の波状文と直線文で飾り、凹形浮文を貼付ける。口縁端部にも凹形浮文を貼付ける。

S D 40003 (1158・188～193)

壺・高坏・甕・銅鐸形土製品が出土している。

壺は広口壺・直口壺・短頸壺がある。広口壺188は上方に向かってすぼまる体部に外反する口縁部が付く。口縁端部は下方に拡張し、凹線文を施し、部分的に凹形浮文を貼付けている。体部上半はハケ調整の上に、7条以上の櫛描直線文で飾っている。直口壺189は、口縁部から体部上半にかけての破片である。短頸壺190は口縁部は「く」字状に外反しており、口縁端部は若干拡張している。体部上半には櫛描による直線文、波状文、斜格子文が施されており、部分的に凹形浮文を貼付けている。

甕191は、小形の甕で口縁部は外反し、口縁端部は上方に拡張している。

高坏は坏部(192)と脚部(193)がある。192は水平口縁のタイプで口縁端部は垂下する。193はヘラ状工具による3状の沈線の間を長方形の透かし、ヘラ状工具による斜格子文、三角形抉りで飾っている。

銅鐸形土製品1158は鐸身の一部が欠損しており、貼付けていた鈕と鱗は全て剥離している。鐸身は横断面がほぼ円形で、表面はナデで丁寧に仕上げられており無文である。内面は指による粗いナデで、器厚は一様ではない。現在高9.2cm、裾の直径6.0cmである。身上部には表裏とも型持を模した直径0.5cmの孔を2孔ずつあけている。舞部分は直径2cm程度の面を作り、中央に型持を模した直径0.5cmの孔をあけている。鈕と鱗の剥離は幅約1.5cmである。

S D 40004 (194~211・1150・1152)

壺・甕・高坏・器台・イイダコ壺・土製紡錘車が出土している。

壺は広口壺・有段口縁壺・直口壺・細頸壺がある。広口壺は頸部下端に突帯を巡らす壺(194・195)と口縁が大きく外反する大形の壺(196)とがある。194は頸部下端に2本の貼付け突帯を巡らし、口縁は外方に弯曲させ、円形浮文と円形竹管文によって加飾している。195は頸部に3条の貼付け突帯を巡らし口縁端部は下方に垂下させ、端部は櫛描の波状文と円形浮文で加飾している。口縁内面は櫛描の列点文と扇形文によって加飾している。体部上半は櫛描直線文を施している。196は、大きく広く口頸部に下方に拡張する口縁部をもつ大形の壺である。有段口縁壺197は内弯する口縁部の外面に粘土帯を貼付け、段を作り出している。口縁端部外面に刻みを加えている。直口壺198は比較的短く直立した口頸部の中程にヘラ先の列点文を巡らす。細頸壺199は口頸部から延びる体部にヘラ先の列点文を巡らす。

甕は小形のもの(205・206)、中形のもの(207~209)、大形のもの(210・211)とがある。口縁部は「く」字状に外反しており、205・208・210は口縁端部を上方に拡張させている。211は口縁端部に刻みを入れている。

高坏は200が屈曲して立ち上がる口縁部をもち、外面に凹線文を巡らしている。201は弯曲して立ち上がる口縁に拡張した口縁端部をもち、円形浮文を貼付け、全体にヘラミガキで調整している。202は脚部の破片で外面は縦位のヘラミガキ、脚内面は横位のヘラ削りを行っている。

器台203は口径に比して背の低い、中央部がくびれた円筒形である。全体にヘラ削りによって調整されている。イイダコ壺204は口縁部に1孔を穿ち、丸底である。

土製紡錘車(1150・1152)は壺を利用したもので、1150は土器片を打ち欠いたままで、孔もあけていない。1152は孔をあけ、縁を研磨している。

3. 平地住居(図版174~179)

S B 40002 (411~446)

S B 40002から出土した土器群は一時期の洪水による洪水砂に埋没した一括性高い遺物であり、壺・鉢・高坏・甕などがある。

壺は広口壺・大形広口壺・広口太頸壺・直口壺・有段口縁壺がある。

広口壺は頸部に突帯を付け、胴部を櫛描文で飾るもの(411~415)と、頸部に突帯を付け、胴部に烈点文を付けるもの(421)、胴部に突帯を付け、胴部を斜格子文で飾るもの(422)の3種類に分類される。411~415はいずれも頸部最下端に複数の突帯を巡らし、口縁部に凹線文を巡らす。胴部上半は櫛描文で飾っている。頸部突帯の数は411・412が2本、413が3本、414・415が4本である。口縁端部は、411~413が上下に拡張し、411・413は内面に段を作る。414・415は口縁端部が大きく垂下している。口縁端部は凹線文で飾り、さらに411は後者の円形浮文と棒状浮文を交互に貼付けたり、413は円形浮文を

2段貼付けたり棒状浮文を貼付けるものもある。口縁内面の加飾は、415の3列に巡る扇形文があるだけである。413～415には2孔1対の紐穴がある。頸部はいずれも縦方向のハケ調整を残すが415は突帯上方に櫛描の波状文と直線文を巡らしている。体部は上半はヘラミガキを施している。412は波状文1段と直線文3段で、最下段は波状文で終わっている。413は直線文を5段施している。414は直線文、波状文を組合せ、直線文で終わっている。415は直線文、波状文を交互に組合せ波状文で終わっている。体下半のヘラミガキは、最大径部を横方向のヘラミガキを行い、413・414の最下段の櫛描直線文の一部もミガキつぶしている。その後下方に縦位のヘラミガキを行っている。最後に底部周囲をヨコナデして仕上げている。421は、頸部下端に突帯を、口縁部は凹線文を巡らし、体部に列点文を施している。頸部下端の突帯は2本で、口縁端部は上下に拡張し、端面には凹線文を巡らしている。頸部は縦ハケを施している。422は、口縁部を欠くが、頸部がすぼまり、球形の胴部が付く。頸部最下端には、5条の貼付け突帯が付いている。胴部は、上半を櫛描文で飾り、下半をヘラミガキ調整している。櫛描文は上から順に施文しており、直線文の間を波状文、斜格子文で埋めている。胴下半は、下方を縦位のヘラミガキ、最大径部を横位のヘラミガキ調整を行っている。

416・417は口縁部の破片で、端部は拡張しており、416は波状文を巡らしており、417は2本の凹線文を巡らしている。419・420は口頸部を欠く広口壺で、体上半部は斜めハケ調整の後、2段の列点文を巡らしている。体下半は、下部を縦位のヘラミガキの後、最大径部を横位のヘラミガキしている。428は口頸部を欠く広口壺で、体部上半は櫛描の波状文と直線文で飾られている。

大形の広口壺(418・423・429～432)は頸部下端に断面三角形貼付け突帯をもつものと頸部下端に指頭圧痕突帯をもつものがある。卵形の胴部に大きく開く口頸部が付く。

頸部下端に断面三角形貼付け突帯をもつ大形の広口壺(429)は、最大径は口縁部にある。頸部最下端に3条の貼付け突帯を巡らし、口縁端部はやや拡張させ、斜めの刻みを付加する。調整は頸部、および胴部の一部に縦ハケが残っているが、残りがよくないため胴下部にヘラミガキを施しているかは不明である。頸部下端に指頭圧痕突帯をもつ大形の広口壺(430・432)は、頸部最下端に1条の指頭圧痕突帯を付し、口縁が垂下するもの(430)と、頸部最下端に2条の指頭圧痕突帯を付し、口縁端部を上下に拡張させ、凹線文を巡らし、棒状浮文と円形浮文を加飾するもの(432)とがある。

418・431は大形の広口壺の口頸部で、口縁端部を上下に拡張させ、凹線文を巡らし、棒状浮文を付けている。423は大形の広口壺の底部である。

太頸広口壺は、頸部と胴部の境界が明確でない。424は細身で425・426は太身である。426は口縁を欠くが、424・425は口縁部が拡張し、凹線文を施し、424は円形浮文を、425は棒状浮文を貼付けている。胴部はハケ調整の後上半部は櫛描直線文で飾っている。下半部は424が縦位のヘラミガキのみで調整し、425・426は最大径部に横位のヘラミガキで調整している。後者は口縁部を欠く。胴部はハケ調整の後、上半部は櫛描の直線文、波状文で飾り、最下端は直線文である。下半部は縦位のヘラミガキを施している。

有段口縁広口壺434は口縁端部と屈曲部に刻みを付け、口縁部は櫛描の斜格子文で飾っている。頸部下端に2段の指頭圧痕突帯を貼付けている。胴部は球形をなし、外面はヘラミガキを施している。

直口壺は装飾のもの(427)と無装飾のもの(433)とがある。427は口縁部を欠くが、体部上半を櫛描の直線文と波状文で飾っている。433は口縁部がやや外上方に直立し、口縁部は2条の凹線を巡らす。2個1対の紐穴がある。胴部は卵形で、上半から口頸部にかけてはハケ調整を行い、下半は縦位のヘ

ラミガキを行っている。

高坏435は屈曲して立ち上がる口縁部をもち、外面に4条の凹線文を巡らしている。437は高坏の脚部で、端部は拡張させ、外面は縦位のヘラミガキ、内面は横位のヘラ削りで調整している。

鉢は段状口縁のもの(439)と口縁が内湾気味のもの(436・446)とがある。439は大形で浅く、段状口縁で、低い脚台が付く。脚台端部は拡張している。446は中形、436は大形で口縁部外面は複数の凹線文が巡る。438は脚台部の破片で端部は拡張し、内面は横位のヘラ削りを行っている。

甕は小形のもの(440)と中形のもの(443・444・445)と大形のもの(441・442)とがある。いずれも「く」字状口縁で口縁端部は上方に拡張し、端部は面を作っている。体部はハケによる調整が基本であるが、外面下半はヘラ削りの後、縦位のヘラミガキを行う。内面下半は縦位のヘラ削りを行う。

4. 竪穴住居(図版180・181・183)

S H30001 (468)

S H30001からは壺468が出土している。

S H40002 (470)

甕470が出土している。小形の甕で口縁部は外反し、口縁端部は丸く納める。体部外面と内面上半は縦位のハケで調整している。

S H40003 (465～467・471)

壺・甕が出土している。壺は広口壺の口縁部の破片である。465は頸部に突帯を巡らさない非装飾壺である。466は頸部最下段に指頭圧痕突帯を巡らす壺で口縁部には装飾を施さない。467は口縁端部に刻みを施し、内面は2条の突帯と櫛描の波状文で加飾している。甕471は中形の甕で口縁部は外反し、口縁端部は丸く納める。

S H40004 (464・469)

壺・甕が出土している。壺464は広口壺の口縁部の破片で、口縁部は外反する。装飾は施していない。甕469は小形の甕で口縁部は外反し、口縁端部は丸く納める。体部外面は縦位のハケで調整している。

S H40005 (462・463)

壺・甕が出土している。壺462は広口短頸壺で大きく張った体部に外反する短い口頸部が付く。頸部最下段には指頭圧痕突帯を巡らす。口縁端部を若干拡張させ、ヘラ状工具により斜格子文で加飾している。甕463は小形の甕で口縁部は外反し、口縁端部は丸く納める。

S H40007 (447～461)

壺・甕・高坏が出土している。壺は広口壺(447・448)と広口短頸壺(453)と直口壺(449)短頸壺(450)とがある。447は頸部に突帯を巡らす広口壺で口縁端部は拡張し、凹線文を巡らしている。448は広口壺の口縁部の破片で装飾は施していない。453は広口短頸壺の口頸部の破片で頸部に指頭圧痕突帯を巡らす。口縁端部はヘラによる斜格子文で飾り、部分的に円形浮文を貼付ける。449は口頸部の破片でやや外傾し、口縁部は強くヨコナデを施している。450は無花果形の体部に短く外反する口頸部が付く。口縁端部は刻みを付ける。451・452は非装飾壺の底部である。

甕(454～459)は大形のもの(454・455)と中形のもの(456～459)とがある。口縁部は「く」字状に外反しており、口縁端部は拡張しない。高坏(460・461)は脚部の破片である。

S H40009 (482)

壺482が出土している。口縁部が垂下する広口壺で、口縁端部には凹線を巡らし、2本1単位の棒状

浮文を付けている。

S H40011 (475)

壺475が出土している。頸部に突帯を巡らさない直口壺である。

5. 水田 (図版153)

洪水砂礫 (227・229・232)

壺が出土している。壺は広口壺(227・229)と短頸壺(232)とがある。227は外反する口頸部に口縁端部を下方に拡張させ端部に斜格子文を付ける。229は櫛描の直線文と刻みを施した広口壺の破片である。232は卵形の体部に直立した短い口頸部が付く。

水田土壇 (228・230・233・234)

広口壺が出土している。228は太頸広口壺で口縁端部を垂下させ凹線文を巡らし、刻みを加える。口縁内面には2列の扇形文を加飾する。体部は櫛描の直線文と波状文で飾る。230は口縁部を「く」字状に外反させ、頸部に指頭圧痕突帯を付ける。口縁端部は拡張させ、刻みを付け円形浮文を巡らす。233は外反した口頸部に3条の指頭圧痕突帯を付け、体部は櫛描の直線文と波状文で飾る。234は口頸部を欠き、体部上半は櫛描の直線文、斜格子文、波状文で飾る。

大畦畔 (231・236～238・240)

壺・甕・鉢・高坏・マダコ壺が出土している。

壺(231)は算盤形の体部に僅かに内弯する口縁をもつ細頸壺で、口頸部から体部上半にかけては櫛描の直線文で飾る。甕(243)は口縁部を「く」字状に外反させ、口縁端部を僅かに上方に拡張させる小形の甕である。鉢(236・237・240)は大きく開き、口縁部が若干内弯するもの(236)と口縁部が内傾するもの(237)と底部(240)とがある。236は口縁部に凹線文を巡らす。237は口縁部にヘラ描で上向きの鋸歯文で飾り、棒状浮文を付けた凹線文、櫛描の簾状文、斜格子文、波状文、直線文で飾っている。底部には脚台が付く。240は短い脚台で円孔の透かしを巡らす。

高坏(238)は坏部が大きく開き、口縁部が若干内弯する。脚部は太く短い。

マダコ壺(242)は口径12.2cm、高さ22.1cmで平底の砲弾形を呈す。口縁部は欠いているため不明であるが、底部に1孔穿つ。体部下半にも焼成後の穿孔がある。

S D40002大畦畔上 (239)

大畦畔上からは高坏239が出土している。口縁部は屈曲して立ち上がり、外面に1条の凹線文を巡らしている。脚部は端部を拡張させ、外面は縦位のヘラミガキ、内面は横位のヘラ削りで調整している。

6. 土坑 (図版181～185)

S K40001 (517)

把手付鉢517が出土している。小形の直線的に大きく開く鉢に縦位に把手を付ける。把手ははめ込み式で、断面は円形であるが欠損している。

S K40004 (472～474・476～480)

壺・水差・甕が出土している。

壺は広口壺のみで、頸部に突帯を付けないもの(476)と頸部最下段に1本の突帯を付けるもの(477)、頸部最下段に3本の凹線文を巡らすもの(478)、頸部最下段に指頭圧痕突帯を巡らすもの(479)がある。また有段口縁の広口壺480もある。口縁部は476～478が上下に拡張し、479が垂下させている。いずれも凹線文を多く用い装飾している。477・479は円形浮文を、478は棒状浮文を付けている。口縁内面

には縷状文と扇形文で加飾している。体部の文様は476は櫛描の直線文と波状文で加飾している。477・478は櫛状工具の列点文を施している。479は櫛描の直線文、波状文と斜格子文で加飾し、円形浮文を貼付けている。体部下半は476は不明であるが、477～479は上部を横位のヘラミガキ、下部を縦位のヘラミガキで調整している。480の有段口縁広口壺は口縁部の段が退化しており、内弯気味に立ち上がっている。外面は3条の凹線を巡らしている。頸部は指頭圧痕突帯を巡らしている。474は壺底部である。

水差473は球形の体部に直立する口頸部が付く。また体部上半から把手を差し込み付けている。また底部には脚台を付けているが、脚端部は欠いている。甕472は大形の甕で口縁部の破片で、口縁部は「く」字状に外反しており、口縁端部は上方に拡張し、面を作る。

S K 40007 (502・509・510)

甕(502・509・510)が出土している。大形の甕の口縁部の破片で、口縁部は「く」字状に外反している。502は口縁端部下方に刻みを巡らしている。

S K 40008 (481・489・492)

壺(481・489・492)が出土している。481は広口壺の口縁部の破片で、口縁端部は下方に拡張し3条の凹線文を巡らす。また部分的に円形浮文を貼付けている。489は広口短頸壺で、口縁部は「く」字状に外反し、頸部に指頭圧痕突帯を巡らしている。492は直口壺の口縁部の破片で、外面は縦方向のハケを施し、口縁端部はヨコナデを行っている。

S K 40009 (501)

甕(501)が出土している。大形の甕の口縁部の破片で、口縁部は「く」字状に外反している。口縁端部は上方に拡張し、面を作る。

S K 40012 (490)

壺(490)が出土している。有段口縁広口壺で、口縁部の段は内弯気味に立ち上がっている。頸部は2列の指頭圧痕突帯を巡らしている。

S K 40013 (520)

無頸壺(490)が出土している。直立気味に内傾する口縁部の破片で、口縁直下に1条の沈線が巡っている。沈線の下には小孔をあけている。

S K 40014 (507)

甕(507)が出土している。中形の甕で底部を欠く。口縁部は「く」字状に外反し、口縁端部は丸く納める。体部は内外とも縦方向のハケ調整を行い、口縁部はヨコナデを行っている。

S K 40015 (483・513・515・516)

壺・無頸壺・蓋が出土している。

483は頸部に3条の凹線文を巡らす広口壺で体部を欠いている。口縁端部は上下に拡張し3条の凹線文を巡らす。また部分的に円形浮文を貼付けている。515は「く」字状口縁の無頸壺である。口縁端部は拡張し、凹線文を巡らし、円形浮文を全面に付けている。頸部には2孔1対の紐穴がある。体部から底部にかけての内外面はよくヘラミガキしている。513は甕蓋で袋笠形を呈している。口縁端部は下方に拡張している。516は直口の小型の鉢である。口縁部は4条の凹線文が巡っている。

S K 40016 (491・514)

S K 40016からは壺・鉢が出土している。壺491は直口壺の口縁部の破片で、口縁部と頸部に多条の凹線文を巡らしている。514は口縁部は「く」字状に外反し、口縁端部は上方に拡張している。体部上半

は横位のヘラミガキを施し、口縁部はヨコナデを行っている。

S K 40017 (487)

S K 40017からは壺487が出土している。頸部に突帯を巡らさない広口壺で、口縁部は外反し、端部と内面に円形刺突を巡らしている。体部は櫛状工具による直線文と波状文で加飾し、波状文の間には円形刺突を巡らしている。

S K 40018 (504)

S K 40018からは甕504が出土している。小形の甕で口縁部は外反し、口縁端部は丸く納める。

S K 40021 (484・485)

S K 40021からは壺(484・485)が出土している。広口壺の口縁部の破片で、484は口縁端部を上下に拡張し端部と内面に櫛状工具による波状文で加飾している。内面はさらに扇状文を施している。485は口縁端部を下方に拡張し3条の門線文を巡らす。また部分的に2段の円形浮文を貼付けている。内面には扇状文を施している。また2孔1対の紐穴もある。

S K 40022 (505・506・522)

S K 40022からは甕・脚が出土している。甕(505・506)は中形の甕で、口縁部は「く」字状に外反し、口縁端部は上方に拡張している。脚522は脚付無頸壺の脚部の破片で楕円形の透かしを穿っている。

S K 40023 (493・521)

S K 40023からは壺・高坏が出土している。

壺493は頸部に突帯を巡らさない直口壺で、体部下半はヘラ削りの後、縦方向のヘラミガキを行っている。高坏521は脚を欠く。坏部に水平の口縁部が付き口縁端部は垂下し、坏部内面に突帯が付く。

S K 40031 (486・488・494・496・499・500)

S K 40031からは壺・甕が出土している。

486は頸部に突帯を2条以上巡らす広口壺で、口縁端部を下方に拡張し3条の門線文を巡らす。また部分的に5個3段の円形浮文を6単位貼付けている。内面には2列の扇状文を施している。488は頸部に指頭圧痕突帯を巡らす広口壺で、口縁端部は単純である。494は頸部に突帯を巡らさない直口壺で、底部を欠く。全体にハケ調整を行い、体部下半は縦方向のヘラミガキを行っている。496は甕類似の広口壺である。「く」字状に開いた口頸部のやや拡張した口縁端部に刻み目を付ける。

499・500は大形の甕で口縁部は「く」字状に外反している。499は口縁端部は上方に拡張している。

S K 40041 (519)

S K 40041からはイダコ壺が出土している。丸底で口縁直下の紐穴部分は欠けている。

S K 40043 (495・503)

S K 40043からは壺・甕が出土している。

495は直口壺の体部から底部にかけての破片である。底部外面は縦方向のヘラミガキを行っている。

503は小形の甕で口縁部は外反する。体部から底部にかけての外面はヘラ削りを行っている。

S K 40044 (511)

S K 40044からは甕511が出土している。大形の甕の口縁部の破片で、口縁部は「く」字状に外反しており、口縁端部は面を作る。

6. 土器棺 (図版186~188)

S P 40001 (523~526)

S P 40001からは壺、高坏、甕が出土している。壺には広口太頸壺と細頸壺とがある。

広口太頸壺523は球形の体部に大きく開く口頸部をもつ。口縁部は強くヨコナデを施し、口縁端部に円形浮文を貼付けている。頸部から体部にかけては櫛描直線文を主体とした文様を施し、1列のみ波状文を巡らしている。体部下半は縦方向のヘラミガキで調整している。細頸壺526は、無花果形の体部にやや広がる口頸部が付く。また、底部には低い脚台が付く。口縁部は3条の刻み目突帯を付け、注ぎ口の扶りを付けている。頸部から体部上半にかけては櫛描の直線文6列を施し、体部上半には櫛描の斜格子文を施し、円形浮文を貼付けている。脚台は円孔透かしを付けている。高坏524は坏部の口縁が内弯気味に立ち上がり、口縁端部に刻みを付ける。脚台部は欠いている。甕525は小形の甕で口縁部は「く」字状に外反している。口縁端部は単純である。体部外面は外方向のハケ調整を行っている。

S P 40002 (527・528)

S P 40002からは壺、甕が出土している。

壺528は短頸壺である。卵形の体部に直立する短い口縁部をもつ。頸部には指頭圧痕突帯を巡らしている。体部下半は縦方向のヘラミガキで調整している。甕527は小形の甕である。

S P 40003 (534・535)

S P 40003からは高坏、甕が出土している。高坏534は坏部が大きく開き、口縁部が若干内弯する。口縁端部は面を作り、強くナデている。内外面とも縦方向のヘラミガキで調整している。脚部は欠いている。甕535は無花果形の体部に「く」字状の口縁部が付く。口縁端部は上方に拡張している。体部下半は内外ともに縦方向のヘラミガキで調整している。

S P 40004 (529)

S P 40004からは壺が出土している。壺529は甕類似の広口壺である。「く」字状に開いた口頸部のやや拡張した口縁端部に刻み目を付ける。体部上半はハケ調整の後、列点文を1列巡らす。体部下半は横・縦のヘラミガキ調整を行っている。

S P 40005 (530・531)

S P 40005からは壺、甕が出土している。

壺530は球形の体部に短く外反する口縁部が付く。口縁端部は拡張し、円形浮文を貼付ける。頸部には指頭圧痕突帯を巡らしている。体部はハケ調整の後上半は櫛描による直線文と波状文を交互に、下半は縦方向のヘラミガキを施している。甕531は無花果形の体部に「く」字状の口縁が付く大形の甕である。体部の調整はハケメを施し、外面下半はヘラ削りを行っている。

S P 40006 (532・533)

S P 40006からは高坏、甕が出土している。

高坏532は坏部口縁が内弯気味に立ち上がる。口縁外面に2条の突帯を貼付け、刻みを付け、棒状浮文を貼付けている。坏部の調整は内外ともヘラミガキを行っている。脚部は欠くが、坏部と脚部の接合部に1条の貼付け突帯を巡らしている。甕533は小形の甕で、無花果形の体部に「く」字状の口縁が付く。口縁端部は拡張しない。体部は内外面ともハケ調整を行っている。

S P 40007 (536・537)

S P 40007からは壺が2个体出土している。

完形の壺537は、無花果形の体部に「く」字状に外反する口縁部が付く。口縁端部には刻み目を付けている。体部はハケ調整の後、最大径部に横方向のヘラミガキ、下半に縦方向のヘラミガキを施してい

る。体部下半のみの壺536は球形の体部下半で、外面の最大径部は横ヘラミガキ、下半は縦位のヘラミガキを行っている。内面は縦方向のハケ調整を行っている。

7. 方形周溝墓 (図版154～173)

S X 40001-S X 40005間 (349)

鉢349が出土している。直線的に開く体部に外反する口縁部が付く。

S X 40001南溝 (263)

S X 40001南溝からは壺263が出土している。加飾する広口壺の口縁部で口縁内面に刻み目突帯を巡らし、口縁端部は拡張し、端面は波状文を巡らしている。

S X 40002-S X 40010間 (278)

壺278が出土している。口頸部を欠く広口壺で頸部に突帯をもたないタイプで、体部上半は櫛描の直線文と波状文で飾っている。

S X 40003-S X 40010間 (259・274・297・360)

壺・甕が出土している。

壺は装飾する広口壺(259・274)と装飾しない広口壺(297)とがある。274は頸部下端に3条の指頭圧痕突帯を付け、口頸部が大きく外方に開く。口縁端部は拡張し上下に刻みを加える。口縁内面は注ぎ口を表現した櫛描による波状文を施す。体部上半は櫛描による波状文と直線文で飾り、最下端に列点文を施す。259は口頸部を欠く。体部上半は櫛描による波状文と直線文で飾っている。297は卵形の体部に短く外反する口頸部が付く。体部の最大径部にヘラ先列点文が巡る。

甕360は口縁部が「く」字状に外反する大形のものである。

S X 40004-S X 40009間 (322)

細頸壺322が出土している。卵形の体部に直線的に開く口頸部が付く。体部上半には細い竹管による2列の刺突文が2帯付されている。

S X 40005-S X 40007間 (262)

壺262が出土している。頸部下端に断面三角形突帯を3条巡らす広口壺である。口縁端部はヘラによる斜格子文で飾り、口縁内面は2状の刻み目突帯を巡らし、注口部を設けている。

S X 40006-S X 40009間 (346)

鉢346が出土している。口縁部が「く」字状に外反する小形のものである。

S X 40006-S X 40010間 (260・295・302)

壺(260・295・302)が出土している。260は体部を欠く。頸部下端に5条の貼付け突帯文を巡らし、大きく開いた口頸部の口縁内面に注ぎ口を表現した刻み目突帯文を付け波状文で飾っている。295は口縁部を欠く。卵形の体部最大径部にヘラ先列点文を巡らす。302は底部を欠く。球形の体部に大きく開く口縁部が付く。無文である。

S X 40007 (377)

S X 40007盛土からは甕377が出土している。小形の底部破片で、外面はヘラミガキを行っている。

S X 40009-S X 40010間 (280・293)

壺(280・293)が出土している。280は頸部に突帯をもたない広口壺で体部上半は櫛描の直線文と波状文で飾る。293は卵形の体部に短く外反する口頸部をもつ広口壺で、体部上半にヘラ先の列点文を付ける。

S X 40010 (279)

S X 40010の盛土からは壺279が出土している。頸部は突帯をもたず、櫛描の直線文を施す広口壺である。口縁端部は下方にやや拡張している。

S X 40010-S X 40012間 (374・401)

甕・脚が出土している。甕374は口縁部が「く」字状に外反する大形のものである。底部を欠く。脚401は高坏のものと考えられ、比較的太い。

S X 40010-S X 40013間 (257・266・319・324・351・382)

壺・鉢・イイダコ壺が出土している。

壺は広口壺(257・266・382)と直口壺(319)と細頸壺(324)とがある。257は体部を欠く。頸部下端に突帯文を貼付け、口頸部は外方に大きく開く。頸部は突帯文の上部に櫛描の波状文と直線文を加飾している。口縁端部は拡張し、櫛状工具で刻みを付けている。266は頸部下端に3条の貼付け突帯文を巡らし、棒状浮文を貼付ける。口頸部は大きく外方に開き、口縁部は垂下する。口縁内面には2条の刻み目突帯文を付け櫛描の半円文で飾っている。口縁端部は櫛描の波状文で加飾している。体部上半は櫛描の直線文、波状文、斜格子文で飾っている。382は口縁部が「く」字状に外反する広口壺である。319は卵形の体部に直立した口頸部をもつ直口壺である。324は口縁部を欠く細頸壺で、筒盤形の体部に細い頸が付く。頸部から体部上半にかけては櫛描の直線文と波状文で飾っている。

鉢351は体部が直線的に開く鉢で、口縁端部はヘラによる斜格子文で飾り、外面は刻み目を付ける。

イイダコ壺(388)は丸底で口縁部に小孔を穿っている。

S X 40010-S X 40014間 (341・383)

壺(341・383)が出土している。383は口縁部が「く」字状に外反する広口壺である。341は細長い体部の上半を櫛描の直線文を施す。体部上半以上を欠いている。

S X 40010-S X 40017間西 (244・250・255・256・261・268・277・288・294・331・366)

S X 40010-S X 40017間西溝からは壺・甕が出土している。256のみはS X 40010の盛土内から出土した土器片が接合している。装飾する広口壺(244・250・255・256・261・268・277・288・331)と装飾しない広口壺(294)とがある。244・250・255・256・261は頸部下端に貼付け突帯文を巡らし、外方に開く口頸部が付く。255は口縁部を欠き、250は単純な口縁部を作り出す。256は口縁端部に櫛状工具による列点文が加えられている。261は口縁内面に注ぎ口部を設けた刻み目突帯を付け、櫛描波状文で飾っている。いずれも体部上半は櫛描の直線文と波状文で飾っている。255・261は体部下半に焼成後の穿孔がある。288は頸部に突帯文をもたない広口壺で口縁内面は櫛描の波状文を施し、体部上半は櫛描の波状文と直線文で飾っている。268は体部上半の破片で、櫛描の直線文、波状文、斜格子文で飾っている。277・331は口頸部を欠き、体部上半は櫛描の直線文と波状文で飾っている。294は短く開く口頸部が付く無装飾系の広口壺で、体最大径部にヘラ先の列点文を付ける。

甕366は口縁部が「く」字状に外反する小形のものである。底部内外面はヘラミガキを施している。

S X 40010-S X 40017間東 (248・253・338・373)

S X 40010-S X 40017間東溝からは壺・甕が出土している。壺は広口壺と短頸壺とがある。広口壺は頸部下端に2条の貼付け突帯文を巡らし、248は口縁端部に刻みを付けている。253は体部上半に櫛描による直線文と波状文を施している。338は体部から直線的に開く短い口頸部をもつ短頸壺である。

甕(373)は口縁部が「く」字状に外反する中形のものである。外面には煤が付着している。

S X 40010-S X 40020間 (267・334・385)

壺・鉢が出土している。壺は広口壺の口縁部と底部とがある。267は、広口壺の口縁部で口縁端部は口縁内面より下まで外反している。口縁内面には刻み目突帯が2条巡っている。334は上半部を欠く広口壺である。体部上半は櫛描の直線文と波状文で飾っている。鉢385は、口縁部が「く」字状に外反している。外面は縦位のヘラミガキ、内面はハケ調整を施している。

S X 40011 (363)

S X 40011盛土からは甕363が出土している。口縁部が「く」字状に外反する小形のものである。外面は板状工具によるナデで調整し、口縁部はヨコナデを行っている。

S X 40011-S X 40012間 (342・364・368・398)

壺・鉢・高坏が出土している。壺(364・368)は口縁部が「く」字状に外反する中形のものである。口縁端部は丸く納めている。鉢342は大きく外方に開く小形の鉢である。高坏398は大きく開く坏部に外反する短い口縁部をもつ高坏で、脚部は太く安定している。円板充填法で接合している。

S X 40011-S X 40013間 (350)

鉢350が出土している。直線的に開く体部に外反する口縁部が付く。体部下半はヘラミガキを行っている。

S X 40013-S X 40014間 (292・308・317・320・330・372)

壺・甕が出土している。壺は装飾しない広口壺と直口壺(308・317・320・330)とがある。広口壺は卵形の体部に短く開く口頸部が付く。体部最大径にヘラ先の列点文を付ける。直口壺は卵形の体部に直立した口頸部が付く。317は口縁部に挟りを設け、330は口頸部を櫛描の波状文と直線文で飾っている。口縁端部には刻みが付けられている。

甕372は口縁部が「く」字状に外反する中形のものである。口縁端部は若干、上方に拡張している。

S X 40013東 (291)

S X 40013東溝からは壺(291)が出土している。口縁部を欠く広口壺で頸部下端は櫛描の糜状文が施され、体部上半は櫛描の直線文と波状文を加飾し、各文様間はヘラミガキを施している。

S X 40013-S X 40016間 (344・359・362)

鉢・甕が出土している。鉢344は外側に直線的に開く小形品である。口縁下方には列点文を巡らしている。内外とも縦位のヘラミガキで調整している。甕は底部を欠くものと底部とがある。362は口縁部が「く」字状に外反する小形のものである。359は小形の甕底部である。

S X 40014もしくは S X 40010 (336)

S X 40014盛土内と S X 40010-S X 40014間溝、S X 40013-S X 40014間溝、S X 40010-S X 40017間溝東から出土した破片が接合した。このことから本来、S X 40014もしくは S X 40010に供えられた土器が S X 40010-S X 40014間溝に転落し、再び盛土し、最転落したものと考えられる。336は口頸部を欠く広口壺で体部上半は櫛描の直線文と波状文で飾る。

S X 40014-S X 40015間 (245・272・284・303・315・323・326・380)

壺が出土している。壺には広口壺・直口壺・細頸壺がある。広口壺は頸部に2条の突帯を巡らすもの、指頭圧痕突帯を巡らすもの、突帯を巡らさないもの、「く」字形口縁をもつ非装飾のもの380とがある。245は短い口頸部に、垂下する口縁部をもつ。口縁端部には刻みが、口縁・内面には扇形文を加飾している。体部上半は櫛描の波状文と直線文で加飾している。272は口縁端部下端に刻みを入れ、体部は櫛

描の直線文を主体に下端のみ波状文で加飾している。直線文のつなぎ目は扇形に加飾している。なお、体部下半には焼成後の穿孔がある。284は短い口頸部に垂下した口縁部をもち、端面には円形浮文を貼付ける。体部は櫛描の直線文・波状文で加飾し、最下端は貝殻による列点文が巡っている。底部は焼成後の穿孔をしている。380は「く」字状に口縁をもつ甕に類似した壺で、装飾は施していない。体部下半は横位と縦位のヘラミガキで調整している。

直口壺は頸部に2条の突帯を巡らすもの(326)と、突帯を巡らさないもの(303・307・315)がある。315は体部上半に櫛状工具による「U」字状の装飾がみられる。細頸壺(323)は扁平な体部がやや外方に開き、口縁部が内湾する口頸部をもち、低い脚台を付ける。口頸部から体部上半にかけて櫛描の波状文と直線文で飾り、体部上半には円形浮文を付ける。

S X 40014東 (314・318)

S X 40014東溝からは直口壺が出土している。卵形の体部に直立した口頸部が付く。314は頸部下端にヘラ先による列点文を施している。318は口縁部に抉りを設け、体部最大径部にヘラ先による列点文を施している。

S X 40018南 (305)

S X 40018南溝からは直口壺305が出土している。卵形の体部に直立した口頸部が付く。内外ともハケ調整を行い、体部外面は縦位のヘラミガキを施している。

S X 40021-S X 40022間 (264・271・282・408)

S X 40021-S X 40022間溝からは壺・鉢・台形が出土している。

壺は広口壺(282・271・264)と底部の破片(408)とがある。271は頸部に指頭圧痕文突帯をもち、その直上を櫛描の直線文で飾っている広口壺である。282は頸部に突帯をもたない広口壺で、口縁端部は刻みを施し、円形浮文を貼付けている。体部上半は櫛描の波状文と直線文で飾っている。264は体部上半は櫛描の直線文と波状文で飾っており、体部下半は横位、縦位のヘラミガキで調整している。体部下半に焼成後の穿孔がある。408は底部破片で外面は縦位のヘラミガキ、内面はヘラ削りで調整している。

鉢393はやや内湾する口縁をもつ。最大径部にヘラ先の列点文を施している。台形土器393は台部のみ破片である。

S X 40022-S X 40027間 (247・313)

壺が出土している。247は頸部最下端に2条の貼付け突帯文を巡らす広口壺である。口縁内面には2条の刻み目突帯文が付けられ、体部上半は櫛描の直線文と波状文で飾り、最下端は2列のヘラ先列点文を付けている。313は卵形の体部に直立する口頸部が付く直口壺である。体部上半には櫛状工具の列点文を付けている。

S X 40022-S X 40028間 (264・276・281・290・296・410)

壺が出土している。壺は頸部に突帯をもたない広口壺と装飾の無い広口壺とがある。276・281は卵形の体部に外反する口頸部が付く。体部上半は櫛描の直線文と波状文で飾っている。281の口縁端部は刻みを加えている。296は下膨れの体部に短く開く口頸部が付く。体部中程にヘラ先の列点文が付けられている。290は口縁部を欠く。体部上半は櫛描の波状文と直線文で飾っている。264は体部下半に焼成後の穿孔がある。410は大形壺の底部である。

S X 40022北 (252・367)

S X 40022 北溝からは壺と甕が出土している。

壺252は頸部に1本の突帯をもつ広口壺で、体部上半は櫛描の直線文と波状文で飾っている。体部下半は縦位のみへのラミガキで調整している。甕367は口縁部が「く」字状に外反する中形のものである。

S X 40023- S X 40024間 (249・352・399)

壺・鉢・脚が出土している。壺249は大きく外方に開く口縁部の破片である。鉢352は内弯気味に直立する口縁部に2条の刻み目突帯文を付ける。体部は横位と縦位のへのラミガキで調整している。脚399は高坏の脚部と考えられる。脚端部は拡張していない。

S X 40024- S X 40027間 (251・304・375)

壺、甕が出土している。壺は広口壺と直口壺とがある。251は口縁部を欠くが、頸部最下端に2条の貼付け突帯文を巡らす。算盤形の体部上半は櫛描の直線文と波状文で飾っている。また焼成後の穿孔がある。304は卵形の体部に直立する口頸部が付く直口壺である。

甕375は口縁部が「く」字状に外反する大形のものである。口縁端部は上方に拡張している。

S X 40024- S X 40030間 (258・299・333・365・381)

壺・甕が出土している。

壺は装飾の広口壺と無装飾の広口壺とがある。258は頸部下端に5条の突帯文を貼付け、2列4単位の棒状浮文を貼付けている。外反する口縁内面には刻み目突帯と櫛描の半円文で飾る。体部上半は櫛描の直線文と波状文で飾り、最下端は櫛による列点文を加えている。333は口頸部を欠く。体部上半は櫛描の直線文と波状文で飾る。299は卵形の体部で上半に2列のへのラミ先列点文を付ける。381は口縁部が「く」字状に外反する広口壺である。体部上半は横位のへのラミガキを施している。

甕365は口縁部が「く」字状に外反する小形のものである。口縁端部は拡張し、面を作っている。

S X 40025- S X 40028間 (298・301・371)

壺・甕が出土している。壺(298・301)は頸部に突帯をもたない無装飾の広口壺で体部最大径部に列点文を施している。甕371は口縁部が「く」字状に外反する大形のものである。

S X 40025- S X 40031間 (345)

鉢345が出土している。外側に直線的に開く小形品である。口縁端部にはへのラミによる刻みを付けている。外面は縦方向のへのラミガキで調整している。

S X 40025西 (340)

S X 40025西溝からは壺340が出土している。小形の壺で口縁部を欠く。体部は無文である。

S X 40026 (310・356・391)

S X 40026の周溝からは壺・甕・マダコ壺が出土している。壺310は卵形の体部に直立する口頸部が付く直口壺である。体部はハケ調整を行っている。甕356は口縁部が「く」字状に外反する小形のものである。口縁端部は拡張し、面を作っている。体部下半は内外ともへのラミガキを行っている。マダコ壺391は平底で体部は砲弾形を呈している。底部に焼成前の穿孔がある。

S X 40027 (378)

S X 40027盛土からは甕378が出土している。中形の底部破片である。外面はへのラミガキを行っている。

S X 40028 (353)

S X 40028盛土からは甕353が出土している。外反する口縁部をもつ小形品である。

S X 40028西溝 (254)

壺(254)が出土している。頸部下端に2本の突帯を巡らす装飾の広口壺である。体部上半は櫛描の直線文と波状文で飾っている。

S X 40030-S X 40033間 (265・270・289・335・370・392・402)

壺・甕・鉢・脚が出土している。

壺265は頸部に5条の突帯文を巡らし2本6単位の棒状浮文を貼付けている。頸部は外方に開き、口縁部は斜下外反させ、内面に2本の突帯文を巡らす。端部は刻みと円形浮文で飾っている。体部は櫛描による直線文、波状文、斜格子文で飾っている。また、円形浮文も貼付けている。270は体部を欠く広口壺である。頸部下端には指頭圧痕突帯が2条巡り、体部最上段は櫛描直線文を施している。口縁端部下端は刻み目を入れている。289は算盤形の壺体部破片で体部上半は櫛描の直線文を施している。335は口頸部を欠く。体部上半は櫛描の直線文と波状文で飾っている。

甕370は口縁部が「く」字状に外反する中形のものである。鉢392は口縁部を欠き、全体に歪んでいる。脚402は大形の鉢の脚台と考えられる。

S X 40030-S X 40034間 (327・337・361)

壺・甕が出土している。

壺には直口壺と広口壺とがある。327は頸部に突帯をもつ直口壺で体部上半は櫛描文で飾られている。337は卵形の体部に外反する口頸部が付く無文の広口壺である。甕361は大形甕の底部である。

S X 40031-S X 40032間 (273・328・329)

壺が出土している。広口壺273は頸部に指頭圧痕突帯を3条巡らす広口壺で外方に開く頸部に外反する口縁部が付く。口縁内面には注ぎ口部を表現した刻み目突帯を付し、注ぎ口部は口縁を打ち欠いて、加工している。体部上半は櫛描による直線文、波状文で飾り、最下端はヘラによる列点文を付けている。直口壺(328・329)は頸部に突帯をもつものともたないものがある。328は直立した口頸部の下端に3条の貼付け突帯が付く。体部上半は櫛描の直線文で飾っている。329は卵形の体部に直立した口頸部が付く。口縁部には抉りがある。口縁部から体部上半にかけては頸部下端に櫛描直線文を描く以外は波状文で飾っている。

S X 40032-S X 40035間 (300・311・316・348・354・355・358・376・379・386・394・395)

壺・甕・鉢が出土している。

壺は広口壺と直口壺と無頸壺とがある。300は無装飾系の壺で算盤形の体部に短く外方に開く口頸部をもつ。379は口縁部「く」字状に外反する広口壺である。直口壺は卵形の体部に直立した口頸部を持ち、316は口縁部に抉りが設けられている。無頸壺は外方に開く体部に内傾した口縁部が付く。底部には脚台がつき、三角形の透かしが付けられている。体部と脚台部との境には突帯文が付けられている。

甕は小形のもの(354・355・358・376)と中形のもの(386)とがある。いずれも口縁端部は丸く納め、355には部分的に刻みが付けられている。358は底部に焼成後の穿孔がある。

鉢(348)は口縁部を「く」字状に外反し、口縁端部を上方に拡張している。体部外面は縦位のヘラミガキを行い、内面下半は軽くヘラ削りを行っている。

S X 40032西 (275)

壺275が出土している。頸部に突帯を巡らさない広口壺で、頸部下端から体部にかけては櫛描の直線文と波状文で飾っている。

S X 40033西 (321・384・389・390・407・1151)

壺・甕・高坏・イイダコ壺・土製紡錘車が出土している。

壺は細頸壺と底部がある。321は球形の体部に細長い頸部が付く。口頸部最上端と最下端に低い突帯をもつ。頸部は櫛描の直線文と波状文により飾っている。体部上半は櫛描の直線文、波状文、斜格子文と円形浮文により加飾している。407は大形の広口壺の底部である。

甕384は口縁部を外反させている中形品である。高坏397は坏部の破片で水平口縁のタイプである。口縁端部は僅かに垂下している。イイダコ壺（389・390）は丸底の底部に口縁部下に一孔をもつ。

土製紡錘車（1151）は土器片を打ち欠いたままで、孔をあけている。

S X 40037（396）

S X 40037の盛上からは甕369が出土している。口縁部が「く」字状に外反する中形のものである。底部外面はヘラ削り後、ヘラミガキを行っている。

S X 40038（306）

S X 40038の盛土、S X 40038の東溝、S X 40038の北溝、S X 40038-S X 40040間溝から出土したものが接合している。本来方形周溝墓S X 40038に供えられていたものと考えられる。306は直口壺で卵形の体部に直立した口頸部をもっている。

S X 40038-S X 40039間（285・339・343・396）

S X 40038-S X 40039間溝からは壺・鉢が出土している。

壺は広口壺と短頸壺がある。285は頸部に突帯をもたない広口壺で口縁端部は上方に拡張し、端面には櫛描の波状文を巡らす。口縁内面には扇形文を巡らしている。体部上半は櫛描の直線文と波状文で飾っている。339は算盤形の体部から直線的に開く短い口頸部をもっている。頸部下端には指頭圧痕突帯を付け、口縁部は凹線文を巡らしている。体部下半には焼成後の穿孔がみられる。

鉢343は直線的に外方に開く小形の鉢である。底部には焼成後の穿孔がある。把手付脚付鉢396は直線的に開く体部に内弯気味の口縁部をもつ。口縁部は凹線文に刻みを加えている。脚台は三角形透かしを穿けている。把手は縦位に付けている。

S X 40038-S X 40040間（286）

壺286が出土している。口頸部を欠く広口壺で、体部上半は櫛描の直線文、波状文で飾っている。

S X 40036-S X 40038間（283）

壺283が出土している。算盤形の体部に短く開く口頸部をもち、口縁端部は拡張する。櫛描により口縁端部は波状文を、体部上半は直線文を施している。

S X 40039東（309）

壺309が出土している。卵形の体部に直立した口頸部をもつ直口壺である。

S X 40040南（312）

壺312が出土している。卵形の体部に直立した口頸部をもつ直口壺である。口縁端部にはヘラによる刻み目が付けられている。

S X 40041北（357）

甕357が出土している。口縁部が「く」字状に外反する小形のもので、口縁端部は上方に拡張している。底部内面はヘラ削りを行っている。体部下半には焼成後の穿孔がある。

S T 40026（403～406）

広口壺が出土している。

広口壺には口頸部に突帯をもたず装飾をするものと、非装飾のものと、「く」字状口縁をもつものと、加飾のある体部のみのものがある。403は体部上半の加飾は櫛描の波状文を基本として、最下端に直線文を巡らす。406は403とほぼ同様の形態をなしているが、加飾されていない。405は球形の体部に「く」字状の口縁をもつ壺である。404は体部上半に荒い櫛による直線文と、波状文を巡らしている。

ST40037 (325)

ST40037の盛土上に立てて置かれていた細頸壺(325)がある。算盤形の体部に直立した細い口頸部が付く。口縁部には凹線文が巡っている。底部には短く開く脚台が付く。体部最大径にはヘラ記号が、体部下半には焼成後の穿孔がある。また脚台には打ち欠きがある。

8. ピット (図版188)

ピット40003 (538～546)

ピット40003からは壺、高坏が出土している。

壺は広口壺(538・539・542)と有段口縁広口壺(540)と直口壺(541)とがある。538は頸部最下端に貼付け突帯を巡らし、口縁端部は垂下させ、凹線文を巡らし、円形浮文を貼付ける。口縁内面は2列の扇形文を巡らす。体部上半は櫛描の直線文を施す。539は頸部に突帯をもたない広口壺で、体部上半を櫛描の直線文で飾る。542は外反する口縁の無装飾系の広口壺である。540は受口状に大きく開いた有段口縁の広口壺で口縁外面に凹線文を巡らす。頸部最下端は指頭圧痕突帯が付く。

高坏(544・545)は545が坏部を欠く。544は水平口縁をもつ高坏で、口縁内面に突帯を付け、口縁端部は僅かに拡張している。脚台54は脚台最上部に2条の突帯が巡る。脚端部は拡張し、内面は横位のヘラ削りを施す。柳葉形の透かしを付けている。

9. 包含層 (図版189)

SY1区SR40001東側微高地 (561～564・1148・1149・1154・1155・1159)

SY1区のSR40001東側微高地包含層から出土した土器の内、図示したものには壺・鉢・蓋・イイダコ壺・土製紡錘車・ミニチュア土器・土製腕輪がある。

壺561は頸部に指頭圧痕突帯を付ける広口壺で、口縁端部は下方に拡張し、凹線文を巡らし、棒状浮文を貼付ける。体部上半は櫛描の直線文と波状文で飾る。鉢562はなだらかにカーブを描いて立ち上がる直口の鉢で、低い脚台を付けている。口縁下端に1条の凹線文が巡っている。

蓋563は甕笠形の甕蓋である。イイダコ壺564は丸底で、口縁部に1孔を穿つ。土製紡錘車(1148・1149)は、1148が土器片を打ち欠いたままで、孔をあけている途中である。1149は土器片を打ち欠いたままで、孔をあけ破損している。ミニチュア土器(1154・1155)は壺の小形品である。土製腕輪(1159)は直径6.7cmの円形で、約4割が残っている。断面は直径0.7cmの円形である。

徳政8区SR40001東側微高地 (548～560・1153・1156)

徳政8区のSR40001東側微高地包含層から出土した土器の内、図示したものは壺・甕・高坏・鉢・器台・イイダコ壺・ミニチュア土器がある。

壺は広口壺と有段口縁広口壺とがある。548は頸部下端に貼付け突帯文を巡らし、口縁端部は下方に拡張し、櫛描の波状文を施している。549は頸部下端に2条の貼付け突帯文を巡らし、口縁部は外反し、口縁端部は下方に拡張する。口縁内面には2条の突帯文を巡らし、口縁端部には櫛状工具による刻みと円形浮文を貼付けている。550は頸部に3条の凹線文を巡らしている。口縁端部は拡張し、凹線文を巡らし、棒状浮文を貼付けている。551は頸部下端に指頭圧痕突帯を巡らし、口頸部は大きく開く。552は

口縁端部を拡張させ凹線文を巡らし、円形浮文を貼付ける。口縁内面は扇形文で飾る。555は口縁部が「く」字状に外反する甕類似の広口壺である。口縁端部は刻み目を施す。553は有段口縁広口壺で、口縁部は凹線文を巡らす。甕556は口縁部が「く」字状に外反し、口縁端部を上方に折り曲げる大形のものである。

高坏557は水平口縁のタイプで口縁内面に突帯を巡らし、口縁部は垂下する。脚内面は横位のヘラ削りを行っている。鉢559はなだらかにカーブを描いて立ち上がる鉢で、低い脚台を付けている。器台560は上下が開き、中央部がせまい鼓胴形を呈する。口縁部を欠き、2帯の凹線文で飾る。

イイダコ壺554は丸底で、口縁部に1孔を穿つ。558は脚台で、三角形の透かし孔をもつ。

ミニチュア土器（1153・1156）は、1153が脚台付きの鉢、1156が鉢の小形品である。

徳政7区SR40001東側微高地（1157）

ミニチュア土器（1157）は、鉢の小形品である。

竹添4ASR40001-S D40004間微高地（1146・1147）

土製紡錘車（1146・1147）は土器片を打ち欠いたままで、孔もあけていない。

第5節 弥生時代後期から古墳時代前期

1. 河道 (図版190~196)

S R 50001 (565~632)

C6 拡区から、黒岡3区にかけて集中的に出土したもので、河道西側の居住域から投棄された遺物と考えられる。それぞれはほぼ単一の土層内に包含されていたようであるが、厳密な意味での一括資料とは捉えられない。しかしながら、時期的に大きく隔たった資料が少ないことから、以下にまとめて報告する。出土遺物は、弥生時代後期の土器を中心とし、壺・甕・鉢・高坏・器台・ミニチュア土器などが挙げられる。

出土した壺は広口壺・広口長頸壺・長頸壺・直口壺などに分類できる。

広口壺には、胴部と頸部と口縁部の境に明瞭な稜をもつもの(565~568)と、なかに移行するもの(569・570)に分かれる。両者とも、加飾する傾向が他の壺より強くみられ、口縁部端面には、凹線や円形竹管浮文、列点文などを、肩部には列点文を施すもの(566・569)などがある。また、口縁部内面にヘラ描沈線によって施文をするもの(569)もみられる。外面の調整は、縦方向のハケを主体とし、その後にヘラミガキを加えて仕上げているものが多い。長頸壺・甕・鉢などと異なり、整形の際についたタタキ痕跡は丁寧に消しているようである。胴部内面の調整が判明する資料は少ないが、ハケによるものとヘラ削りを施すもの両者がある。広口長頸壺は、長頸壺の口縁部を強く外反させて、端部に加飾するものである。外反する口縁部端に垂下する粘土帯を加えるもの(571・572)と、口縁部を水平に近く外反させるもの(573)の二者がある。前者の文様は櫛描の粗い波状文のみであり、後者は2個1単位の円形浮文をもつ。調整は広口壺と大差はない。広口壺・広口長頸壺のうち、口縁部端面に加飾するものは、肩部にも列点文などの文様をもつものが多いようである。

長頸壺は、全形のうかがえる個体がないため分類は困難であるが、頸部長が器高の1/2以上を占めるもの(574~577)と、1/2以下のもの(578・579)に分かれるようである。頸部は、直立したのち外反するもの(574・575)や、なだらかに外反するもの(577・578)、外傾するもの(576・579)などがあり、口縁部のおさめ方と同様、均一ではない。頸部の調整は外面を縦方向のハケないしヘラミガキ、内面を横方向のハケで仕上げるのが一般的である。胴部外面に水平方向のタタキメを残すもの(579)がある。

直口壺には、短く立ち上がる頸部をもつもの(580)と、緩やかに外反する頸部をもつもの(581)がある。後者は片口をもち、肩部に棒状工具の刺突による列点文がみられる。

甕には、口径に対して胴部最大径が大きいもの、ほぼ等しいもの、小さいものといった三者が存在する。この器形の違いは、容量の大小に応じたものであり、概していえば、それぞれ、小型・中型・大型の甕に対応することは既に指摘されているとおりである。底部の形状は平底のものが多く、上げ底状のもの(584)も存在する。胴部最大径は上半に位置するもの(582・584・586)もあるが、これは小型の甕に限られるようで、中・大型の甕については、中位に胴部最大径をもつものがほとんどである。口縁部には、端面をもつものや丸くおさめるものがあるが、特徴的な形態をもつもの(598~600)が存在する。この甕の口縁部は、数本の凹線を施すために直立した幅広い端面を作り出すもので、内面が緩やかに内湾しており、口縁部と胴部の境付近が極めて厚いことを特徴とする。口縁部の成形には、貼り付けによるものが大半であるが、582のように口縁部叩き出し手法によるものも見受けられる。胴部外面

の調整は、右上がり方向のタタキを基本とし、その上にタテハケを施すものが多いようである。胴部内面は、ハケ、ヘラ削り、ナデの三者が存在し、このうちナデは比較的小型の甕（582・583・587）の調整として使用されたようである。また、589は胴部内面の整形にあたって、第1間接と第2間接の間の指の背を利用したユビオサエを用いており、大型の土器の整形方法の一例として注意しておきたい。

601は、吉備系の土器と考えられる。屈曲部以下の胴部内面をヘラ削りし、口縁端部に擬門線を施すものである。岡山県南部の編年にいう、上東・鬼川市I式ないしII式に属するものと考えられる。

鉢には、①、甕の成形第1段階の逆円錐台を利用したもの（602～607）、②、外反する口縁部をもつもの（608～612）、③、直線的に外傾する胴部をもつもの（613）、④、胴部先端を内湾させ口縁部を作りだしたもの（614）などに分類でき、それぞれ底部に1ないし複数の円孔をもついわゆる有孔鉢も含まれている。①の底部は平底のもの（604・605）、突出気味の平底を呈するもの（602・606）、円板充填手法によるため上げ底状を呈するもの（603）、粘土の付加により、底部を補強したもの（607）などがあり、一定していない。胴部の調整は、タタキののちにヘラミガキ（602）やタテハケ（607）を施すものなどがある。②はいずれも端面をもつ口縁部を有するものであるが、胴部への移行にはいくつかのバリエーションがある。胴部が張りをもたず底部へいたるもの（608・609）、肩部付近に胴部最大径をもつもの（610・611）、垂直に立ち上がる胴部をもつもの（612）などである。④とした614は、胴部下半に縦方向、上半に左上がりのタタキを残すもので、底部に焼成前の円孔を有する。

ミニチュア土器は、鉢を模したと思われる615や、直口壺を模したらしい616が知られる。いずれもヘラミガキなどの丁寧な調整は施されていない。

高坏には、椀形の坏部をもつもの（617）と皿形の坏部をもつもの（620～622・627～629）の二者に分けられる。椀形坏部の高坏は、概して小型である。口縁部直下に浅い沈線をもつものがあり、中期の装飾手法の残存をみることができる。坏部の調整は、内外面とも縦方向のヘラミガキである。

皿形坏部の高坏は、内湾もしくは外傾する体部に口縁部がつくものであるが、口縁部の外反の度合いや長さの変化が時期を示す指標のひとつとなっている。この西河道出土の高坏は、口縁部の外反度は弱く、口縁部長と体部長の比が約1：2.5のもの（620・621）、1：3.5のもの（627）、1：4のもの（629）などがある。小型の高坏の口縁部外面には、2本の浅い沈線に挟まれて細かい櫛描波状文を施すもの（620・621）がある。皿形を呈する坏部の調整はヘラミガキを基本とし、その方向は、外面は縦、内面は体部を縦、口縁部を横とするものが多いようである。

脚部は、緩やかに広がりながら、大きく外反する裾部にいたるものが多いようであり、椀形坏部および皿形坏部との対応関係は明瞭ではない。外面の調整は、縦方向のハケののち、ヘラミガキを施すものがほとんどであり、内面はナデ仕上げのものが多い。脚部の円孔は1段3孔ないし4孔のものが多いが、5孔のもの（623）や無孔のもの（624）があり、規則的ではない。また、626の裾部内面には周縁2cmの間に煤の付着が顕著であり、破損後に蓋として再利用されたことが分かる。

器台は、小型の器台（630）と、大型の器台（631・632）とに分けられる。

小型の器台は、口縁部に粘土帯を付加して直立した文様帯をつくるもので、文様帯には小型皿形坏部の高坏（620・621）と共通する装飾パターンである、2本の沈線に挟まれた櫛描波状文のセットの上に円形浮文を施した加飾がみられる。大型の器台も、口縁部に円形浮文などの加飾をもつ。筒部の円孔はいずれも2段にわたるもので、調整も縦方向のヘラミガキを基本とする。

S R 50002（図版194～196 633～690）

S R 50002出土の土器は、河道東側の居住域から投棄された遺物と考えられ、弥生時代後期を中心とする。黒岡4区、KM7区、さらに第2巻で報告予定の下町2区から多く出土しており、これらは大きな時期差をもたないようである。これより下流の下町10、二ノ郷3区でも土器は出土するが、少量であり、また時期差の大きい資料を多く含む傾向がある。このため、比較的まとまった時期の資料を一括し、時期的に大きく隔たった資料を分割して最後に報告することとする。

出土遺物は、弥生時代後期のものに壺・甕・鉢・高坏、器台・ミニチュア土器があり、古墳時代前期に属するものに、小型丸底壺を含む壺・高坏などがある。

壺には広口壺・広口長頸壺・長頸壺がある。

広口壺には、外反する頸部とさらに強く外反する口縁部をもつもの(633・634)、胴部・頸部・口縁部との境に明瞭な稜をもつもの(635・636)がある。前者は、幅広い口縁端面をもつもので、そこに円形浮文や板状工具による刺突文などで装飾を加える。後者にも636のように、口縁部への加飾をもつものがある。これは、ヘラ描の波状文の上に2個1単位の円形浮文とS字状浮文を交互に配置するものであり、口縁部内面にもヘラ描の波状文を施している。胴部の破片にタタキを残す個体は少なく、丁寧に消す意志が働いていたようである。

広口長頸壺を1点図化している。口縁部端からわずかに垂下する程度に粘土帯を付加し、凹線と円形竹管浮文を配するための文様帯を形成している。さらに、口縁部内面には板状工具の刺突による列点文と、櫛描波状文を全周させている。頸部は、外面を縦方向のヘラミガキ、内面を横および縦方向のヘラミガキで仕上げている。

長頸壺は、頸部長が器高の1/2程度のもの(639)と、1/3程度のもの(638・640)に分けられる。前者は、胴部と頸部の境が明瞭であり、口縁部直下に2条の浅い沈線を施すものである。後者は、胴部から頸部にかけて緩やかに移行するものであり、広口壺との区別の困難なものである。640の肩部には2段の竹管文を全周させるなど、569のような器種と共通性があるが、頸部が直線的に外傾することから、ここでは長頸壺とした。内面の調整はナデを基本とするようであり、外面は右上がりのタタキのうち、タテハケを施すもの(638)がある。

甕には、口径より胴部最大径が小さいものと、大きいものの二者があり、前者は小型の甕(641・649)である。底部の形状は突出気味の平底を呈するもの(641・647)や上げ底のもの(653)がある。649は平底であるが、極めて薄く仕上げられている点が特徴的である。胴部最大径は小型の641を除き、ほとんどが中位にある。口縁部を丸くおさめるものは少なく、端面をもつものがほとんどである。口縁部をわずかに上方につまみあげるものも存在する(642・645・648・651)。胴部外面の調整は、右上がりのタタキを基本とし、その後タテハケを施すものが多い。胴部内面は、小型の649がナデ仕上げであるのを除けば、ハケあるいはヘラ削りである。

鉢には、①、甕の成形第1段階の逆円錐台を利用したもの(658・659)、②、外反する口縁部をもつもの(654～657)、③、直線的に外傾する胴部をもつもの(660)がある。

①は、突出する平底を呈するもので、底部には焼成前の円孔が穿たれている。胴部外面は右上がりのタタキを施したままであり、内面はハケ仕上げである。②は胴部最大径が肩部付近にあるもの(654・655)と、口縁部から底部へかけてなだらかにすはまる胴部をもつもの(656・657)の二者がある。前者は、口縁部が比較的上方に向けてのびるのに対し、後者の口縁部は水平方向を指向しているようである。胴部外面は、タテハケのうち横方向に丁寧にヘラミガキされるものが多く、内面もヘラミガキある

いはナデ仕上げである。③の外面調整は、ハケののちに施されたナデであり、内面も同様である。底部は平底を呈しており、小円孔が多数穿たれたものである。

高坏には、椀形の坏部をもつもの(661~663)と皿形の坏部をもつもの(665~670)の二者がある。椀形坏部の高坏は、概して小型で、坏部も浅いようである。口縁部直下に浅い沈線や棒状工具による列点文を施すものがある。坏部の調整は縦方向に施し、内面にはヘラミガキを、外面にはヘラミガキあるいはハケを用いるようである。

皿形坏部の高坏は、内湾もしくは外傾する体部に口縁部がつくものである。東河道出土の高坏は、口縁部の外反度は弱く、口縁部長と体部長の比が約1:2.5のもの(669)、1:2.8のもの(668)、1:3.5のもの(666・667)などがある。小型の高坏の口縁部外面には、櫛描波状文を施すもの(670)があり、口縁部外面には暗文風の山形のヘラミガキを施す。皿形を呈する坏部の調整はヘラミガキを基本とし、その方向は、外面は縦、内面は体部を縦、口縁部を横とするものが多いようである。

脚部は、緩やかに広がりながら、大きく外反する裾部にいたるものが多いようであるが、669のように屈曲点をもって内湾気味に大きく広がる裾部をもつものもある。673も同様の裾部であろうか。これには裾部端に沈線が4条施されている。外面の調整は縦方向のハケののち、ヘラミガキを施すものがほとんどであり、内面はナデあるいはハケ仕上げのものが多い。また、脚柱状部が細くなっているものについては、内面の絞り目が顕著に残存している。脚部の円孔は1段であり、3孔ないし4孔のものが多い。

器台は小型品に良好な資料がなく、大型の器台2個体(674・675)を図化した。受部、筒部、裾部の区別が比較的明瞭なものであり、外面の調整には、タテハケののち縦方向のヘラミガキを用い、内面はナデ仕上げを主とする。円孔は2段に穿たれており、1段のなかにおける円孔の配置が不規則なものも存在する。

図版196の下段には、633~675よりも新しい時期のものと考えられる資料およびミニチュア土器(681~686)など時期の決定の困難な資料を図化している。小型丸底壺には、口径が胴部最大径より大きいもの(676)、ほぼ等しいもの(679・680)、小さいもの(678)があり、時期的に混在した資料であることが分かる。胴部の調整は、磨滅の激しい680を除き、すべてハケ仕上げである。

ミニチュア土器(681~686)は壺、鉢などを模したものと思われる。

壺は、687がやや尖り気味の丸底から球形の胴部を経て、短く外傾する口縁部にいたる短頸壺である。胴部外面の調整は、縦方向のヘラミガキであり、内面はナデ仕上げである。688は肩部以上の広口壺の破片である。球形の胴部から直線的に外傾する口縁部をもつ。口縁部直下外面には1条の沈線を施している。胴部外面は細かいハケで仕上げ、内面には横方向のヘラ削りを行う。689は、完全な丸底から球形の胴部を経て、やや内湾気味にのびる口縁部をもつ直口壺である。外面は磨滅のため調整が観察不可能であるが、内面はナデ仕上げであることが分かる。

高坏(690)は、弥生後期に出現した皿形の高坏の変遷のなかで捉えられる高坏である。坏部の形態は、ほぼ水平にのびる体部に外反しながら長くのびる口縁部をもつものである。やや中膨れした柱状部から強く外へ広がる裾部を有するものと思われる。柱状部内面には横方向のヘラ削りが認められる。

2. 土坑(図版197)

S K 50001 (691~701)

S K 50001の埋土から極めて一括性の高い状態で出土した土器群である。器種には壺・甕がある。

壺は、全形を知ることのできる資料は693のみであるが、接合可能な部分が少ないことから、器形の復原は正確とはいえない。広めの平底から長めの球形を呈した胴部にいたり、急激にすぼまりながら内傾する頸部にスムーズに連続している。ここから、端面をもつ口縁部にかけて緩やかに開く形態をとる。691・692も同様の形態であるとすれば、693よりも大容量の壺に復原される。胴部および頸部外面の調整は縦方向のヘラミガキであり、口縁部の内外面はナデ仕上げである。胴部内面の調整は観察不可能である。694は、胴部、頸部、口縁部の境界が比較的明瞭な広口壺である。胴部から頸部にかけて縦ハケを施している。

甕は、695・697が外面に縦ハケを施し、内面にヘラ削りを行う甕である。外面のハケメの下にタタキがあるかどうかは確認できない。口縁部の屈曲はさほど強くなく、端面を作りだしたものである。内面のヘラ削りは屈曲部まで達していない。696は、鋭く内傾する口縁端部を上下に拡張し、この端面に凹線が3条施されている。胴部外面に縦方向のハケを施し、内面は肩部付近にユビオサエが顕著であり、中位以下をヘラ削りするようである。胴部上半の形態は、吉備地方で通常みられるものと若干趣きを異にするが、極めて特徴的な口縁部の形態から、当地方からの搬入あるいは強い影響を受けて製作されたものとしてよい。岡山県南部地方でいう、上東・鬼川市I式に属するものである。698は、胴部下半の破片である。外面には縦ハケが密に施され、内面には下半を縦方向のヘラ削り、胴部最大径付近を横方向にヘラ削りしている。

699は、ほぼ完形に復原された甕である。突出気味の平底から、中位に最大径をもつ胴部を経て外傾する口縁部にいたる。胴部外面には右上がりのタタキを施し、内面には板状工具によるナデを施している。

700は甕胴部下半の破片である。底部は上げ底状を呈している。701は、甕の胴部の破片であり、二枚貝の貝殻の表面を使用した特異なタタキをもつものであり、放射肋と鱗片突起が観察される。押圧痕跡は縦、横とも8mm程度であり、このなかに放射肋が6～7条認められる。

3. 溝 (図版197)

S D 50002 (702)

土器の出土量は少なく、古墳時代前期の小型丸底壺702を1点を図化したのみである。内外面とも丁寧な横方向のヘラミガキを施すものである。

S D 60001～S D 60004 (703～707)

溝群出土の土器は古墳時代後期のものが圧倒的であり、弥生時代後期から古墳時代前期のものも少量含まれている。703はいわゆる山陰系の甕である。胴部の張りが弱く、胴部最大径も中位にありそうである。また、屈曲する各部も強い稜をもたない。胴部外面は磨減が激しいが、縦方向のハケ仕上げのようである。704は二重口縁壺である。1次口縁と2次口縁の境は鋭く外方に突出するようである。705は甕である。口縁部には端面をもち、2条の凹線を施している。706は甕である。胴部内面にはヘラ削りを施すようである。707は強く外反する口縁部をもつ甕である。胴部外面には比較的細かい水平タタキを施している。内面はナデ仕上げである。

4. 竪穴住居 (図版198・199)

S H 50001 (708～749)

S H 50001は焼失住居であり、炭・焼土を除去した床面直上から多くの土器が出土した。これらはいずれもほぼ使用時に置かれていた原位置に近い状態であると判断でき、良好な一括資料である。出土している器種は壺・甕・鉢・高坏・器台・ミニチュアなど、貯蔵・煮沸・供膳・祭祀のすべての器種を含

んでいる。土器はすべて火災の際に強い熱を受け器面があれどおり、調整の不明瞭なものが多い。以下、器種毎に説明していく。

壺は広口壺、広口長頸壺、細頸壺の3種類に分類できる。

広口壺(708・709・711～713)は、708が口唇部を強く外側に折り曲げ、端部を肥厚させ面をつくる。頸部は外面に縦方向の細かいヘラミガキを施し、内面はナデで仕上げる。口縁端面は波状文で飾り、頸部と胴部の境にヘラによる刻み目を巡らせる。709は短く立ち上がる口縁をもったものである。外面は頸部から胴部上半にかけて縦方向のヘラミガキを施した後に、口縁直下と胴部下半に横方向のヘラミガキを施す。内面は口縁内面は横方向のヘラミガキ、胴部下半はハケで仕上げる。711は偏平な体部から内傾して立ち上がる頸部に外反する口縁部がついたものである。外面は胴部に縦方向のヘラミガキを施した後に、頸部と胴部中央に横方向のヘラミガキを施す。内面は口縁部のみに横方向のヘラミガキを施し、他はナデで仕上げる。712は球形の胴部から頸部が外傾して立ち上がり、口縁端部を上下に若干肥厚させ凹線文を2条施すものである。胴部はタタキ成形しており、タタキ目はナデ消している。頸部は縦方向のハケをナデ消す。内面は胴部はハケで仕上げ、頸部はナデで仕上げている。713は背の高い胴部に短く外反する頸部がつくものである。胴部はタタキによって成形されている。外面はハケによってタタキ目を消したのちにさらにナデで仕上げ、胴部上半に縦方向、頸部に横方向のヘラミガキを施している。口縁部外面から頸部内面にかけてはヨコナデ、胴部内面下半は縦方向のハケによって仕上げられている。

広口長頸壺(710・717)は、710が外反して立ち上がる長い頸部にはほぼ直角に折れ曲がる口縁部がつく。頸部と胴部の境には櫛描の直線文と波状文が上下に施される。口縁端面は上下に拡張され、櫛描の波状文が施された後に、円形浮文が2個1単位と1個単独で交互に貼付けられる。頸部は外面が縦方向のヘラミガキ、内面が横方向のヘラミガキで丁寧に仕上げられている。717は球形の胴部から外傾して立ち上がる長い頸部に強く外反する口縁部がつく。外面は頸部から胴部にかけて縦方向のハケで調整し、胴部下半はナデで仕上げる。胴部上半のみ縦方向のヘラミガキで仕上げる。口縁部外面から頸部内面はヨコナデ、胴部下半内面は横方向のハケで仕上げる。口縁部に2個1単位になった紐通しの孔があく。

細頸壺(718)は偏平な胴部から細い頸が直立する。内面、外面ともにナデで仕上げている。

壺底部(714～716)は広口壺もしくは長頸壺の底部である。いずれも成形にタタキ技法を用いる。714は内面に初痕がある。715は内面・外面ともにハケで仕上げる。716は内面・外面ともにナデで仕上げる。

甕(719・720)は1種類のみである。719は口縁部を上拡張したものである。タタキで成形されており、それをナデで仕上げる。ヘラ状の工具で絵画が線刻されている。一部欠損しているがいわゆる「龍」とよばれているものである。外面には煤が付着する。720は口縁部を欠くが、粗いタタキ目が残る。内面は斜め方向のハケで仕上げている。底部にはクモノス状のハケが残る。甕底部(721)は上げ底の底部である。外面はナデ、内面は縦方向のハケの後に横方向のハケを施す。

鉢は大型鉢、小型鉢、背の高い鉢の3種類に分類できる。725～727は口縁端部が拡張される鉢である。いずれも拡張した口縁端面に細かい凹線文を施す。725はタタキで成形されており、外面底部は縦方向のヘラミガキで、内面底部はハケで仕上げられている。726は胴部上半が内傾する。727はタタキで成形されており、底部外面と胴部内面上半は縦方向のハケで仕上げられている。722～724は短く外反する口縁をもつものである。いずれもタタキで成形されている。722は小型の鉢であり、外面はナデ、内面は横方向のハケで仕上げられている。723は大型の鉢であり、外面はハケの後にナデで、内面はナデで仕上げられている。724はやや背の高い鉢であり、外面上半はタタキ目が完全にナデ消されており、内面

はナデで仕上げられている。728～736は楕形の小型の鉢である。728は手握ねによって成形されたミニチュア土器である。729・730は安定の良い大きな平底をもつものであり、730は内外面ともにハケの後にナデで仕上げている。731・732は小さな平底をもつものであり、タタキによって成形されている。外面は丁寧なナデ、内面は目の細かいハケで仕上げられている。733・734は口縁が直線的に立ち上がるものである。外面はナデ、内面はハケの後にナデで仕上げる。733の側面には焼成後、小さな孔がひとつあけられている。735・736はやや大型のものである。735は突出した平底をもち、外面はナデ、内面はハケの後にナデで仕上げられている。736はタタキで成形されており、内外面ともにナデで仕上げる。

737は背の高いコップ形の鉢である。安定の良い大きな平底をもち、口縁直下に2条の浅い凹線を施す。底部内面にはヘラによる掻き取り痕があり、内外面ともにナデで仕上げられている。

ミニチュア壺(738)は、低い脚台をもつ小型の壺である。口縁部を欠き、脚台は底部に貼付けた粘土を指でつまみ出したものである。内外面ともに丁寧なナデで仕上げている。

高杯(739～744)は、739～741が楕形の坏部をもつものである。739は口縁部直下に2条、脚端部に1条の沈線を巡らせる。脚裾部には4個の円形の透孔をあける。脚部に縦方向のヘラミガキを施す。740は口縁部直下に3条、脚端部に5条の沈線を巡らせる。脚裾部には5個の円形の透孔をあける。脚筒部外面には縦方向のヘラミガキを施し、坏部内面はハケで仕上げる。741は口縁部直下に1条の沈線を巡らせる。脚裾部には4個の透孔をあける。脚筒部外面に縦方向のヘラミガキを施している。

742は坏部が屈曲して斜めに立ち上がる高杯である。坏部と脚部を接合した後に底部を充填する。坏部外面に縦方向のヘラミガキを施す。内面もヘラミガキを施しているようであるが明瞭ではない。

743・744は坏部が屈曲してたちあがり、さらに外反するものである。743は小型の高杯であり、口縁直下に1条、脚裾部端に3条の浅い沈線を施す。脚裾部には4個の円形の透孔がある。744は大型の高杯である。口縁直下に3条、屈曲部に2条、脚裾部端に2条の浅い沈線を施す。脚裾部には4個の円形の透孔をあける。脚部と坏部は接合した後に底を充填している。坏部の内外面は屈曲部より上は横方向のヘラミガキで仕上げ、脚部外面は縦方向のヘラミガキで仕上げる。

器台(745～747)は、746が口縁部を下方に拡張するものである。端面には細かい凹線文を施し、その上を5本1単位のヘラ描の沈線で飾る。外面は縦方向のヘラミガキで仕上げる。745は口縁部を上下に拡張するものである。端面は上下2本の沈線の間を櫛描の波状文で飾り、さらにその上に2個1組の円形浮文を貼付ける。脚裾部には4個の円形の透孔をあけ、裾端には列点文と沈線を交互に施す。外面は縦方向のハケで調整した後に、坏部外面、脚裾部外面を縦方向のヘラミガキで、坏部内面を横方向のヘラミガキでそれぞれ調整する。747は器台もしくは高杯の脚部である。裾端に3条の沈線を施し、5個の円形の透孔をあける。内面は縦方向後に横方向のハケで仕上げる。

皮袋形土器(748)は皮袋を形どったような形態の土器である。薄くのばした粘土板を二つ折りにして、両脇で閉じて台形にしている。口の部分の破損が著しいために口部の形態がわかりにくい、上から一側面にかけて開くようである。成形にはタタキを用いており、内面には指頭圧痕が多く残る。

土製丸玉(749)は直径3.4cm、高さ2.6cmの土製素焼きの算盤玉形の玉である。焼成前に中心に0.3cmの孔がけられている。

S H50002 (750)

S H50002からは壺750が1点出土している。安定の良い平底の壺である。おそらく広口壺であろう。外面は縦方向のハケで仕上げている。

第6節 古墳時代から奈良時代 (図版200 751~791)

二ノ郷・徳政地区出土の古墳時代～奈良時代の土器はごくわずかで、図版200に挙げた41点がピックアップしたものは全てである。その多くは調査区をおよそ南北方向に流れる4本の溝S D 60001～S D 60004からの出土である。751～785が須恵器、土師器は786～791までで、須恵器の方が量的に多い。須恵器の図面では、ヘラ削りとナデの境界は実線で、ヘラ削りの単位は一点切りの破線で、ナデの単位および稜線は二点切りの破線で示している。

751～759は古墳時代6世紀初頭のものと思われる。高杯蓋751は天井部のヘラ削りの範囲は口縁部との稜付近まで及ぶ。757・758の坏身は口縁端部がやや厚手なよく似た作りである。759の坏蓋はかなり口縁が開いており、壺蓋の可能性もある。

760～767は751～759に比べて口径がやや大きく、外面のヘラ削りの範囲も狭く、6世紀半ば以降のものと思われる。下のものほど新しい様相を示している。坏蓋760は天井部内面に、坏身762は底部外面にヘラ記号がある。坏身764は底部と胴部の境で明確に屈曲し、口縁部から受部にかけて器壁が厚いなど特徴的な作りである。屈曲部内面に成形時の粘土紐の継ぎ目が残っている。

768～781は坏類の口径の最も矮小化する古墳時代末の6世紀末から飛鳥時代の7世紀にかけての時期のものである。この時期には蓋か身か判別しにくい個体も多い。ここではヘラ記号のあるものについては、外面にヘラ記号のあるものは蓋とし、内面にヘラ記号のあるものは身として上下を決めて図示した。しかし、772～779を全て蓋と考えたとそれに対応する口径のかえりのある身がほとんどない点から考えて、必ずしも図のとおり向きで使用されたとは限らない。770・776はS D 80039から、778はS D 80041から、780はS R 60001東側の古墳時代水田の洪水砂から出土している。

782～784は奈良時代のものと思われる。782・783は古墳時代の坏蓋の系譜を引く器種ではあるが、時期的には奈良時代に下る坏と思われる。また、784は平城宮などにみられる典型的な形とは少し違うが、いわゆる坏Aにあたり、内面にヘラ記号がある。783はS D 80039から出土し、784はS D 80011から出土している。

785はおそらく鉢で、口縁端部に直線的に切られたような面をもつ。二ノ郷9区の古墳時代溝から759・760・772と伴出して出土しているが、どれに伴う時期のものかは不明である。

786～791は土師器である。786の碗はやや深めの形で、外面の下半から底部にかけてヘラ削りを施しているが上半は指頭圧痕を残している。内面はハケメないし板ナデを施している。787は大きく外反して開く口縁の高坏で、751～759とほぼ同時期のものであろう。788の高杯は口のすぼまる碗状の坏部をもつあまり類例をみないものである。坏部外面と内面の中心部および脚裾部内面にハケメが施されている。

789・790は小型の甕で、791は球形ないし卵形の胴部をもつ大型の甕である。詳しい時期は決め難いが、口縁部の形態からみておそらく751～759ないしは760～767と同様の古墳時代に属するものであろう。

第7節 古代末から中世

1. 溝から出土した土器 (図版201・202)

S D 80001 (861)

須恵器の壺 (861) がある。口縁部と頸部のみの破片である。

S D 80002 (815・856・858・862・863)

土師器の鍋 (858) と須恵器の小皿 (815)・鉢 (862・863) と、瓦器椀 (856) がある。

858は体部下半部が内弯し、体部上半分が直線的に開いている。口縁部付近は外反している。体部外面に右上がりのタキ目が見られる。862・863のこね鉢はいずれも口縁部だけが残っている。862は口縁の端部が狭い面をなすタイプ。863は口縁部が肥厚し、玉縁状をなすタイプである。口径はどちらも28.0cm前後である。

S D 80004 (806・807・828・829・841・842・848)

土師器の小皿 (806・807)・坏 (828・829) と、須恵器の坏 (841・842・848) がある。841・842は口径約15cm、器高約5cmである。底部に回転糸切りの痕跡がある。今回報告する遺物のうち、土師器の小皿・坏、須恵器の小皿・坏・こね鉢は、底部に回転糸切り痕を残しているものが大半であるので、本文中は底部が回転糸切り底のものについては特に記述することをせず、他のタイプの底部については、その都度述べていくことにする。848は口径18cm、器高4.5cmの浅いタイプのものである。

S D 80005 (864)

須恵器のこね鉢 (864) がある。口縁部の破片で、口径28.0cmに復原できる。

S D 80006 (827・840)

土師器の坏 (827) と須恵器の坏 (840) がある。827は口径は13.2cm、器高は2.8cmと、非常に浅い。840は口縁部と体部のみで、底部は残存しない。口径は13.2cmに復原できる。

S D 80008 (808・809・823・824・831～833)

土師器の小皿 (808・809) と、須恵器の小皿 (823)・大型の皿 (824)・坏 (831～833) がある。832・833はどちらも体部がやや内弯している。このうち832は底部の上方に体部の粘土を輪積みしているため、底部の部分が「高台」状に飛び出しているように見える。

824は口径17.4cm、器高2.1cmである。831は口径13.6cm、器高4.1cmで、いずれも広い底部の上にはほぼ直立する体部をもつものである。また底部はナデによる調整が見られ、831は底部を作るために粘土紐を巻いた跡が見られる。

S D 80012 (793～798・812～814・825・838・839)

土師器の小皿 (793～798)・坏 (825) と、須恵器の小皿 (812～814)・坏 (838・839) がある。

793～798はいずれも口径約9cm、器高約1.5cmである。812～814は口径が8cm前後、器高が約2.5cmで、他の小皿と較べてやや深い。838・839はどちらも体部の形態は、丸く内弯している。底部の突出は見られない。

S D 80014 (850・853)

須恵器の坏 (850・853) がある。いずれも口縁部と体部のみの破片である。

S D 80015 (820・834～836)

須恵器の小皿 (820)・坏 (834～836) がある。

834～836は、体部がやや丸く内湾している。底部は突出し、見込みの部分が凹んでいる。体部中程にヘラ描の沈線が1本巡らされる。法量は口径が16.7cm～15.8cm、器高が5.3cm～5.25cmである。

S D80020 (799～802・826・843～846・854・855・857)

土師器小皿(799～802)・坏(826)、須恵器の坏(843～846)・小型坏(854)・瓦器椀(855)・羽釜(857)がある。

854は口径が9.3cm、器高3.9cmで、他の坏と較べて器高が相対的に深くなっている。体部は下半部が内湾している。底部は見込みの部分が凹んでいる。855は口縁部付近の破片である。調整は外面が口縁から下約1cmが横ナデ、その下は指頭の圧痕が残っている。内面は口縁部から約1cm下を横ナデ、さらに下はヘラミガキである。口径は9.3cmと復原される。857は口縁部とその直下の鈔部の破片である。口径は11.3cmである。この口径は他の土師器の羽釜と較べてかなり小さいだけでなく、先述の855の口径よりも小さいものである。鈔は幅、厚さとも非常に小さく、実用に耐えるものではない。胎土は、礫をほとんど含まない精良なものである。

S D80021 (816)

須恵器の小皿(816)がある。口径7.5cm、器高1.3cmである。

S D80023 (837・859・860)

須恵器の坏(837)と土師器の羽釜(859)・鍋(860)がある。

837は口径15.2cm、器高5.7cmで、体部が丸く内湾し、外面に沈線が1本、ヘラで描かれている。底部は見込みが凹んでいるタイプである。859は口縁部と体部の上半部のみ残っている。鈔はちょうど口縁部の外面の位置に取付けられている。器壁の調整は、外面が縦方向の平行タタキ、内面は横ナデである。口径は31.6cm、鈔部の径は34.1cmである。860も口縁部の部分の破片である。形態は、体部は直立に近く、口縁部は外反するが端部のみ直立する。口径は30.8cmである。調整は、体部外面に平行タタキ、内面に横ナデを施している。

S D80026 (803・804・818・819・852)

土師器の小皿(803・804)・須恵器の小皿(818・819)と坏(852)がある。819は口径7.85cm、器高2.0cmである。

S D80037 (792)

土師器の小皿(792)がある。口径8.2cm、器高1.7cmである。

S D80038 (817)

須恵器の小皿(817)がある。口径7.8cm、器高1.4cmである。

S D80039 (851)

須恵器の坏(851)がある。口縁部と体部のみの破片である。

S D80042 (821)

須恵器の小皿(821)がある。口径は7.6cm、器高は1.55cmである。

S D80043 (805)

土師器の小皿(805)がある。底部に回転糸切りの痕跡がある。

S D80044 (849)

須恵器の坏(849)がある。口径は15.3cm、器高は4.9cmである。

2. 掘立柱建物 (図版203・204)

S B 80004 (880・881)

土師器の小皿(880・881)がある。法量はいずれも口径約8.6cm、器高約1.5cmである。

S B 80006 (882)

土師器の小皿(882)がある。法量は口径8.1cm、器高1.7cmである。

S B 80007 (910)

土師器の坏(910)がある。口縁部と体部上半部のみの破片である。

S B 80008 (883・893・919)

土師器の小皿(883・893)と須恵器の坏(919)がある。土師器の小皿のうち893は手づくねで成形されたもので、底部に多くの指頭痕が残っている。法量が口径7.9cm、器高0.8cmの浅いタイプのものである。

S B 80009 (923・934・935)

須恵器の坏(923)・甕(934・935)がある。いずれも口縁部付近の破片である。2つとも形態は類似しており、いずれも外に開いた口縁の端部を少し上に持ち上げるように整形している。口径は934が34.6cm、935が36.8cmである。

S B 80011 (884)

土師器の小皿(884)がある。口径7.8cm、器高1.2cmである。

S B 80016 (924)

須恵器の坏(924)がある。口径は17.9cm、器高4.6cmである。

S B 80017 (903・904)

須恵器の小皿(903・904)がある。どちらも口径8.2cm、器高1.4cmである。

S B 80018 (969・968)

土師器の坏(969・968)がある。969は口径14.1cm、器高3.3cmである。968は口径14.8cm、器高3.9cmである。

S B 80020 (885・894～896)

土師器の小皿(885・894～896)がある。このうち885はロクロで成形されたもので、底部に回転糸切りの跡がある。残りの894～896は手づくねで成形されたもので、底部に指頭による圧痕が見られる。

S B 80021 (886・887・900・921・922・925・929～933・936)

土師器の小皿(886・887)と、須恵器の小皿(900)・坏(921・922・925)・甕(929～933)・こね鉢(936)がある。

925は底部をナデで仕上げ、粘土紐の巻き上げ痕を残すものである。929～933はいずれも口縁部付近の破片であるが、口縁端部の形態により2種類に分けられる。ひとつは端部を丸く、または四角くまとめるタイプ(929～931)。もうひとつは四角い端部を上方に軽くつまみ上げるタイプ(932・933)である。

S B 80022 (888・918)

土師器の小皿(888)と、須恵器の坏(918)がある。918は、体部が丸く内湾するタイプで、底部が高台状に下へ飛び出している。口径13.8cm、器高6.0cmである。

S B 80027 (916・927)

土師器の甕(927)と須恵器の坏(916)がある。

927は口縁部付近のみの破片である。長胴形とおぼしき体部の上に、やや外反する口縁部をもつ。口径は16.6cmである。916は、丸く内湾する体部と、下方へ突出する形態の底部をもつ。

S B 80029 (907・908・915)

土師器の坏(907・908)と、須恵器の坏(915)がある。915は、直線的な体部がやや内湾し、底部は下方に突出している。口径は15.5cm、器高5.1cmである。

S B 80031 (889)

土師器の小皿がある。口径7.6cm、器高1.8cmである。

S B 80033 (920)

須恵器の坏(920)がある。形態は体部が丸く内湾し、底部は平らである。口径は17.2cm、器高5.4cmである。

S B 80034 (914)

須恵器の坏(914)がある。器高5cm、口径12.7cmである。

S B 80036 (909・917)

土師器の坏(909)と、須恵器の坏(917)がある。909は口径13.7cm、器高3.5cmである。

S B 80037 (890)

土師器の小皿(890)がある。口径8.5cm、器高1.2cmである。

S B 80038 (940・971)

土師器の小皿(940)と須恵器の坏(971)がある。940は口径10.3cm、器高1.9cmである。971は口縁部の欠けた破片である。底部は下方へ突出し、見込みの部分が凹んでいる。体部はやや内湾しており、体部中程にヘラ描きの沈線が1本巡らされる。底径は5.5cmである。

S B 80040 (891・897～899・905・906・911)

土師器の小皿(891)・坏(905・906)と、須恵器の小皿(897～899)・坏(911)がある。905・906のうち、905の器表面の調整は、やや外反する体部の外面を横方向にナデた後、その下半部を中心に篋のような工具で、鈍い沈線を何本か巡らせるといものである。口径14.6cm、器高3.3cmである。これと同じような技法で調整する土師器の杯は、包含層の遺物に1点ある(872)。911は体部が内湾し、底部は見込みの部分が落ち込むタイプのもので、体部中程に沈線が1本巡らされている。

S B 80041 (892・912・913・926・928)

土師器の小皿(892)・鉢(926)・鍋(928)と、須恵器の坏(912・913)がある。

926は体部の上半部のみ残っている。全体の器形は不明であるが、球形もしくは半球形に近いものになるであろう。器表面の調整は、外面が斜め方向の平行タタキ、内面は横ナデである。胎土は赤褐色で、やや大きめの礫を含んでいる。口径は17.8cmである。

928は、口縁部付近の破片である。長胴形の体部にやや外反する口縁部をもつ。調整は外面が斜め方向の平行タタキ、内面が横方向のナデである。口径は30.4cmである。

912・913は体部が丸く内湾するタイプである。このうち912には体部中程に沈線が1本巡らされている。912は底部が欠けてはいるものの、いずれも底部が突出するタイプのものと考えられる。

S B 80044 (945～947・963)

土師器の小皿(945～947)と須恵器の小皿(963)がある。945・946はどちらも口径8cm前後、器高は1.5cm前後である。947は口径9.3cm、器高1.2cm、963は口径8.3cm、器高2.52cmとやや深めである。

S B 80045 (975)

須恵器の坏(975)がある。口径13.4cm、器高5.6cmである。

3. 柵およびピット (図版203~205)

S A 80001 (901・902)

須恵器の小皿(901・902)がある。いずれも口径約7.5cm、器高約1.5cmである。

P 80001 (960・961)

須恵器の小皿(960・961)がある。960は口径8.6cm、器高1.9cm、961は口径7.6cm、器高1.4cmとやや浅い。

P 80002 (976)

土師器の鍋(976)がある。体部下半部の径が最も大きくなる、いわゆる「しもぶくれ」形の体部にやや外反する口縁部をもつ。口縁端部は内側に折り曲げるようにして肥厚させる。器表面の調整は外面が斜め方向の平行タタキ、内面は板ナデである。口径22.4cm、腹径26.4cm、器高15.4である。

P 80003 (957)

土師器の小皿(957)がある。手づくねで成形されたらしく、凹凸のある器表面に指頭圧痕が残っている。体部は横ナデ調整である。口径8.0cm、器高1.6cmである。

P 80004 (952)

土師器の小皿(952)がある。口径7.8cm、器高1.0cmとやや浅目である。底部はやや丸みをもっている。体部は非常に短く、底部の端を少し上方に折り曲げただけのような形である。底部は手づくねで成形され、指頭圧痕が残っている。体部は横ナデ調整である。

P 80005 (951)

土師器の小皿(951)がある。手づくねで成形されている。器表面の調整は、体部が横ナデ、底部に不定方向のナデが施されている。法量は口径7.8cm、器高1.4cmである。

P 80006 (937)

須恵器のこね鉢(937)がある。体部の形態は直線的である。口縁部はその端部を上下に拡張することにより、面を作り出している。器高は不明であるが口径は31.5cmである。

P 80007 (950)

土師器の小皿(950)がある。底部は手づくねで成形されている。やや丸みがあり、指頭圧痕が見られる。体部の調整は横ナデである。法量は口径7.9cm、器高1.4cmである。

P 80008 (938)

須恵器のこね鉢(938)がある。口縁部は端部が上方に拡張されているが、かなり肉付けがなされており、玉縁状の口縁を呈している。法量は口径25.4cm、底径9.2cm、器高8.9cmである。

P 80009 (943)

土師器の小皿(943)がある。口径8.8cm、器高1.9cmである。

P 80010 (964)

土師器の坏(964)がある。底部が突出し、見込みの部分が下方に大きく落ち込んでいる。体部は丸みを帯びて内弯するが、口縁部付近ではやや外反している。法量は口径13.8cm、器高5.9cmである。

P 80011 (944・953)

土師器の小皿(944・953)がある。このうち953は、底部は手づくねで成形されたため起伏があり、

指頭圧痕がいくつか見られる。体部は横ナデ調整である。

P 80012 (954~956)

土師器の小皿(954~956)がある。いずれも手づくねの土器で、底部には指頭圧痕が見られる。体部は横ナデにより調整されている。法量はいずれも口径7~8cm、器高約1.7cmである。

P 80014 (977)

土師器の鍋(977)がある。完形品ではなく、口縁部付近の破片である。口縁部はやや外反し、口縁端部は内側に折り曲げ、玉縁状に成形されている。口径21.7cmである。

P 80015 (978)

土師器の鍋(978)がある。口縁部のみの破片である。体部の調整は内外面ともハケ目を施している。

P 80016 (967)

土師器の坏(967)がある。口径14.1cm、器高3.5cmである。

P 80017 (949)

土師器の小皿(949)がある。全体を手づくねで成形する。外面には指頭による圧痕が残っている。法量は口径7.8cm、器高1.8cmである。

P 80018 (948)

土師器の小皿(948)がある。全体を手づくねで成形する。外面には指頭による圧痕が残っている。法量は口径6.7cm、器高1.6cmである。

P 80019 (974)

須恵器の坏(974)がある。口径14.6cm・器高3.4cmと他の須恵器の坏よりもやや浅い。底部は平らで、体部はやや内弯している。

P 80020 (973)

須恵器の坏(973)がある。口径15.3cm・器高4.6cmである。

P 80021 (962)

須恵器の小皿(962)がある。口径8.6cm・器高1.7cmである。

P 80022 (958)

土師器の小皿(958)がある。器表面の調整は、底部から体部下半部にかけて不定方向のナデを、体部上半部には横ナデを施している。法量は口径8.3cm・器高1.8cmである。

P 80023 (959)

須恵器の小皿(959)がある。口径8.3cm、器高1.8cmである。

P 80024 (942・966)

土師器の小皿(942)と坏(966)がある。942は口径6.7cm、器高0.9cm、966は口径14.6cm、器高4.25cmである。

P 80026・P 80027 (979)

土師器の羽釜(979)がある。体部の形状は、体部下半部に最大径部があるいわゆる「しもぶくれ」状を呈している。体部上半部は直線的である。口縁部は高さ6cmほどあり、外面には強いナデにより段が3段作られている。鐔は口縁部と体部のちょうど境目につき、幅2.5cm、厚さ1cmと小型のものである。

P 80028 (941)

土師器の小皿（941）がある。口径8.6cm、器高1.8cmである。

P 80029（965）

土師器の坏（965）がある。体部は直線的で大きく外に開いている。法量は口径14.6cm、器高3.5cmである。

P 80031（972）

須恵器の坏（972）がある。体部は内弯し、底部は突出し見込みの部分がやや凹んでいる。口径13.8cm・器高5.6cmである。

P 80032（970）

須恵器の坏（970）がある。体部はやや内弯しているが、口縁端部で部分的に外反する。底部は回転糸切り底であるがその下に高さ約1cmの高台がついている。高台は、厚さが約0.8cmで、内から外に向けて踏張るような形になっている。法量は口径15.2cm、器高5.8cmである。

5. 土坑（図版206～211）

S K 80001（1050・1079・1080）

土師器の小皿（1050）と、須恵器の坏（1079・1080）がある。1079・1080はいずれも口径約16.0cm、器高約4.5cmで比較的浅目である。体部は直線的な器形である。

S K 80003（1089）

須恵器の甕（1089）がある。口径15.8cmである。

S K 80004（1048・1049・1054・1055）

土師器の小皿（1048・1049）と、須恵器の小皿（1054・1055）がある。1055は口径7.6cm、器高1.9cmとやや深めである。

S K 80005（845・1051・1056・1082～1086・1088・1090・1091）

土師器の鍋（1082・1084）・羽釜（1083・1085・1088）・マダコ壺（1086）と須恵器の小皿（1051・1056）・坏（845）甕（1090・1091）がある。

1084は口縁部の破片である。口縁部は外反しその端部を内側に折り返すように成形しており、口縁端部は平坦面をもっている。口径は21.0cmである。1083・1085は、口縁部からやや下がった位置に、非常に幅の狭い鑿がつく。口径はどちらも20cm前後である。

1086は、底部と体部の破片がそれぞれわかれていて、互いに接合しない。胎土は黄褐色で礫をあまり多く含まない精良なものであり、焼成は非常によく焼けている。器表面の調整は回転ナデであるが、底部に近いところに指頭による圧痕が残っている。底部は回転糸切りで、穴が1箇所穿たれている。また体部の破片も同じように1箇所穿孔されている。

845は直線的だがやや内弯する体部と、平らな底部をもつ。

1090は口縁部の破片で、「大」の字形の線刻が見られる。口径は17.4cmである。

S K 80006（1081）

須恵器の坏（1081）がある。体部はやや内弯している。器高は他の坏と比べて非常に低い（器高3.1cm）。口径は14.7cmである。

S K 80007（1061）

土師器の坏（1061）がある。口径15.9cm、器高3.3cmである。

S K 80008（982～987・989～993・1000～1035）

土師器の小皿（982～987）、坏（990～993）、甕（1027・1028）、須恵器の小皿（989）、坏（1000～1023）・こね鉢（1024～1026）・甕（1029～1035）がある。

990～993、1000～1023はいずれも形態・法量とも、あまり大差はない。990～993は、底部はやや広め、体部は直線的である。法量は、口径15.0cm～14.0cm、器高3.9cm～3.1cmの間に含まれる。

1000～1023も体部は直線的だがやや内湾している。底部は平らである。法量は、口径17.0cm～15.4cm、器高5.2cm～4.2cmの間に含まれる。

甕はほぼ完形に復原できるものが5個（1029～1031・1034・1035）と、口縁部から肩部付近まで復原できるものが2個（1032・1033）ある。完形なものなかで、器形とくに体部の形態は、ほぼ球形のもの（1029・1030）と、肩に最大径部があり底部付近でさらに屈曲するもの（1031・1034・1035）の2通りがある。また口縁部の形態は、端部を角張らせて面を作り出すもの（1029・1034・1035）と、端部を丸く仕上げるもの（1031～1033）の2通りある。これらのうち（1032）は、口縁部の形態や胎土の質で、他の須恵器の甕と異なる部分がある。すなわち、口縁の端部が丸く外反する点と、外面を上下2段に分けてナデるために口縁部中程に稜線ができていている点、さらに胎土が特に精良である点、これらの特徴を考えると、この甕が初期の備前焼の甕である可能性も考えられる。

S K 80009（1040・1051）

土師器の小皿（1040）と、須恵器の小皿（1051）がある。1040は口径7.6cm、器高1.3cmである。

S K 80010（1041～1043・1078・1087・1092・1095～1097）

土師器の小皿（1041～1043）・羽釜（1087）と、須恵器の坏（1078）・甕（1092）・こね鉢（1095～1097）がある。

1043は口径7.8cm、器高1.6cmである。1087は完形品で、口径23.9cm、器高17.6cm、鏝部の径は32.0cmである。胎土は橙褐色で、礫を含んでいる。1092は非常に短い口縁部の上半分がやや外反気味に形作られる。内面には、タタキの当て具の痕跡と思われる凹みが残っている。1078は、直線的だがやや弯曲する体部と、平らな底部をもつ。口径15.8cm、器高4.4cmである。1095～1097は、口縁端部がいずれも狭い平坦面をなしている。法量は口径が11cm前後、器高は32.2cm～30.6cmの間である。

S K 80012（1044）

土師器の小皿（1044）と、須恵器のこね鉢（1093）がある。

S K 80013（1057・1058・1065・1067～1069）

須恵器の小皿（1057・1058）・坏（1065・1067～1069）がある。

1057・1058はどちらも口径約10cm、器高約2cmである。

1065～1069は1065が口径15.5cm、器高6cmとやや大型で、底部は見込みの部分が凹んでいる。体部中程に沈線が1本、ヘラで描かれている。1067～1069が口径約13.6cm、器高約5.4cmでやや小型である。

S K 80014（1046・1047・1070～1075）

土師器の小皿（1046・1047）と、須恵器の坏（1070～1075）がある。

1070～1075はいずれも体部は丸く内湾し、底部は見込みの部分が凹んでいる。器高はどれも5cm前後であるが、口径は（1070～1072）が約5cm、（1073・1074）が約3cmである。

S K 80015（1066）

須恵器の坏（1066）がある。口径15.7cm、器高5.7cmである。

S K 80017（1036・1037）

土師器の小皿（1036・1037）がある。口径9cm前後、器高1.5cmである。

S K 80018（1094）

須恵器のこね鉢（1094）がある。口径約30cmである。

S K 80019（1039）

土師器の小皿（1039）がある。口径7.8cm、器高1.1cmである。

S K 80020（1075）

須恵器の坏（1075）がある。底部の欠けた破片である。体部がやや内弯している。

S K 80022（1059・1077）

須恵器の小皿（1059）・坏（1077）がある。須恵器の小皿は口径10.2cm、器高2cmとやや大型品である。

S K 80023（1076）

須恵器の坏（1076）がある。口径16.0cmである。

S K 80024（1060・1062～1064）

土師器の椀（1060）・坏（1062）、須恵器の坏（1063・1064）がある。1060は高台の付く底部のみの破片である。高台径は2.5cmである。1063・1064のうち1063も底部に高台がつく。口径15.5cm、器高5.7cmで、高台径は7.2cmである。見込みには凹みはなく、滑らかに仕上げられている。

6.井戸（図版212）

S E 80001（1098～1123）

土師器の小皿（1098～1103）・鍋（1121・1122）・羽釜（1119・1120・1123）と、須恵器の小皿（1104・1105）・坏（1106～1113）・こね鉢（1117・1118）、瓦器の椀（1114～1116）がある。

1121・1122は、いずれもハケによる調整が施されている。口縁部が横方向、体部は縦方向のハケ目である。1119・1120・1123はいずれも内面の調整は板ナデである。また1123は鈔の下面にも指頭による圧痕が残っている。1106～1113の法量は、口径が17.0cm～14.4cm、器高が5.0cm～3.3cmである。このうち1109は体部外面に墨書の痕跡が残っている。カタカナの「キ」の字、あるいは漢字の「千」の字にも見えるが、実際いかなる文字かは不明である。

1114～1116は1115が完形である。法量は口径12.8cm、器高3.6cm。器表面は風化が進んでおり、調整は詳しく観察できない。1114は口径14.5cm、器高3.25cm。外面の口縁部から下1cmを横方向にナデ、それ以下の部分には指頭圧痕が多く残されている。内面は磨きによる調整が施されている。磨きの間隔は粗いものであるが、底部付近でループ状に1回転している部分があることから、暗文が施されていたものと考えられる。

7.土器群・土器溜り（図版213）

土器群（1124～1126・1129）

土師器の小皿（1124・1125）と、須恵器の小皿（1126）・坏（1129）がある。

1126は口径が11.8cm、器高2.3cmあり、須恵器の小皿のなかではかなり大きい部類に入る。

1129は完形ではなく、底部の欠けた破片である。体部の器形は丸く内弯しており、器高も深めであることから、底部が突出し、見込みの部分が凹むタイプになるであろう。口径は約17.0cmである。

土器溜り（1127・1128・1130～1145）

土師器の鍋（1142～1145）・羽釜（1140・1141）・須恵器の小皿（1127・1128）・坏（1130・

1131)・こね鉢(1132~1139)がある。

1142~1145は、いずれも内外面をハケで調整している。このうち1145は体部下半部に脚の折れた痕跡を残しており、脚付きの鍋であったことがわかる。1132~1139は、いずれも口縁端部が狭い面をもち、体部は直線的である。口径は27cm~33.4cm、完形のもので器高は11.4cmである。

8.包含層(図版202)

土師器の小皿(865~867)・坏(871・872)・鍋(878)と、須恵器の小皿(868~870)・坏(873~877)、瓦器の椀(879)がある。

871・872はどちらも底径が広く、体部の長さの短いものである。このうち872の体部の外面には、鈍い沈線が数本巡らされている。873~877の形態はいずれも体部が丸く、底部が突出し、見込みの部分が凹んでいる。これらのうち874・875は口径が7~8cmで、体部中程にはヘラで沈線が描かれている。873・876・877は口径約6.3cmと、上の2点と較べてやや小さい。このうちの873は口縁部付近の破片であるが、口縁部のやや下方に墨書の痕跡がのこっている。「やす」とも見えるこの文字が、正確にいかなる字なのかは不明である。

瓦器の椀(879)は高台をもつ底部のみが残っている。内面には暗文状に磨かれた痕跡が残っている。高台は断面が三角形で、その下端が椀の底部よりも高いところにあるため、高台としての役割を果たしていない。土師器の鍋(878)は口縁部と肩部の破片である。口径は18.5cmである。口縁は直立気味であるがやや外反し、その端部は外側に折り曲げられ、玉縁状を呈している。

第8節 中国製磁器 (図版215)

中国製磁器のうち器種・器形が識別できたのは28点である。この28点の中国製磁器は白磁(1160～1172)・青白磁(1173・1174)、龍泉窯・同安窯系の青磁(1175～1187)、染付(1188)がある。器種は碗・皿類が中心で、これら以外に白磁水注(1172)・青白磁合子(1173・1174)が各1点出土している。

1. 白磁

白磁は碗と水注が出土している。釉色は灰白色を呈するが、1164はやや黄色味を帯びる。碗の外面に回転ヘラ削り調整の痕跡が顕著に残るものが多い。

1160～1165は玉縁状の口縁部をもつ碗である。玉縁碗のうち1160～1163は比較的大きな玉縁の碗で、口径は14～16cm前後におさまる。内外面無文の碗が多いが、1160のように外面に蓮弁様の文様を刻む碗もある。1164は極めて小さな玉縁をもち、釉調は透明度がほかの白磁碗に比べて高く、全面に小さな貫入が認められる。1165は口縁部直下が括れ、小さな玉縁をもつ碗である。内面見込み部分に沈線状の段が認められる。外面体部下位から高台部にかけて露胎である。口径16cm・器高5.8cmである。1166・1167は口縁部が外反し、端部が水平になった碗である。高台部は高く、外面体部下位～高台部にかけて露胎である。1167は内面口縁部と見込み部分に沈線が認められる。口径は16～17cm前後におさまり、器高は6.5cm前後である。1168～1171は、碗の底部で、いずれも高台部内が露胎である。1168・1169は低く削り出された高台部をもち、内面に沈線状の段をもつ碗である。底径は6.5cm前後である。1170・1171は、1168・1169の高台部よりやや細く、高い高台部をもつ碗である。いずれも内面見込みの軸を輪状に掻き取っている。底径は6cm前後である。

1172は把手と注口をもつ水注である。高台部内および内面体部は露胎である。外面注口部下位には幅広の沈線が2条巡る。復原口径10.2cm・器高26.0cmである。

2. 青白磁

1173・1174は型成形による青白磁の合子である。蓋部は花卉を型押し、口縁端部は露胎である。復原口径は4.9cmである。身部は幅広の受口部をもち体部下半は露胎である。復原口径は5.0cmである。

3. 青磁

1175～1177は、内面にヘラによる片彫りと櫛状工具によるジグザク文を刻む青磁皿である。外面底部は露胎で、口径10.5cm・器高2cm前後である。1178は外面に6本一単位の櫛目、内面にヘラによる片彫りと櫛状工具によるジグザク文を刻む碗である。体部下半は露胎である。復原口径は16.3cmである。

1179～1183は内面に片彫りによる蓮華文を施す碗である。外面は無文で、高台畳付きおよびその内部は露胎である。口径は16cm前後である。1184・1185は外面体部に蓮弁文を施す碗である。いずれも高台畳付きおよびその内部は露胎である。1185は鐫をもつ蓮弁文で、復元口径は15.6cm・器高6.4cmである。1184は見込み部に剝離痕跡が顕著に認められる。

1186・1187は見込み部に文様をもつ碗である。1186は見込み部に蓮華文のスタンプを施し、1187は花卉を刻んでいる。いずれも高台畳付きおよびその内部は露胎である。

1188は染付の皿である。外面は唐花文、内面は口縁部と見込み部に回線を呉須描きしている。口径は推定で8.9cmである。

第9節 瓦 (図版216・217)

二ノ郷・徳政地区の中世面では、平安時代末～鎌倉時代の瓦が多数出土している。ただし、建物の屋根を負けるほどの点数はなく、柱穴の礎板などに用いられていたものであろう。図化したものは、軒丸瓦が8点、鬼瓦が1点、丸瓦が5点、平瓦が9点である。瓦はいずれも還元焰焼成されており、製作技法から播磨産のものと推定できる。

1. 軒丸瓦 (1189～1196)

1189は徳政1区から出土した擬複弁十葉蓮華文軒丸瓦である。珠文帯の両側に界線を持ち、花卉は一見単弁に見える。鳥羽離宮北殿・神出古窯跡群堂ノ前支群4号窯・居住遺跡などで同文の瓦が出土している。

1190は二ノ郷5区の掘立柱建物跡S B 80023の柱穴6から出土した単弁蓮華文の軒丸瓦である。瓦当部分がほとんど残っていないため、文様の全容はわからない。1191は二ノ郷16区の中世包含層から出土した単弁十葉蓮華文の軒丸瓦である。辻ヶ内地区で同範のものが出土しており、中房には右巻きの三巴文を配する。

1192～1196は徳政11区から出土した右巻き三巴文の軒丸瓦である。1192は長く尾を引く巴文を細い界線で囲んだものである。1193はやや太めの巴文である。1194は長く尾を引く巴文の周囲に大粒の珠文を配する。1195は巴文を細い界線で囲み、その周囲にやや扁平の大粒な珠文で囲んだものである。1196も巴文を細い界線で囲んで、その外側に小粒な珠文を配する。

2. 鬼瓦等 (1197・1198)

1197は徳政11区の欄S A 80002の柱穴46から出土した鬼瓦で、鼻から頬・歯の部分の破片である。裏側は丁寧にナデられている。これと同範のものは辻ヶ内地区で出土している。

1198はKM 4区のS B 80018の柱穴15から出土した陶製品である。瓦の一種であるかどうかは不明であるが、ここで説明しておく。縁が盛り上がった円形のものに弧線が二重に線刻されている。

3. 丸瓦 (1199～1203)

完形品がないため、正確な大きさはわからないが、幅12cm・長さ25cm前後の小型品と推測する。1199はKM 9区、1200～1203は二ノ郷5区から出土したものである。いずれも凹・凸両面ともナデで仕上げられているが、凹面には布目が残る。1200は凸面に緑色の自然釉がかかる。1201は凸面に縦方向の強いナデが見られる。

4. 平瓦 (1204～1212)

1204が徳政12区、1205が徳政7区、1206が徳政9区、1207・1208・1212がKM 9区、1209・1210が徳政11区、1211が二ノ郷5区からの出土である。

薄手と厚手の2種類がある。1204～1206・1211が薄手のものであるが、厚さが1～1.5cm、幅16cm、長さ25cm前後のものである。凹面は粗い布目をナデ消しており、凸面は16が縦方向のヘラ削り、1205が格子目タタキをナデ消し、1211がナデとそれぞれ異なる。1211は目釘穴を持つ。1207～1210・1212が厚手のものである。厚さは2cm前後、大きさは薄手のものより大きいようであるが不明である。1208・1209は凸面には縄タタキが残り、凹面には細かい布目、その下に糸切り痕が残る。1210は凸面を削り、1212は凸面に並行条線のタタキが残る。

第2章 石器

徳政・二ノ郷・黒岡地区では、縄文時代晩期、弥生時代中期と後期、平安時代末～鎌倉時代の遺構が検出されている。弥生時代中期は上層と下層の2時期に分かれ、上層は遺物量が最も豊富である。以下では石器が出土した遺構・遺物包含層の時期に即して記述を行うが、図版の版組みを終えた後に、遺構の時期や出土場所の誤りが判明したものが幾つかあった。また、特に削器や楔形石器などの不定形な石器についても図版上での混乱が多い。遺物の順序が前後して分かりにくいものとなってしまう誠に申し訳ないが、ご容赦願いたい。実測図を示した遺物の器種名や出土遺構とその時期、法量などは一覧表にまとめているので参照されたい（第2～5表）。

第1節 弥生時代中期下層（図版218～220）

弥生時代中期下層の石器の大部分は徳政地区を中心に検出されたを溝（SO30010・SD30002・SD30006）から出土したもので、特にSD30010に集中する。溝以外の遺構としてはSY1区の土坑（SK30004）と、徳政・竹添地区の下層水田面上やその検出時に出土したものが若干ある。製品は46点を数え、石鏃や打製尖頭器といった狩猟具・武器を中心に、農具では未成品を含む磨製石庖丁、工具では石錐、太型蛤刃石斧と砥石、調理具では敲石がみられる。さらに、破損しているものの大型の磨製石剣が存在することは特筆される。磨製石斧の中で片刃石斧類が欠落しているのは、遺物量の少なさによるものであろう。なお、製品以外ではサヌカイトの石核1点と剥片、赤色の強いメノウの剥片（185）、珪化木の碎片がある。

1. 狩猟具・武器

石鏃（1・2・4～7・37・62・72・205）

未成品と考えられる1点（37）を含めて10点ある。基部形態が判明するものでは、凹基式（1・2・205）と平基式（4・7）、尖基式（6・72）がある。凹基式は3例とも重量1g以下と小型である。平基式と尖基式はこれよりやや大きく、長さが3cmを超えるものもあるが、重量は破損を考慮しても3gを大きく超えるものはない。

打製尖頭器（11）

1点のみ出土している。薄手の横長剥片を周辺加工のみで槍先状に成形した石器である。全長の約1/3を幅広の基部が占める。素材剥片の腹面（右図）には弱い磨耗がある。

2. 農具

磨製石庖丁（17・18・20～24・92・100・102）

磨製石庖丁は未成品をあわせて10点が出土しており、全点を図示する。完成品は4点ある（17・18・23・92）。17は両端が直線的に割り取られるものの背縁は弯曲し、直線刃半月形に含められるであろう。表面が風化して白っぽく変色しているが、緑色片岩製と考えられる。18・23は砂岩製、92は泥板岩製の小片で、23では背部の成形打撃痕を磨き残す。未成品はすべて砂岩などの在地産石材製で、成形打撃のみ（20～22・24）、成形打撃後の研磨（102）、さらに穿孔途中（100）の各工程のものがある。20では全周に成形打撃を加え、おおまかに直線刃半月形に整える。この他の成形打撃工程の資料では、24のように石庖丁とかけ離れた形態であっても石材から判断して未成品に含めている。すべて、薄手の扁平な鏃

をそのまま素材としており、S D30006などからは未加工の板状礫も出土している。穿孔途中の100は敲打によって窪みを作る。本例では背縁部だけが研磨され、刃部は打ち欠いたままの状態である。中期下層の砂岩製磨製石庖丁は、後述の中期上層の資料と顕著な違いがなく、少なくともこの時期までには、その製作技法が確立・普遍化していたと考えられる。

3. 工具

石錐 (10・167)

2点出土している。10は錐部と柄部とを明瞭に区分するもので、錐部は柄部に比べ短く、断面形は扁平である。167も同様であるが錐部の加工には折れ面を利用する。ともに錐部は磨耗していない。

大型蛤刃石斧 (25～27・112)

5点のうち4点を図示する。完形品はなく、すべて破損・破片資料で、他の用途に転用されているものも含めた。25は刃部の破片で刃縁はやや潰れているものの、比較的鋭さを保つ。側縁は敲打痕をわずかに磨き残す。26と112は体部破片で、112は破損後に転用されている。27は刃部付近の破片と考えられるものを楔形石器に転用したもので、あと残りの1点は小片である。

砥石 (29・121)

5点あるがすべて砂岩など粒子の粗い石材を用いている。2点を図示する。29は比較的厚手の自然礫で両端が欠損する。片面の一部が軽く使用されているようである。裏面には浅い窪みを作る。121は薄い板状礫の片面を砥石面としたものである。

4. 調理具

敲石 (28・132)

2点出土している。円礫の上下両端を中心に敲打痕が認められもので、28では両端に平坦面をもち、表裏両面の中央部には浅い不整形な窪みが形成されている。

5. その他

削器 (12・141)

4点のうち2点を図示する。ともに抉り状の刃部を作出したもので、折れて三角形状となる。

楔形石器 (16)

5点のうち1点を図示する。16は上下の側縁に階段状の剥離痕をもつ。中央付近で二つに割れている。

二次加工ある剥片 (174)

1点のみである。剥片の一边に小さな二次加工があるが、破損しており形状は不明。

磨製石剣 (30)

1点のみ出土している。徳政2区のS D30002から2片に分かれて出土した。基部側を大きく欠損するため、全長は不明であるが、幅は5 cmあり、磨製石剣としては最も幅広で大型の部類に入る。身の中央にはやや丸みのある鑄が通り、切っ先は抉り状の剥離痕が研ぎ残されてやや歪な形状を示す。切っ先の研ぎ出しは不自然で、身との間に不規則な稜が形成されている。破損後の再生を示すものかもしれない。ほぼ平行する両側縁は、先端から9 cmまでは鋭い刃をつけているが、それ以下は擦り落とされて幅約2 mmの平坦面をもつ。わずかに残存する身の下半部には樋の存在を示すものは認められない。石材は極めて良質の黒色粘板岩で、磨かれてにぶい光沢を放つ。こうした石材には珍しく折れ面に明瞭なリングが生じていることも石材が緻密であることを物語る。畿内周辺の磨製石剣としては大型で比較的初現期の資料であるが、まだ断片的でありその系譜など今後の研究の進展に期待したい。

石核 (198)・剥片 (185)

板状の剥片の周囲から剥離作業を行った円盤状の石核である。それぞれの剥離面が比較的大きいことから製品ではなく石核としたが、この他には石核と考えられるものはない。両面に残された剥離面の末端は階段状であり、あまり良好な剥片は得られなかったであろう。185はメノウ製の剥片である。

第2節 弥生時代中期上層 (図版221~235)

弥生時代中期上層の主要な遺構は、徳政地区微高地上の竪穴住居や土坑など、及び、二ノ郷地区の方形周溝墓である。そして、微高地上を中心に遺物包含層が堆積する。その多くは弥生第Ⅱ~Ⅳ-1期までの時期幅をもつが、SY1区のSB40001と徳政8区のSB40002、それに徳政8区で検出された土器群周辺の遺物包含層はⅣ-1期に限られる。遺構出土石器(製品)の半数近くは竪穴住居から出土したもので、特に徳政8区のSH40007には石鏃、石錐、石庖丁、磨製石斧など70点以上の製品が集中する。またSY1区のSK40045も石器が多く出土した土坑で、大きさの異なる3点の扁平片刃石斧(114~116)をはじめ石鏃や楔形石器、砥石などがある。二ノ郷地区の方形周溝墓では木棺内からは石鏃だけが、周溝内からは各種の石器が出土している。さらに徳政8区の河道(SR40001)では磨製石庖丁未成品や砥石など比較的大型の石器が日につく。

遺構出土の製品は201点、水田面を含め包含層では198点を数え、製品以外にサヌカイト製の石核と考えられるもの4点や多数の剥片とチップ、珪化木の碎片、軽石などがある。製品の中では、石鏃が未成品と考えられるもの7点を含めて94点と最も多い。同じく武器としての機能が想定される打製尖頭器は5点(未成品含む)、環状石斧は1点である。農具では石庖丁21点(磨製17点、打製3点、大型打製1点と他に磨製の未成品が41点)、工具では石錐27点、磨製石斧14点、砥石36点、調理具では磨石・敲石が13点を数える。他に削器26点、楔形石器59点(削片含む)、二次加工ある剥片57点、有孔軽石3点などがある。石庖丁と磨製石斧の比率はちょうど6:4であり、畿内周辺部に位置する兵庫県七日市遺跡の比率とはほぼ同じである。(兵庫県教育委員会1990年)。また、砥石が比較的多くみられることは磨製石庖丁未成品の量と対応しよう。

石器の用材は磨製石器や礫石器では多様な石材が使用されているが、打製石器はほとんどサヌカイト製で、しかも肉眼で判断する限り金山産が圧倒的多数を占める(サヌカイトの蛍光X線分析による産地同定は第6分冊で報告を予定している)。なお、サヌカイト製の剥片石器では石核と考えられる資料が極めて少ない上に、畿内中心部で見られるような典型的な石核は存在しないといつて良い。それを補うものとしては石鏃に次ぐ点数をみる楔形石器の一部を想定するのが最も妥当であろう。

1. 狩猟具・武器

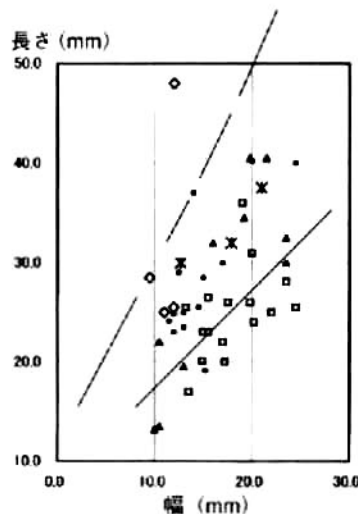
石鏃 (3・8・9・31~36・39~61・63~71・73・204・206~221・223~246・378)

94点のうち85点を図示する。破損の程度が低いものを含めて基部形態の判明するものは、凹基式16点、平基式21点、凸基式23点、有茎式4点となる(第1図)。平基式と凸基式がほぼ同数、凹基式がこれに次ぎ、有茎式はごく少数である。凸基式の中では凹基式(17点)が尖基式(6点)の3倍近くを占める。

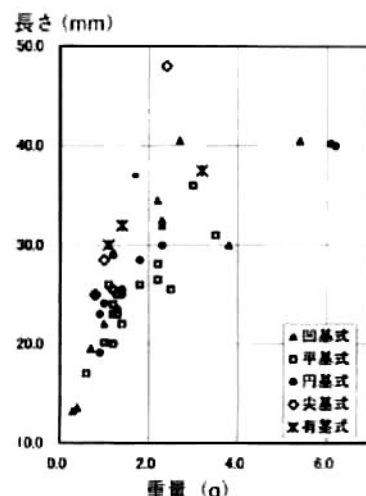
完形品の形態ごとの長さとの関係を見ると(第2図)、まず、凹基式では、長さが2cmほどの小型品と3cm以上の大型品に分かれる。中間的な長さのものが見当たらないが、遺跡全体では特に有為な差はないようである。長さが2cm以下のものは平基式や凸基式にも存在するが、凹基式ほど顕著ではない。長幅比はおおむね1~2の間に納まるが、長さが3cmを越えるとより細身になる傾向がある。平基式で



第1図 石鎌の形



第2図 石鎌の長さとお幅



第3図 石鎌の長さとお重量

は凹基式のような大小の区別はなく、長さは2～3cmを中心に凹基式の空白部を埋める様な範囲に分布する。長幅比に関しても凹基式と同様の傾向がある。凸基式は長さでは2～3cmのものとは3.5cm以上のものに分かれるが、長幅比はこれに関係なく2前後が中心となる。凹基式や平基式に比べ細身で、特に尖基式はいずれも長幅比が2を超える。有茎式では3点のみではあるが、凸基式と同じく細身のものが目立つ。

次に、長さとお重量の関係をみる(第3図)。長さ3cmを超えるものでも重量は1～6g強までの幅がある。しかし、2gを基準にとると、長さ3cm以上の大半が2g以上となり、3cm以下の大半が2g以下となるのと好対象を示す。凸基式や有茎式が他に比べて、長くても軽量となる傾向にあるのは細身であるからである。武器としての機能が高い石鎌を、長さ3cm以上か重量2g以上を基準とすると、約4割が該当することになる。

石鎌のうち方形周溝墓の主体部から出土したものが6例ある(31・32・46・49・60・65)。主体部はいずれも木棺で、石鎌以外の石器は出土していない。31のように全体に磨滅したものや、32のように非常に小型のものもあるので一概には言えないが、これらが被葬者の死因に関連する可能性は十分に考えられる。特に60は大型の柳葉形鎌であり、殺傷力も大きいであろう(図版396)。

8・31～36・204・206～212は凹基式石鎌である。31は基部の挟りが深いが、他は浅く平基式に近いものもある。側縁は直線的なものと緩やかに外弯するものがある。38～47・213～224は平基式石鎌である。側縁は直線的なものを主に緩やかに外弯するものをまじえる。3・48～51・53～60・226～240は凸基式石鎌で、凹基と尖基がある。60は二上山産と考えられるサヌカイトを用い、均整のとれた柳葉形に仕上げたものである。二次加工は全面に及び、断面形を菱形にする。先端部のみ65も同様な石材である。61・241～243は有茎式石鎌である。61と243では身から茎部にかけてそのまま連続するが、241と242では変化点をもって短い台形状の茎部を作り出す。241は肉眼でみる限り二上山産サヌカイトの可能性はある。以上のうち、35・42・61・211・220は側縁を細かな鋸歯にする。なお、9・52・57・59・234は全体の加工が粗いことから未成品と考えておきたい。

打製尖頭器 (74・75・89・200・253・340)

破損品3点と未成品2点の他に製作時の剥片と考えられるものが1点ある(200)。74・75は体部の小破片で、断面は凸レンズ状で両側縁が平行する。74では両面に残る素材剥片の剥離面に明瞭な磨耗が認

められる。片側は素材面が広く残り、二次加工も階段状剥離を生じている。75では平坦な二次加工がほぼ全面に及ぶ。340も薄身であるが打製尖頭器の端部であろう。89は尖頭器とは程遠い形態ながら大きさや加工状況などから未成品と考えておく。下半部が欠損する。二次加工は粗い階段状で、素材面も広く残る。さらに右側縁には体部と直交する自然面を残す。側面の自然面と素材剥片の背面側（左面）は鈍角で交わり、ここを鋭利にするにはかなり無理な加工を強いねばならない。253は下端に自然面をもち、上半部が欠損する。両面に素材面を残し、左面ではそれが磨耗している。二次加工は粗い階段状で、断面形も垂であることからこれも未成品と考えておきたい。なお、刃縁は潰れた状況を示す。200は背面の一部が強く研磨されたサスカイトの剥片である。打製尖頭器の製作途中に研磨を行い、さらに剥離を行うことはしばしば観察される。これもそうした工程で生じた剥片であろう。

環状石斧 (277)

竹添4区の包含層から出土した1点がある。約半分が残存し、径約10cmに対して厚さは約1cmと薄身である。左面はほぼ平坦に近く刃部付近が少し傾斜をもつものに対して、右面は孔の周囲だけが平坦で、刃部への傾斜が急である。

2. 農具

打製石庖丁 (90・91・389)

3点あり、挟りをもつものもたないものがある。薄く幅広い横長剥片の打面側を背縁部、末端側を刃縁部とする。90は両端に挟りをもつ完形資料で、刃縁側は平坦剥離、背縁側に階段状剥離で成形する。この資料で注目されるのは背面側（左面）の刃部及び素材剥片の稜が著しく磨耗し、光沢を帯びていることである。磨耗は挟り部と背縁側の剥離の稜にもわずかながら認められる。その分布状況から判断すると、本資料は背面側（左面）を表にして、刃の天地を逆にした状態で右手に保持して使用したことが推量できる。91は全体にやや薄手で、両端が欠損している。二次加工の状況は90と同様である。389は礫面を背縁部とすることでバルブの厚みを減じる程度の二次加工ですましている。刃縁部には使用痕と考えられるような細かな剥離痕が連続する。

大型打製石庖丁 (361)

361は両端に把手状の突起を設け、内弯する両刃の刃部を形成した大型の石器である。刃縁部には磨耗が認められるが、背縁部は比較的鋭い状態を保っている。形態的に大阪府池上遺跡の大型磨製石庖丁（財団法人大阪文化財センター1979年）や鳥根県西川津遺跡の大型磨製石庖丁（鳥根県教育委員会1989年）などに類似する。竹添地区出土の打製石庖丁と磨製石庖丁には形態の上で共通性が認められることから、大型石庖丁についても同様なことが意識されたのかもしれない。

磨製石庖丁 (19・93～99・101・103～108・110・111・254～271・368)

出土数59点のうち完成品は17点、未成品は41点である。完成品15点、未成品22点を図化した。石材は在地産の砂岩や凝灰質砂岩が大半を占める（以下では砂岩製と呼ぶ）。完成品には緑色片岩と砂質頁岩が4点（23%）混じるが、未成品では石庖丁と確実に判断できるものはすべて砂岩製である。完成品の幅を石材で比べると、緑色片岩と砂質頁岩製では4cm以下となるが、砂岩製では4cmよりも幅広くなるものがほとんどを占める。これは刃部の研ぎ直しの頓度差を反映しているものと考えられる。

完成品で完形資料は砂岩製の1点（263）しかなく、未成品でも19・101・111・269など一部を除いてほとんど破損し、完形率は1割ほどしかない。特に穿孔工程のものはすべて破損している。したがって形態の判明するものは少ないが、未成品を含めると、96や263のような直線刃半月形を中心に、長方形

第1表 摩製石庖丁未成品工程別一覧（ゴチックは完形品・265は破損して出土したものが接合した）

	成形打撃段階の資料			研磨段階の資料		
	面的剥離	周辺剥離	部分剥離	刃部・背縁部のみ	体部のみ	ほぼ全面
未穿孔	19	111・269・270・271・(107・108・266)	101・106・(110・267)	102・(103・104)		
穿孔途中		99・265・268		98・100・368		264
穿孔完了					262	

(265)、紡錘形(256)、楕円形(264)などの形態を含むと考えられる。紐孔はすべて2孔で、竹添地区で出土している1孔の確実な例は、ここでは見当たらない。紐孔の穿孔方法は回転穿孔と敲打で窪みを作るものがある。後者は砂岩系の石材に限られるが、紐孔が貫通するまで敲打が継続されたことが確実な資料は見当たらず、貫通している紐孔にはすべて回転穿孔の状況が観察される。したがって、敲打による窪みがある程度深くなった後に、回転穿孔で貫通させたと考えられる。256は回転穿孔された紐孔の周囲に敲打による窪みがわずかに残存する。体部の研磨によって窪みの大半は消失してしまったのであろう。

次に、砂岩製未成品を作業工程に沿って検討する(第1表)。原石は遺跡周辺の河原で容易に手に入れることのできる薄く扁平な礫で、101や106はそのごく一部に成形打撃が加えられている。成形打撃には、片面のほぼ全面に剥離が及んでいるもの(19)、両面の周辺部全体(111など)、周辺部の小範囲に限定されるもの(106など)がある。全面に及ぶものはごく少なく、原石の選択によって、加工範囲を減らそうとしたものと考えられる。この段階の資料には完形品が散見されるが、その後の研磨あるいは穿孔段階になるとすべて破損してしまっている。穿孔に先立って研磨を行うものには102がある。103や104も小片ながらその可能性があり、103は刃部のみが研磨されているが、成形打撃は行われていないのかもしれない。穿孔前の研磨部位は刃部あるいは背縁部に限定され、体部全面には及んでいない。穿孔途中の資料では、研磨の前に穿孔が開始されているもの(99など)と刃部あるいは背縁部のみを研磨しているもの(98など)、ほぼ全面が研磨されているもの(264)がある。穿孔が完了している資料には、成形打撃のみのもはなく、体部のみ研磨を行っているものがある(262)。

砂岩製の石庖丁は、手ごろな河原礫に周辺からの成形打撃を加えた後、刃部あるいは背縁部を中心とした研磨を先に行うものが主体を占めるが、研磨以前に穿孔を開始するものも存在する。穿孔に敲打を用いることは破損の危険性が高く、研磨がほぼ終了してから敲打を行うことは避けられたのであろう。なお、成形打撃工程のものが多いにもかかわらず、その際に生じる剥片はまったく見当たらない。作業が原石を採取した河原などで行われたことを示すのであろう。

幾つかの資料について補足的な説明を加えておく。完成品では、93・97・255が砂質頁岩、94が緑色片岩製である。93は暗灰色で縞状の石理が断面で観察できる。97は乳白色を呈する緻密な凝灰質頁岩製で、紐孔には紐擦れの跡が明瞭に認められ、かなり使い込まれている。やや内弯する刃部は使用の結果生じた形態と考えられる。背縁部に小さな剥離が連続するが、これは研磨後のものである。砂岩製の105は紐孔以下の刃部～背縁部にかけて成形打撃痕が研ぎ残され、抉れを生じている。紐孔が貫通し、研磨もほぼ全面に及んでいることから完成品と考えておく。258は体部が極めて丁寧に研磨された完成品であるが、全周が叩き潰され、長方形に近い形態に加工されている。叩き潰しは刃部と背部が顕著で、紐孔も一部失われている。別用途の石器に再加工されたものであろう。261の紐孔内面は回転穿孔の状況を示すが、上部径が他例よりも広く敲打による窪みの径に近いことが気にかかる。

未成品では、98は刃部両面と背縁部が研磨される。刃部は片刃に研ぎ出されているが、穿孔は途中である。368も同様である。100は背縁部のみに研磨が認められる。敲打による窪みは深く、厚みの2/3を超える。104は刃部と背部のみに成形打撃を加えた後、背縁部と刃部を部分的に研磨する。穿孔はまだ行われていない。262は紐孔が回転穿孔によって貫通し、体部の研磨も行われているが、刃部がまったく研磨されていないものである。このような状態の未成品は他にない。264は研磨は全面に及び、紐孔も貫通まであとわずかのところまで窪みが達している。

3. 工具

石錐 (76・88・186・247・252・295・344・345)

27点出土しており、このうち23点を図示する。摘みの有無とその形態によって、錐部と摘み部を明瞭に区別するもの(76・247)、両者の区別が曖昧で摘み部から連続して錐部へ移行するもの(79・80・248・249・344・345)、摘み部のない棒状錐(77・78・82・85・88・186・250・252)に分類できる。23点のうち11点は錐部を欠損する。残る12点で錐部に磨耗が認められるものは4点(88・250・295・344)で、磨耗の範囲は先端付近の小範囲にとどまる。248も先端を欠くものの両側縁にわずかながら磨耗部が残存する。錐部の折れや磨耗と石錐の形態の間に関連性は認めにくい。石錐の用途としては磨製石庖丁の穿孔がまず考えられるが、錐部が磨耗していない資料については、それ以外の用途を想定すべきであろう。

太型蛤刃石斧 (113・272)

3点のうち2点を図示した。113は両側縁が平行し、刃部は鋭利に研磨されてその中央付近に若干の潰れあるいは研ぎ残しがある。研磨は体部には及ばず、あばた状の敲打痕に覆われている。基部端面にも同様な敲打痕を残す。完形品のように見えるが、幅に対して長さが短いことから基部側が破損した後、敲石に転用したものと考へたい。272は基部の破片で、研磨はほぼ全面に及ぶ。残る1点は小片である。

柱状片刃石斧 (118・274・275)

5点出土しており、3点を図示する。274と275は刃部が鋭く研ぎ出された完形品で、大型の274には挟りが入らない。長さが23.6cmあり、特に長大である。刃部の一角が割れている。275は明瞭な挟りが入った長さ6.2cmの小型品で、大きさでは小型方柱状片刃石斧の範疇に入る。基部の側面には擦り切り状の溝跡をとどめる。乳白色を呈し凝灰質砂岩製であろう。118は両端が折れた柱状片刃石斧を楔形石器あるいは敲石に転用したと考へられるもので、上下両端は潰れて平坦気味の面を形成している。柱状片刃石斧としては厚みが幅を超える断面形態のものとなろう。この他に緑色片岩製の小片2点が包含層から出土している。

扁平片刃石斧 (109・114・116・276)

未成品と考へられる1点(109)を含め6点あり、そのうち3点がSY1区のSK40045から出土している(114・116)。この3点は大きさがまったく異なり、115は一般的な中型品のサイズであるが、114は幅7cmを超える極大品で、全面に明瞭な研磨痕が観察される。横斧として着柄されたのであれば、装着部も相応に大型でなければならない。さらに、116は極小品で斧としての着柄法は想定しがたく、実用品ならば柄の先端に差し込んで鑿として用いたのであろう。276は両側面に研磨された平坦面が残るが、表裏面は上下からの階段状の剝離面で覆われる。石材から考へて扁平片刃石斧あるいは柱状片刃石斧の破片を楔として転用したものであろう。他に泥板岩製の小片が1点ある。なお、109は淡緑色の凝灰質砂岩の剝片に打ち欠きを行ったもので、2面が折れて全体の形状は不明である。石材から扁平片刃石斧の未成品と判断した。

その他の石斧 (117)

白色凝灰岩製の石斧の基部であろう。厚みは薄く刃部にかけて楡状に広がる。体部には成形打撃時の剥離面が併ぎ残され、折れ面にも複数の剥離痕がある。

砥石 (119・120・122～130・278～282・369・372・373)

36点出土しており19点を図示する。いずれも自然礫をほぼそのまま利用したもので、特に明確な成形意図をもって加工を行ったと考えられるものはない。石材はほとんどが砂岩あるいは凝灰質砂岩で、荒砥となるものが大半であるが、わずかながら比較的細粒で仕上げ砥に相当するようなものも含まれる(129)。完形品がほとんどなく、本来の形状をうかがい知れるものは少ないが、大きさでおおまかに二分できるようである。大型品は厚みがあって塊状のものと薄い板状のものに分かれるが、小型品(120・123・129・281・369)は概して薄手である。小型品の120・281は板状の自然礫の片側全面が砥面として使用されている。123と129の片面の中央には溝状の浅い窪みが形成されて、369は裏面中央にのみ柳葉状の研磨面がある。大型品では使用部位が平坦面を成すもの(122・125・127・373)、全体として緩やかな皿状の曲面を成すもの(130・279・282)、長軸に沿って浅く窪み、その中に溝状の筋が形成される場合があるもの(119・128・280・374)など、使用状況は様々である。緩やかな局面を成すものなどは石皿との区別が曖昧である。

4. 調理具

磨石・敲石 (131・133～135・283～286・370)

円礫や棒状の礫の一部に敲打痕あるいは叩き潰されたような剥離面が認められるものを敲石、全面あるいは一部が磨られているものを磨石としたが、こうした使用痕を正確に判断することが難しいものも少なくない。また、石器製作時のハードハンマーとの区別も難しい。14点のうち9点を図示する。磨石としたものは133の他に2点あるが、いずれも使用痕は不明瞭である。敲石のうち283～286では円礫あるいは扁平礫の両端に敲打による平坦面が形成されている。370は敲打痕はあるものの、平坦面の形成には至っていない。134と135はチャートの棒状礫を使用したもので、一端に潰れ状の剥離面が形成されている。これから剥離したと考えられる剥片も1点ある。131はこれらとはやや異なった棒状の礫で、使用痕は不明瞭であるが、側面に削り取られたような痕跡がある。

5. その他の石器

削器 (13・136～140・188・190・191・197・288・289・291～294・308・356・380)

サヌカイト製の剥片石器で平坦剥離を主とする連続した二次加工が認められるものを削器とする。26点をそれとみなし、19点を図示する。破損品が多いが、折れと二次加工との前後関係すら判断は容易でない。平面形態や刃部形態に斉性は乏しい。

13は厚みのある剥片の端部を断ち切るように急角度の刃部を作り出したもの。136や289は尖頭部を作り出す。140は板状剥片の一辺に小さな平坦剥離を連続させたもので、294や308も同様なものかもしれないが、294では折れ面をもつ剥片が素材となっている可能性がある。190では刃部の剥離面に接して光沢が広がっている。191と292は尖頭器様の形態を呈するが、二次加工の無い縁辺に微細な剥離痕が連続することから、こちらが刃部であろう。291と356は打製石砲丁の破片かもしれない。380は直線的な側縁と外弯する側縁をもつ。外弯する一辺には突起を設ける。形態的には石小刀と呼ばれる石器に類似するが、突起の向きが異なることからここでは削器に含めた。左面の右半分と右面の下端部には著しい稜

の磨耗が認められる。

楔形石器と楔形石器の剥片

相対する二側縁に顕著な階段状剥離が認められ、縁辺が潰れ状を呈するものである。側面に裁断面をもつものも多い。相対する二側縁には折れ面や自然面など平坦な面が利用される場合が多く、鋭い刃部が形成されることは稀である。楔形石器とした資料は57点あり、他にその削片が2点ある(147)。実測図を示した49点の大きさは、長さが2～5cm、幅が1～3cmを中心した値となる。両極打法を用いれば、作業面に近い大きさで、しかも薄い剥片を剥離することは可能である。144のような小型のものは楔として使用されたと考えたほうが妥当であろうが、比較的大きなものからは石鏃や石錐などの小型剥片石器の素材とするに足る大きさの剥片を得ることができよう。

二次加工ある剥片

剥片の一部に二次加工が認められるものの、削器のような連続性がないものである。二次加工ある剥片とみなした57点のうち42点を図示する。二次加工の状況などは個々に様々である。

有孔軽石(202・203)・軽石(201)

小塊状の軽石に小孔を掘ったもので、中には貫通しているものもある。孔の径は約1cmで回転穿孔されている。3点のうち2点を図示する。203では未貫通の孔の中央に小さな隆起があり、竹管状のものが使用されたと考えられる。なお、201のような孔のない軽石の小塊も8点出土している。S K40031などS Y 1区の土坑に集中する。

石核(193・194・199)・剥片・珪化木の碎片

石核と考えられるものは4点あり、3点を図示する。193は折れ面や自然面に囲まれた厚手の板状剥片の末端側から剥離を行っているが、階段状剥離を生じ良好な剥片が得られた形跡はない。194も同様で、階段状剥離はさらに著しい。199はやや薄手の剥片が素材となっていると考えられ、両面を作業面とする。これらの資料をみる限り、良好な剥片が剥離されたとは考えにくく、点数も少ないことから石核として積極的に評価することはできない。

剥片は10点図示しているが、特に意図したものではなく、当初、楔形石器などに分類していたもので、再検討の結果、剥片に変更したものである。小型剥片の打面は線状かハジケ飛んでいる。また、大きな意味では剥片であるが、珪化木の塊を割った際に砕け散ったような石片(碎片)が11点ある。10cm角以上のかかなり大きな塊状のものもあるが、多くは長さ数cmの薄片で、水洗選別資料からは微細なものも検出されている。徳政8区のS H40007などから出土しているが、珪化木製石器の製品としては楔形石器が数点あるくらいで、何を意図して石割りを行ったものか不明である。

最後に、先に方形周溝墓の主体部から出土した石器は石鏃だけであると述べたが、実はもう一つある。それはサヌカイトのチップである。すべて棺埋土の水洗選別によって検出されたもので、最大でも1cm角程度、大半は数mm角ほどのごく微細なものである。1主体部あたりの点数は多くても10点くらいで、意図的に墓に入れられたものとは到底考えられない。このようなチップが主体部内から検出される原因としては、被葬者の着衣や体毛に付着したものと考えるのが妥当ではなかろうか。石器製作時に飛散したチップが着衣の編み目や体毛に絡まり、そのまま、墓に入るまで落下しなかったと考えたい。

第3節 弥生時代後期(図版249)

弥生時代後期の遺構である黒岡3区のS H50001からは円礫2点と砥石1点が出土している。また、

河道（S R 50001）からも楔形石器1点（364）出土しているが、こちらは混入かもしれない。

365と366は卵形の自然礫で、366に受熱の痕跡がある以外、加工痕や使用痕は認められない。竪穴住居の床面から出土していることから、意図的の持ち込まれたものと考え、投弾のようなものではないかと考えた。367は凝灰岩製の砥石である。表面と右側面には幅約1.5cmの鉄製加工具によると思われるケズリの痕跡が明瞭に認められる。左側面は極めてよく使用されているのに対して、正面と右側面は使用の程度は低い。

第4節 縄文時代晩期（図版249・251）

縄文時代の石器はすべて、徳政11区の河道（S R 10001）から出土したもので、製品としては、楔形石器1点と砥石2点がみられるにすぎない。

363はサヌカイト製の楔形石器である。やや厚手の剥片を素材としており、側面にはいわゆる截断面が認められる。362は板状の自然礫をそのまま利用したもので、表側の面が平滑であるため砥石と考えたが、使用痕は不明瞭である。上下両端を欠損する。374は砂岩製の砥石で表裏と1側面が使用されている。表と裏は浅い曲面を成し、裏面には長軸に沿って2条の溝がある。

第5節 弥生時代の遊離遺物（図版252・253）

ここでは出土位置が不明確で所属時期の明かでない石器のいくつかについて簡単に記しておきたい。

273は緑色片岩製の柱状片刃石斧の完形品で、後主面の中央付近には研磨が及んでいない素材面が、左側面の基部側には敲打痕が残存する。

376は平基式、377は尖基式の石鏃で、中期上層の範疇に入るものであろう。375は厚みがあることから打製尖頭器と先端部であらう。382や383も石鏃あるいはその未成品の可能性はあるが、382の二次加工は急角度であり、二次加工のある剥片としておく。381は碧玉の剥片で、背面側には擦り切りの際の溝が残されている。

379と384は楔形石器、385～387は二次加工ある剥片である。385は打面部をもつ剥片であり、線条打面、点状打面が大半を占める剥片の中で希少な存在である。

388は両面にポジティブな剥離面をもつ大型の剥片である。末端側の一辺を除いて側面に自然面が認められる。石器製作の素材として搬入されたものであろう。

390～392は打製石庖丁である。石理の沿って剥離された板状の剥片を素材とし、打面側の両面に階段状剥離を施し背縁部としたものである。竹添地区では、類似資料の良好な一括出土がある。概して抉りをもつ打製石庖丁よりも大型で、刃部に明確な二次加工は施されず、磨耗などの使用痕も確認できない。

第6節 中世（図版254）

徳政地区や二ノ郷地区の井戸や掘立柱建物などから砥石が出土している。流紋岩質凝灰岩の3点（393・394・396）は長方形に成形され、表裏両側面の4面が使用されている。それ以外の石材では395は扁平な円礫、397は塊状の礫をそのまま使用したものである。

引用文献

- 兵庫県教育委員会 1990年 「七日市遺跡（I）—第2分冊—（弥生・古墳時代遺跡の調査）」
 高根県教育委員会 1989年 「西川津遺跡V」
 財団法人大阪文化財センター 1979年 「池上遺跡 第3分冊の1 石器編」

第3章 玉・金属器・土製品・石製品

第1節 玉 (図版255)

玉は弥生時代と古墳時代と推定される。

1. 弥生時代中期下層 (42)

中期前半の竪穴住居跡S H30001の床面から碧玉製の管玉が1点出土している。42は全長4.4mm、直径24mm、重量0.40mgを測る。両面穿孔で濃緑色を呈する。

2. 弥生時代中期上層 (1～41・43・380)

弥生時代中期後半のものは平地建物S B40001と方形周溝墓の埋葬施設S T40019とS T40025から合計42点出土している。いずれも碧玉製の管玉である。

S B40001 (43)

平地建物S B40001の床面から碧玉製の管玉が1点が出土している。43は全長5.7mm、直径2.1mm、重量0.41mgを測る。両面穿孔で濃緑色を呈する。

S T40019 (1～34)

方形周溝墓S X40010の埋葬施設S T40019の床面から碧玉製の管玉が34点が出土している。1～34は全長は最小が1の3.5mmから最大が6の9.5mmまでであり平均5.78mmを測る。直径は最小が5・15・19・26の2.0mmから最大が14・20の2.5mmまでであり平均2.21mmを測る。重量は最小が24の0.23mgから最大が6の0.82mgまでであり平均0.412mgを測る。両面穿孔で12は紐擦れの痕跡が残る。5は断面が円形では無く、一部平坦面を残す。3は端面の片面が完全に調整されていない。全体に緑色を呈するが、18は緑灰色で、8・25・26は淡緑色を呈する。

S T40025 (35～41)

方形周溝墓S X40021の埋葬施設S T40025の頭部付近から碧玉製の管玉が7点出土している。35～41は全長は最小が36の5.5mmから最大が38の8.2mmまでであり平均6.67mmを測る。直径は最小が41の2.6mmから最大の35の3.4mmまでであり平均2.93を測る。重量最小が36の0.54mgから最大が39の1.17mgまでであり平均0.824mgを測る。緑色を呈する。両面穿孔で端面は36が両面とも35・39が片面完全に調整されていない。

その他 (380)

碧玉の擦切溝と研磨痕が存在する剥片(380)が1点出土している。

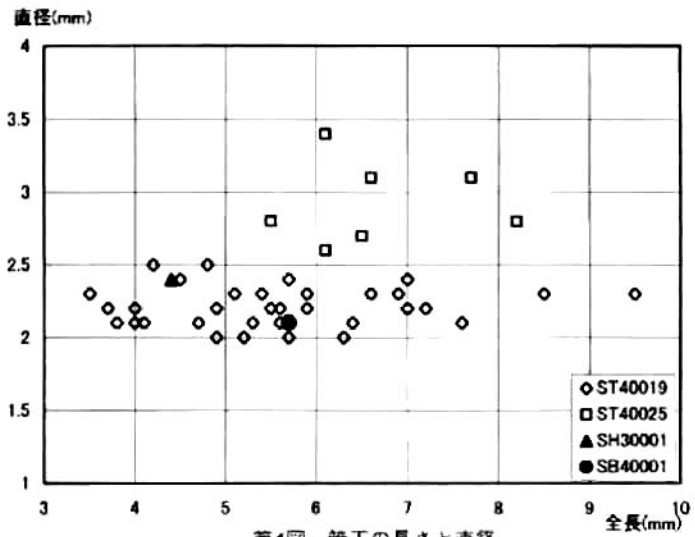
3. 古墳時代 (44)

勾玉が1点出土している。二ノ郷5区の中世面の遺構検出時に出土した。下層には古墳時代の溝(S D60001～S D60004)や弥生時代の方形周溝墓群が存在している。

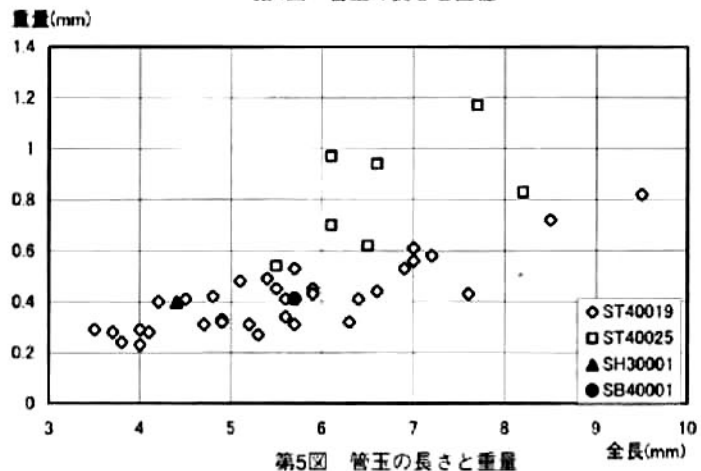
丁字頭勾玉(44)は逆C字形で頭部の幅が最も広く、尾部に行くにしたがってしだいに狭くなっている。全長42.2mm、中央部幅16.3mm、厚さ13.9mmを測り、断面形はやや扁平である。頭部には3条の刻線が刻まれているが紐孔まで達していない。紐孔は両面から穿孔しており、孔径4.7mm～5.3mm前後である。重量は184.29mgを測る。色調は白っぽく、石材は凝灰岩と考えられる。風化が著しく、原面を保っているのは紐孔と側内面のみであり、研磨痕などは認められない。

第6表 管玉一覧

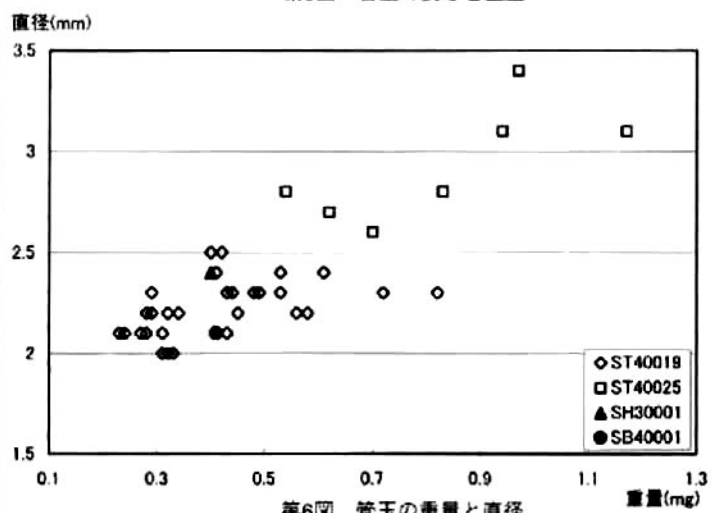
No.	全長 (mm)	直径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (mg)	特徴
1	3.5	2.3	1.4	1.3	0.29
2	7.2	2.2	1.4	1.4	0.58
3	3.7	2.2	1.5	1.5	0.28 欠け
4	5.7	2.4	1.5	1.5	0.53
5	4.9	2.0	1.2	1.2	0.33 平坦面あり
6	9.5	2.3	1.6	1.5	0.82
7	5.9	2.2	1.5	1.5	0.45
8	7.0	2.4	1.6	1.6	0.61 淡緑
9	4.5	2.4	1.4	1.1	0.41
10	5.1	2.3	1.3	1.2	0.48
11	5.6	2.1	1.2	1.1	0.41
12	4.7	2.1	1.3	1.2	0.31 紐
13	7.0	2.2	1.3	1.1	0.56
14	4.2	2.5	1.4	1.0	0.40
15	5.2	2.0	1.5	1.1	0.31
16	8.5	2.3	1.4	1.1	0.72
17	3.8	2.1	1.4	1.2	0.24
18	5.3	2.1	1.5	1.3	0.27 緑灰
19	6.3	2.0	1.6	1.5	0.32
20	4.8	2.5	1.5	1.4	0.42
21	5.5	2.2	1.4	1.3	0.45
22	5.9	2.3	1.4	1.4	0.43
23	6.6	2.3	1.6	1.5	0.44
24	4.0	2.1	1.2	1.1	0.23
25	4.9	2.2	1.7	1.6	0.32 淡緑
26	5.7	2.0	1.6	1.4	0.31 淡緑
27	6.4	2.1	1.5	1.4	0.41
28	7.6	2.1	1.5	1.3	0.43
29	5.4	2.3	1.5	1.4	0.49
30	4.0	2.2	1.5	1.1	0.29
31	5.6	2.2	1.5	1.0	0.34
32	4.7	2.1	1.5	1.3	0.31
33	4.1	2.1	1.4	1.4	0.28
34	6.9	2.3	1.5	1.5	0.53
35	6.1	3.4	2.0	1.6	0.97 欠け
36	5.5	2.8	1.6	1.5	0.54 欠け
37	6.6	3.1	1.9	1.6	0.94
38	8.2	2.8	1.9	1.7	0.83
39	7.7	3.1	1.7	1.6	1.17 欠け
40	6.5	2.7	1.7	1.5	0.82
41	6.1	2.6	1.6	1.5	0.70
42	4.4	2.4	1.5	1.3	0.40
43	5.7	2.1	1.3	1.0	0.41
平均	5.73	2.33	1.42	0.48	全体
平均	5.78	2.21	1.38	0.41	ST40019
平均	6.67	2.93	1.67	0.82	ST40025
平均	4.4	2.4	1.5	1.3	SH30001
平均	5.7	2.1	1.3	1.0	SB40001



第4図 管玉の長さ と 直径



第5図 管玉の長さ と 重量



第6図 管玉の重量 と 直径

第2節 金属器・土製品・石製品 (図版255・256)

1. 青銅器 (1)

青銅器は弥生時代中期の木棺S T 40004の人骨の腰部分から出土している。青銅武器の鋒部分で折れて欠損している。現存長4.83cm、最大幅2.09cm、最大厚0.60cmを測る。鑄が明瞭に残り、樋は存在しない。破断面は扁平な菱形である。表裏ともに幅約2cmの斜め方向の付着物が認められる。付着物は脂肪酸分析により人間の皮下脂肪であることが判明した。

2. 鉄器 (2~17)

ここに報告する鉄器は、平安時代から鎌倉時代にかけての遺構や遺構検出時に出土している。釘・錐・楔・鋤先・刀子などがある。釘(2~8・11)はいずれも小型で、頭部が残っている2・3・6~8は頭折れである。身部の断面形は方形ないし長方形である。茎(10)は断面形が長方形のため、鎌などの茎などが考えられる。錐(9)は両端を欠損しており、柄部分は0.7cm×0.3cmの長方形の断面に木質が付着しており、刃部分の断面は直径0.4cmの円形である。楔(13)は長さ3.8cm、幅1.4cm、厚さ1.1cmで刃部に向かって薄くしている。中央部の断面形は楕円形を呈している。鋤先(14)はV字形の刃部を作り出している。刀子(15~17)は16を除いて残りは悪い。15は茎部分で、目釘孔が存在する。16は全体に縦目の木質が付着している。全長19.0cm、刀身長14.0cm、刃幅1.6cm、茎長5.4cm、茎幅1.3cmを測る。12は不明である。

2~5・11はKM4区のSB80016から出土。6は二ノ郷5区のSK80012の南側の土坑から出土。7は徳政6区のピットから出土。8は徳政13区のSK80003から出土。9・17は竹添4A区のピットから出土。10は徳政12区のSB80006から出土。12は徳政4区のSK80017から出土。13は徳政4区のSK80016から出土。16はKM4区のSB80001から出土。14は徳政9区の包含層から、15は徳政12の包含層から出土。

資料化していないが、徳政7区のSD80023からと徳政12区のピットと徳政9区の包含層から鉄滓が出土している。

3. 土製品 (18~21)

土製品は平安時代から鎌倉時代にかけての遺構や遺構検出時に出土している。羽口と土鍾がある。

羽口(18~20)はSB80038から出土している。18・19は胎土や調整から同一個体の可能性が高い。輪装着部はラップ状に開いている。20は先端部が火を受けており、全体に製作時の調整痕が残っている。直径7.6cm、孔径約2.3cm。土鍾(21)は長さ5.2cm、直径0.8cm、孔径0.3cmの細長い管状土鍾である。SK80001から出土している。

4. 石製品 (22~24)

石製品は平安時代から鎌倉時代にかけての遺構や遺構検出時に出土している。基石と硯がある。

基石(22)は黒石であり、直径1.8cm、厚さ0.6cmの扁平である。細かい擦痕を残す。SB80009から出土している。硯(24)は砂石製で、硯首を欠いており、幅7.6cm、厚さ2.2cm、縁幅0.6cmを測る。磨墨面は使用により窪んでいる。SK80008から出土している。23は粘板岩製である。

第4章 木器 (図版257～262)

木器・木製品は縄文時代晩期から鎌倉時代にわたるものが出土している。図示したものは一部で、板材や木棺材、柱や枕など図示していないものも樹種同定を実施している。

第1節 縄文時代晩期 (1001・1011)

縄文時代晩期の木器は河道S R10001から、掘り棒と板材が出土している。

掘り棒1001は、身の先端を欠いている。身が厚いことから未成品の可能性がある。全長88.2cmを測り、柄部は64.8cm、身部は23.4cm以上である。柄はまっすぐで、直径は3.2cmを測る。身は肩部を斜めに作り出している。幅10.4cm、厚さ3.5cmを測る。板材1011は、長さ65.6cm、幅10.8cm、厚さ2.0cmを測る。

第2節 弥生時代中期下層 (1002・1009)

弥生時代中期下層の木器は溝S D30008から平鋸の未成品と土坑S K30001から鋸が出土している。

1009は平鋸身の未成品で連結を切り離し、A形突起の加工途中の段階のものと思われる長さ44.0cm、幅18.8cm、厚さ2.4cmを測る。A形突起部分は紡錘形を呈し、長さ18.8cm、幅8.9cm、厚さ3.0cmを測る。1002は土坑S K30001から出土した、鋸身の一部である。

第3節 弥生時代中期上層 (1006・1007・1014・1015・1033～1035)

弥生時代中期上層の木器は平鋸身未成品、樋、板材などが出土しているが、第1分冊地区は居住域の外れであるため、木製品の出土数は少ない。

なお、木器ではないが木棺の中で特殊な加工をしたものなども図示している。

平鋸身未成品1007は、河道S R40002から出土している。アカガシ垂属のミカン割り材から平鋸身の加工途中のものである。平鋸身を三個連結加工の段階で、ほぼ形態は整っている。全長87.0cm以上、最大幅20.0cm、最大厚さ5.2cmを測る。

樋1006はカヤの丸太を半裁し、内面をくり抜いたものである。全長71.2cm、最大幅17.4cmを測る。全面に工具による加工痕跡が残っている。1014は平地住居S B40002の南溝から出土した板材である。樹種はコウヤマキであり、不定形な孔があげられている。

1015は方形周溝墓群上層から出土した板材である。樹種はコウヤマキであることから木棺材の可能性はあるが、縁に厚みをもたせていることから何らかの製品の可能性もある。一部に火を受けて炭化している。

木棺材(1033～1035)は加工の特殊なもの、あるいは棺とは直接関係ない加工のあるものを図示した。1033は方形周溝墓S X40018の木棺S T40024の南小口板である。側縁部に一辺4.0cmの方形の小孔をあけている。1034は方形周溝墓S X40038の木棺S T40045の西側板である。通常は小口をはめ込む溝は直立しているが、これは内湾している。溝の断面は木棺の内側を深く、外側を浅く加工している。1034は同じく木棺S T40045の東側板の端部の破片である。一辺2.4cmの方形の孔があげられている。木棺S T40045を構成する棺材の樹種は、小口板は湾曲させやすいようにクスノキを使用しており、他はコウヤマキを使用しており、1034だけがモミを使用しており、さらに木棺には必要のない加工が存在することから、他の材を転用したのではないかと考えられる。

第4節 弥生時代後期 (1003・1005・1008・1010・1013・1017～1027)

弥生時代後期の木器は河道S R 50001と河道S R 50002から出土している。工具として斧柄が、農具として鋤、泥除、掘棒、横槌、食事具として匙がある。

斧腰柄(1022・1023)は、いずれも横斧の柄である。1022は斧装着部と握りの一部を欠いている。斧台後面は平坦に薄く仕上げられている。握りの斧台への着柄部分は弯曲させている。握りの径は2.0cmを測る。1023は斧台前面を欠損しているが、握りはほぼ完全である。斧台の装着面は平坦に加工しているが、後面は平坦にしていない。柄の全長は34.8cm、握りの直径は3.1cmを測る。着柄角度は55°である。

直柄平鋤身1010は柄孔部分を中心とした縦の破片である。柄孔周囲にはA形隆起が付き、刃部先端には鉄の刃先を装着させるための段を形成している。全長26.8cm、身厚1.0cmを測る。泥除1008は上端を欠いている。平面形は上端を除いて不整形で、木目は横に通る。柄孔の他に中軸線下端近くに小孔がある。断面形は扁平な板状である。幅29.0cm、厚さ0.5cmを測る。曲柄又鋤身1004は鋤身先端の破片である。刃部の最大幅は下方にある。1024・1025は欠損部が多いが、形態から鋤曲柄と判断した。1024は握りの直径3.2cmを測る。1025は鋤台上の紐かけが表現されている。握りの直径は3.2cmを測る。

掘り棒1003は身部から柄の一部にかけてのものである。身の肩はなで肩で、身の横断面は平坦な板状である。身の厚さは1.0cm、柄の直径は2.7cmを測る。穂摘具1005は変形の平行四辺形を呈している。背近くに2孔一対の紐孔を穿つ。2孔の紐孔を結ぶように片面に浅い溝が付く。全長16.3cm、幅4.6cm、厚さ1.0cmを測る。

横槌1020は身部のみで握り部を欠いている。身の断面形は円形で、全長18.4cm、直径9.1cmを測る。

匙(1017～1019)はいずれも加工途中の未成品である。形態は身の口縁と柄のつけねの上面との間に段差がなく、両者が鈍角にとりつく。身の形態は紡錘形をしている。全体に細かい工具痕跡が残る。1017は全長31.3cm、1018は全長36.8cmを測る。

1026は盾の破片である。厚さ0.6cmの板材で全面に小孔があげられている。表面の全面と裏面の一部に赤彩が認められる。建築部材1027は板材で完形である。両先端を加工し、切り込みを設け、中央部分には2.0cm×2.4cmの長方形の孔をあけている。また長辺の二辺の側縁部近くには四つの小孔をあけている。全長78.3cm、幅12.5cm、厚さ1.3cmを測る。一部は火を受けて炭化している。

有頭棒1021は心持ち材の一端を加工して頭を作り出した製品である。全長25.7cm以上、直径3.6cmを測る。1013は用途不明製品の一部である。全長37.1cm以上、厚さ1.2cmを測る。隅は丸く仕上げられており、長辺の側縁に隅丸方形の孔が三個以上あげられている。

第5節 古墳時代後期 (1016)

古墳時代後期の木器は水路S D 60005から出土している。

1016は馬鋤の台木部の一部である。引棒の孔が一孔と歯孔が四孔残っている。全長は41.6cm、幅6.8cm、厚さ8.8cmを測る。歯の心々距離の平均は10.0cmを測る。

第6節 中世 (1028～1032)

中世の木器は井戸関係の部材を中心に図示した。1028はS E 80001の中から出土した竹で、長さ21.2cm、直径2.8cmを測る。1029～1032はS E 80001の四隅の支柱で、いずれもモミ材で、1032は心持ち材を使っている。横棧を通す孔があげられている。先端は突き刺すため、尖らせている。

第V部 自然科学的調査

第1章 玉津田中遺跡で検出された地震の痕跡

通商産業省工業技術院地質調査所

主任研究官 寒川 旭

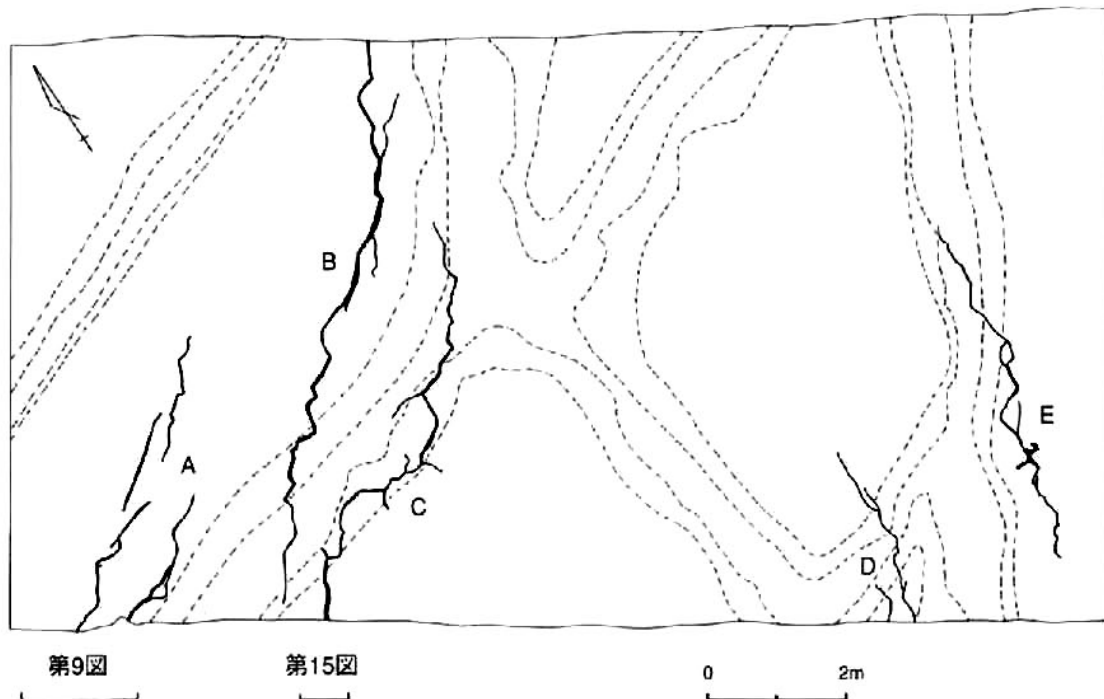
第1節 はじめに

最近、全国の遺跡発掘調査において地震の痕跡が検出されるようになり、地震の予知や被害の予測に役立つ重要な資料と考えられている。

遺跡で最もよく検出されるのは液状化現象の痕跡である。この現象は、地表からさほど深くない所にゆる詰まりの砂（礫）が堆積し、地下水で満たされている状態で次のような過程を経て発生する。

地下の砂粒は、通常は、お互いに支えあって安定している。そこへ、激しい地震動が加わると支えがはずれ、それぞれの粒子がすき間を小さくしてより安定するよう移動する。このため、すき間を満たしている地下水が圧迫されて水圧が急上昇する。やがて、水圧の高まった水が砂粒や周囲からの土圧を支えるようになり、地層全体が液体の性質をもつようになる（液状化）。さらに、水・砂が上位にある地層を引き裂きながら「噴砂」として上昇することになる。

この現象は、近代都市の諸機能に著しい被害を与え、防災上注目されている。また、液状化現象の存在を確認することは、過去に震度V以上の激しい地震動が存在したことを証明することにもなる。



第7図 地震跡（砂脈）の分布

第2節 地震跡の形態

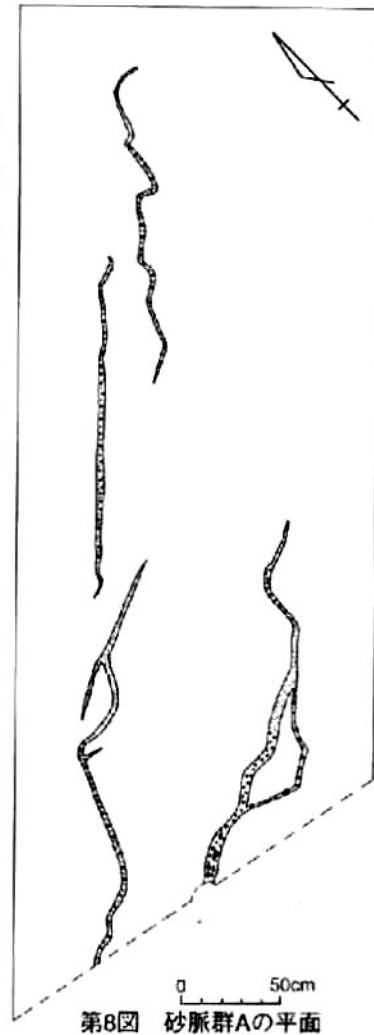
玉津田中遺跡において顕著な液状化跡が検出された。

第7図は弥生時代中期の水田面にみられる砂脈の分布を示したものである。図の左半分では、北東-南東方向にのびる多くの砂脈が、右半分では南北方向にのびる2列の砂脈が分布している。本稿では、これらの砂脈をA～Eの5グループに分類して説明を行う。

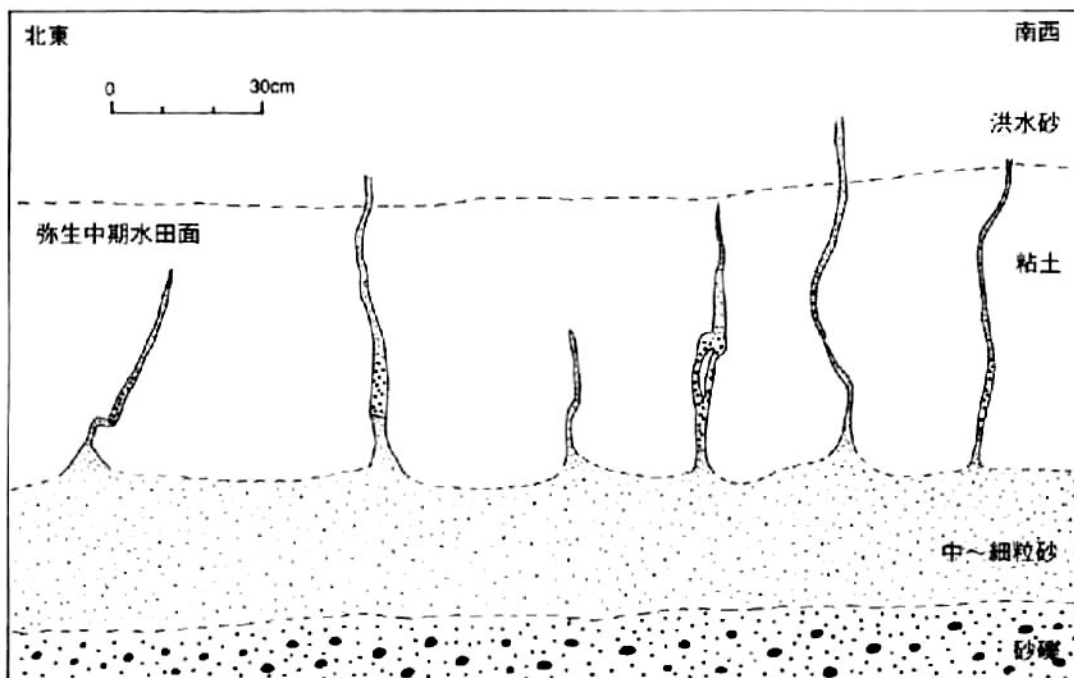
まずAの砂脈群（第8図）は最大幅6cmで概ね1m前後の長さを持つ4条の砂脈で構成されている。砂脈の内部は粗粒～細粒砂より構成されており、砂脈の中央部付近が粗粒砂、末端部分付近が細粒砂となる場合が多い。

第9図はこの砂脈群の南西端壁面の断面図である。ここでは、上位より細～中粒砂（洪水砂）・粘土・中～細粒砂・砂礫が堆積している。そして、中～細粒砂層中で液状化が生じ、数条の砂脈を通じて噴砂が上昇する様子が認められた。砂脈内は下部が粗粒砂・上部が細粒砂で構成されており、上端で自然消滅している。砂脈の上端が洪水砂中まで達するものも見られる。

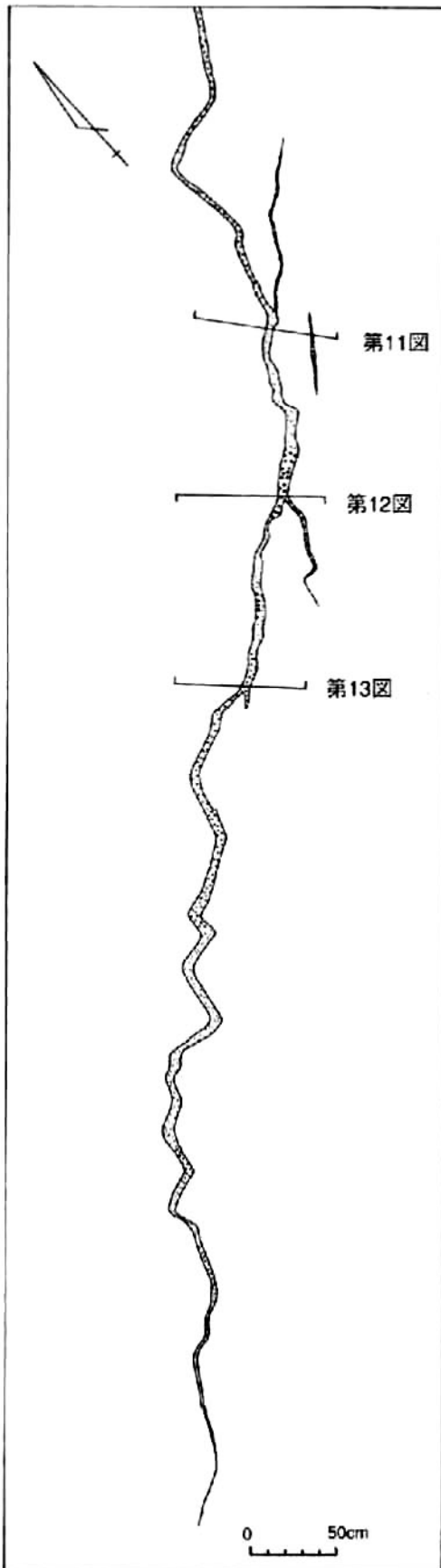
Bは北東から南西に向かう砂脈で（第10図）、最大幅10cm、長さ4.5m以上になり、今回検出された中では最も大きいものである。砂脈の中心部のみが粗粒砂で他は細～中粒砂で構成されている。そして、この砂脈沿いの3ヶ所（第11～13図）で断面形の観察を行った。



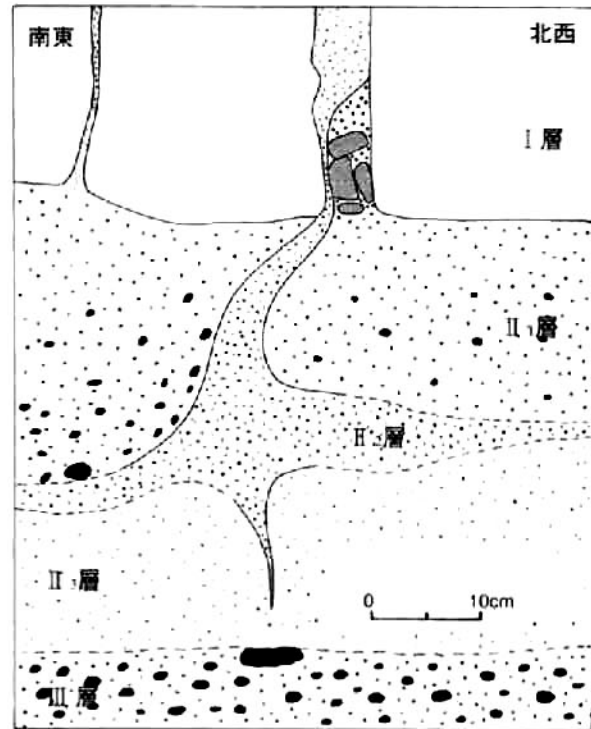
第8図 砂脈群Aの平面



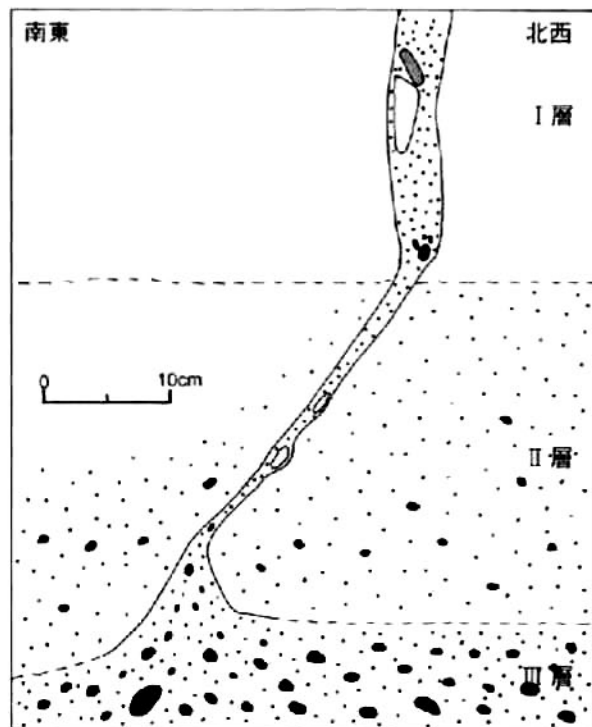
第9図 砂脈群Aに関する断面（断面の位置は第7図に示す）



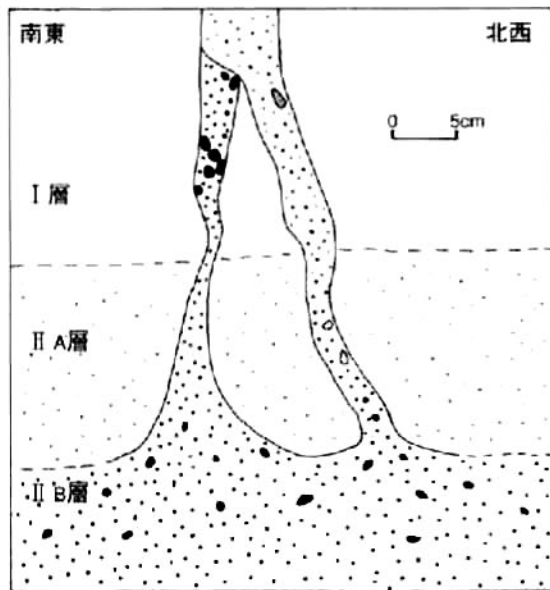
第10図 砂脈Bの平面



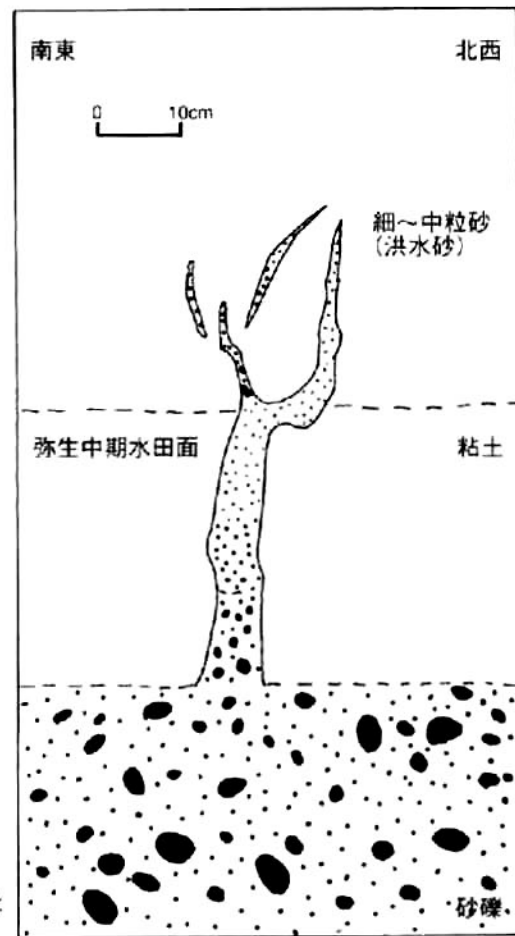
第11図 砂脈Bの断面（その1）
（メッシュ部分は上位の極細粒砂（洪水砂）が落下したもの）



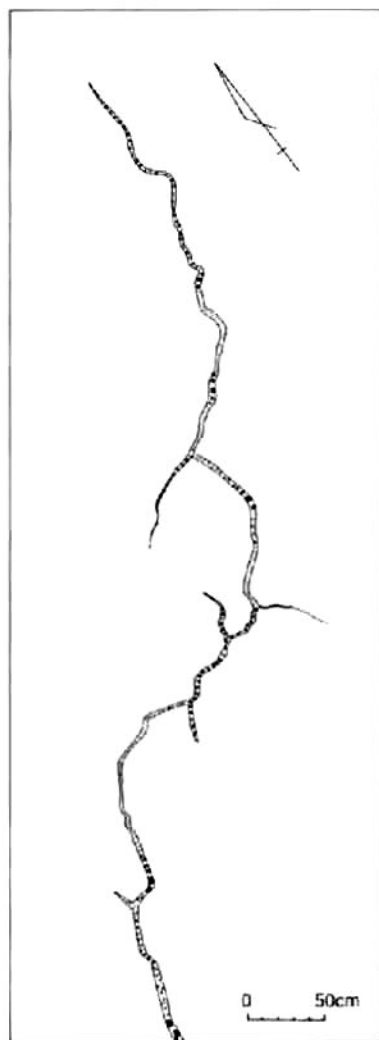
第12図 砂脈Bの断面（その2）
（砂脈内で白抜きの部分はI層のシルトが落下したもの）



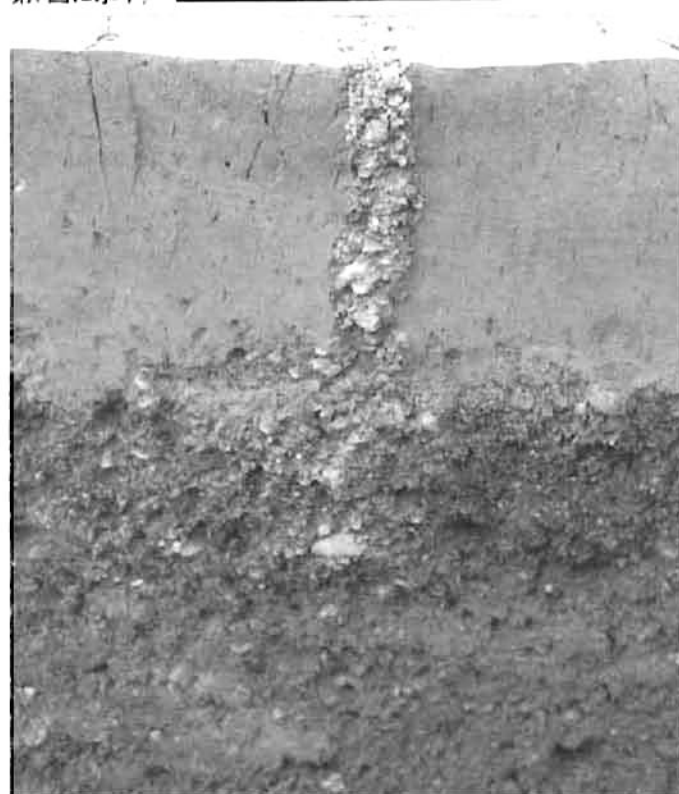
第13図 砂脈Bの断面 (その3)
(砂脈内のメッシュの部分は上位の洪水砂が、
白抜き部分はI層が落下したもの)



第15図
砂脈Cの断面
(断面の位置は
第7図に示す)



第14図 砂脈Cの平面



第16図 砂脈Cにおける砂礫層の液化跡

第11図の堆積物はI層（シルト）、II層（最大径4cmの礫を含む粗粒砂）、II_a層（中～粗粒砂）、II_b層（細～中粒砂）、III層（最大径20cmの礫および砂）に区分され、2段階にわたる噴砂の発生が認められている。まず、III層が液状化して、I層を引き裂きながら（幅約5cm）粗粒砂が上昇している。この時、I層よりさらに上位に堆積していた極細粒砂（洪水砂）の一部が小さなブロックとなって砂脈内に落下している。次いで、II層から噴砂が上昇し、砂脈内に細～中粒砂を供給している。この段階でII層からの噴砂の上昇は停止している。また、II層から上昇する噴砂は上部ほど細かい粒子で構成されている。さらに、II層の先端に亀裂が生じてII層の一部が流れ込んでいる。

第12図の堆積物は、I層（シルト）、II層（細礫を含む粗粒砂）、III層（最大径5cmの礫および砂）に区分され、III層内で液状化が生じ、粗粒砂が噴砂として上昇している。砂脈の幅はI層を引き裂く部分で4cm、II層を引き裂く部分で幅1～2cmとなる。砂脈内には、I層および、上位の洪水砂の一部がブロック状に落下している。

第13図の堆積物はI層（シルト）、II_a層（細～中粒砂）、II_b層（最大径4cmの礫を含む粗粒砂）と区分できる。ここでは、II_a層が液状化して噴砂が上昇している。そして、液状化したII_a層から2本の砂脈が発達し、上部で合流して同一の砂脈になっている。液状化の発生と共に、左側の砂脈内を粗粒砂および細礫（最大幅1.6cm）が上昇し、次いで、右側の砂脈内を粗～細粒砂が上昇している。

砂脈Bは平面図では一本の砂脈として認識される。しかし、上述の観察により、様々な地層が液状化し、複雑な経路を経て噴砂が供給されていることが明らかになった。

砂脈Cは、第14図に示すように、最大幅5cmで樹枝状に屈曲した平面形を示す。砂脈内の5ヶ所で礫の噴出が認められる。

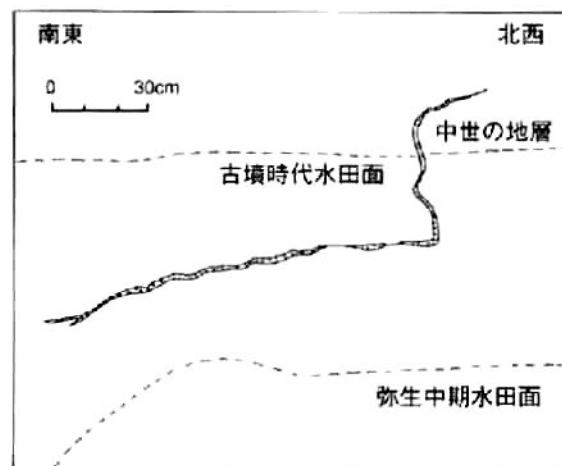
砂脈南西端（第16図）では、礫の比率の多い砂礫層（最大径10cm）で液状化現象が生じている。そして、幅数cmの砂脈内を礫・砂が上昇しており、砂脈内には最大径7cmの礫も見られる。

反対側の断面（第15図）でも、砂礫層（最大径6cm）中で液状化が生じ、礫・砂が上昇する様子が観察できる。砂脈内部では、下部に礫（最大径1.5cm）、中～上部に粗～中粒砂が見られ、上部ほど粒径が小さくなる状況がよくわかる。砂脈先端は、洪水砂中で消滅している。

砂脈Dは最大幅3cmで北北東～南南西方向に伸びており、砂脈の内部は中～細粒砂で満たされている。

砂脈Eも砂脈Dに平行する方向に伸びており、最大幅10cmの砂脈の中央部は中～粗粒砂、他は細～極細粒砂からなり、末端ほど細かい粒子で構成されている。

その他に、一連の砂脈群から7m南東寄りの位置に砂脈Fが認められる（第17図）。この砂脈は壁面でのみ認められるものであるが、古墳時代（6世紀後半）の水田面や、上位の中世の地層を引き裂きながら上昇し、最上部は地表まで達しないで自然消滅している。



第17図 砂脈Fの断面

第3節 考察とまとめ

当遺跡の液状化跡において、興味深い現象がいくつか観察できた。

まず、第12・15・16図に示したような砂礫層の液状化現象が確認できた¹⁾。液状化現象は、本来、粒径のそろった中～細粒砂において発生し易く、砂礫層で液状化が発生することは難しいと考えられていた。しかし、当遺跡では、最大径10cm程度の礫を含み、砂にくらべ礫の比率の大きい堆積物中で液状化現象が生じ、多量の礫が砂脈内を上昇していた。このことは、当地域において①かなり激しい地震動が生じる②特に液状化し易い地質条件にあった③など砂礫層でも液状化が生じるような条件が存在したことを示す。

平面的に一本の砂脈でも、地下では複数の地層が液状化して、各地層から砂脈内に砂・礫を供給していることが、第11・13図のように明らかになった。一方、砂脈内を砂・礫が上昇する過程で分級化作用が生じ、上位ほど細かい粒子で構成される現象²⁾がほとんどの断面で見られた。

大部分の砂脈が、弥生時代中期の水田面を引き裂き、これを覆う洪水砂層で消滅している。このため、弥生時代中期より後に発生した地震による液状化現象の痕跡と考えられる。この中で砂脈Fのみは中世頃の地層を切っていることより中世以降の地震による液状化跡も含まれていることが判明した。

当地域に激しい地震動を与える歴史地震として、1596年9月5日に発生して京阪神地方に著しい被害をもたらせた「伏見地震」が考えられる³⁾。六甲山地南麓域でもこの地震による痕跡が多く検出されている。その他、神戸市東灘区において5世紀末～6世紀中頃までの時期と考えられる地震跡が検出されており⁴⁾、この時の地震跡を含む可能性もある。

今後、周辺地域の調査において、地震の痕跡が認められる可能性が強いので、地震跡の形成時期の問題も含めて、調査の過程で十分留意する必要がある。

<謝辞>

本稿をまとめるにあたり、山下史朗氏はじめ兵庫県埋蔵文化財調査事務所の皆様には多くの御教示を頂きました。また第7・17図は兵庫県埋蔵文化財調査事務所作成の原図をもとにして作成いたしました。

註

- (1) 近畿地方でも、京都府八幡市の木津川河床遺跡や内里八丁遺跡、滋賀県高島郡新旭町の針江浜遺跡をはじめいくつかの遺跡で砂礫層での液状化が検証されている。
- (2) 寒川 旭・佃 英吉・葛原秀雄(1987b)：滋賀県高島郡今津町の北御西海道遺跡において認められた地震跡、地質ニュース,390,13-17. 寒川 旭(1990)遺跡から得られた過去の地震情報、地学雑誌,99,471-482. 寒川 旭(1992a)遺跡の地震跡、土と基礎,40,13-18. 寒川 旭(1992b)地震考古学-遺跡が語る地震の歴史-,中央公論社,251p.などに事例が紹介されている。
- (3) 伏見地震については、宇佐美(1887)新編・日本被害地震総覧、東京大学出版会,434p.に被害の概要が、寒川 旭(1992c)に地震跡の分布が示されている。
- (4) 寒川 旭・佃 英吉・藤本史子(1991)神戸市郡家遺跡の地震跡、考古学と自然科学,23,51-59. 寒川 旭(1992c)郡家遺跡にみられる地震の痕跡、大手前女子大学史学研究所編「郡家遺跡」,85-93. および寒川(1992b)に事例が示されている。また、この他に868年8月3日に生じた播磨・山城の地震(宇佐美,1987など)の痕跡が含まれている可能性もある。

第V部 第2章は
公開していません

第2章 玉津田中遺跡木棺 S T 40004から出土した
青銅器に残存する脂質について

第Ⅵ部 まとめ

第1分冊の徳政・二ノ郷・黒岡地区は玉津田中遺跡の西端に位置している。沖積地であり、何回も洪水に遭っているため、複数の遺構面を調査した。調査した遺構面は縄文時代晩期・弥生時代前期・弥生時代中期下層・弥生時代中期上層・弥生時代後期・古墳時代前期・古墳時代後期・中世などである。

縄文時代晩期

縄文時代晩期の二ノ郷10・13・12区、徳政10・15・3・11・13・12区は自然流路S R 10001が大きく蛇行しながら流れている。二ノ郷11区からは深鉢に伴って炭化米が107粒程度検出できた。徳政11区では土坑が存在しているが、居住域・墓域は確認していない。

弥生時代前期

弥生時代前期になるとS R 10001は窪みとなり、同じ場所に新たに溝S R 20003が開削される。本流はS R 20001に流れを変え、弥生時代中期以降の竹添の微高地が形成され始める。調査区の西端の徳政9・12区にはS D 20002が開削され、これより低い場所に小区画の水田域が造られている。第1分冊部分では居住域・墓域は確認していない。

弥生時代中期下層

弥生時代中期下層は、北から南に傾斜する地形の中で、河道・水路とも地形に沿って北から南に流れている。居住域は自然流路S R 30002と自然流路S R 30003に挟まれた微高地と自然流路S R 30002とその西側を流れる水路S D 30005との間の小微高地に限られる。自然流路S R 30002と自然流路S R 30003に挟まれた微高地はさらに竹添地区に広がっている。微高地の中央部分の高い場所に溝S D 30010を掘削している。

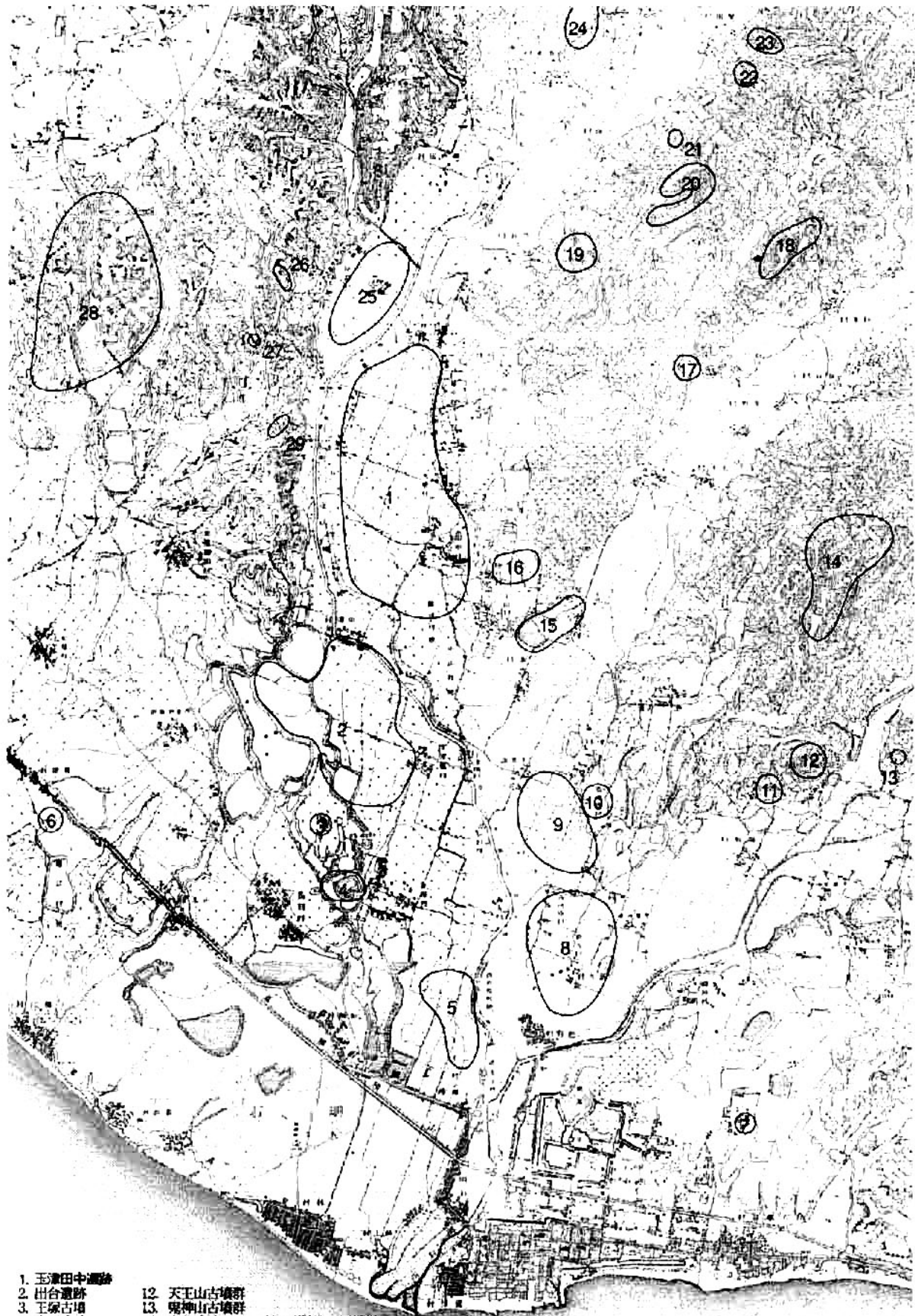
水田域は徳政地区と黒岡地区に存在し、徳政地区は水路S D 30006の西側に広がり、徳政西地区と徳政東地区の大きく2地区に分けられる。徳政西地区は水路S D 30001より西側に位置し、徳政東地区は水路S D 30001と水路S D 30006に挟まれた範囲である。水路S D 30001と水路S D 30009の間は、水田は造られていなかったと考えられる。水田区画は小区画で方形であることが特徴である。墓域は確認していない。

弥生時代中期上層

弥生時代中期上層は洪水砂に覆われているため、比較的良好に全体像が判明した。地形は北から南に傾斜し、川・水路とも地形に沿って北から南に流れており、大きく二つの地域に分けられる。一つは水路S D 40004の東側に広がる微高地部分であり、もう一つは河道S R 40001と水路S D 40004の西側に広がる水田域である。

水路S D 40004の東側に広がる微高地部分は自然河道S R 40001と自然河道S R 40002に挟まれた微高地部分と自然河道S R 40001と水路S D 40004に挟まれた小微高地に分けられる。前者の微高地は北側の二ノ郷地区で方形周溝墓群が形成され、南側の徳政地区では竪穴住居、平地住居、土坑などの居住域が広がっている。方形周溝墓群と居住域の間には調査した範囲では特別な施設は設けられておらず、時代とともに墓域が拡張している様子が確認できた。方形周溝墓群は40基調査し、39基の埋葬施設を調査した。埋葬施設は方形周溝墓の盛土部分に存在するものと、周溝内に存在するものがあり、周溝内に存在するものは、組合せの木棺の他に木蓋土壙墓も存在している。木棺の中には青銅武器の鋒や石鏃が出

圖 版

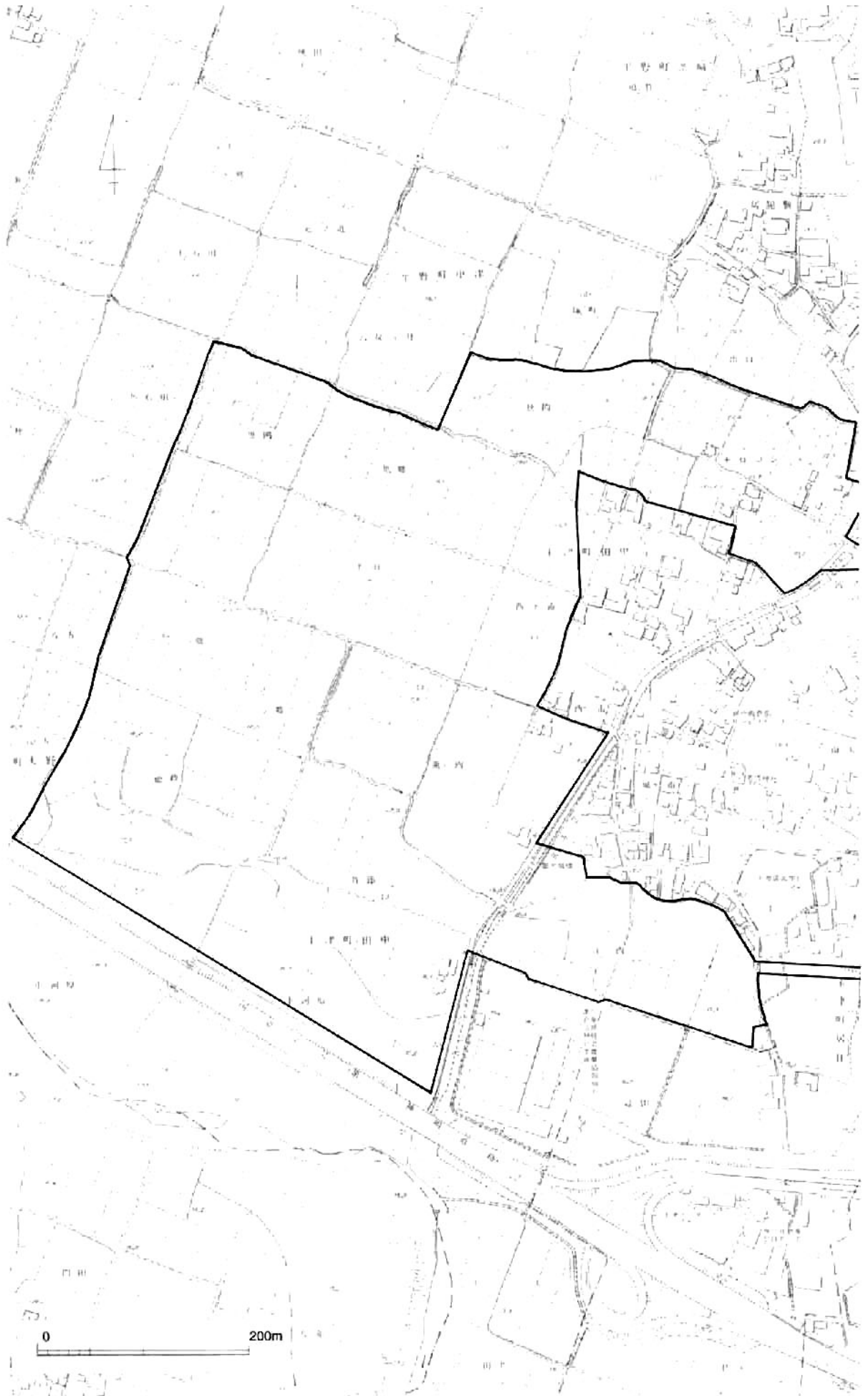


- | | | |
|------------|------------|---------------|
| 1. 玉津田中遺跡 | 12. 天王山古墳群 | 22. 西神41・42遺跡 |
| 2. 出合遺跡 | 13. 鬼神山古墳群 | 23. 西神38・40遺跡 |
| 3. 王塚古墳 | 14. 青谷遺跡 | 24. 黒田遺跡 |
| 4. 吉田遺跡 | 15. ニッ勝遺跡 | 25. 日給遺跡 |
| 5. 吉田南遺跡 | 16. 厨住小山遺跡 | 26. 日給古墳群 |
| 6. カケユ池古墳群 | 17. 西神52遺跡 | 27. 下大谷古墳群 |
| 7. 太寺庵寺 | 18. 西神53遺跡 | 28. 高丘古墳群 |
| 8. 新方遺跡 | 19. 西神54遺跡 | 29. 中村古墳群 |
| 9. 今津遺跡 | 20. 西神55遺跡 | |
| 10. 高池橋岡遺跡 | 21. 西神47遺跡 | |
| 11. 瓢箪古墳 | | |

0 2km

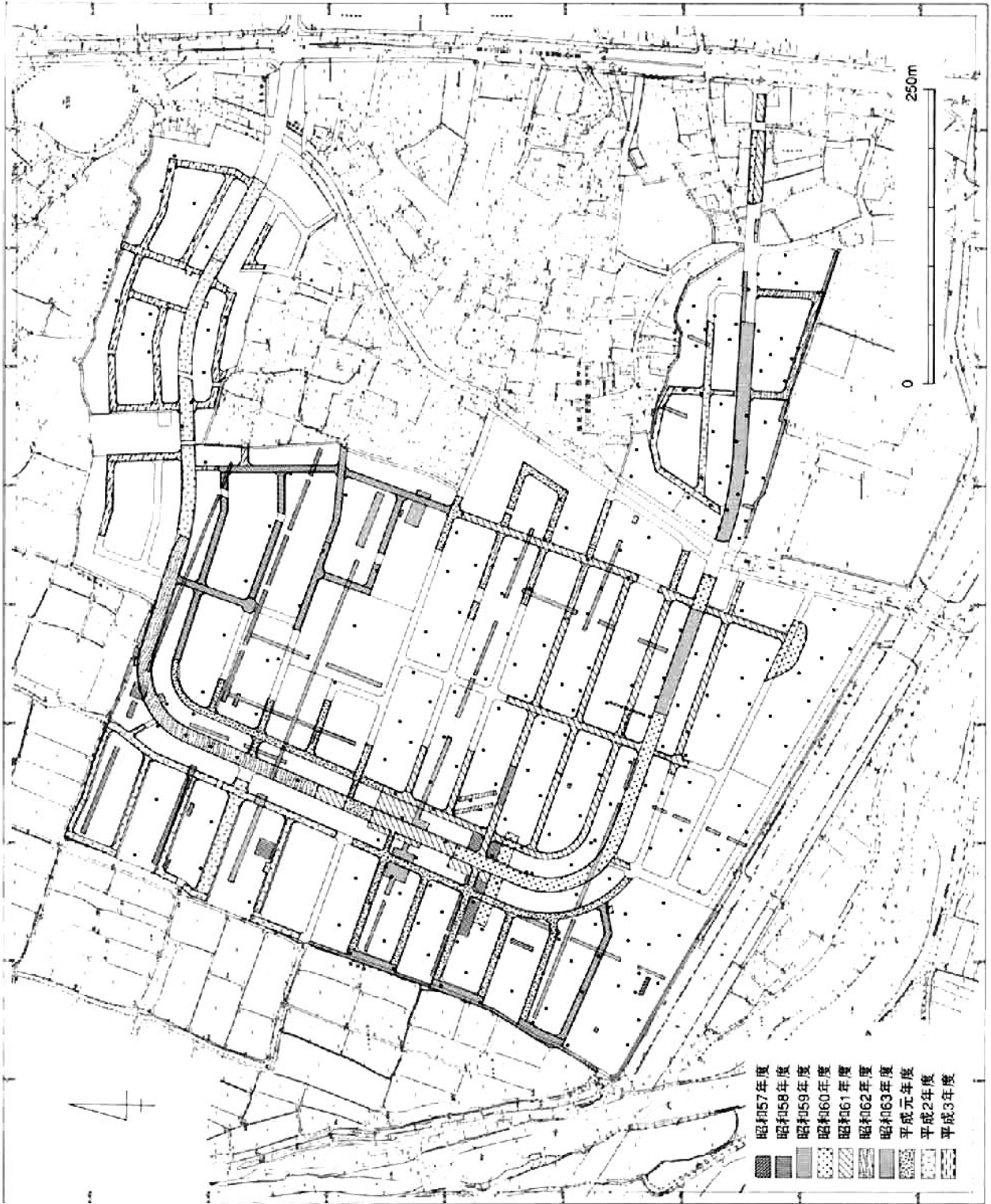
遺跡の位置と周辺の遺跡(1/40,000)

図版2 遺跡

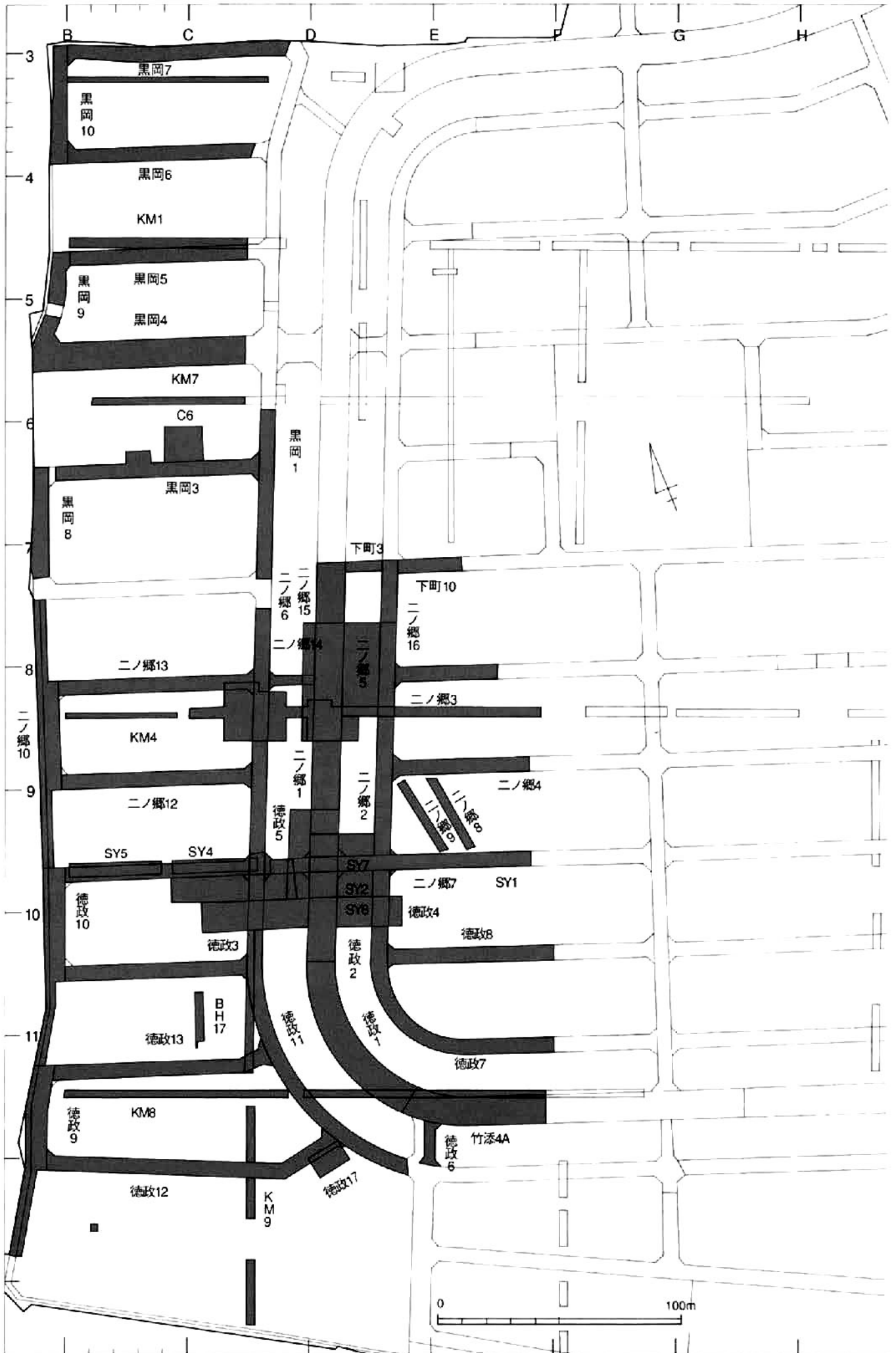


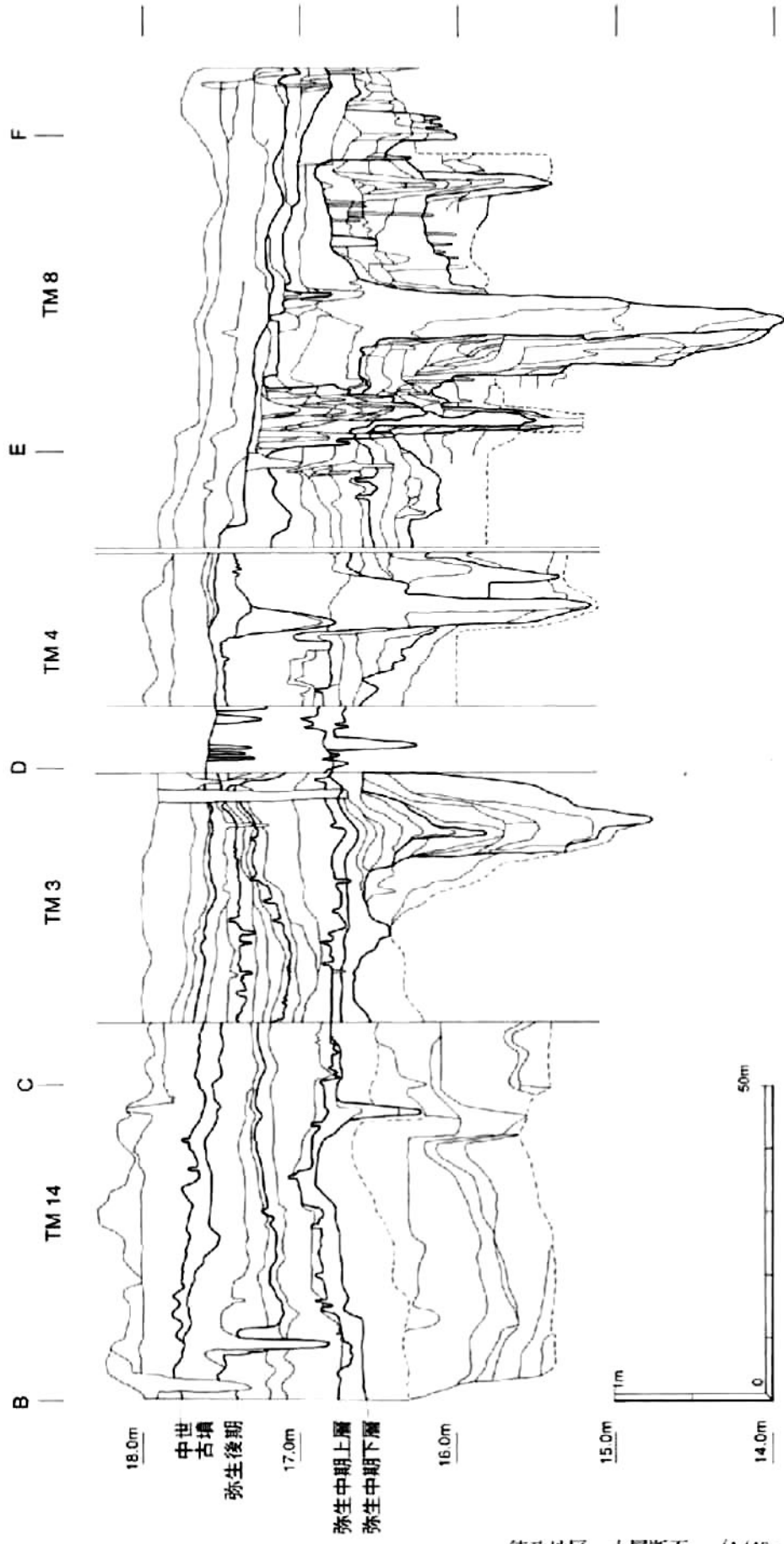
調査前の状況と事業範囲 (1/5,000) 神戸市「高津橋」・「福中」

図版 3 遺跡

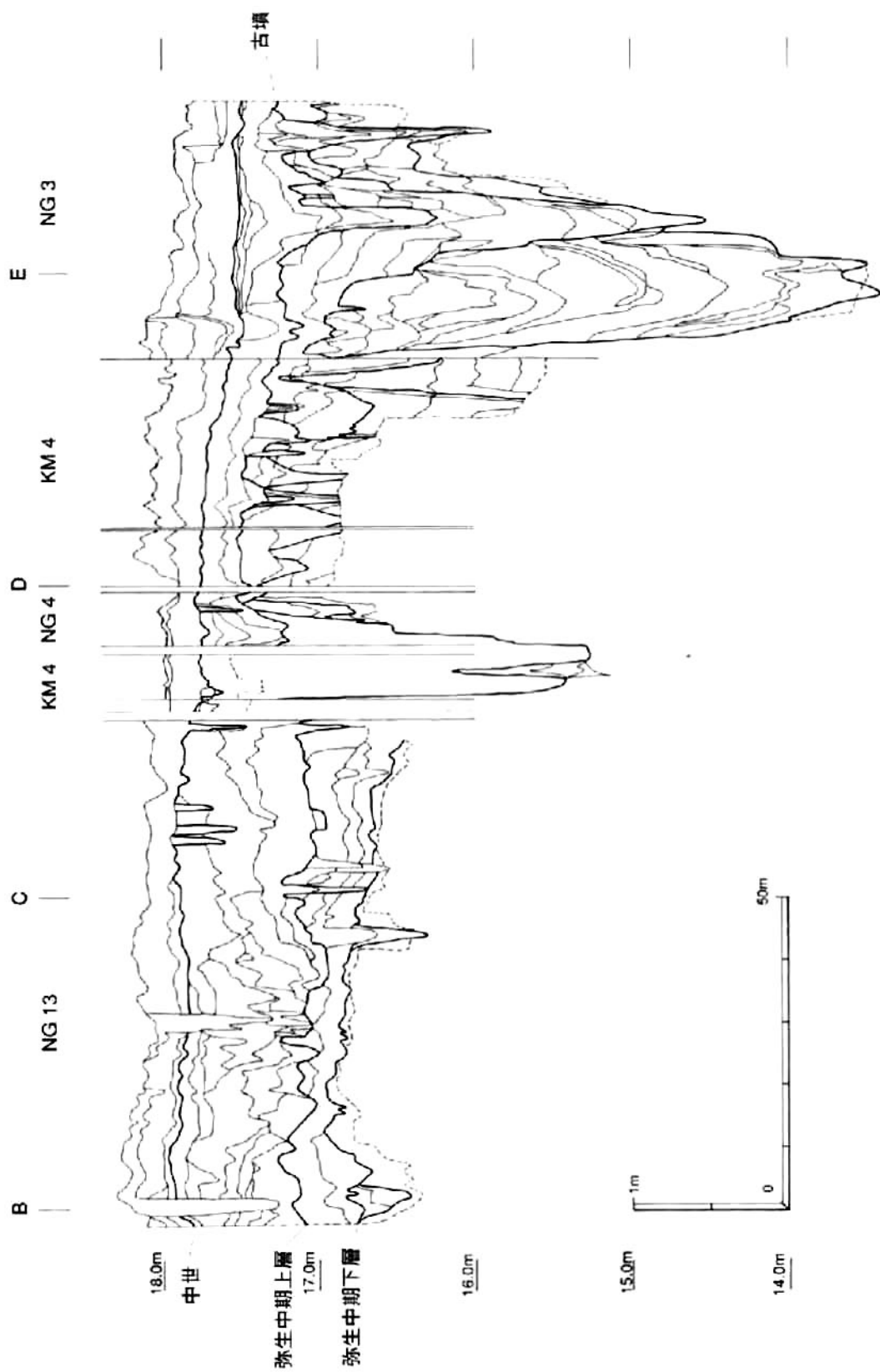


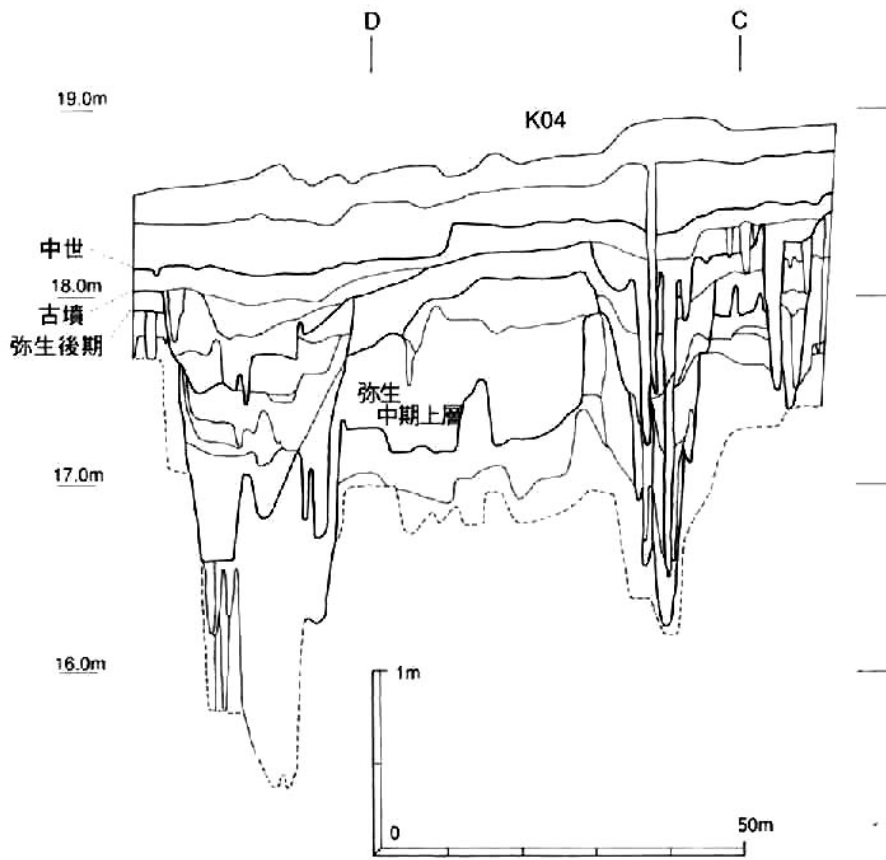
図版 4
遺跡

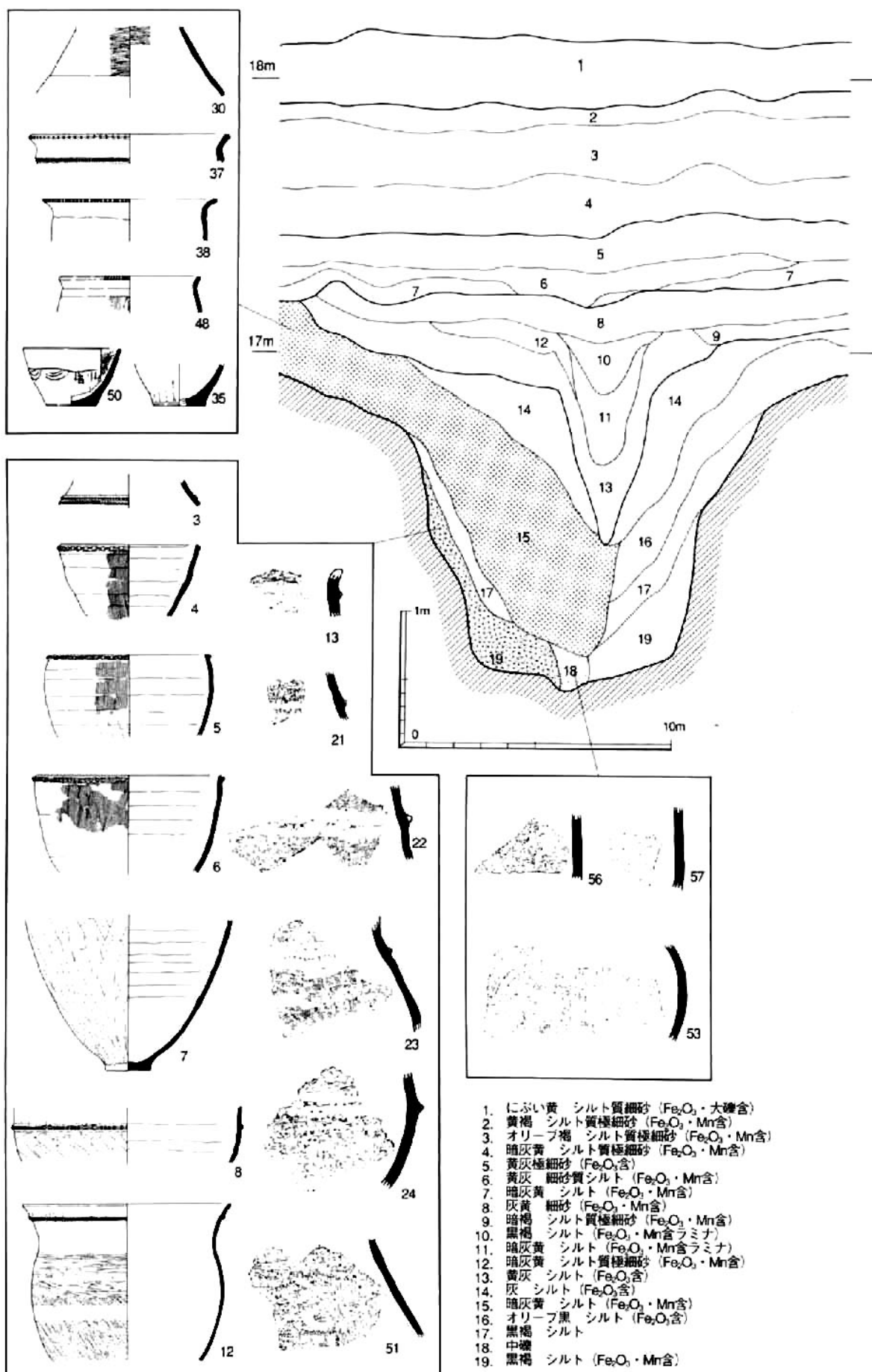




徳政地区 土層断面 (1/40 · 1/1,000)

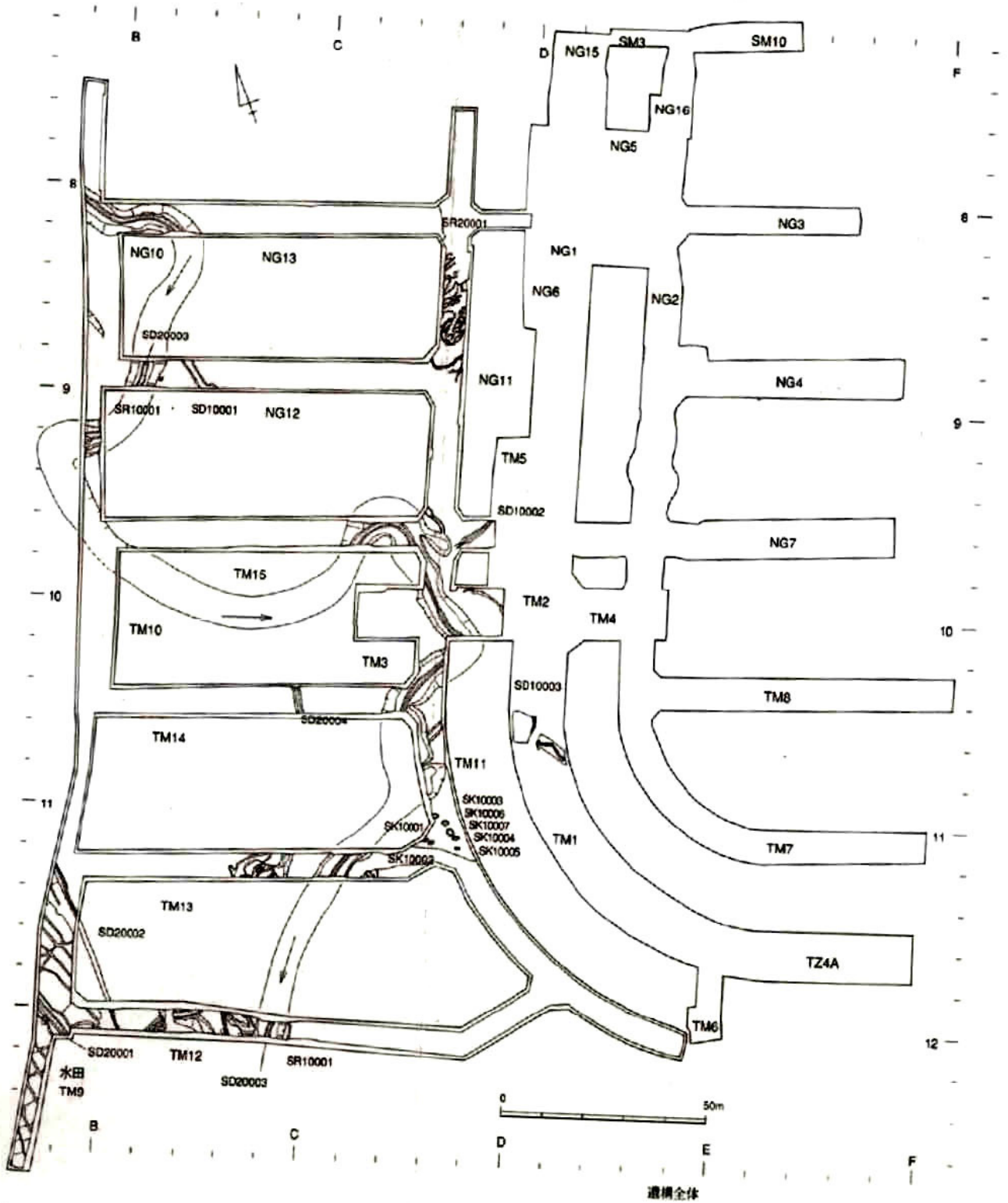




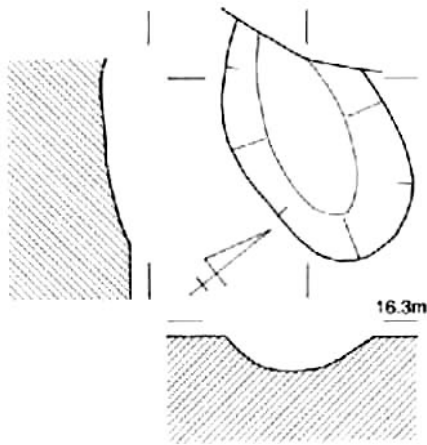


河道 (SR10001)断面及び出土土器

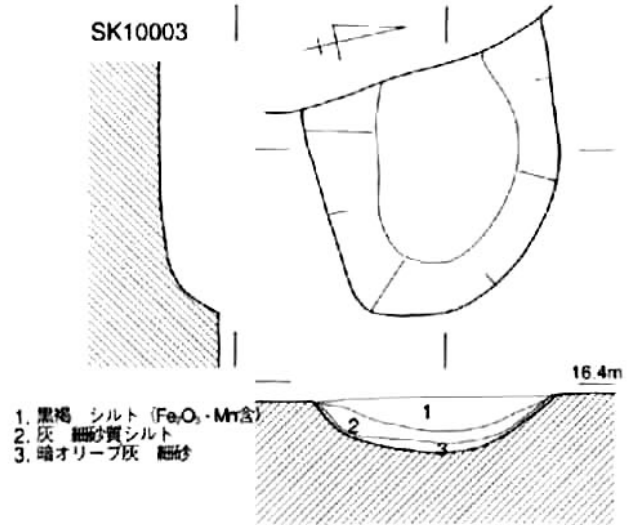
図版 9 縄文晩期・弥生前期



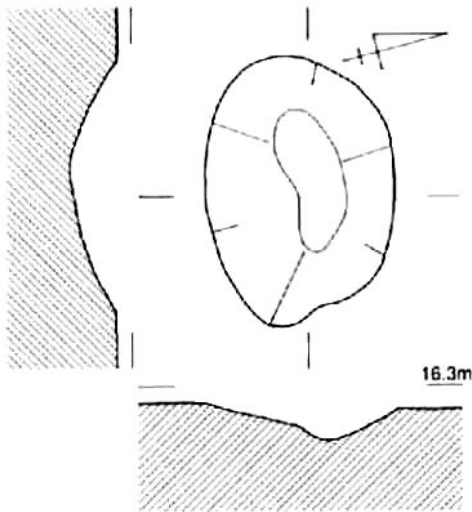
SK10001



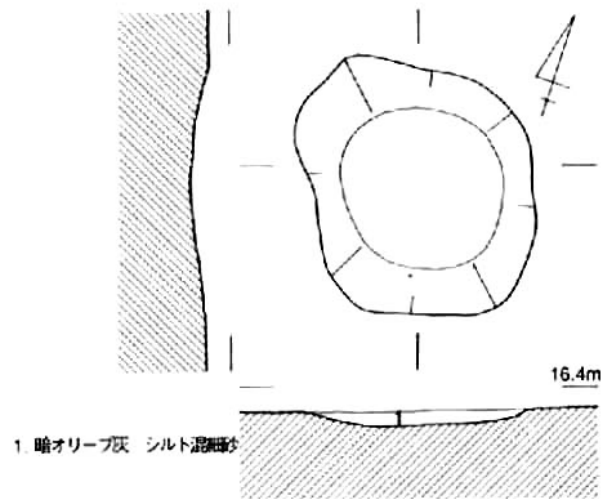
SK10003



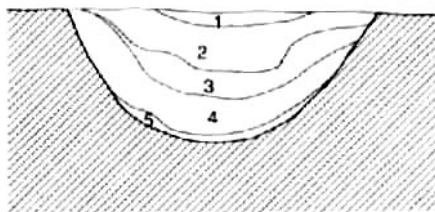
SK10002



SK10006

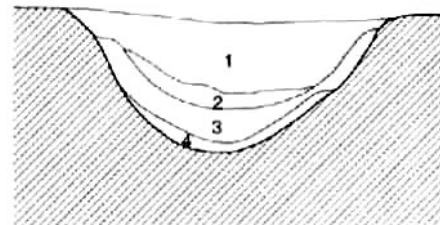


SD20001 16.1m



1. 灰 シルト (Fe₂O₃・炭含)
2. 暗オリーブ灰 シルト (Fe₂O₃・炭含)
3. オリーブ黒 細砂混シルト (炭含)
4. 暗オリーブ灰 細砂～中砂下層に混シルト (炭若干含)
5. 暗緑灰 シルト (やや硬質)

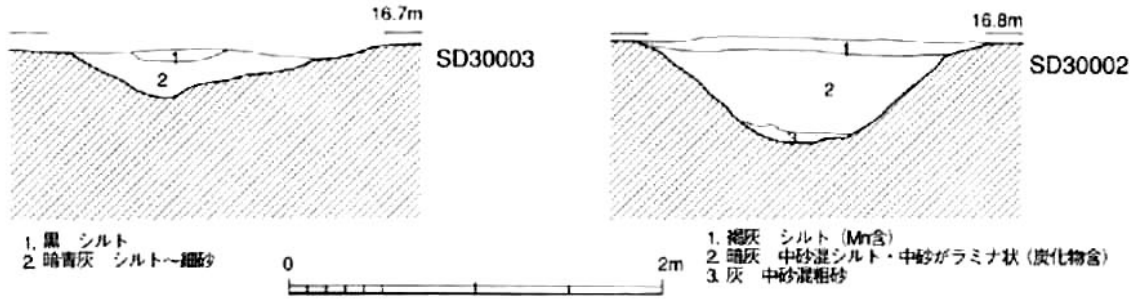
SD20003 17.4m



1. 浅黄 細砂 (Fe₂O₃わずかに含)
2. 灰 シルト質中細砂
3. 暗灰黄 シルト質極細砂
4. オリーブ黒 シルト質極細砂 (炭化物含)



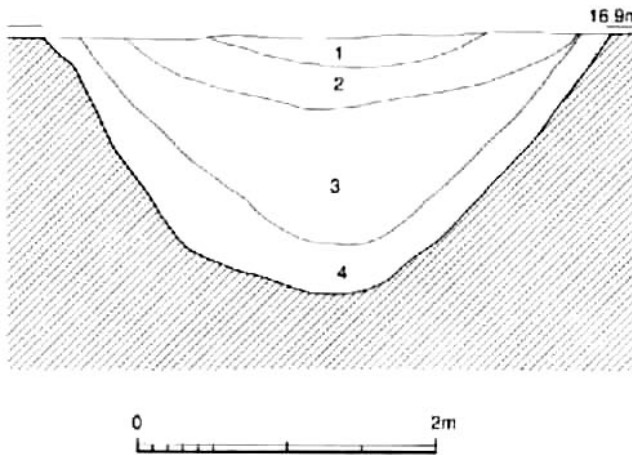
土坑 (SK10001～10003・10006)、溝 (SD20001・20003) 断面



1. 黒 シルト
2. 暗青灰 シルト～細砂

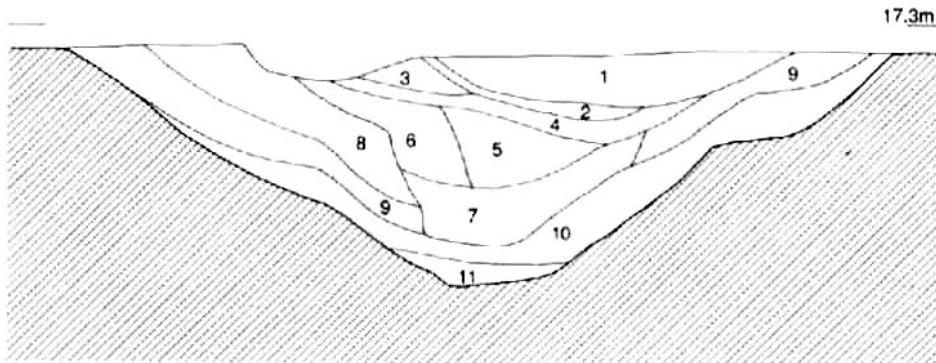
1. 褐灰 シルト (Mn多)
2. 暗灰 中砂混シルト・中砂がラミナ状 (炭化物含)
3. 灰 中砂混粗砂

SD30009

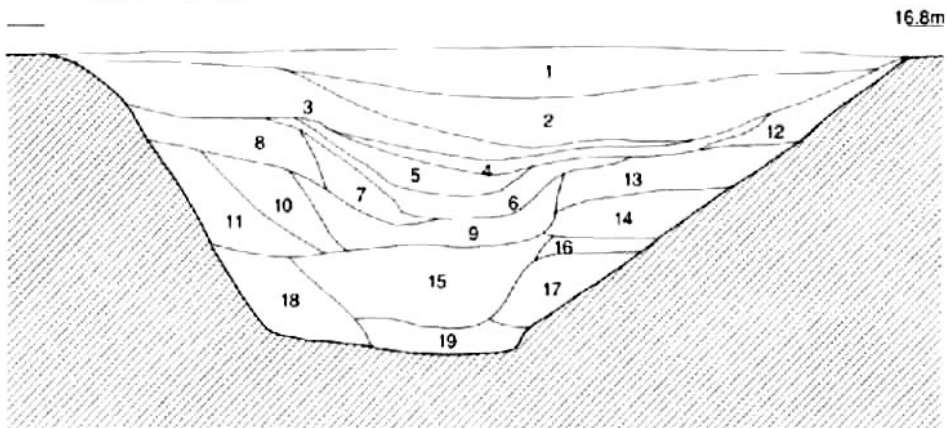


1. 灰青 極細砂
2. 灰白 シルト質極細砂 (炭化物含)
3. 褐灰 シルト質極細砂 (炭化物含)
4. 灰白 細砂～極細砂

SD30010

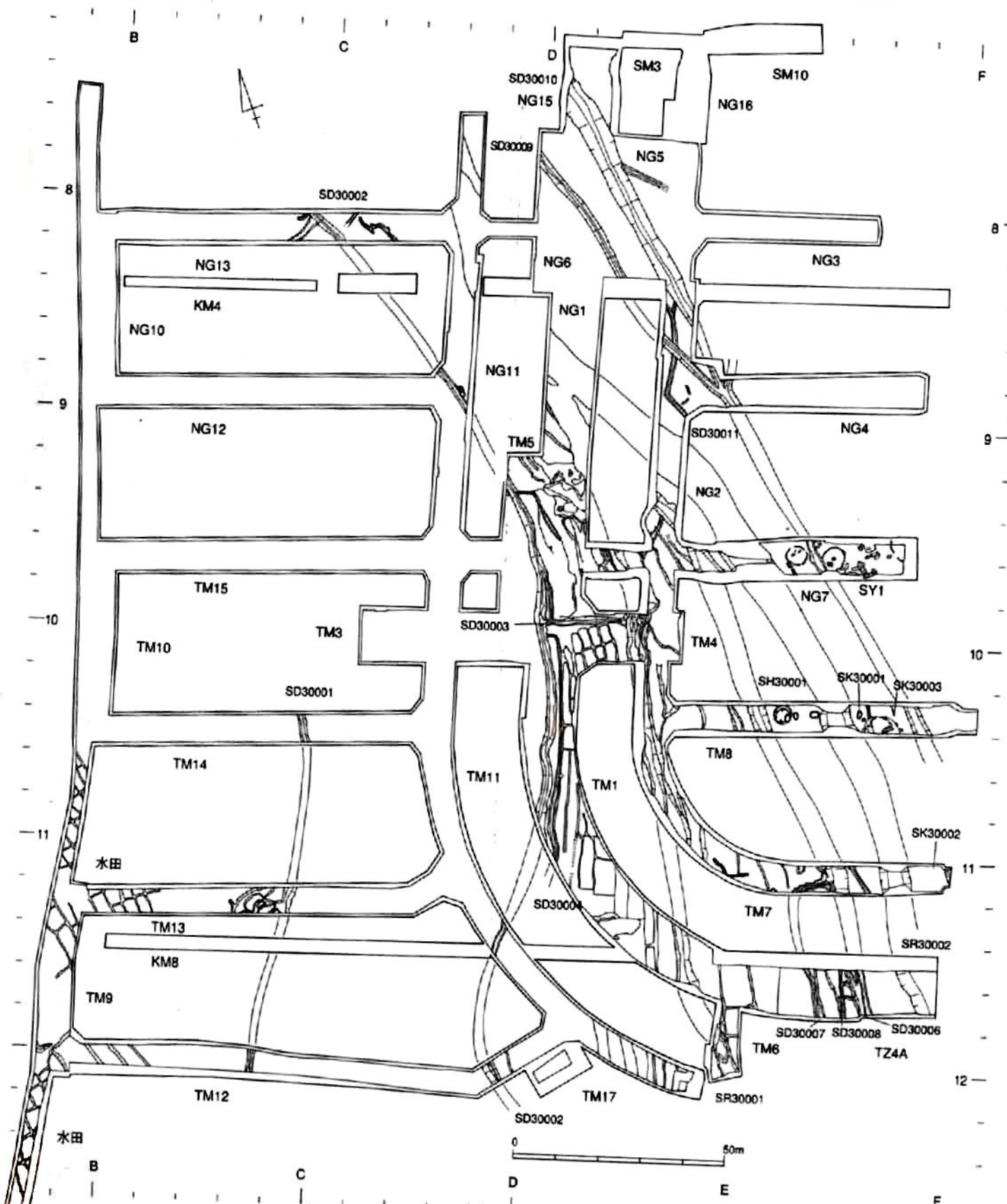


- | | |
|-----------------|--------------------|
| 1. にぶい黄橙 細砂 | 7. 明緑灰 細砂～極砂 |
| 2. 灰黄 細砂 | 8. 灰白 細砂 |
| 3. 灰黄 細砂 | 9. 灰 小礫混シルト質極細砂 |
| 4. にぶい黄 細砂 | 10. 明オリーブ灰 シルト質極細砂 |
| 5. 灰オリーブ 細砂～極細砂 | 11. 灰 粗砂～小礫 |
| 6. 浅黄 中砂～細砂 | |



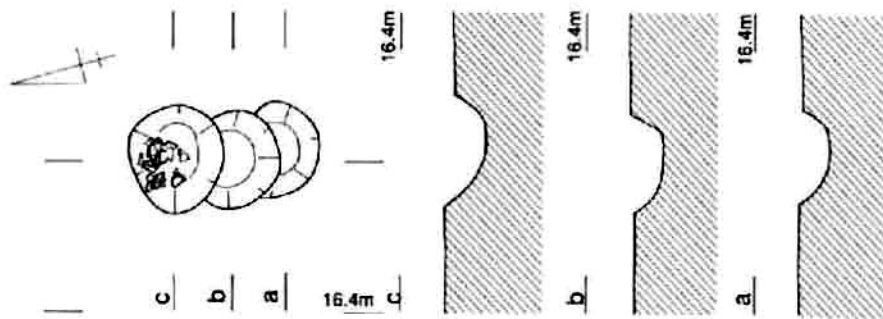
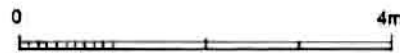
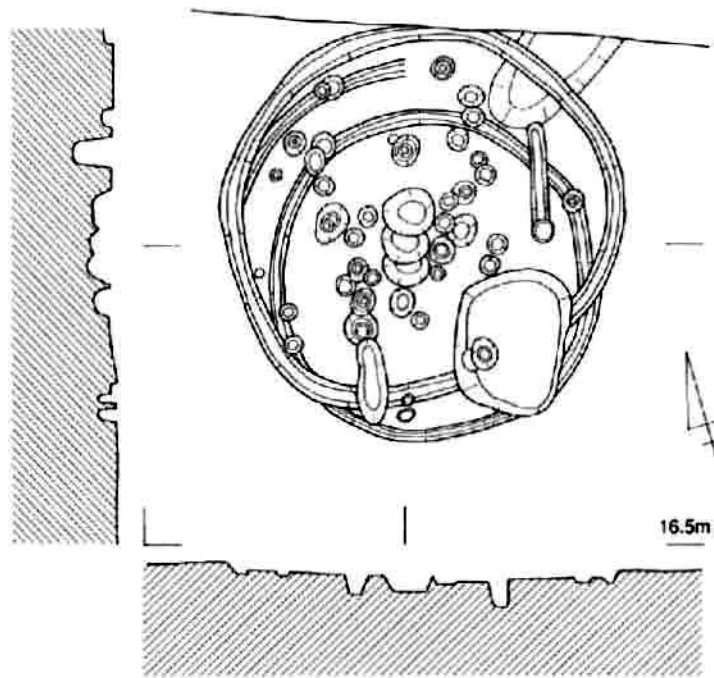
- | | | |
|---|---|---|
| 1. 暗灰青 シルト質極細砂 (炭細粒少量混) | 7. 暗灰黄 極細砂質シルト | 13. 暗灰黄 シルト質中砂～粗砂炭をラミナ状に含・Mn・Fe ₂ O ₃ 多 |
| 2. 黒褐 細砂～極細砂 (炭をラミナ状に含・第3次炭層) | 8. 暗灰黄 シルト質細砂～シルト質中砂 | 14. オリーブ褐 中砂～粗砂混シルト質極細砂 (Mn・Fe ₂ O ₃ 多) |
| 3. 黄灰 細砂～極細砂 (炭少量混) | 9. 暗灰黄 シルト質極細砂～中砂 (Mn・Fe ₂ O ₃ 多) | 15. 黄灰 極細砂～中砂シルト (Fe ₂ O ₃ 多) |
| 4. 黒褐 炭・焼土混シルト質極細砂 (第2次炭層・Mn多) | 10. 暗灰黄 シルト質極細砂～中砂 (Mn多) | 16. 灰オリーブ シルト |
| 5. 黄灰 極細砂質シルト (Fe ₂ O ₃ ・Mn多) | 11. 暗灰黄 中礫混シルト質極細砂 | 17. 灰 シルト (炭少量混) |
| 6. 暗灰黄 極細砂質シルト (第1次炭層) | 12. 黄灰 細砂～極細砂混シルト (Mn多) | 18. 灰 中砂混シルト |

溝 (SD30002・30003・30009・30010) 断面



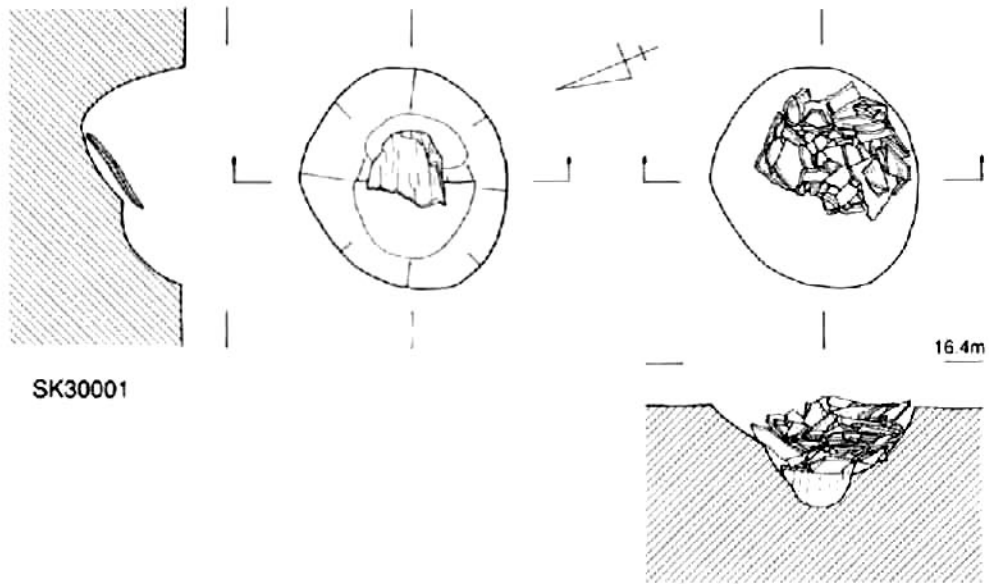
弥生中期下層 遺構全体

SH30001



1. 暗灰黄 シルト質極細砂
2. 黒褐 極細砂質シルト (炭含)
3. 黒 シルト (炭層)
4. 灰オリーブ 極細砂質シルト (炭化粒子含)
5. 黄灰 極細砂質シルト (炭化粒子・焼土片含)
6. 灰 極細砂質シルト (下面に炭層)
7. 暗灰黄 シルト質極細砂 (下面に炭層)

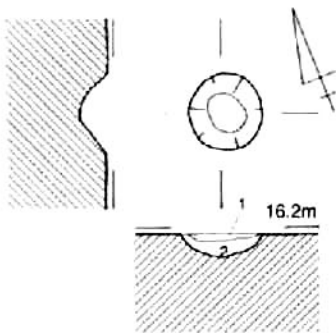




SK30001



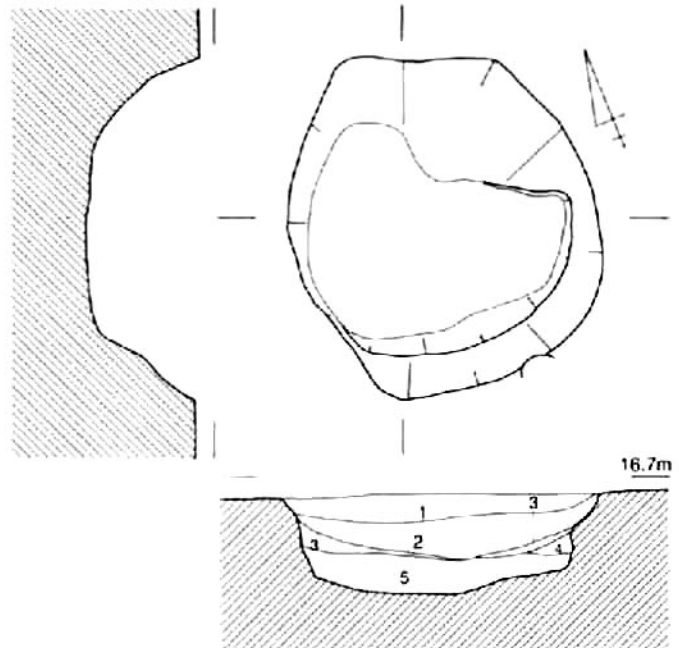
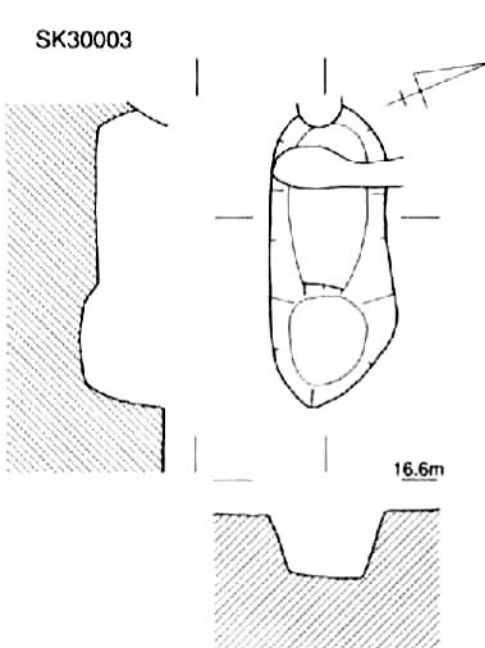
SK30002



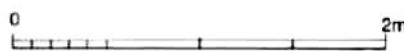
1. 暗青灰 極細砂質シルト
2. 青灰 シルト質極細砂

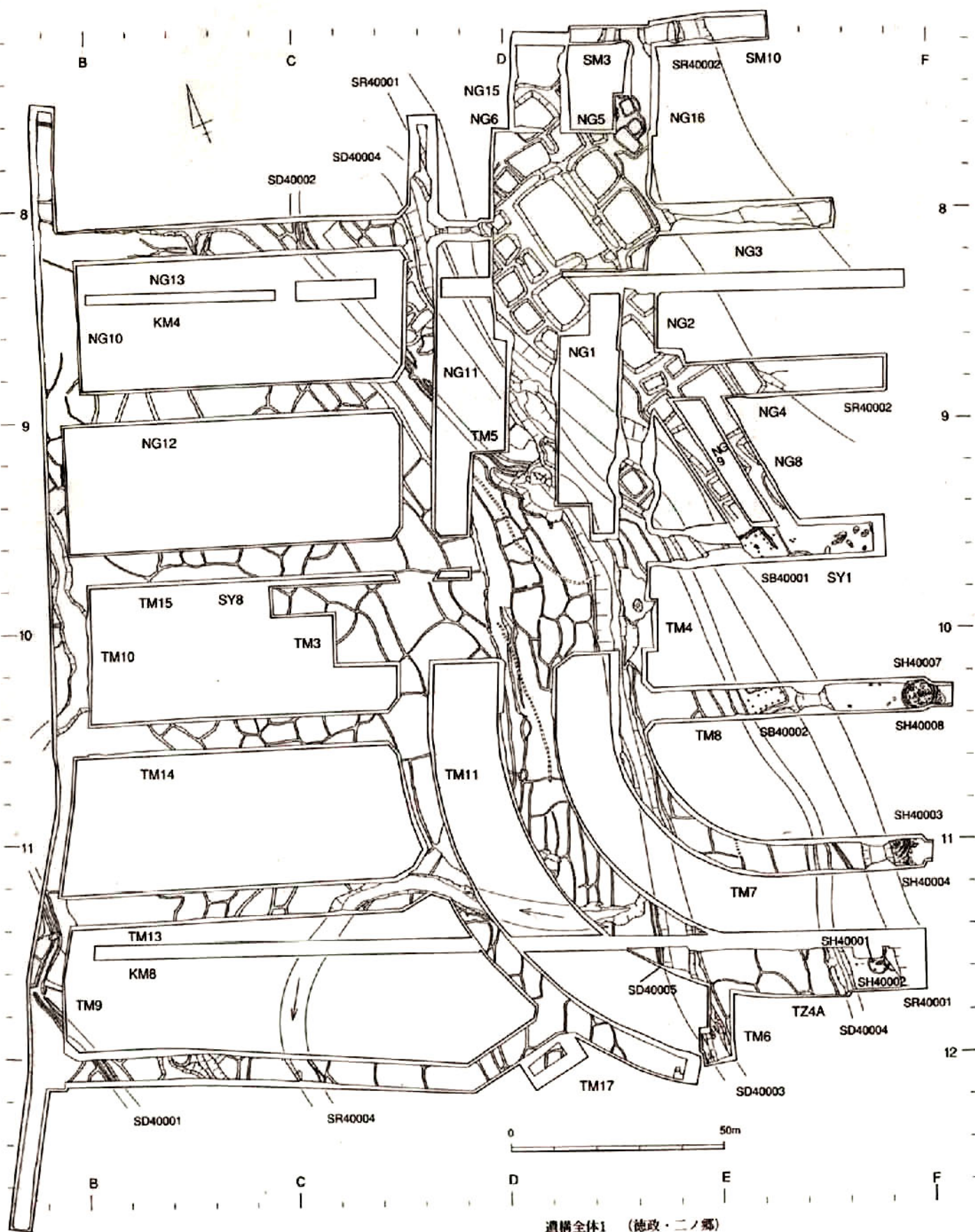
SK30004

SK30003

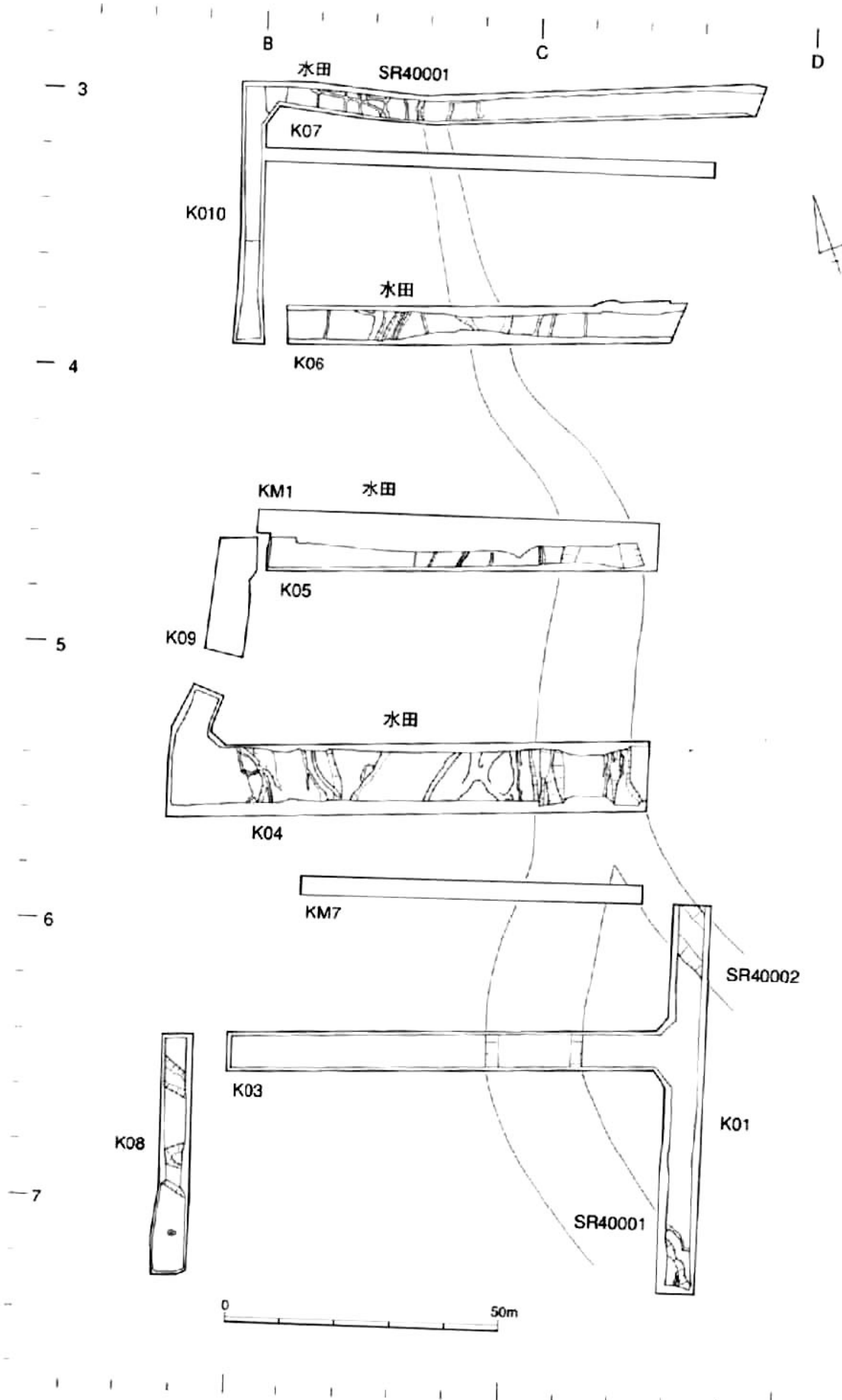


1. 淡黒灰 シルト混じり細砂~極細砂 (Fe₂O₃)
2. 黒灰 シルト質極細砂~極細砂 (炭多量)
3. 青灰 シルト質極細砂
4. 黄灰 シルト混じり極細砂
5. 暗青灰 シルト混じり極細砂 (炭)



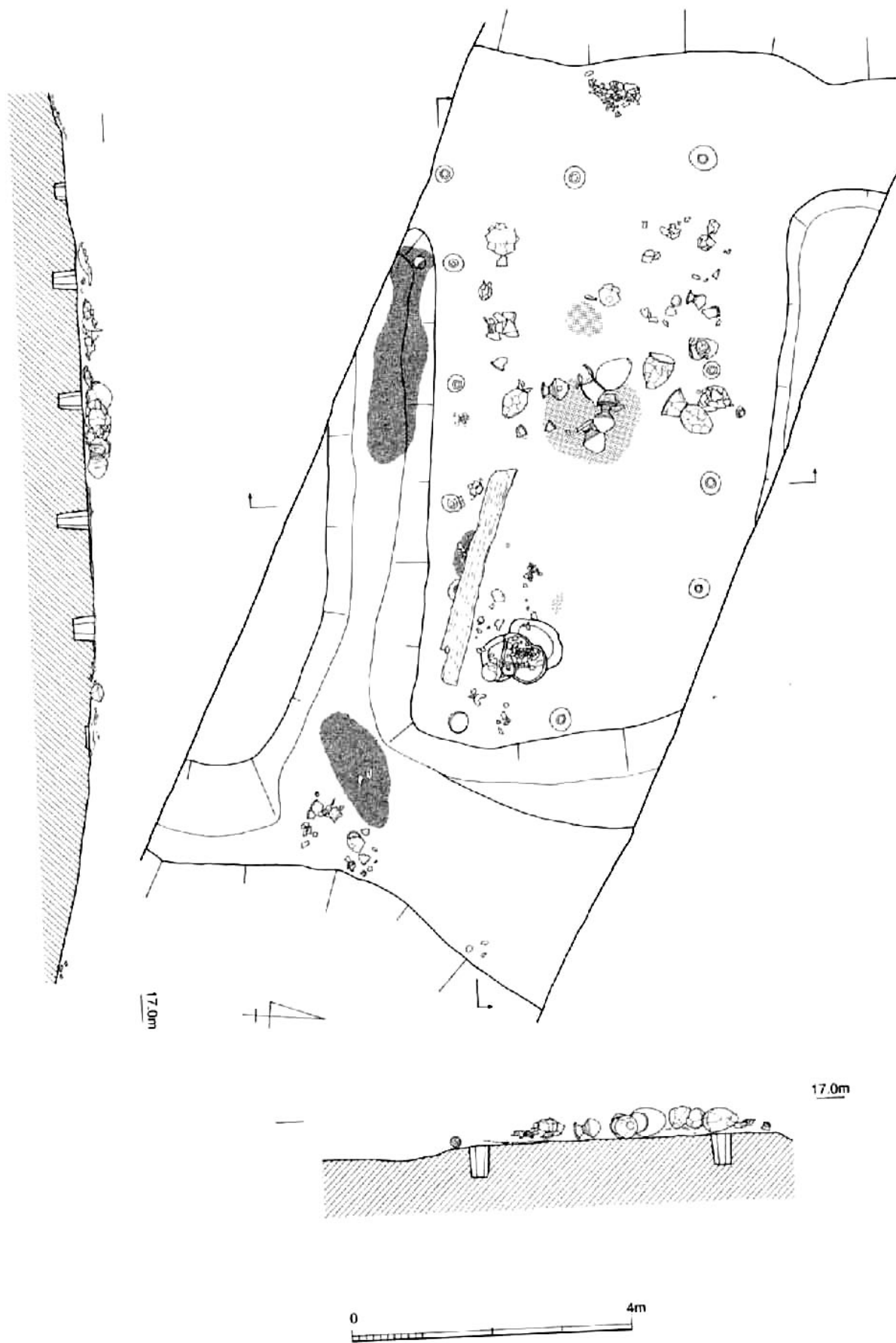


遺構全体1 (徳政・二ノ郷)



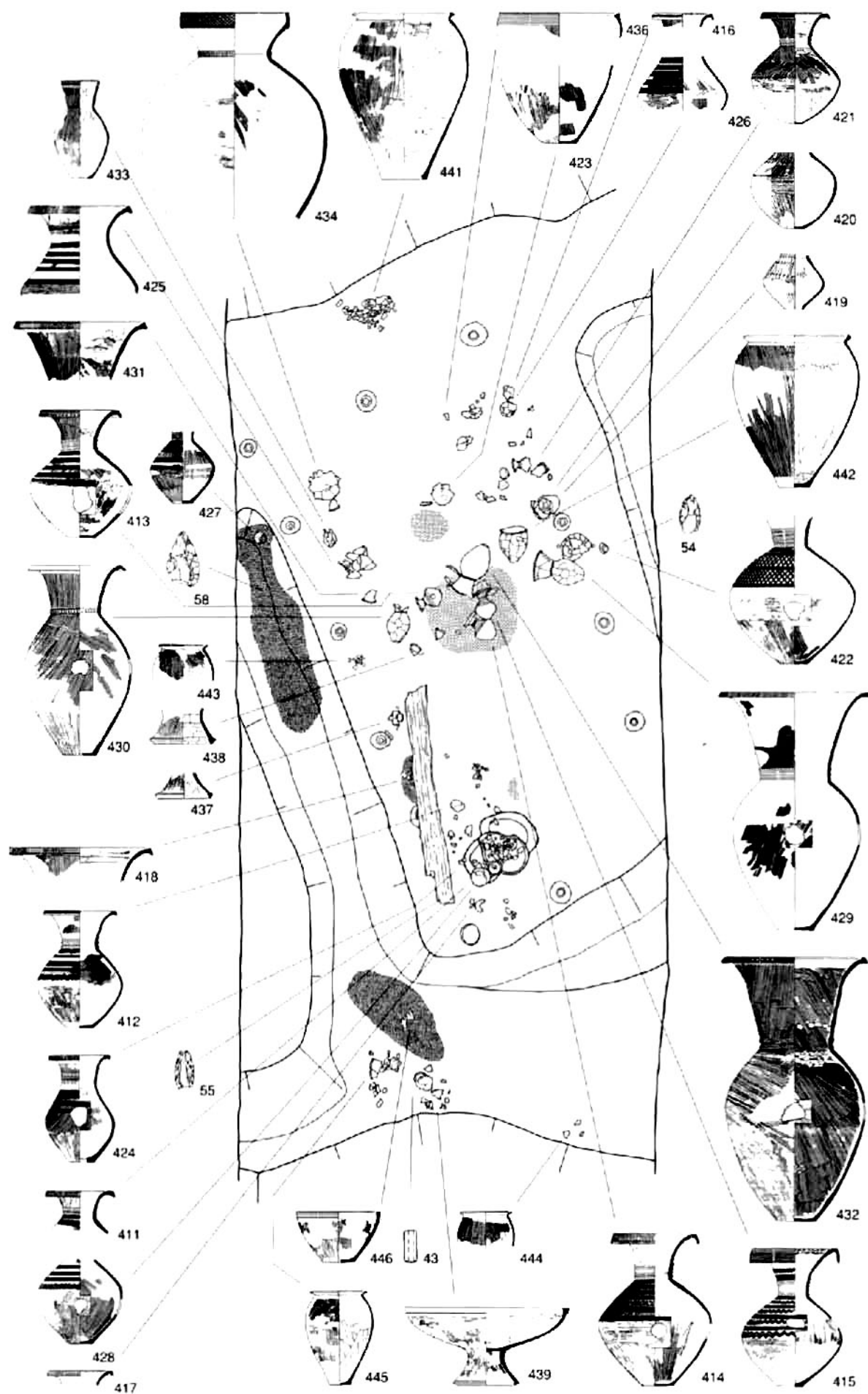
遺構全体2 (黒岡)

図版 20 弥生中期上層



平地住居1 (SB 40002)

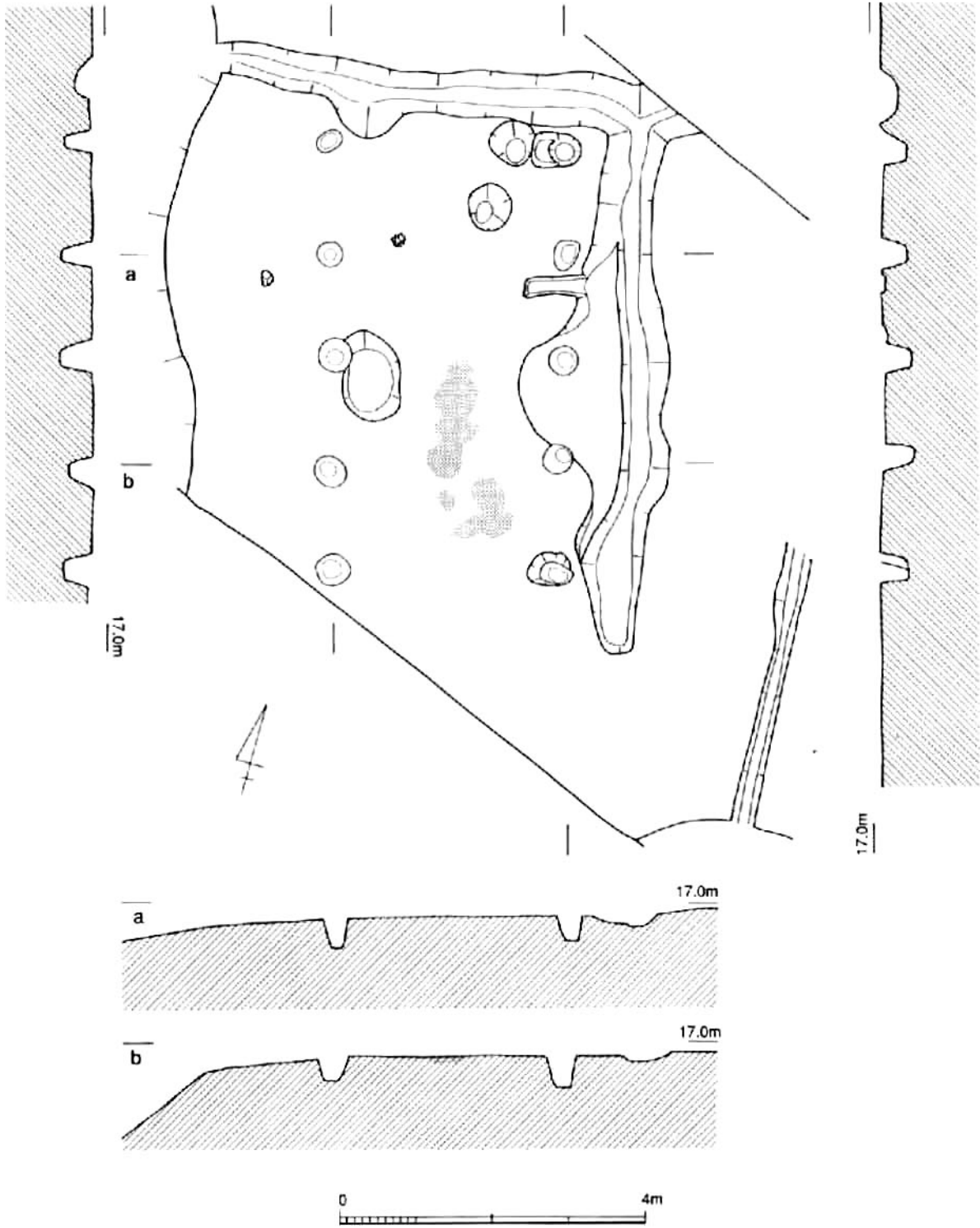
图版 21
弥生中期上層

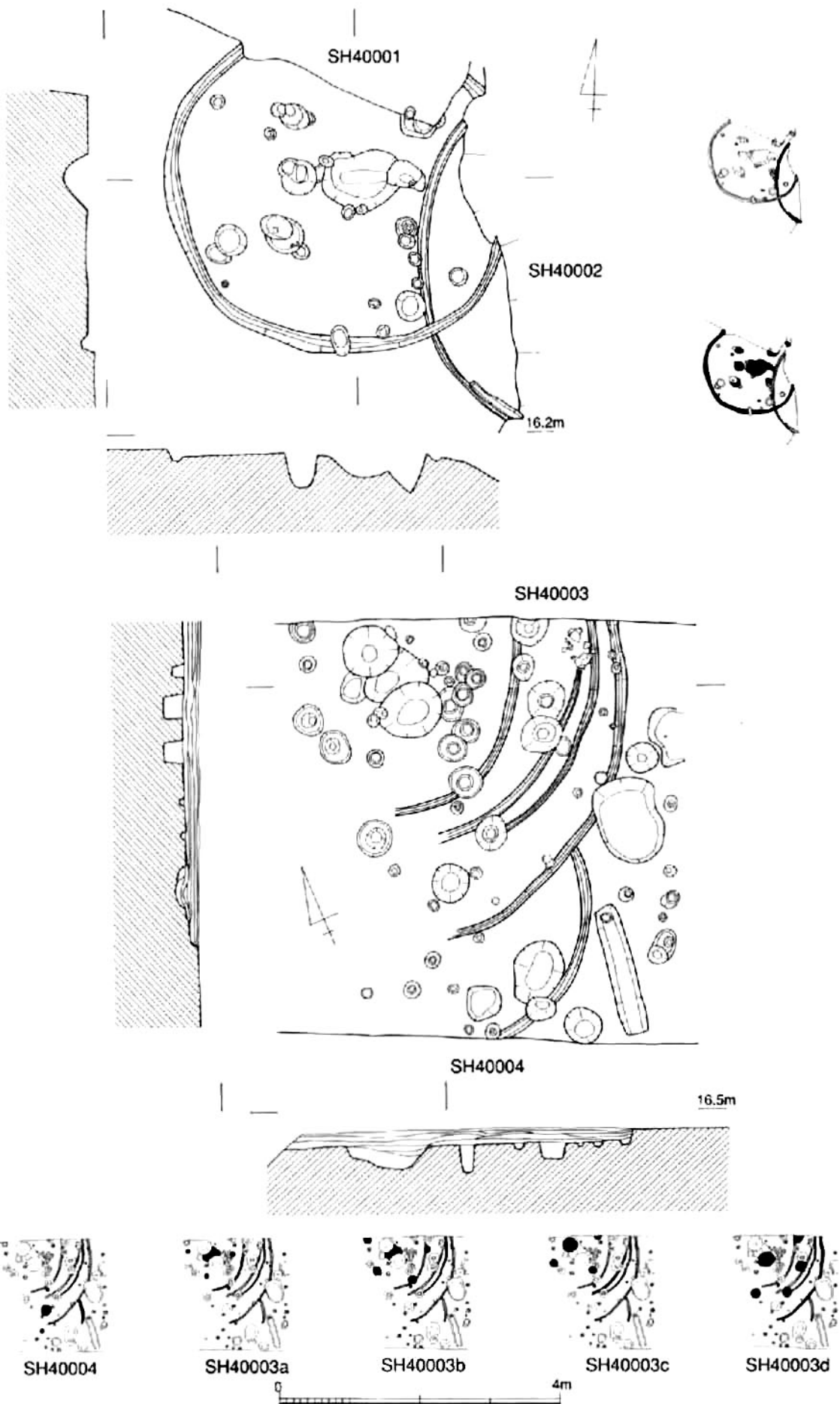


平地住居2 (SB40002 土器出土状況)

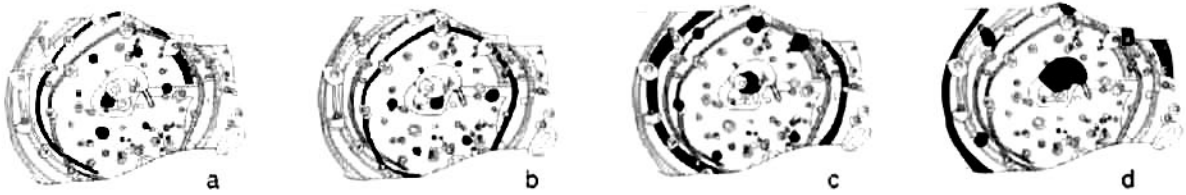
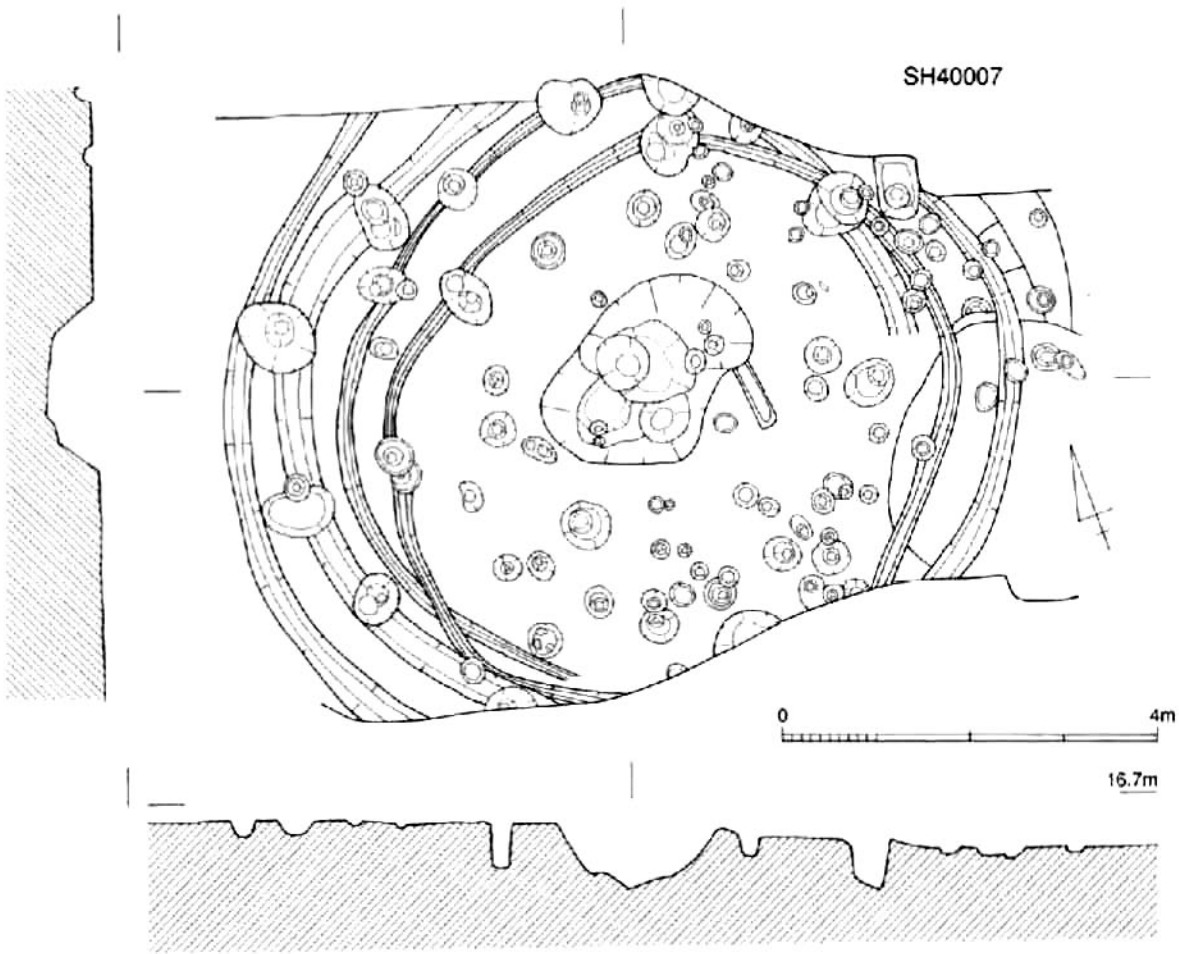
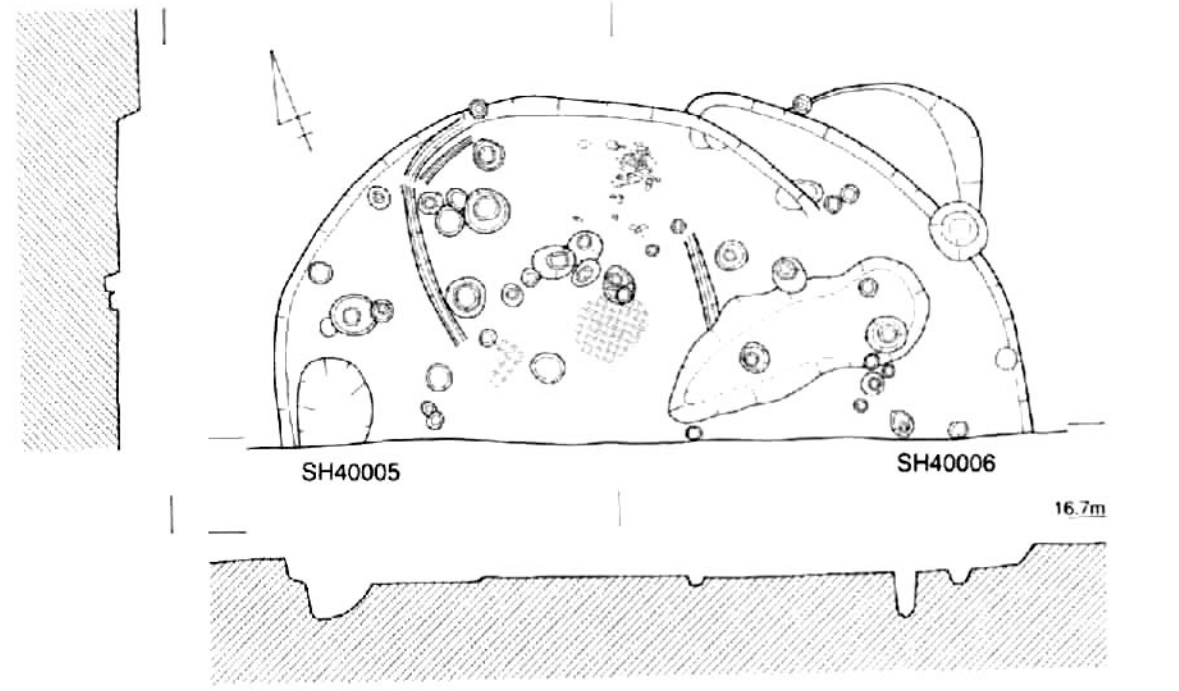


平地住居3 (SB40002床面硬度)



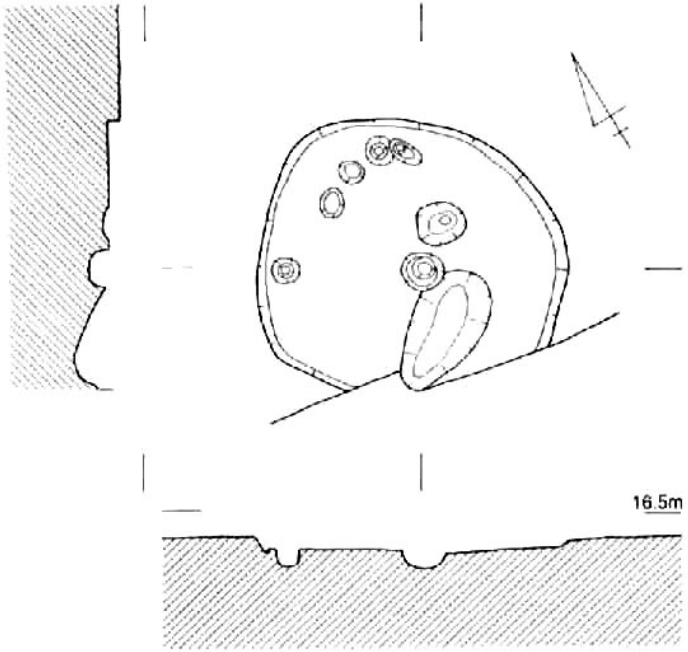


壺穴住居1 (SH40001~40004)

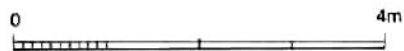
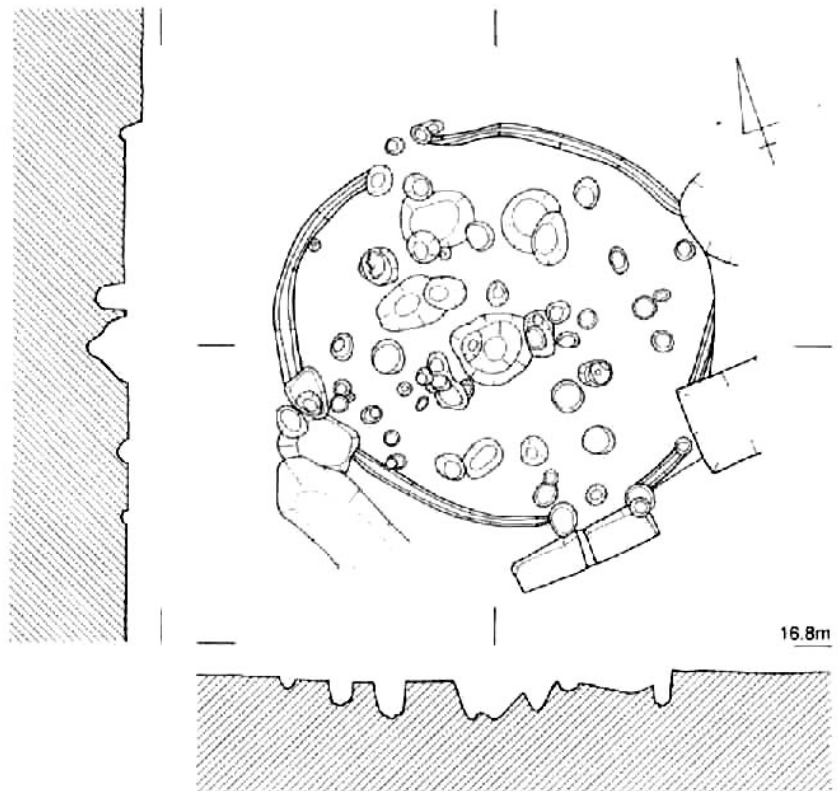


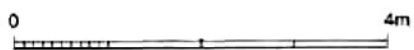
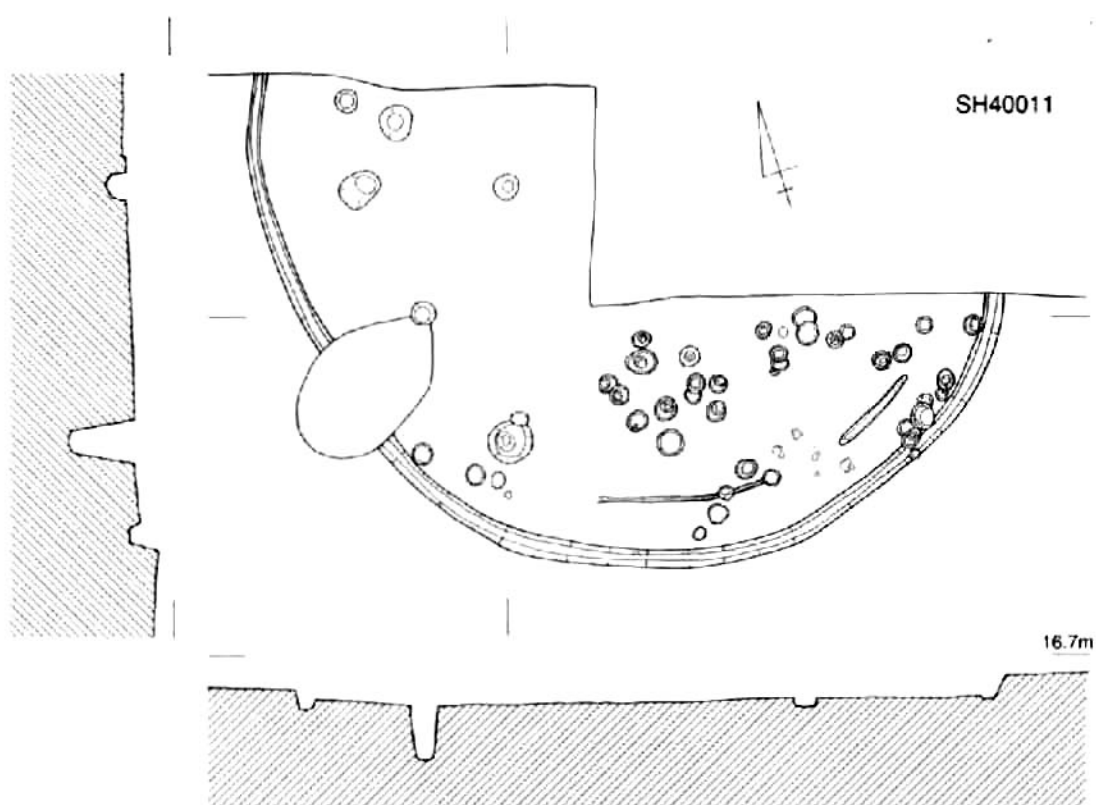
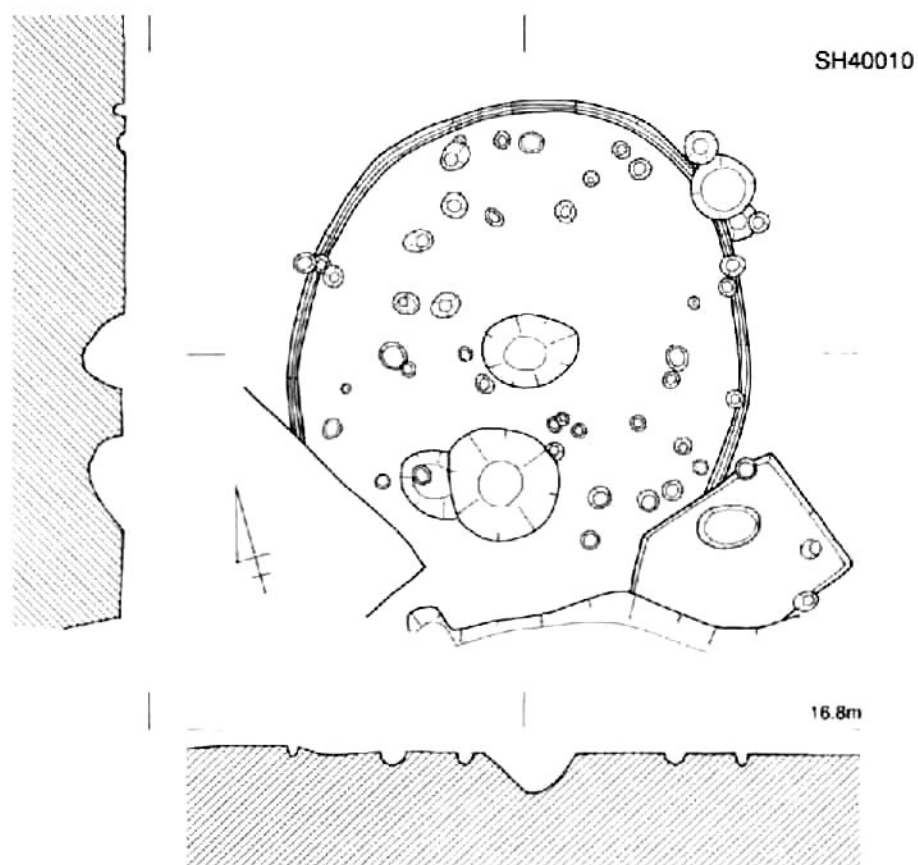
豎穴住居2 (SH40005~40007)

SH40008

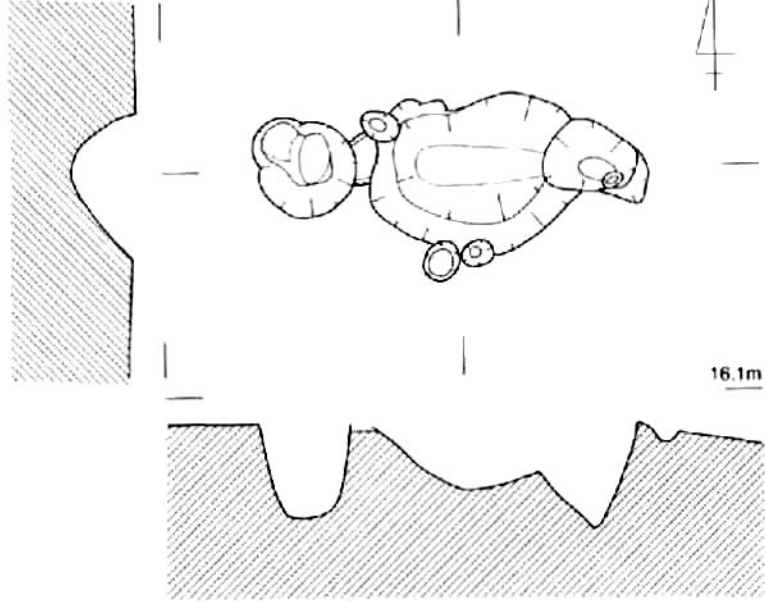


SH40009

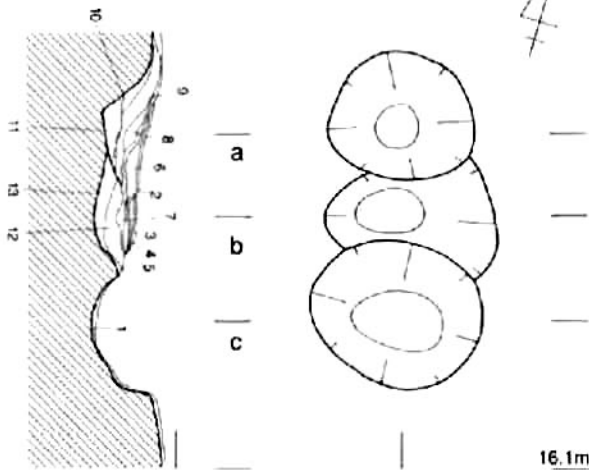




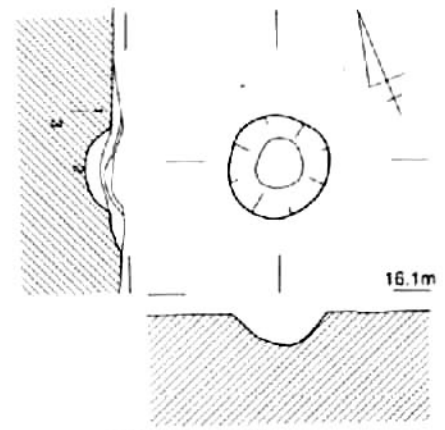
SH40001



SH40003



SH40004

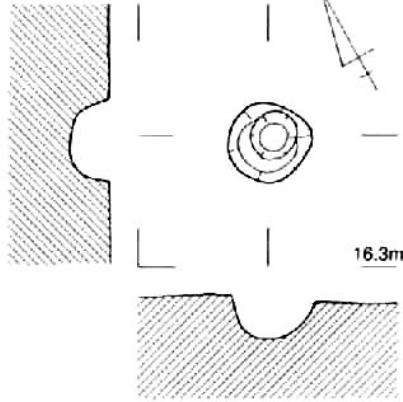


- 1. 黒 極細砂 (炭層)
- 2. 灰 シルト質極細砂 (炭・白色砂粒状)
- 3. 灰 極細砂 (炭・白色砂粒状)

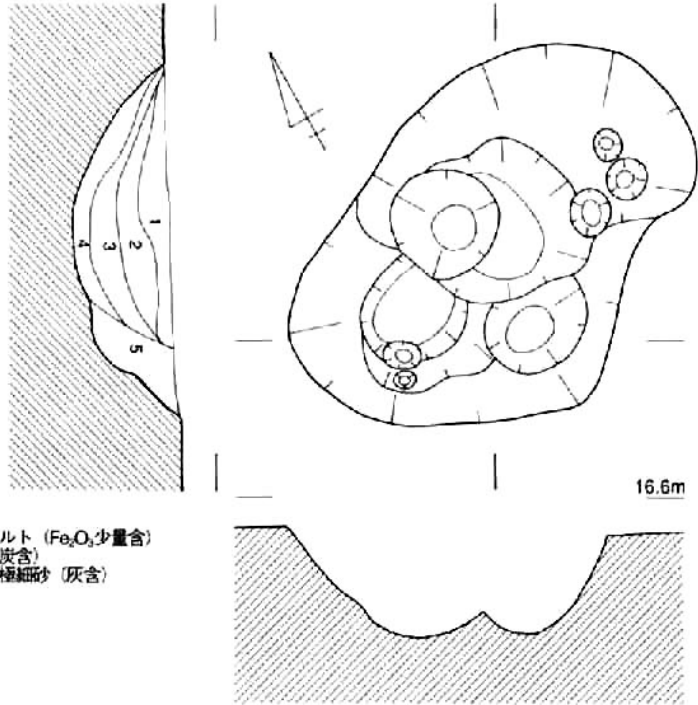
- 1. 黒 シルト (炭層)
- 2. 緑灰 極細砂 (炭含)
- 3. 明オリブ灰 (上面に炭層)
- 4. 灰 シルト質極細砂
- 5. 黒 シルト (炭層)
- 6. 灰 シルト質極細砂
- 7. 1と4が互層を成す
- 8. 暗青灰 シルト (炭・礫・白色砂混)
- 9. 灰 シルト質極細砂
- 10. 黒 シルト (炭層4が粒状混)
- 11. 黒 シルト (炭層)
- 12. 暗灰 シルト
- 13. 黒 シルト (炭層)



SH40008

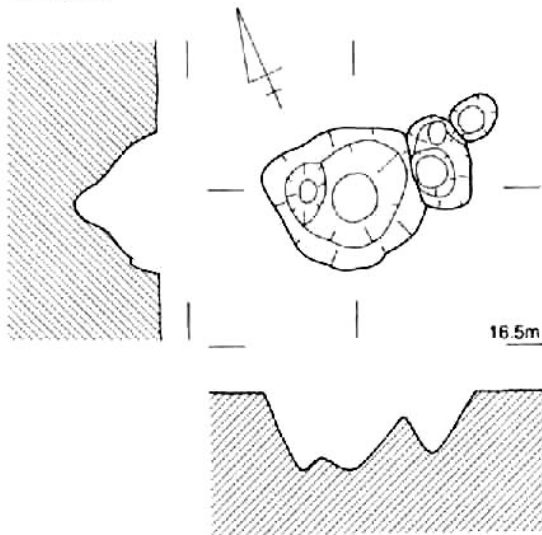


SH40007

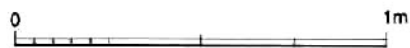
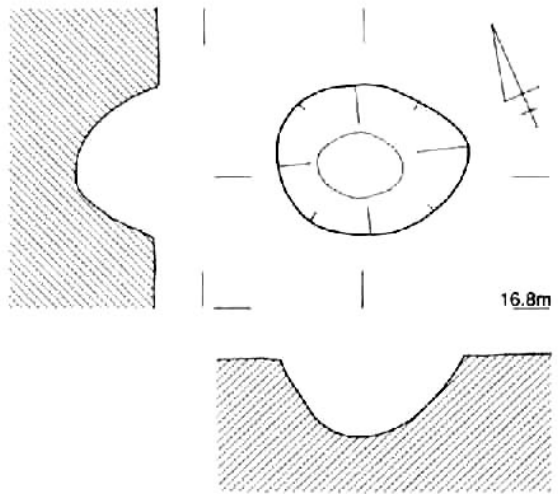


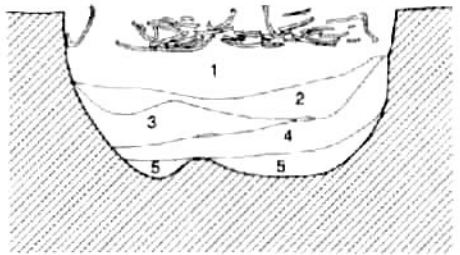
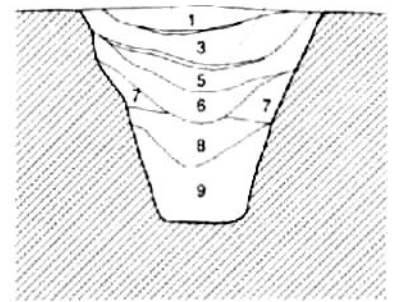
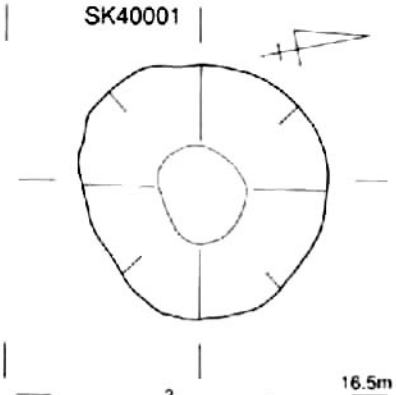
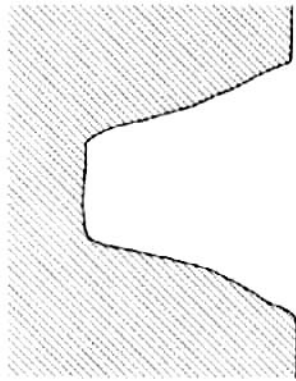
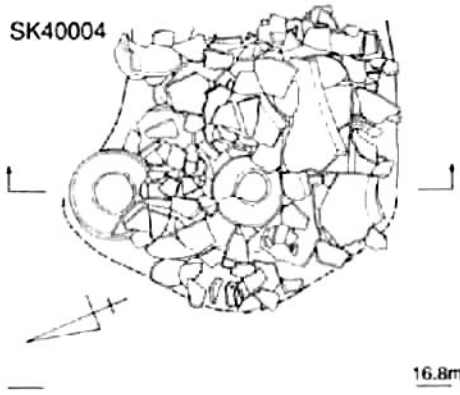
1. オリーブ黒 細砂混シルト (Fe₂O₃少量含)
2. 黒 シルト質極細砂 (炭含)
3. オリーブ黒 シルト質極細砂 (炭含)
4. 黒 炭層
5. 黒 極細砂質シルト

SH40009

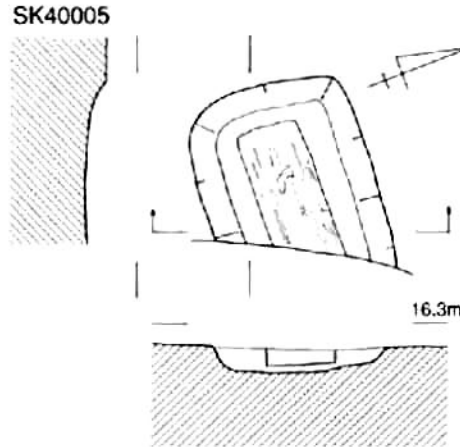


SH40010

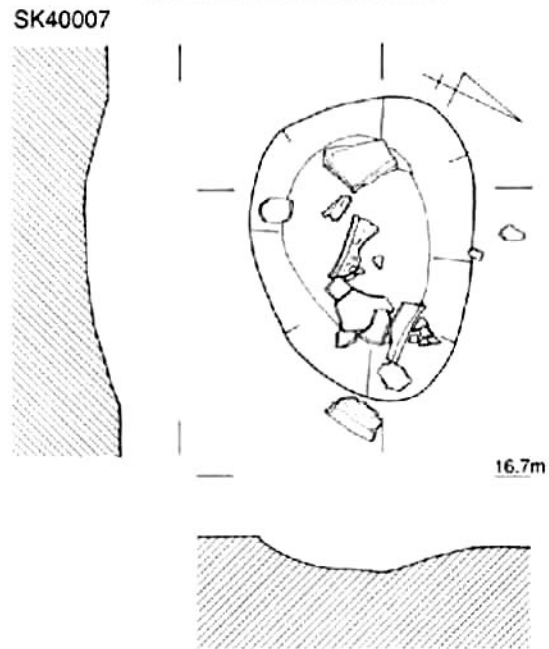
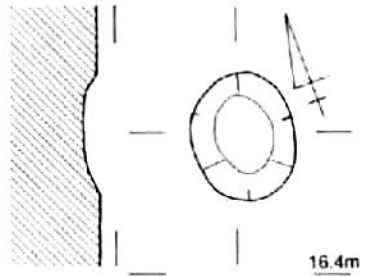




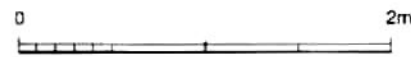
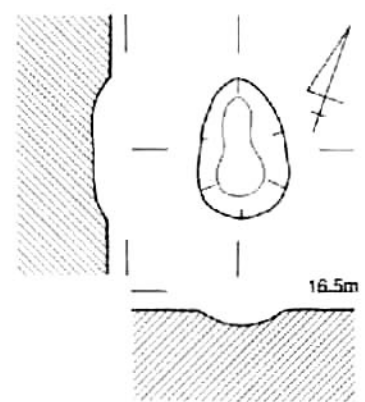
- 1. 暗灰 極細砂
 - 2. 灰 シルト質極細砂
 - 3. 明オリブ灰 シルト質極細砂
 - 4. オリブ灰 シルト質極細砂
 - 5. 灰 シルト質極細砂
-
- 1. 暗灰・黄灰 シルト質極細砂 (少量泥)
 - 2. 黒褐色 シルト質極細砂 (炭泥)
 - 3. 暗灰 細砂混シルト質極細砂 (Mn・炭泥)
 - 4. 黄灰 シルト質極細砂 (炭泥)
 - 5. 暗灰 シルト質極細砂 (Mn・Fe₂O₃・炭泥)
 - 6. にぶい黄灰 シルト質極細砂
 - 7. 黄灰 細砂〜中砂
 - 8. 黒 シルト質極細砂
 - 9. 黄灰 細砂



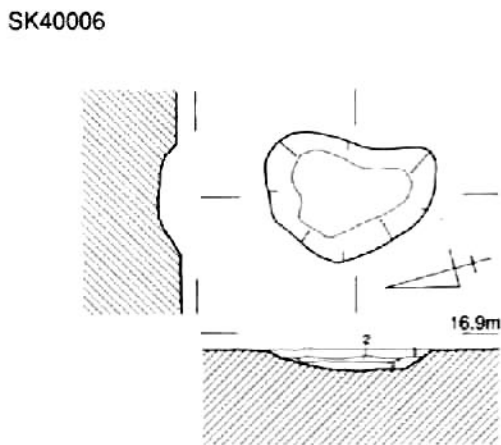
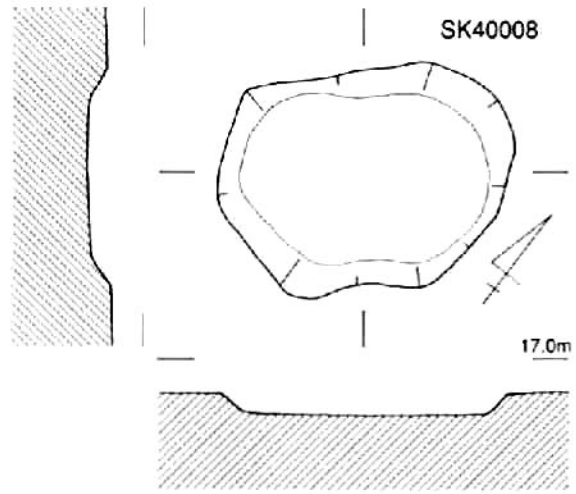
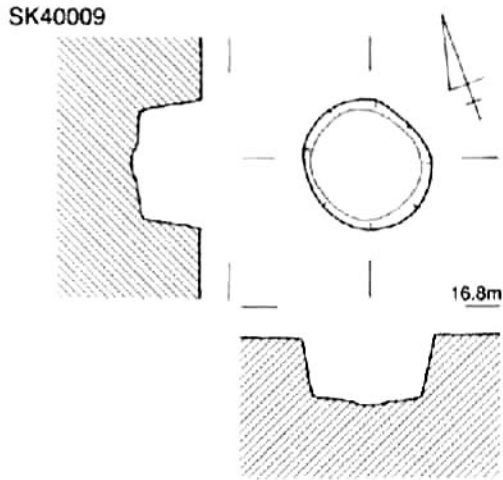
SK40003



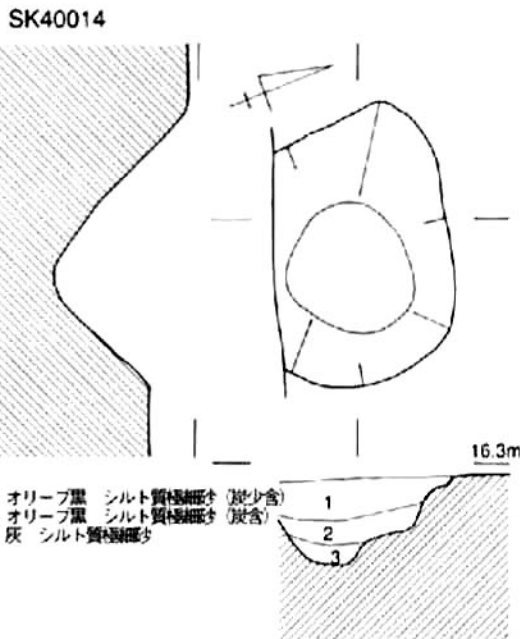
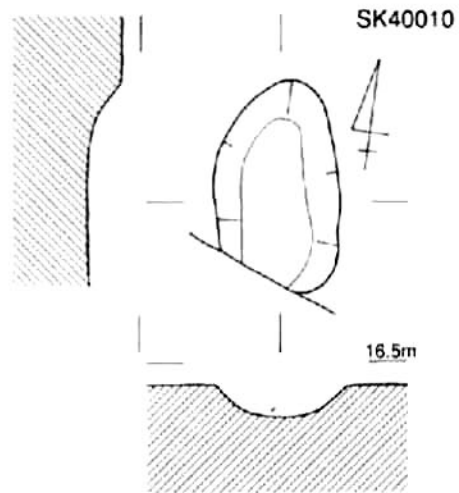
SK40002



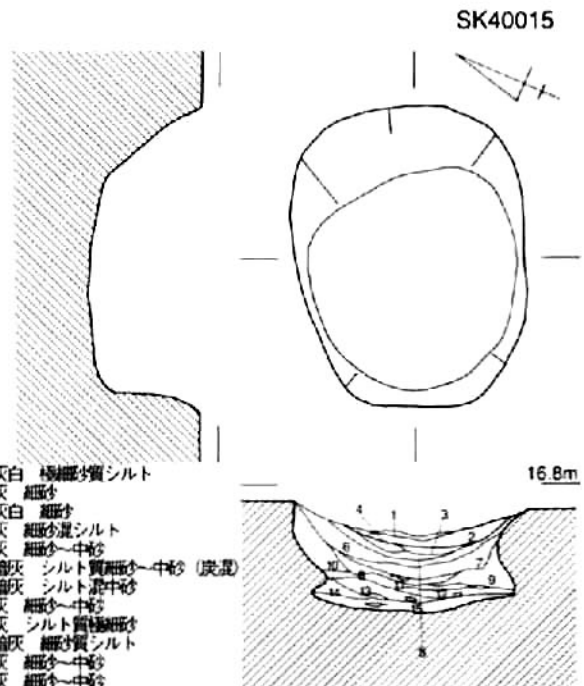
土坑I (SK40001~40005・40007)



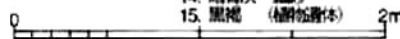
1. 暗褐色 シルト混細砂
2. にぶい黄褐色 シルト混細砂 (多量の炭含)
3. 灰黄褐色 砂質シルト



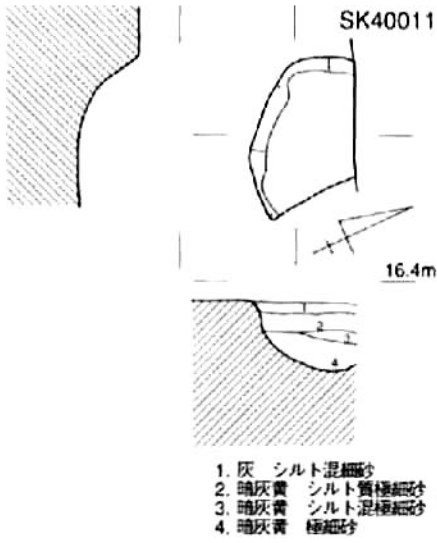
1. オリーブ黒 シルト質極細砂 (炭少含)
2. オリーブ黒 シルト質極細砂 (炭含)
3. 灰 シルト質極細砂



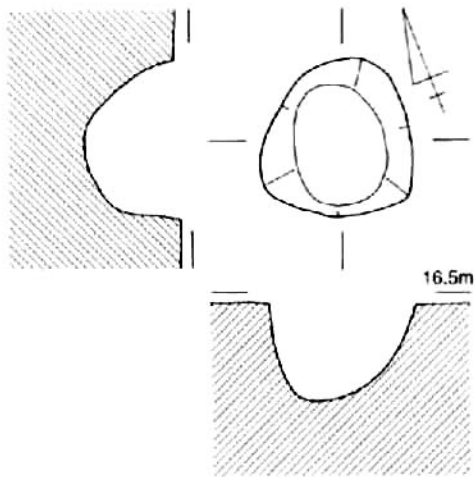
1. 灰白 極細砂質シルト
2. 灰 細砂
3. 灰白 細砂
4. 灰 細砂混シルト
5. 灰 細砂~中砂
6. 暗灰 シルト質細砂~中砂 (炭混)
7. 暗灰 シルト混中砂
8. 灰 細砂~中砂
9. 灰 シルト質極細砂
10. 暗灰 細砂質シルト
11. 灰 細砂~中砂
12. 灰 細砂~中砂
13. 青灰 細砂~中砂
14. 暗青灰 細砂
15. 黒褐色 (粘板層)



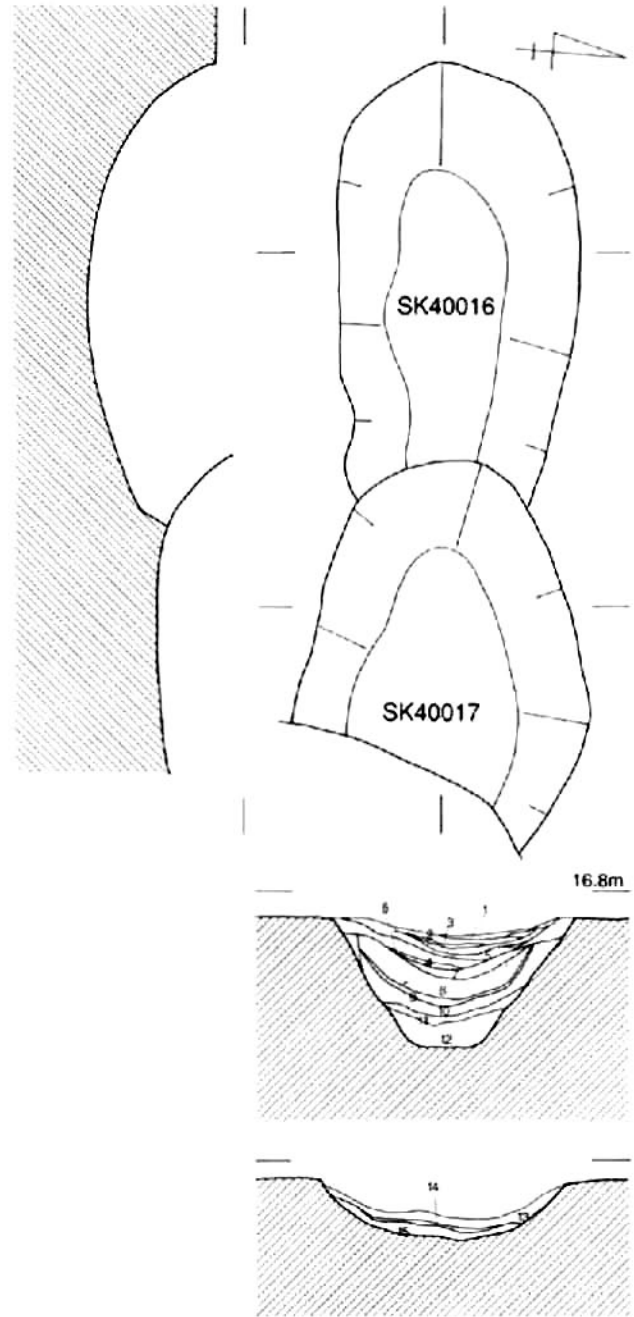
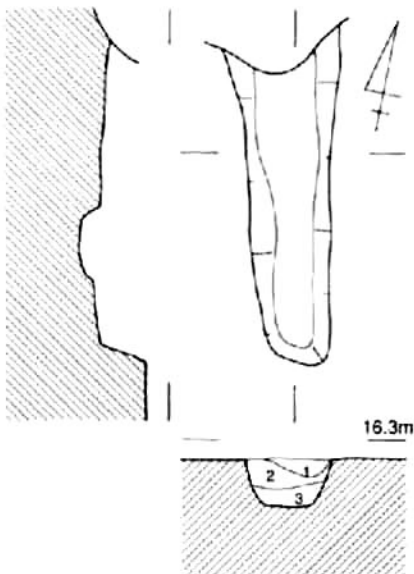
土坑2 (SK40006・40008~40010・40014・40015)



SK40012

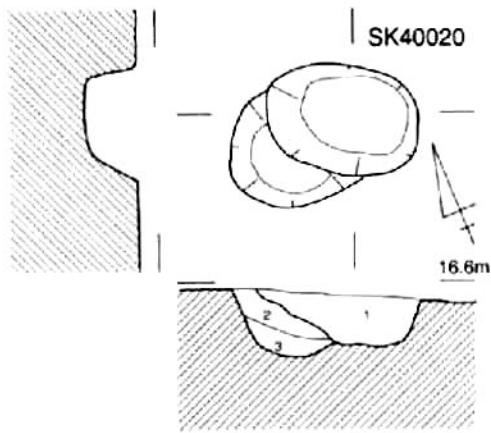


SK40013

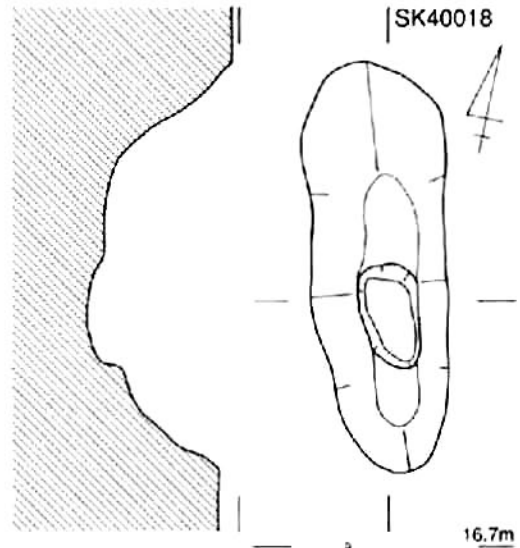


土坑3 (SK40011~40013・40017)

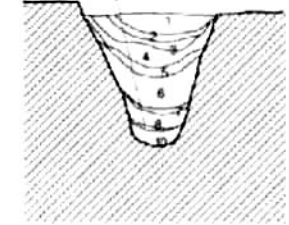
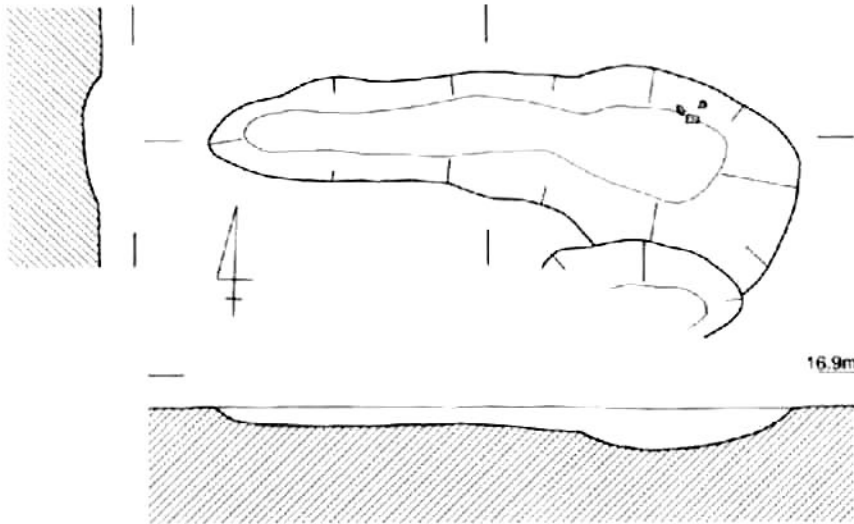




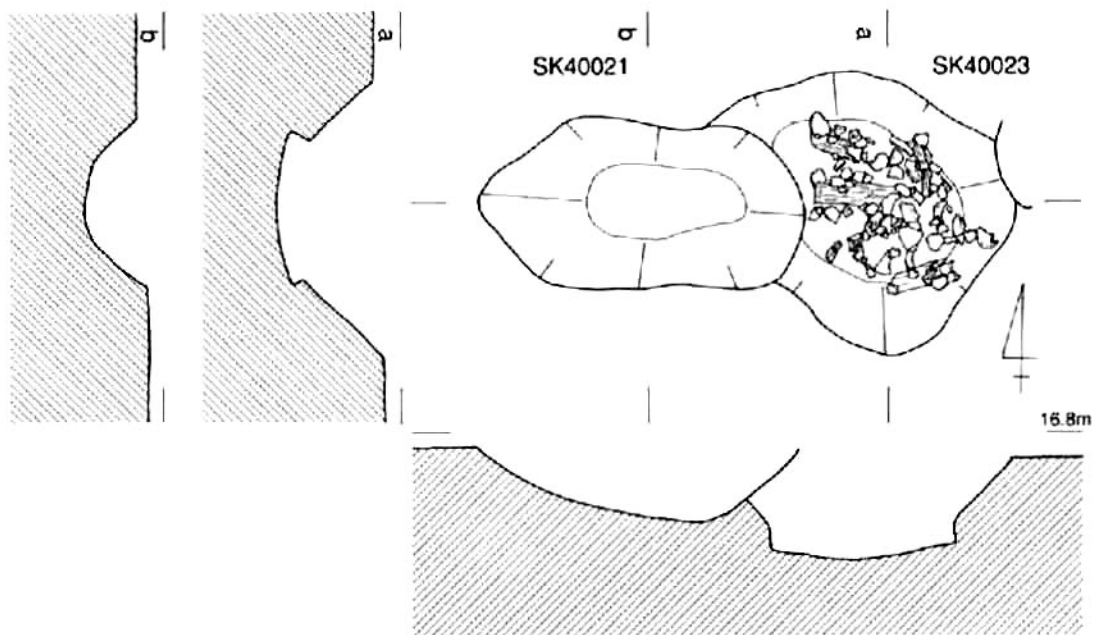
- 1. 灰 シルト混細砂
- 2. 淡黄灰 シルト質極細砂 (炭多量)
- 3. 暗灰 シルト質極細砂



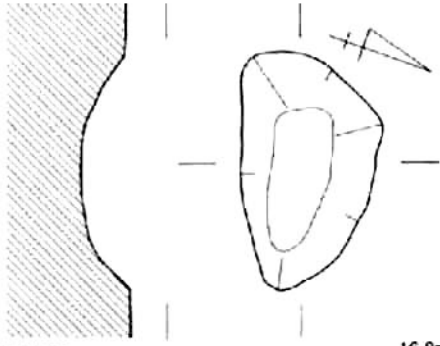
SK40022



- 1 灰 シルト混細砂
- 2 灰白 細砂
- 3 灰 シルト混細砂
- 4 暗灰 シルト質細砂～中砂
- 5 明黄灰 シルト質細砂
- 6 暗灰 細砂～中砂混シルト
- 7 灰白 極細砂～シルト
- 8 暗灰 シルト質極細砂
- 9 灰白 極細砂～シルト
- 10 暗灰 シルト質極細砂



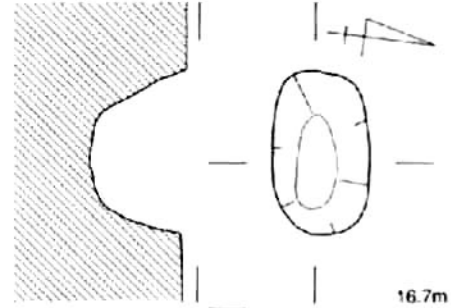
土坑4 (SK40018・40020～40023)



SK40024

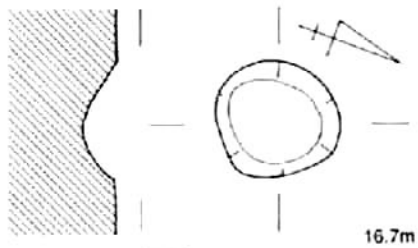
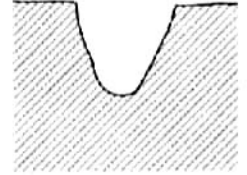
16.8m

1. 黒褐 シルト混極細砂 (炭多量)
2. 暗褐 細砂質シルト
3. 灰 シルト混中砂
4. 暗灰 中砂混シルト
5. 暗灰 細砂~中砂混シルト



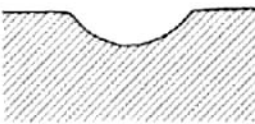
SK40026

16.7m



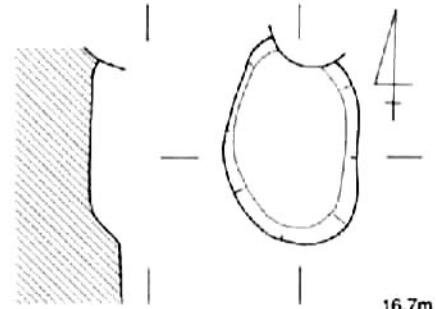
SK40025

16.7m

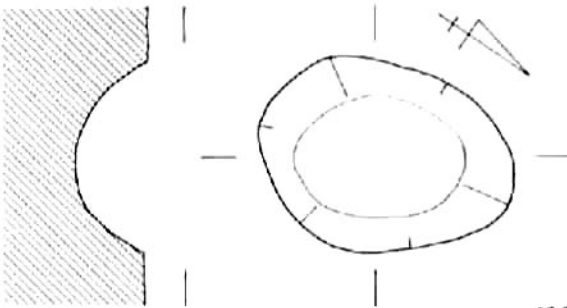
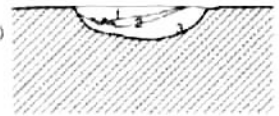


SK40027

1. 灰褐 シルト質極細砂~極細砂 (Fe₂O₃)
2. 黒灰 炭化物
3. 暗灰褐 シルト質極細砂~細砂



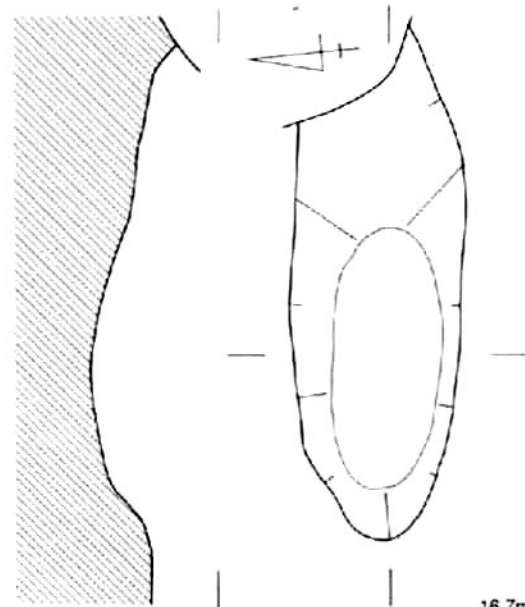
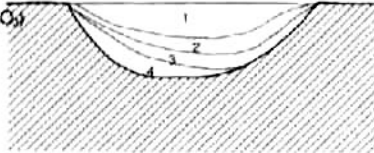
16.7m



SK40028

16.8m

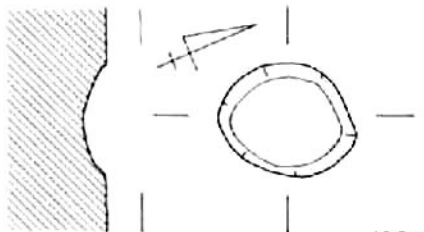
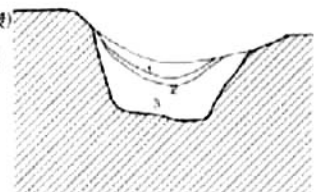
1. 梅灰 シルト質極細砂(Fe₂O₃)
2. 淡梅灰 シルト質極細砂
3. 暗灰 シルト質極細砂
4. 黄灰白 シルト質極細砂



SK40030

16.7m

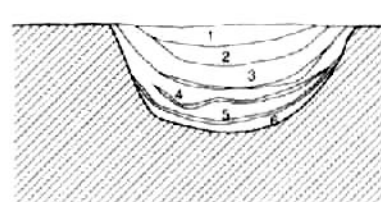
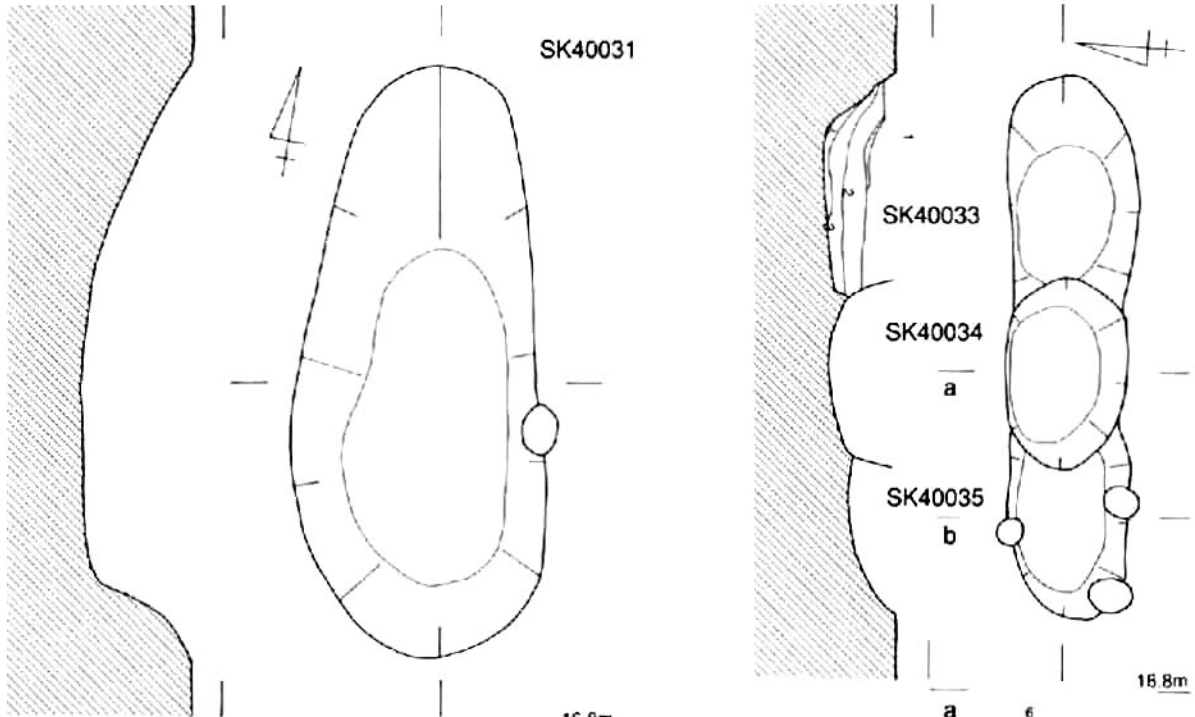
1. 暗灰 シルト質極細砂~細砂 (炭)
2. 黄灰白 極細砂
3. 暗灰 シルト質極細砂 (炭化物)



SK40029

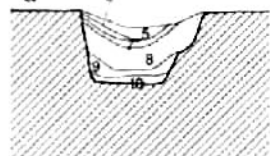
16.8m





- 1 褐灰 シルト質極細砂～細砂 (Fe₂O₃含)
- 2 褐灰 シルト質極細砂～細砂 (炭)
- 3 暗灰 シルト質極細砂～細砂 (炭化物)
- 4 黄灰白 シルト質極細砂 (ラミナ・炭)
- 5 黄灰白 シルト質極細砂～細砂
- 6 黒灰 シルト質極細砂 (炭多量)

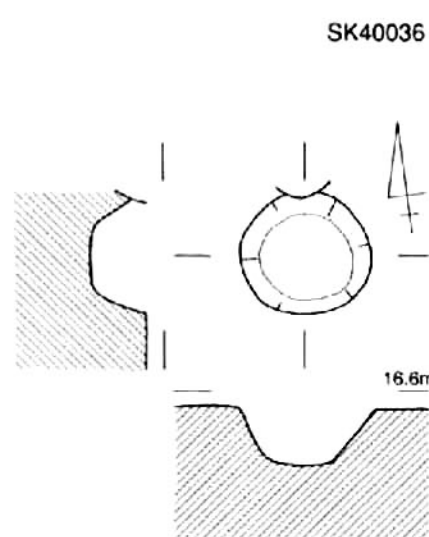
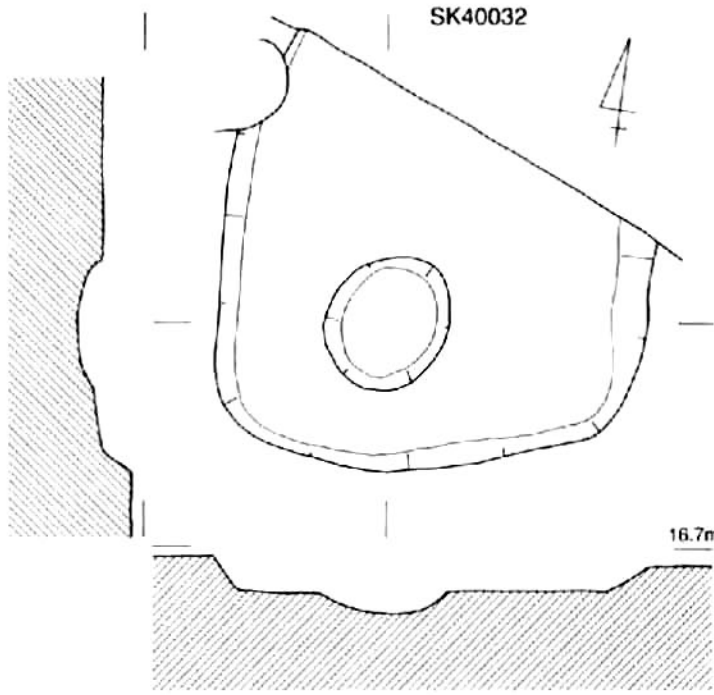
- 1. 暗褐 シルト質極細砂 (焼土)
- 2. 褐 シルト質極細砂～細砂 (炭)
- 3. 暗灰 シルト質極細砂～細砂
- 4. 黒 炭
- 5. 淡黄灰 シルト
- 6. 灰 シルト質極細砂
- 7. 淡黄灰 シルト
- 8. 灰 シルト質極細砂
- 9. 淡黄灰 極細砂～細砂
- 10. 暗灰 シルト質極細砂～細砂 (炭)
- 11. 灰 シルト質極細砂～細砂 (炭)
- 12. 暗灰 シルト質極細砂～細砂



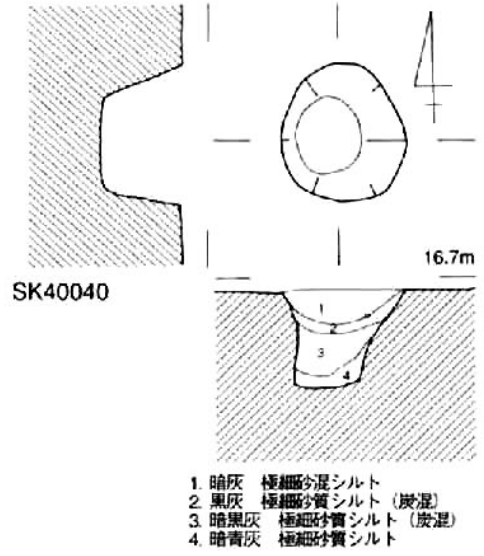
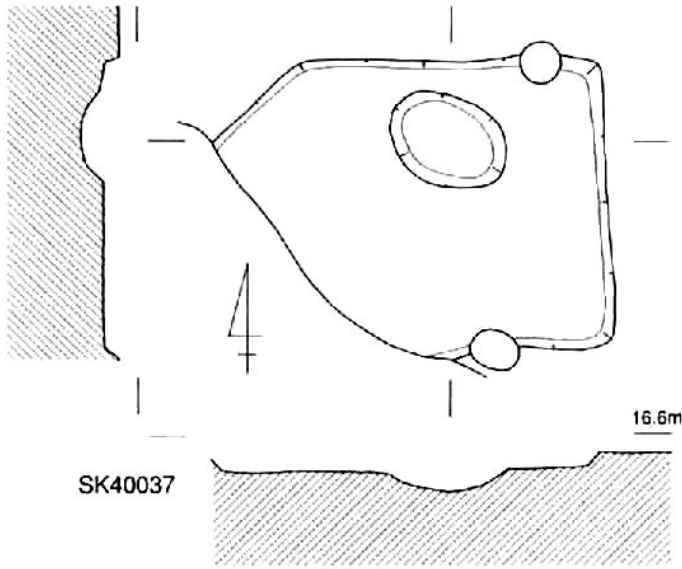
16.8m



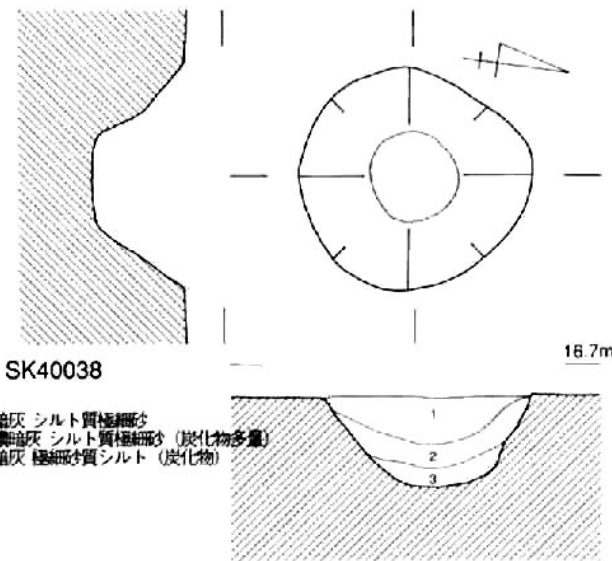
16.8m



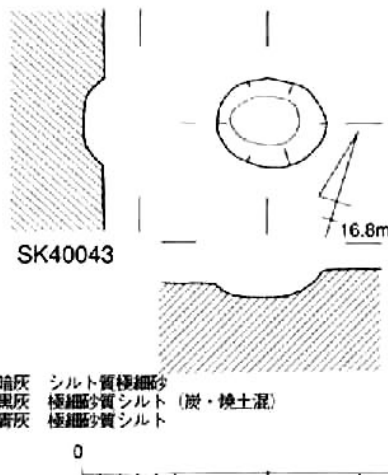
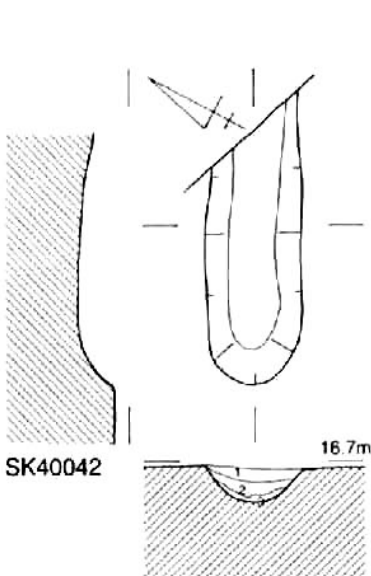
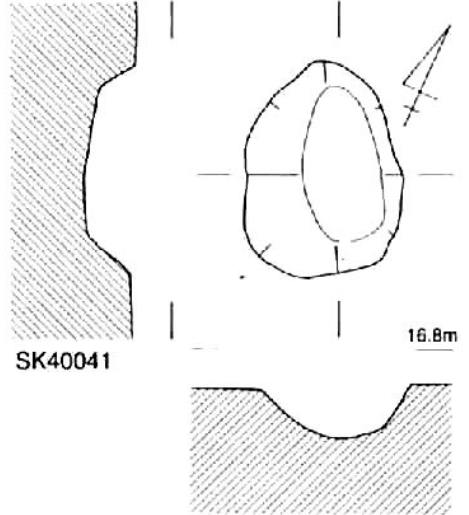
上坑6 (SK40031~40036)



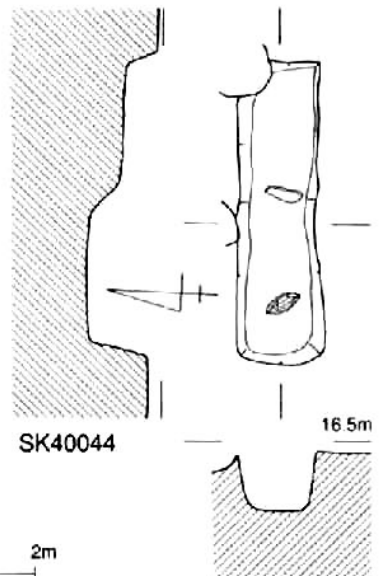
- 1 暗灰 極細砂質シルト
- 2 黒灰 極細砂質シルト (炭混)
- 3 暗黒灰 極細砂質シルト (炭混)
- 4 暗青灰 極細砂質シルト



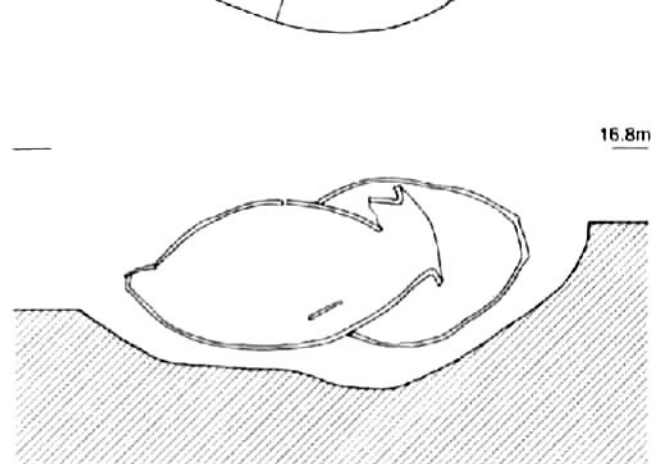
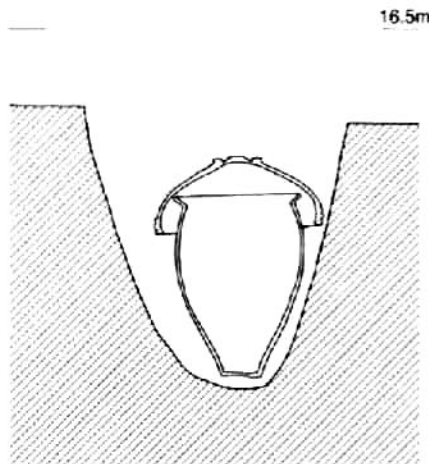
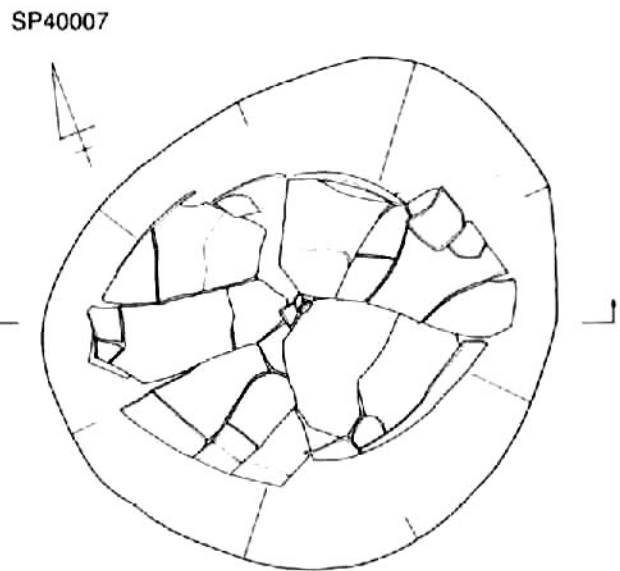
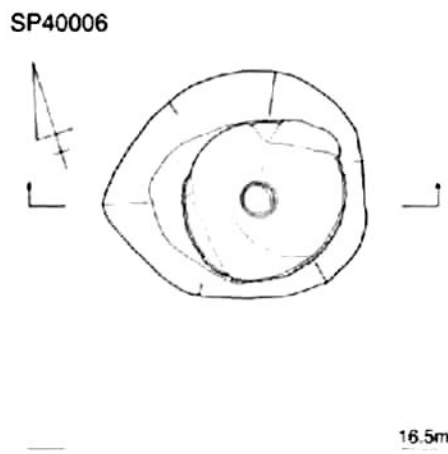
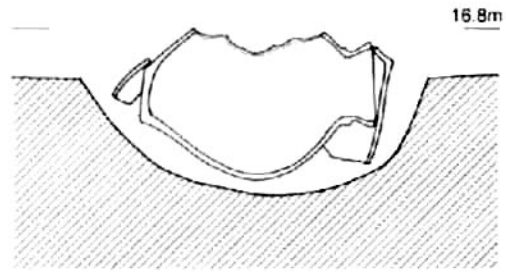
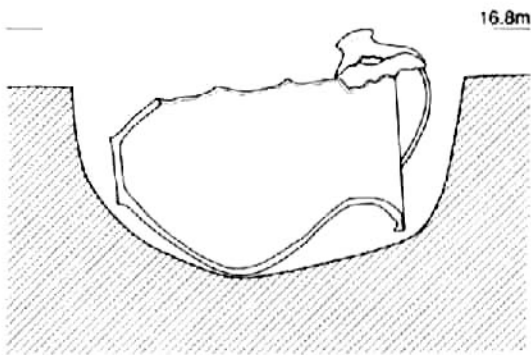
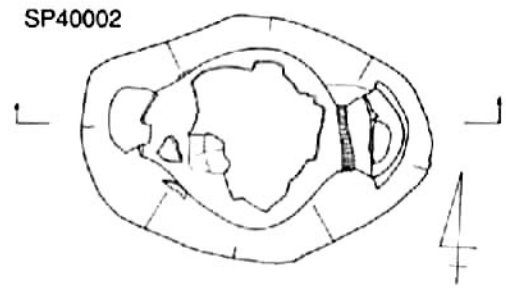
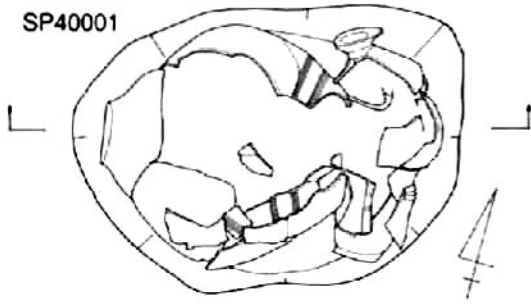
- 1 暗灰 シルト質極細砂
- 2 濃暗灰 シルト質極細砂 (炭化物多量)
- 3 暗灰 極細砂質シルト (炭化物)



- 1 暗灰 シルト質極細砂
- 2 黒灰 極細砂質シルト (炭・換土混)
- 3 青灰 極細砂質シルト

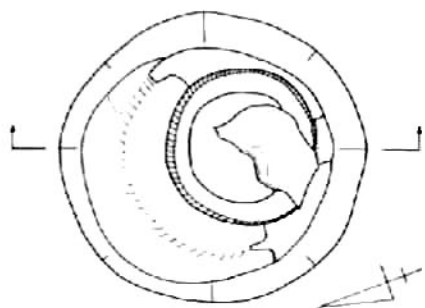


土坑7 (SK40037・40038・40040~40044)

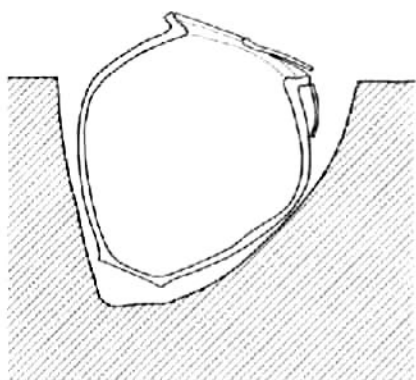


土器棺墓1 (SP40001・40002・40006・40007)

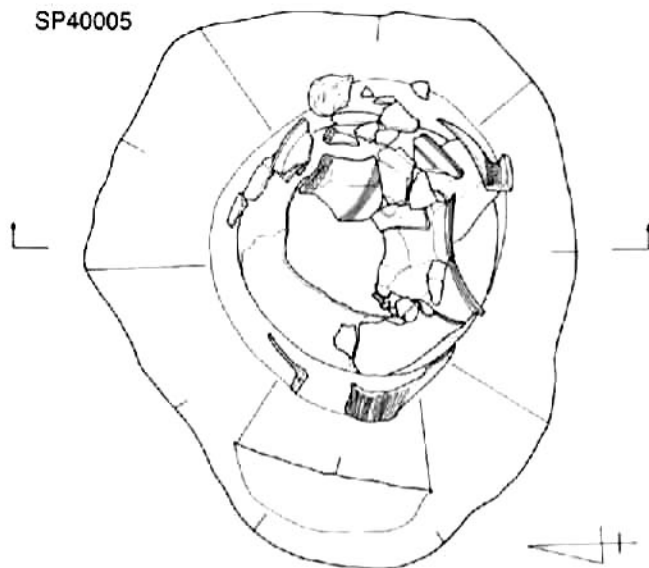
SP40004



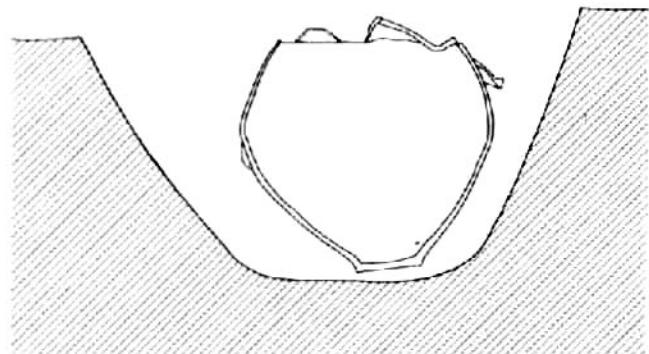
16.8m



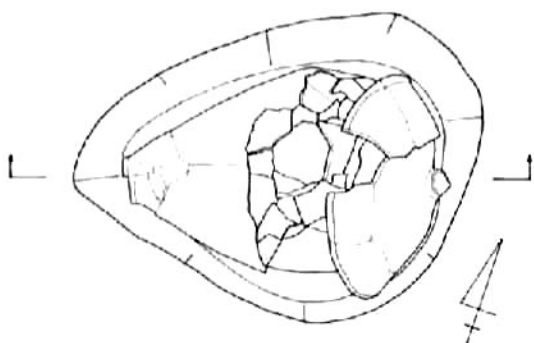
SP40005



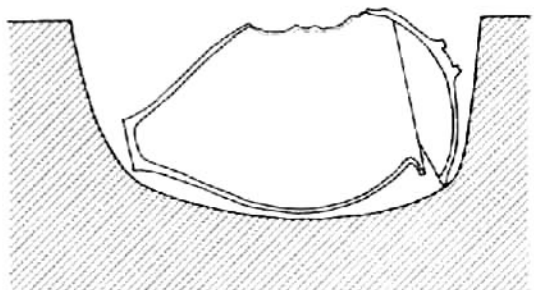
16.8m



SP40003

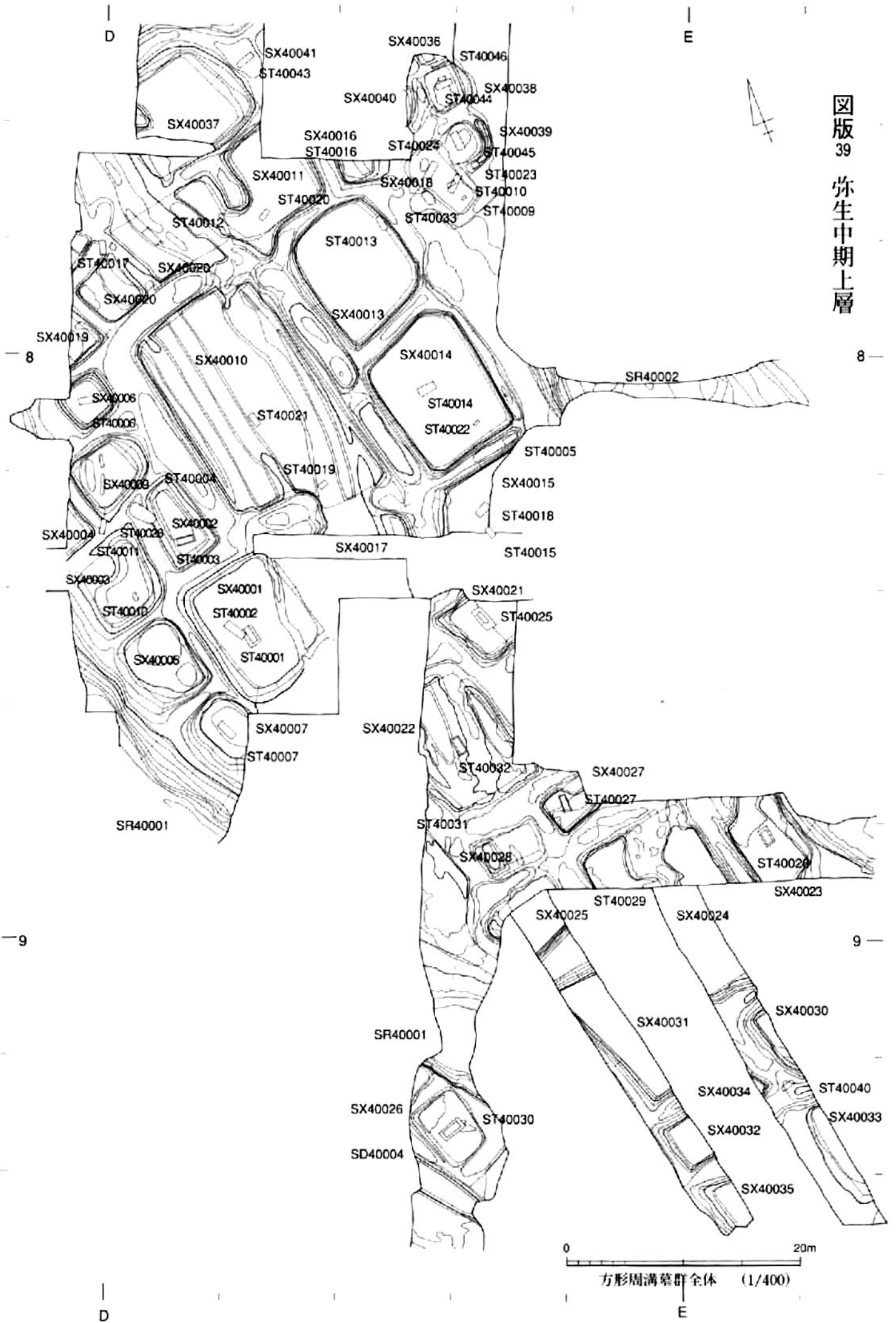


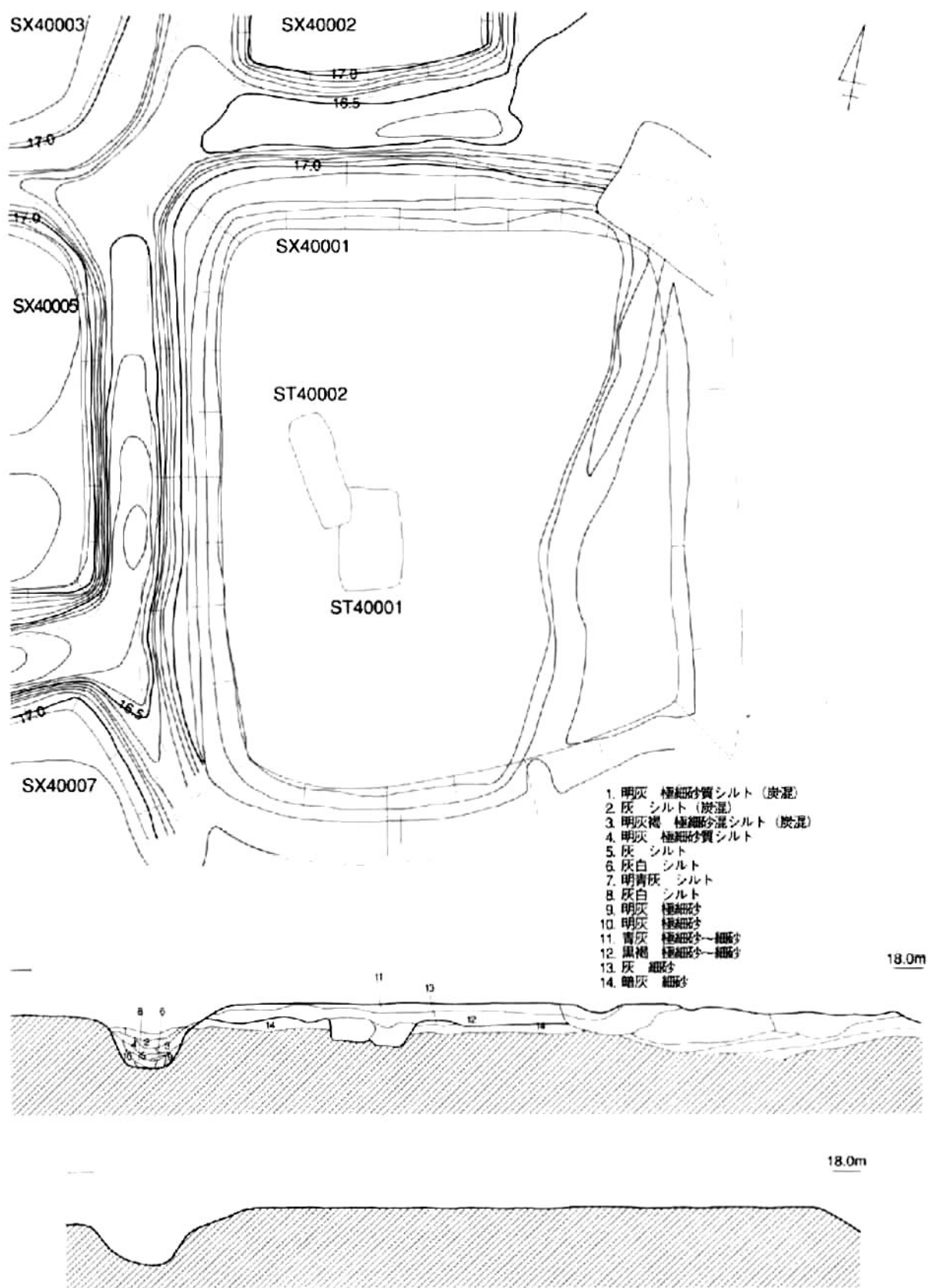
16.8m



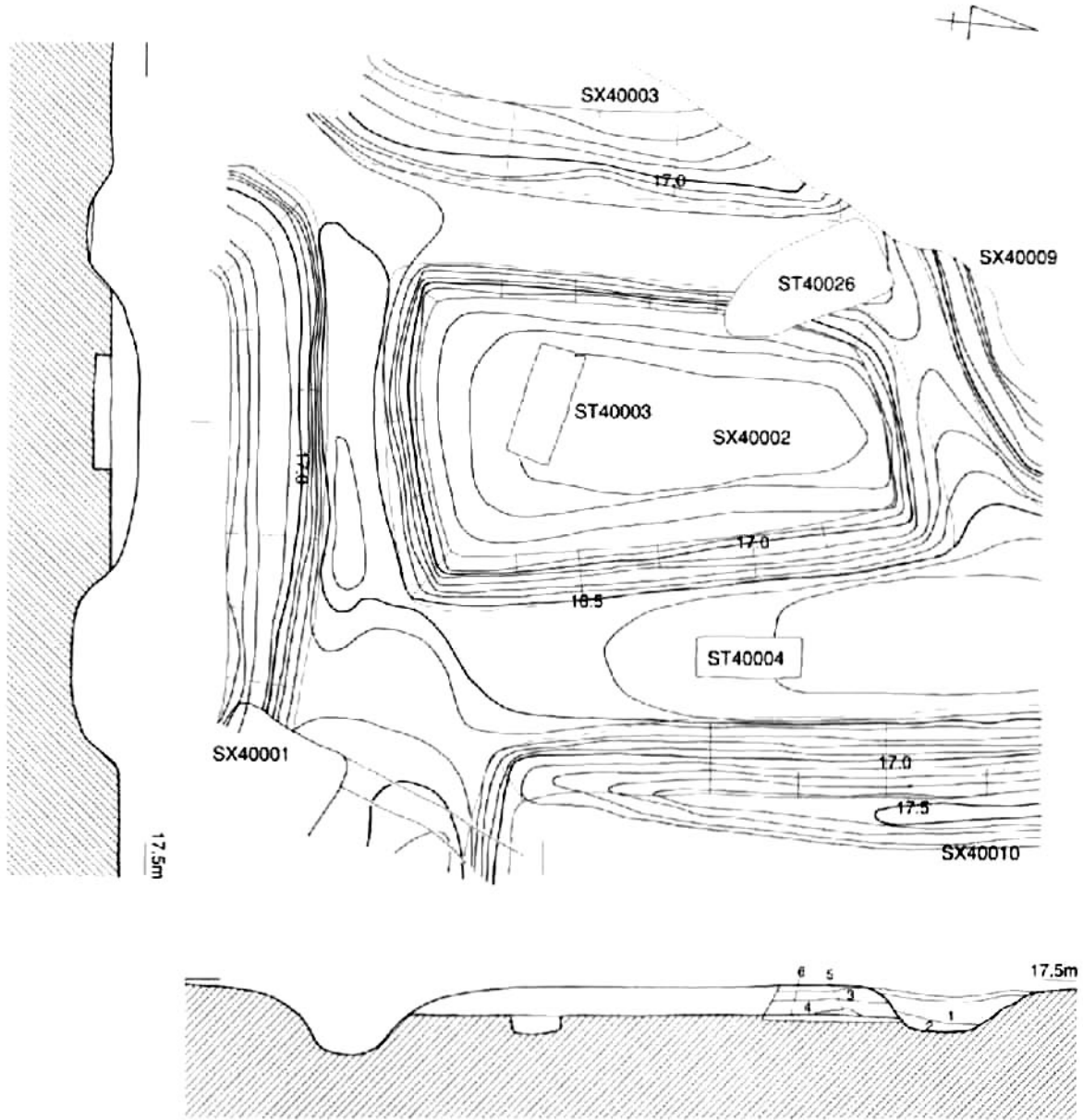
0 50cm

土器棺墓2 (SP40003~40005)



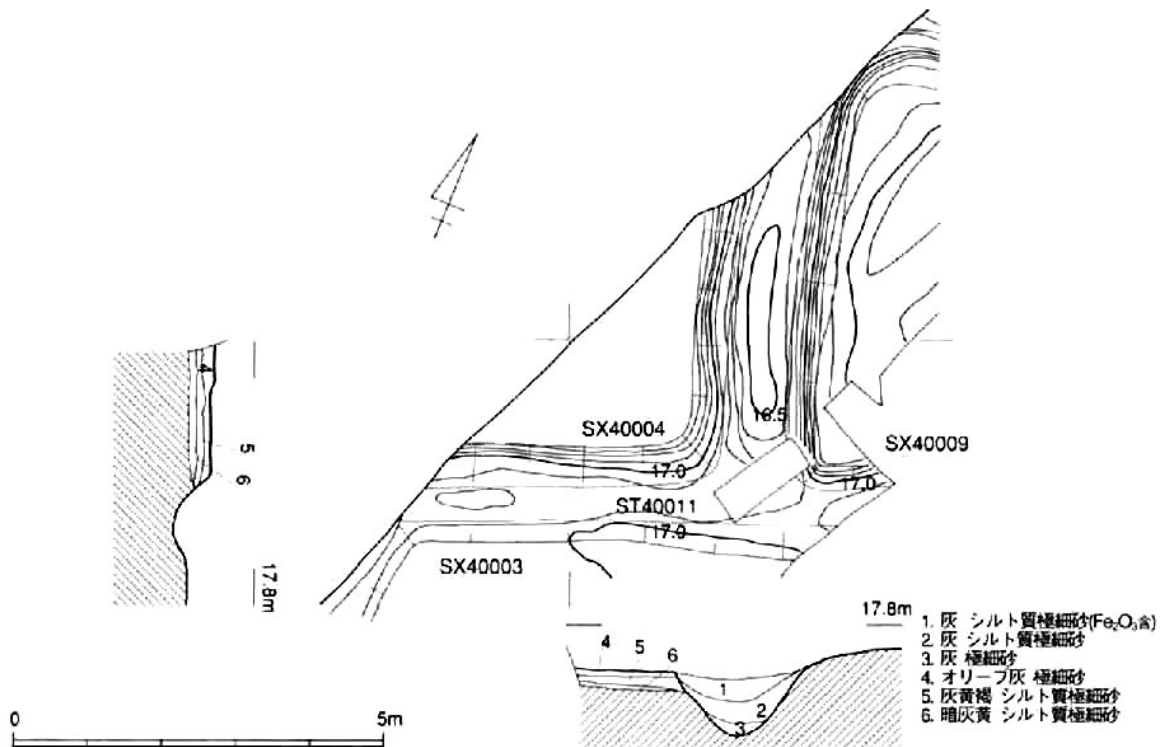
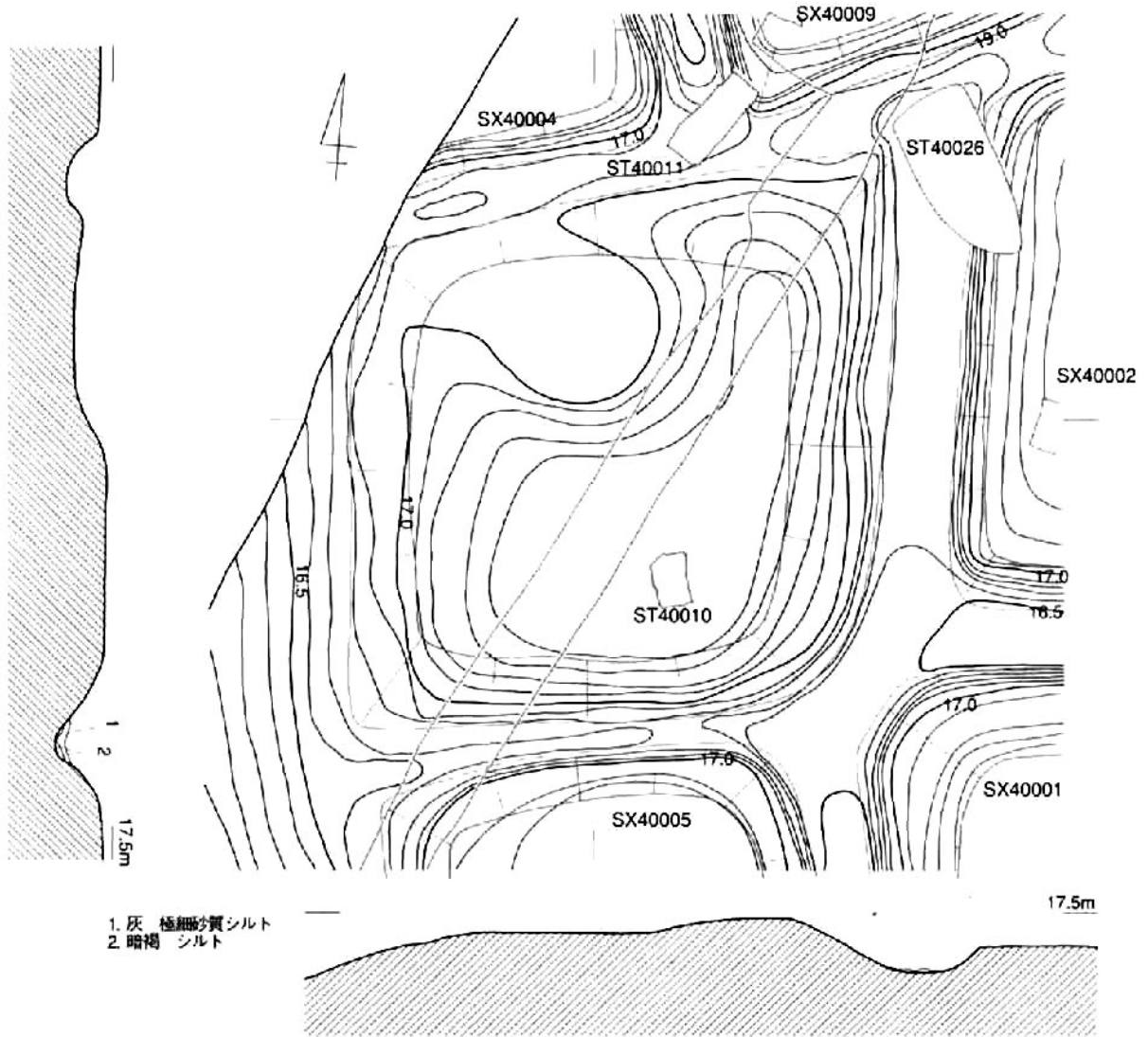


方形周溝墓1 (SX40001)



- 1. 黒灰 極細砂質シルト
- 2. 淡灰 極細砂～細砂質シルト
- 3. 灰オリーブ シルト質極細砂 (Fe₂O₃・Mn含)
- 4. 暗黄灰 シルト質極細砂 (Fe₂O₃・Mn含)
- 5. オリーブ灰 シルト質極細砂
- 6. 灰 シルト





方形周溝墓3 (SX40003・40004)